
魔法少女リリカルなのは～聖王と魔装機神～

黒彗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 聖王と魔装機神

【Nコード】

N4679N

【作者名】

黒彗星

【あらすじ】

聖王オリヴィエは仲間の供養のために地球の日本に来ていた。その日本で仲間の兄と出会い結婚した。その50年後、オリヴィエは家族達に見送られてこの世を去った。それから約250年、聖王の血を受け継いだ一人の赤子が生を受ける。これはそんな赤子、高町なのはが仲間と共に復活した邪神ヴォルクルスや組織の闇と戦う物語である。

(注意1) チート作品でオリジナル設定やキャラ崩壊もあり原作とはだいぶかけ離れてしまします。

(注意2) この作品の作者は文才や文章力の無い初心者です。

(注意3) この作品が処女作です。

(注意4) デバイスは全て日本語で会話します。

プロローグ（前書き）

始めまして黒彗星です。文才と文章力の無い初心者ですがよろしく
お願いします。

プロローグ

事の始まりは、古代ベルカーの国家である聖王家に多くの国々が同盟を組んで攻めて来てからでした。

同盟軍はそれぞれの国から進軍を開始しました。勿論、聖王家も黙っているわけも無く

それぞれにベル力最強の騎士団である聖王騎士団を各地に派遣しました。

戦況は騎士団を派遣してからは徐々に押し返し、とうとう元の国境にまで押し返すことに成功しました。

その戦いで殆んどの兵力を失った同盟軍は切り札を使うことにしました。

その切り札とは破壊神の封玉の封印を解き、かつてラ・ギアスと言う世界を恐怖に陥れた破壊神ヴォルクルスを復活させる事だったのです。そして、とうとう復活してしまったヴォルクルスですが、邪神は人に扱いきれるような物ではなく敵味方関係なく殺戮を繰り返したのです。

しかし、聖王家には今までの戦いにより既に僅かな兵と騎士しか残っていません。

そこで、聖王は聖王家最強の4大騎士を派遣することにしました。けれども邪神の進行は止まらず、4大騎士に疲れが見え始めたその時、4人の前に光が差し込みました。少して光が消えるとそこには4つの魔道の器がありました。4大騎士はそれぞれの魔道の器と契約を結びました。魔道の器を手にしてからの4大騎士は疲れていたとは思えないほどの動きと力で邪神を圧倒していきました。

そして、とうとう止めの時が近いと感じた4人は止めの刺そうとした時、一人の神官らしき男が現れ邪神に取り込まれたのです。

すると邪神も力を増し、4人にやや押されているものの再生を始めました。

それを見た4騎士は止めを刺そうとしましたがその隙をつか一人ずつ邪神の攻撃を受けて倒されてしまいました。

ですが、最後の一人が己の最強の一撃を放つことに成功し、邪神は倒されたかに思われましたが邪神はなんとか最後の力を使い最後の一人に向けて攻撃を放ちながら消滅しました。最後の一人も攻撃がよけきれず絶命しました。

そのことを知り怒りと憎しみに染まった聖王は遺体や遺品を生き残った騎士と兵と共にベルカ最強の戦船である聖王のゆりかごに載せ同盟国を攻撃しました。

兵力の無くなった同盟軍はなすすべも無く滅びの時を迎えました。聖王が自分を取り戻した時に見たのは荒野となった変わり果てたベルカの大地でした。既に人が住めるような土地ではなく、生き残っていた人達は絶望に包まれていました。それを見た聖王は自分がした事に対し後悔し、せめてもの償いにと、聖王家と同盟を組んでいた国々やミッドチルダ等の人の住める土地にベルカの民を移住させました。聖王はゆりかごを封印し、仲間の遺骨と遺品を持ち何人かの従者と共に姿を次元世界から消えてしまいました。その後、聖王達を見た者は誰もいないとされています。

その聖王の名はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。歴代聖王の中でも最強の力を持っていた女性である。

プロローグ（後書き）

短くてすみません。初めての小説なので色々難しいです。意見やアドバイスをもらえると助かります。ちなみに会話が無いのは詳しいことは過去編に書くからです。まずは、現代編からの執筆？です。次回は、オリヴィエ達が地球に降り立ちます。少し変更しました。

プロローグ2（前書き）

少し文の言葉使いを変えます。それと日本語や改行がおかしいとは思いますが許してください。

プロローグ2

聖王オリヴィエと従者達が姿を消して半月の時が経った。その頃、オリヴィエとその従者達は魔法文化や大した化学文明の無い150年後の未来で出来る時空管理局が第97管理外世界と呼ぶ地球に来て御神家と不破家という家の本家にお世話になっていた。地球に転移した場所は御神・不破の本家であつたが彼らに警戒されたが不破の当主が御神家と不破家は特殊な一族で御神家は護衛や拠点防衛を、不破家は暗殺や不穏組織の殲滅等を家業とする家だという事をオリヴィエに話した。そのことは4大騎士の一人であつたランドール・ザン・ゼノサキスから聞いていたので驚かなかつた。驚かなかつた事に疑問を持ち、不破家の当主でありランドールこと不破正樹の兄でもある不破騰樹はそのことをオリヴィエ達に聞くと彼女らは彼ら御神家・不破家にとつて驚くべきことを口にした。

「不破正樹から聞きました。」と・・・。

周りが騒然となつたが騰樹の一声で大人しくなつた。周りが落ち着いて所を見計らつて騰樹はオリヴィエ達に詳しい話を求めた。オリヴィエ達もそれに頷き、自分のこと魔法や戦争、邪神の事を話してから本題に入つた。その時にまた周りが騒がしくなつたが騰樹に止められたのを見計らつて彼女は話を続けた。その話は、周りを絶句させるのに十分なほどの内容であつた。4年前に不破正樹は何故かベルカに召喚されて始めて会つたのが彼らの目の前にいるオリヴィエであつた。オリヴィエはそんな彼に対し事情を聞き、衣食住を与えたのだと言う。正樹はそれに対し働くことで恩を返そうとした。オリヴィエは良いと言つたが本人が気が済まないと言う事で仕方なく了承した。そこで彼が戦う人間である事と、魔力が多いことに目を付けたオリヴィエは文字と魔法を教えた。才能があつたようで正樹はそれらを1年でマスターし、オリヴィエもそんな正樹に騎士爵とランドール・ザン・ゼノサキスと言うベルカでの名を贈つた。そ

の後、様々な任務をこなしていった正樹はとうとう聖王家最強の4大騎士の一人に数えられるようになる。それから一年、遂にあの戦争が起こってしまい、あの戦争での出来事や正樹が他の4大騎士と共に邪神と戦い最終的に相打ちに近い形で亡くなったことを話した。更にはオリヴィエがその事で憎しみで暴走してしまい、ベルカの地を人の住めない不毛の大地にしてしまったことを後悔したオリヴィエは民を人の住める土地に移住させたこと、この世界に來た理由も正樹の供養の為だと言うことまでも話してしまった。

オリヴィエ達はそれらのことを話してから、謝罪の言葉と共に深々と頭を下げた。そのことには流石の騰樹も慌てて頭を上げるように言い、更にはそんなこととしても正樹は喜ばないと諭した。

どうにか頭を上げたオリヴィエに騰樹が正樹のことを許し、この家に留まる事を勧めるも周りの人間とオリヴィエが難色を示したが、周りの人間には弟である正樹を保護して衣食住の面倒も見てくれて、更には職を与えてくれたオリヴィエに恩を返したいと答えて周りを黙らせてから、オリヴィエに対しても正樹もきつと望んでいると言った。こうしてオリヴィエ達は御神・不破家に住む事が決まり、家事の手伝いをするようになっていた。

あの話の後、二人で色々と話をしてらしくそこから騰樹とオリヴィエの二人は互いに惹かれ、愛し合うようになっていた。それから二人は結婚したり、子供が生まれたりと大変ではあるが幸せな日々を送っていた。

その50年後、オリヴィエの隣には既に騰樹の姿は無く、オリヴィエも病気で倒れてしまい、自分の死が近いことを察したオリヴィエは一族全員を集めて遺言書を残しそれらを渡すとオリヴィエは安らかに息を引き取った。

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト 享年75歳

ちなみに、オリヴィエが残した遺言書は250年後にテロ組織の龍^{リウ}が爆弾テロで御神・不破を滅ぼすまで守られていたと言う。しかし、御神・不破に生き残りが存在し、その生き残りの一人が正樹の生ま

れ変わりで、その妹が聖王オリヴィエの生まれ変わりであることや、オリヴィエの魔道デバイスの器達だけが消えていることにもまだ誰も知らない。

ブログ2（後書き）

やはり、難しい。

それと前話を少し変更や改良しています。読みやすくなっているかは微妙ですが、文才や文章力の無い初心者の処女作ということで見逃して貰えたらと思います。

次回はなのはが産まれます。なのはが産まれる年などは違ってるかもしれませんがご了承ください。文章も会話が入ります。はつきり言って表現などがかなり難しいですが頑張ります。ちなみに過去編は不破正樹がベルカに現れる所から始まり、オリヴィエが死ぬ所まで書く予定です。遺言書の内容も書くかもしれません。

序章 1 話 「誕生」 (前書き)

どなたか私に文才と文章力や日本語力を下さい。

序章 1話 「誕生」

オリヴィエが死去してから250年後

御神・不破が滅んでしまった。理由は御神・不破の結婚式の日に来たにテロ組織龍による爆弾テロによるものだった。それでも4人が生き残り、その内の一人である御神美沙斗は復讐のために生き残った幼い娘の美由希を同じく生き残った兄の不破士郎に預け裏社会に身を投じ、後の3人は比較的穏やかに暮らすことを選んだ。そんな矢先、士郎は親友のアルバート・クリステラの依頼により護衛の仕事を受けた。結果としてアルバートや側近達は無事に帰国したのだが、士郎は巻き込まれた童顔の女性、高町桃子を庇って重症を負ってしまう。責任を感じた桃子は士郎の入院する病院に行き、看病していたのだがその時の看護婦さんの一言が切っ掛けで士郎がプロポーズし、桃子もそれを受け二人は結婚することとなった。その際に士郎は、婿養子として生き残りの一人で息子の恭也と義娘の美由希と共に不破姓から高町姓に変えた。

その後、桃子が子供の頃から夢だった、喫茶店を開くことになった。喫茶店を始めてしばらく経って、士郎はアルバートの依頼でイギリスに行ったのだが、そこでアルバートの娘であるフィアッセ・クリステラを狙った爆弾テロが起きた。士郎も巻き込まれたが、士郎の胸ポケットから光だしたのを驚きながらもフィアッセを庇おうとした士郎とフィアッセを謎の青色の光が二人を守るように包み込み、士郎は怪我をせず平行世界のように死んだり、瀕死の重傷を負わなかった。その時に、士郎が胸ポケットの中に入れていたのはこの仕事中には必要かもしれないと急に思い、お守り代わりに持ってきていた銀色の二本の小太刀をクロスさせたアクセサリーだった。ちなみにそれは不破の秘宝の一つであったが焼け残った屋敷の中から見つけ出し他の秘宝と共に士郎が海鳴の家に持ってきた品物であった。

その仕事が終わって無傷の士郎は帰国するアルバートに「店のこともあるし、何より娘が生まれるからしばらく休業する。」と言った。その数カ月後の3月15日、待ちに待った女の子が生まれた。そして、3月22日はそんな母娘と士郎達の面会の日であった。

場所：海鳴大学病院・204号病室

サイド：桃子

娘が生まれて一週間が経ち、今日はそんな娘と士郎さん達が初めて会う日であった。ただ、皆は驚くかもしれない。なぜならその子の髪は金色で目が翠と赤の虹彩異色だったからだ。

医者や看護婦さんは珍しさから驚いて、かく言う私も驚いた。私の家系には無かったはずだし、士郎さん達は黒髪だったからだ。もしかしたらかなり前の先祖のものかもしれないと思っていたその時……。

コンコン（ドアをノックする音）

「はい、どうぞ。」

ガチャ（ドアを開ける音）

「桃子、入るぞー。」

「入るよ、母さん。」

「おかーさん、入るよー。」

3人がそう言い終わるとボタンとドアが閉まった。

「ええ、こっちに來て。」

それに対し私も三人をベットの所まで誘った。

「調子はどうだい？」

「問題ないわ。」

「そうか、よかった。」

その言葉に私は頷くと隣で寝ている娘の方を向いて

「それより、皆が会いたがってた子よ。」

それにつられて士郎さんや二人の子供達は赤ちゃんを見て、美由希が「かわいい!!」

と少し大きめの声を出してしまった。

「美由希、もう少し声を小さくしような。赤ちゃんが起きちゃうから。」

と土郎さんは軽く注意し

「うん、ごめんなさい。」

美由希も素直に謝った。

「起きなかったからいいよ。そういえば髪が金色なんだな。」

「ええ、そうよ。それにこの子、今は寝てるから分からないけど瞳が翠と赤の虹彩異色なのよ。」

土郎さんは驚きながらもそれについて何か思い当たるようで

「ほう？そうなのか？」

と聞いてきた。それに気づいた私も

「ええ、それよりも何か知ってそうね。」

と聞き土郎さんから事情を聞こうとした。

「まあな。けど、確定したわけじゃないから考えがまとまったら話すよ。」

「分かったわ。この子の名前はとうする？」

この子の名前については色々候補があつたのだがその中でも

「前から決めてた菜ノ葉でいいんじゃないか？」

そう、菜ノ葉と言う名前が一番気に入ったのだが少し硬い感じがしたので

「そうね。けど漢字じゃ硬い感じがするからひらがなにしましょう。」

「

「わかった。じゃあ、市役所には高町なのはで登録しておくよ。」

「ありがとね。それと……。」

という風に娘の名前が決まってから少し別の話をしている間に、面会の時間は終わってしまった。

まあ、店のこともあるから仕方ないことだけれどもと思い苦笑しながら私は産まれてから一週間しか経っていない我が子を見た。

視点終了

なのはが産まれた翌日

場所：???

サイド：???

「んんん。」

何処かの屋敷にある一室に銀髪と金髪の二人の少女が悩んでるかのようにはなやましていた。それを不思議に思ったメイド服を着た二人より年上

らしきの銀髪の少女が

「今朝から如何したのですか？」

と朝から気にしていたことを訊ねた。それに対し二人は

「少し前から主そっくりの魔力を感じただけで、反応が小さいのよね。」

と銀髪の少女が答え、さらに

「うん、まるで赤ちゃんみたいに。」

金髪の少女もそう言う

「そうですか。……では、オリヴィエ様の生まれ変わりが産まれたのかもしれないね？」

メイドも理解し、その理由について答えた。

「かもね。まあ、ある程度大きくなったら何処にいるかわかるはずだし、その時に探しましょう。」

「そうしましょ。お姉さま。」

「お二人がそう言うのでしたら間違いないでしょうね。レミリアお嬢様、フランドールお嬢様」

二人の判断に間違いはないと思いメイドはそう言って部屋を出ようとしたときに

「そうね、それはそうと咲夜？」

と銀髪の少女、レミリアが咲夜というメイドを止める。

「はい、なんででしょうか？」

それに答え、レミリアの方を向く咲夜に対し

「お茶の時間にしましょう。」

とレミリアが言った後に金髪の少女、フランドールがそれ続き

「じゃあ、あたしはケーキが食べたい。」

と注文をした。

「はい、畏まりました。お嬢様方。」

と言い咲夜という少女は紅茶とケーキを用意するため部屋を出て行った。

余談だが、その5分後に咲夜が二つのショートケーキと紅茶を持ってきた。

視点終了

序章 1話 「誕生」 (後書き)

遅れてすみません。

駄文ですみません。

デバイスが発動したのは本作中で明らかになりますのでそれまで待ってください。

それと東方キャラを出してみました。三人ともオリヴィエの従者だった方々です。咲夜についてはいずれ能力と共に明らかにする予定です。原作では吸血鬼姉妹だった二人の姉妹ですがこの作品ではなのはユニゾンデバイスとなります。過去編ではオリヴィエが主です。次回は士郎と美沙斗の兄妹が再会してなのはや美由希について話をします。

日本語や何か文章的に変な所があったら勝手に改正していくのでご了承ください。

序章2話「不破兄妹」

桃子となのはが退院してから一週間が経っていた。桃子はなのはの育児に翠屋にと大急がしである。

そんな中、夫の士郎は妹の美沙斗と一緒に美沙斗が拠点としている廃ビルの中にいた。

「よう、久しぶりだな。美沙斗」

「ええ、兄さん。でもどうして此処が？」

「知り合いが教えてくれた。それよりお前、香港警防に睨まれてるらしいじゃないか。」

と話す士郎に対し美沙斗は

「それも知り合いが？」

と驚きながら聞いた。

「ああ、それより今日はそんな話をしに来たわけじゃないんだ。」

と別件で用があるようにいう。

「どういうことですか？」

と美沙斗が聞いた。

「家の桃子に子供が生まれたんだが、その子に少し問題があつてな。」

「
士郎は子供が生まれたことを語り、その子が普通じゃないような言い方をする。」

「なんです？その問題って？」

美沙斗も気になったように聞いてくる。

「お前も不破の人間だったなら聞いたことがあるだろう？聖王という異界の魔法使いの王の話をな。」

と言い本題に入り始める。

「ええ、その話なら母さんに聞いたことがありますけど……つてまさか……！」

と美沙斗は途中で士郎が何を言おうとするのかが分かり、それに対

し驚きの声を上げた。

「ああ、その可能性が高い。髪と目の色が一緒だった。」

士郎は頷きながら理由を言った。

カイゼル・ファルベ

「これで虹色の魔力光なる物が出たら完全に聖王の復活ですね。」

「ああ、それとこれは俺と恭也に関することなんだが。」

と次の問題に入りだした。

「兄さんと恭也にも何か？」

「ああ、俺は約一年前にある護衛の仕事をしていたんだがな。その時に妙な現象が起こったんだ。」

「妙な現象？」

「ああ、護衛対象のいるホテルに爆弾を仕掛けられていた。で、それが爆発した時に対象の娘さんが爆破に巻き込まれそうになったんだ。俺はその時、その娘さんと一緒にいて、その子を庇ったまでは良かったが、そこに胸ポケットに入っていたこれが光ったと思ったら青色の光の幕が現れたんだ。」

と言ういうと士郎はあの時、自分とフィアッセを救った小太刀がクロスしたアクセサリーをポケットから取り出して美沙斗に見せる。

「光の幕？それに、これは不破の秘宝の一つじゃないですか！？何故それを？」

と驚きを隠せない美沙斗が何故持っていたのか聞く。

「ああ、なぜか持つて行ったほうが言いと思つてな。これが無かつたら今頃は墓の下か重症を負つていただろうな。」

と言う理由ともしもこれが無かつた場合の事も語った。それに対し「そんなー！」

「しかも、その後に恭也に渡してほしいって言う声が頭の中でしたんだ。それに、周りには俺とその子しかいなかった。」

と驚く美沙斗に士郎は頭に声がし、そこには自分とフィアッセしかいなかったことを語る。

「つまり、これが兄さんの頭の中に声をかけたと？」

そこで落ち着いてきた美沙斗はアクセサリーを指しながら士郎が考

えているであろう推論を語る。

「そうとしか考えられない。」

とその推論しかないと答えた。

「まあ、それは兄さんが一番分かっているのでしょうか、それだけではないのでしょうか？」

「流石は俺の妹の事だけはあるな。実はこれを恭也に渡そうと思うんだがお前にも一応は意見を聞いておこうと思ってな。」

「異論はありませんよ。それより今の私は御神ですよ？その私に不破の秘宝のことを聞くのもどうかと思いますが。」

と自分も問題ないといい、更には自分には関係ないのではと語る。

「それもそうだな。……それより、お前はこれから如何するんだ？」

と納得し、美沙斗に今後のことを聞く。

「奴らを滅ぼします。その為に裏社会に身を投じたのですから。」

「美由希に会わないのか？」

と士郎は美由希に会いたいであろう美沙斗に聞くが

「今更ですよ？兄さん」

と言い会わないと告げる。

「そうか、じゃあ写真は？」

「それも遠慮しておきます。」

士郎は写真も進めるがこれも拒否した美沙斗。

「そうか。……何か有ったらこの番号に連絡くれ。」

と言いつつ士郎はメモを取り出してそのメモに自分の携帯の番号の書いてその部分だけを切り取って美沙斗に渡した。

「分かりました。」

とメモを受けとり返事をする。

「じゃあな。」

と言いつつ踵を返しないう士郎に

「はい、兄さんもお元気で。」

と返し、互いに挨拶を済ませると士郎は美沙斗がいる部屋から出て

行った。

士郎が出て行った部屋では美沙斗が悲しそうな顔をしていた。

数時間後

高町夫婦の寝室で士郎は桃子に美沙斗と会ったことを話し、更には美沙斗に語ったようになのはが魔法使いではないかという推論とその根拠を語り、あの事件で自分やフィアッセに起きた異変なども話した。そのことについて桃子はなのはのことはまだ分からないけど、二人とも無事でよかったから気にしないでと言っていた。

序章2話「不破兄妹」(後書き)

相変わらずの遅さと駄文です。

次回は恭也がある年上の少女と出会います。

序章3話「不破の秘宝」

士郎と美沙斗が再会した翌日

場所：高町家の道場

視点：士郎

早朝の鍛錬終了後俺は道場を出て行こうとする恭也を呼び止めた。

「恭也、少しいいか？」

「何？父さん。」

それに振り向いた恭也に

「実はこれをお前にやろうと思ってな。」

と俺は言いつつポケットから取り出した二本の小太刀の交差したア
クセサリーを恭也に渡した。

「これは？」

その渡されたそれを見ながら俺に尋ねる。

「これは不破の秘宝だ。」

その問いが来ることが分かっていたかのように俺は答えた。

「不破の秘宝？これが？」

不破の秘宝と言うのは実は恭也も聞いたことがあったがてつきり小
太刀の類だと思っていたのでかなり意外だったのだ。

「ああ、秘宝自体が存在していることはお前も知っていただろうが、
どういう由来でどんな形かはまだ知らなかったはずだ。」

と言う俺の言葉に頷く恭也を見た俺はさらに言葉を続ける。

「その由来は今から250年前にまで遡る。」

と言い俺は語りだした。内容は以下の通りである。

これらの秘宝は元々その時の不破の当主、不破騰樹の奥さんである
オリヴィエと言う人が持っていたもので、そのオリヴィエと言う人
は異世界の住人で聖王という魔法使いの王だったと言う。そしてこ
れらの秘宝はその王に仕えていた者達の遺品であり、生前のその者

達を補助した相棒であり魔法の補助具だったということらしい。そしてその従者の一人に当主の弟がいたらしく、元々オリヴィエが不破に来たのも供養や家族に報告と謝罪をするためだったと言う。そして、オリヴィエが死去する前に遺言状にこれらを売らずに家宝としてくれと言うものがあつたのだという。

「とまあ、こんな感じだな。」

「それは分かったけどどうしてこれを俺に？」

「実はな、これを前のイギリスの仕事のときに持っていてったんだ。」

「どうしてだ？」

「さあな、俺にもわからん。何故か持つて行かないといけないがしてな。」

「で、それと俺にどういう関係が有るんだ？」

「うむ、此処からが本題だ。」

と切り出す俺に恭也は何時以上に顔を引き締めた。

「実はこれがなければ、俺は死んでいたか瀕死の重傷を負っていただろうな。」

「なっ！！どういうことだ？きちんと説明しろ！！」

「慌てるな。今から話す。」

と言い恭也を黙らせて語りだした。

俺はフィアッセと一緒にホテルのパーティー会場に来ていた。そんな中、誰かがフィアッセ宛に送ったぬいぐるみが爆発したのだった。その時、フィアッセはそのぬいぐるみから離れていた所にいたので直撃はしなかったが爆風や破片が彼女に襲い掛かったので俺がフィアッセを庇うために前に出た瞬間にこのアクセサリーが光り出したと思つたら青色の膜が俺達二人を包み込み俺達を守った後、俺の頭の中で私を恭也に渡してくれと言う声が聞こえたのだ。そのことを美沙斗に相談した結果、頭の声の通りの恭也に渡す事を決断したのだと言う。

「ま、そんなわけで受け取れ。」

「ああ、分かった。」

と頷き、返事をする。

「と、そろそろ飯の時間だ。いくぞ。」

と言いつつ道場を出る俺の後を

「ああ。」

と返事をしつつ恭也は道場を出て俺の後についていった。

その後、朝食を終えた恭也と美由希は一緒に何時も通り小学校に向かった。

視点終了

その数時間後

場所：駅前

視点：恭也

学校が終わり、俺は帰宅した恭也は夕飯の買出しに行くように母さんに命令されて今は駅前にいたのだった。そんな中、俺は一つの人だかりを見つけた。その中心にいたのは、ピンク色の髪の女性とあからさまに柄の悪い若い男であった。聞いていればナンパをしているようでその男はしつこく付きまとっていた。

恭也が見たところその女性は少し具合が悪そうに見えた。

（あの男、あんなに側にいながら彼女の様子に気づいてないのか？）
そしてそんなことも気にせず男は少女をお茶に誘おうとする。

「ね〜ね〜、良いじゃんかよ〜。」

「お断りします。友人と待ち合わせていますので。」

と勿論少女も嫌なので断わるが男はまだ食い下がる。

「そんなこと言わずにさ〜。ちょっとお茶するだけなんだからさ〜。」

「他を当たってください。」

と言った後、男は遂に切れだした。

「そんなことどうでも良いんだよ！！さっさと俺に付いてくれば良いんだよ！！」

「きゃあ！！」

と言い、悲鳴を上げる少女の手を強引に取り、どこかに連れて行くとした時。

「いい加減にしたらどうだ！！」

と俺は怒りを抑え切れずにそう叫んだ。

これが未来の聖風魔装騎士と未来の聖水魔装騎士の出会いであった。
視点終了

序章3話「不破の秘宝」（後書き）

相変わらずの駄文です。

とらハ１のヒロインのさくらさんを出しました。最後の文のようにさくらさんは夏頃に恭也と一緒に魔道騎士になる予定で、更には恭也の恋人になる予定です。

理由は単に私の好きなキャラだからです。他にもそういう好きなキャラや魔法や設定を出そうと思います。

それと恭也の嫁については裏技で一人か二人に増やすかもしれません。

序章4話「駅前にて」

視点：さくら

私は先輩であり友人の相川先輩達との待ち合わせのために駅に向かっていた。その途中、見た目からして柄の悪い男に絡まれてしまった。男は待ち合わせがあるからと言って断わり続けても聞かず纏わり付いてきた。そんな中、私は貧血を起こしてしまった。そのことに気づかない男は怒鳴りながら強引に私を連れて行こうとして手をつかんできたその時

「いい加減にしたらどうだ!!」

と言う怒鳴り声が聞こえたのでとっさにその声の方を向けると、そこには10歳くらいの黒尽くめの美形の少年が男を睨みながら此方にやってくるのが見えた。男も少年を見て声の主だと認識すると

「んあ？何だ餓鬼か。テメーなんざお呼びじゃないんだよ!!」

と脅しをかけるが少年は気にせずに

「お前こそ、その女性から手を放して立ち去るんだな。」

と男に向けてそう挑発した。それに対し男は

「な、なんだとー!!」

と挑発に乗っていた。そこで少年は私の方を向き、本気で心配している様な顔をして

「顔色が悪いですが、大丈夫ですか？」

と声をかけてくれる。そんな少年を安心させるために

「え、ええ。」

と返事をする。

「おい！テメー、俺を無視すんじゃないよ！」

と今の会話で自分を無視したのが気に入らないらしく、そう言いながら行き成り少年に殴りかかったが逆に男が懐に入られ一撃食らい気絶させられたのが見えた。

「さて、何時までも此処に居る訳にもいきません。どこか行きまし

よう。」

と気絶した男の事は気にせず、この場から離れようと言う少年に私は啞然としていたので

「え、ええ。」

と返すのがやっとだった。

こうして私と少年は啞然としたままの野次馬に気にせずこの場から去っていった。

その後、貧血症状が和らいだ私は駅まで来て少年にお礼を言い何か礼をしたいと言ったが、少年は当然のことをしたまですので気にしないで下さいと言いつけ取ってくれなかった。それでは私の気が治まらないと言ったのを聞いて少年はそれでは喫茶翠屋を利用して下さいと言いつけ取つて去ろうとしたが私はそんな彼を引き止めまず名前を名乗ってから彼の名前を聞いた。彼は高町恭也と名乗り少し話してから分かれた。私は彼に運命を感じまた会いたいと思いながら先輩達との待ち合わせ場所に急ぐのであった。

視点終了

その後、さくらは真一郎達と合流してさっきの出来事を話した。すると皆、恭也を褒め、彼の言葉通りに皆でまた翠屋に行こうという話しになった。そして、さくらはそういえばどうして翠屋なんだろうと思いつながら真一郎に血をくれるよう頼むことにしてのだった。そのことをさくらの姪、月村忍に話したらその恭也に会ってみたいと言った。それは直に叶うことになるのはまた別の話である。

数日後

さくら達は翠屋で翠屋の制服姿の恭也と再会し彼から翠屋は恭也の両親が経営していることを告げられて、彼女らを少し驚かせたのは言うまでもない。この事が切っ掛けでさくらと恭也は仲良くなり互いの距離を縮めることとなったことにより恭也や高町家はさざなみ寮の人達や相川真一郎達と関わりそれらの事件にも多少巻き込まれ

ていくことになる。勿論それはお互い様で高町家が関わる魔法事件にも真一郎達やさざなみ寮の人達は巻き込まれていくことになる。でもそれは数年後の話である。

序章4話「駅前にて」（後書き）

今回は恭也が忍に会いに行きます。ノエルは次回ですが。あと少しでラブチャの五月の雪編を書く予定です。時間軸が違うと思いますがこの小説の設定だと思って気にしないでください。ざから戦で恭也とさくらが魔道騎士&魔装士（魔装機及び魔装機神の使い手を指します。）に覚醒します。

なんか恭也が主人公なのはより目立っていますがそれはなのはがまた赤ん坊だからあらなのである程度なのはが成長したら完全な主役となる予定です。

春原七瀬の生まれ変わりをなのは達の妹の高町七瀬として出そうと思いますけどでしょうか？

序章5話「月村忍との出会い」前編」（前書き）

序章4話のあとがきの予告を変えました。毎度内容が変わってすみません。しかし、これからもそうなるかもしれないのでよろしくお願いします。

それと前編と後編に分けます。何処まで長くなるか分かりませんから。

序章5話「月村忍との出会い」前編」

さくらと自らの秘密である御神の剣の鍛錬を見せられたり翠屋の手伝いをするほど仲良くなつた恭也はさくらからも自分が人ではなく夜の一族と呼ばれる吸血種と人狼とのハーフだと聞かされた。しかし恭也はそんなことは気にせずに普段通りに接していた。それだけではなく契約をし、しかも自分の血を吸うことも許したりと普通では考えられない様なこともした。そしてそんなある日の金曜日、翠屋のバイトが終わつたさくらが同じく店の手伝い終えた恭也にある事を頼んだ。

「姪っ子さん達が俺に会いたいんですか？」

「そうなの。それで恭也君のことを話したらその子が会いたいんだつて。」

「そうですか。」

「それでねその子も夜の一族でしかも人見知りだからあまり友達が作れないの。」

と辛そうな顔をするさくらに

「ああ、そういうことでしたらいいですよ。」

と不器用ながら微笑みながら答える恭也に

「ありがとうね。あの子も喜ぶわ!!」

とさっきの顔が嘘みたいに明るくなりそう答えた。

「いえ、それに俺も友達は居ませんから秘密を共有できる友達が出来ると嬉しいですから。」

「そう、じゃあ日曜日に調整しとくわね。その子、割と暇だから直に合わせられると思うし。」

「分かりました。ではその時に翠屋のシュークリームを持っていきます?」

「そうね、あの子達も喜ぶわ。じゃあ、待ち合わせは10時半に翠屋前で良い?」

「はい。」

「それじゃあ、また日曜日に会いましょう。」

「はい。じゃあ、また明後日。」

と話し合い二人はそれぞれの家に帰宅していった。

その後、忍に電話でその事を話すさくらの声は実に喜びに満ち溢れていた。

そして日曜日の10時半前

視点：恭也

後もう少しでさくらさんが来る。しかし昨日来た連絡に寄れば来るのはさくらさんだけではなく姪っ子である忍さんの従者さんも車の運転手として来るらしい。此方は既に翠屋特製のシュークリームを入れて準備している。後は、さくらさん達が来るのを待つだけだ。と思っていたときさくらさんともう一人背の高い薄紫色の髪的女性が此方にやってきた。恐らく、彼女が従者さんなんだろう。

「おはようございます、さくらさん。それで此方が？」

「おはよう、恭也君。そうよ、ノエル。」

「はい、始めまして高町様。私は忍お嬢様の従者を務めるノエル・綺堂・エーアリヒカイトと申します。以後、お見知りおきを。」

と言い、優雅に頭を下げた。

「はい、此方こそよろしくお願いします。」

と俺も頭を下げて挨拶した。

「さて、自己紹介も終わった所でそろそろ行きましょうか。」

その言葉に俺とノエルは

「「はい、さくらさん（さくらお嬢様）。」「

と二人同時に答えたて俺たちは月村家が所有する車が在るほうに向かっていった。

視点終了

所変わって何処かの館

視点：レミリア

私ことユニゾンデバイス「レミリア・スカーレット」はあることを二つ悩んでいた。一つ目は正樹もといランドールの魔力とティッテイの魔力が全盛期より少し小さいながら一緒にいることだ。しかも別の魔力と混ざっている。これは二人が我等が主、聖王陛下同様に転生していることを指す。しかも聖王陛下よりも前より存在し、尚且つ今は聖王陛下の生まれ変わりの近くにいます。ランドールの方は完全に一緒に暮しているように感じられる。恐らく、兄妹として暮しているのだろうか？二つ目は近くはかなり大きな魔力反応と少し大きな魔力反応の二つの魔力と魔力とは違う大きな力を三つ感じたことだ。私達姉妹のオリジナルである本物のスカーレット姉妹同様の妖気を感じるのだ。私達はオリジナルの姿と能力を模したユニゾンデバイスである。ちなみに咲夜は本来の歴史ならばオリジナルが支配下に置くはずだったが何の因果か吸血鬼ハンターであった彼女は私達を狙ったのであった。振り返りにしたが、その力を欲した私は彼女の運命を変えて従わせたのだ。知らない魔力と妖気の持ち主が敵対者であれば戦わないといけないが二人（なのははまだ赤ん坊なので数には入れていません。）のデバイス達が目覚めていない以上、かなり危険だと言うことになる。せめて味方が無害であればいいが……。念のため咲夜とフランを連れて三人を守るために三人の所へ向かうかしら？

視点終了

序章5話「月村忍との出会い」前編」（後書き）

地球の表にいるスカーレット姉妹がが幻想郷のスカーレット姉妹の姿と能力を真似た存在ということになりました。かなり出鱈目ですがオリジナルは殆んど昼は活動できませんからその方向にしました。妖気の正体はもうじき分かりますし、かなり大きい魔力はシュウ・シラカワこと白河愁で少し多い魔力反応とは忍のことです。忍は支援重視の魔道騎士にする予定です。幻想郷メンバーや月村姉妹はなのは陣営になります。それと懐かしい勇者特急マイトガインを見て思ったのですが超AIを搭載したロボットに変形するヘリや乗り物、戦艦なんてどうでしょうか？

序章6話「月村忍との出会い」後編」

恭也達が車に乗って月村邸に向かっている頃の忍と言つと。

場所：月村邸の忍の自室

視点：忍

私は落ち着きが無く自室をうろつき回っていた。その理由は比較的年の近い叔母のさくらが私の一つ上の友人を連れてくるからだ。しかもその子は男の子なのだ。基本的に男性には警戒心のあるさくらが子供とは言え余程の事が無ければ男と仲良くするはずが無いからその余程の事が有ったんだろう。しかもその子にさくらは自分から自分の正体まで教えている。それは私達、夜の一族や闇に属する者や特殊な力を持つ者にとつてはやってはいけないはずのことだった。ただどさくらはそれをやっている。

だとすればそれはそうさせるだけの子ということになる。どの道、会つて見るしかない、等と考えていると少し離れた所から車の走る音が聞こえてきた。その音は段々大きくなっていき遂にこの屋敷の付近に停止した。そしてドアが開いた音と閉じた音が聞こえる。その後、車は車庫に向かったようだ。その後少しして屋敷のドアが開いた音がして、直にさくらの声で

「忍、来たわよ。恭也君も来てくれてるわよ。」

と私を呼んでいる声がする。その声に応じるように私は部屋を出て、さくら達のいる玄関ホールに向かっていった。

視点終了

視点：さくら

月村邸に着いた恭也君と私はノエルに車を車庫に入れるように命じて月村邸に入っていた。

「忍、来たわよ。恭也君も来てくれてるわよ。」

と忍に呼びかけると忍の部屋の方からドアの開け閉めする音が聞こえ、こちらに近づいているのが分かる。恭也君もそれに気がついたようだ。と言うよりも恭也君はやはり普通じゃないと感じさせるものであった。その理由として、私達は人より感覚神経が鋭いから当たり前なのだけれども目に見えない気配を感じ取るのは人間にはかなり難しいことである。と考えていると忍が階段を降りてきているところだった。階段を降り此方に来た忍に恭也君を、恭也君を忍に紹介するために

「忍、この子が高町恭也君よ。で、恭也君この子が私の姪の忍よ。」と紹介すると

「始めまして、月村さん。俺は高町恭也と言います。」

と恭也君が挨拶し忍も

「月村忍です、今日は来てくれてありがとう。それと高町君は私より一つ上なんだから敬語とかいいよ。私自身そういうの好きじゃないし。」

と自己紹介や来た礼に恭也君の挨拶で気に入らないことを言った。

恭也君もしぶしぶながら納得し

「分かった。じゃあ、さん付けだけはさせてもらうけどいいかな？」

「うん。まあ、初対面で呼び捨てって言うのもあれだしね。いいよ。」

と話す二人に私は

「立ち話も何だし、忍の部屋にでも行きましようか。」

「そうだね。」

「はい。」

と忍（上）と恭也君（下）

こうして私達は忍の部屋に向かうのであった。

部屋に入ると恭也君は家のことのそうだが部屋を見て驚いていた。その後、車を車庫に止めてメイド服に着替えたノエルが部屋に入ってきてお茶を出してる時に忍も恭也君のことを気に入ったのかノエルが自動人形だということをばらしていたりして一悶着があったが

色々な質問会話などして楽しんだ。それから2時間が経過して恭也君も一緒に昼食をとる事になった。

食事を終えた私達はゲームや雑談等をしているとノエルが入って来て紅茶と御茶請けとして翠屋特製のシュークリームが出された。こうして楽しい時間が過ぎていったがそんな時間がずっと続くわけも無く恭也君が帰る時間になったのだ。忍はそれに渋ったがまた遊ぶことを約束したことで手打ちとなった。

そして行き同様にノエルに車を出してもらい、今度は恭也君の自宅まで送ることになったのだ。

これが高町恭也と月村忍は出会いであり、聖風の魔装騎士と闇の魔装士の出会いであった。

視点終了

視点：忍

「高町君……か。」

確かにさくらが認めるだけのことはある。

そういえば私と高町君が話しているとさくらから嫉妬のようなものを感じただけれど気のせいかな？

もしかしたらさくらは高町君のことが好きなのかもしれない。帰ってきたらさくらに聞いてみよう。

そして数分後、さくらとノエルが帰ってきた。

早速、さくらに聞いてみた。さくらは顔を真っ赤にしながら否定していたが好きなのがばれだった。そのことをからかったりしてさくらで遊んでいたら、この後暫くの間、口を聞いてくれなくなった。そして、私もやり過ぎた事を自覚し、さくらに謝り倒し何とか許してもらえたのだった。

そして私は、このことが切っ掛けで人をからかう様な事はしなくなった。

視点終了

場所：何処かの館

視点：レミリア

「と言う訳なんだけど付いてきてくれる？」

私は我等の主達がかなり危険な場所にいると思ひ二人にも主たちを守るためにその地に向かうことを話し、付いてくれるように要請したのだ。

「勿論です。陛下を守るのは我等の役目であり使命でもあります。」
と頷きながら言ってくれる咲夜と

「そうだね、私も行くよ。お姉さま。で、場所は分かったの？」

同じく付いてきてくれるフランがその場所が分かったか聞いてくる。

「ええ、運命と地図で何とか探し当てたわ。」

そう、私は地図で陛下たちと出会う運命が最も強いところで探したのだ。

「それで、その場所は？」

と咲夜が早く行来たそうに催促する。

「〇〇県の実鳴市で最も強い反応があったわ。そこに行きましょう。」

「
」
と言ひ二人が同時に

「はいっ！」

「はい。」

と返事をしたのであった。こうして一人と二機（融合機なので間違っていない）は実鳴市に向かうことになったのだった。

視点終了

序章6話「月村忍との出会い」後編」（後書き）

次回はざからと雪と氷那を出します（ほぼ名前だけです）。多分台詞が殆んど無い状態かも知れません。ざからは如何しよう。ざからを封印するんなら雪も自ら封印されるだろうから真一郎が可哀相だし……。瀕死の状態にして恭也orさくらor忍の守護獣（人型にできるし戦力にも出来る）にするか、召喚獣（宝石に内包して召喚したいときに召喚して戦力に出来る）にするかな？

序章7話「人外と武と異能の力」前編」（前書き）

五月の雪の出来事や台詞も殆んど忘れていたため適当です。
時期も適当です。台詞もあります。

序章7話「人外と武と異能の力」前編」

恭也と忍が会って1年と少し経ち5月になった。二人やさくらは良くなのはの面倒を見たりしたりしている。なのははとても頭がいいのか既に喋れるようになっており、普通に会話とかもしている。それだけでなく既に立つて歩いていると言う普通ならありえないことも起きている。そのことに疑問に思った士郎は筋肉の成長具合を見たが既に神速に耐えられるような肉体をしており、御神流を習わせたいという衝動に駆られていたし、忍は忍で少し前までは面白半分で工学を教えていたが最近では本気で教えているようである。

そんな5月のある日の午前、さくらを含む真一郎グループと恭也と忍とノエルはさざなみ女子寮に車で向かっていた。恭也が来たのは皆（主にさくら）に誘われたからである。

真一郎達が恭也と出合ったのはさくらが仲介してのことだった。恭也達は直に仲良くなり、その中で恭也が御神の生き残りであることを知った^{ト・ユンファ}菟弓華は自分が元龍^{ロン}構成員であることを明かし、御神壊滅のことを謝罪した。その時、真一郎達は慌てたりしたが恭也は元でしかも悪意が無い為、自分達に害がないのであれば気にしないと云い事でなきを得た。原作で来なかった忍とノエルが来たのは恭也が来ることが知られたからである。その事は忍と会ったことのある真一郎達からも驚かれており忍に対しての評価は前より大分柔らかくなったというより明るくなったと評している。ちなみに皆は十中八九、恭也のお陰であろうと思っていた。

その恭也と忍とノエルを入れた一行はさざなみ女子寮生である岡本みなみと言う案内役を乗せたノエルの運転する車とオーナーである楨原愛の運転するグループに分かれてさざなみに向かった。組み合わせは以下の通りである。

ノエル組：恭也、さくら、忍、みなみ、弓華、井上ななか

愛組：真一郎、野々村小鳥、鷹城唯子、千堂瞳、御剣いずみ、春原七瀬

と言う組み合わせであつた。

何故これだけの人間がさざなみ女子寮に来ることになったかと言うと、真一郎グループの瞳率いる護身部が優勝（瞳）と第3位（唯子）を取り、さざなみ寮でも仁村真雪の漫画がコミック化してその祝いとして宴会を開こう話になった時に、真一郎達が祝い場所を探していたのでみなみの提案によりさざなみ寮での合同パーティーになったのである。

それから数十分後、さざなみ寮に着いた一行はさざなみ寮に入りその住民と管理人の楨原耕介に挨拶をしてパーティーが始まつた。

それから少し経つて、さくらとさざなみ寮の住人の一人である神埼薫が何かの魔の気配に気づき山の奥のほうに向かつて行つた。しかし、御神体ごしんたいがなくなっていた以外は何も見つからずに寮に帰って行つた。その後、少しして瞳が寮の近くで倒れていた少女を見つけて寮にまで運んだのである。少女が目覚めますが本人は雪という名前以外は覚えていないと言う。その同時刻、寮の住人の一人、椎名ゆうひが大学の近くで毛玉のような生物を見つけさざなみ寮に連れて来た。その毛玉もときを見た雪は氷那っ！！と言い、氷那という毛玉もキューと鳴きながら雪に抱きついた。その事に不審を感じた一同だったが数分後、今まで晴天だったのが嘘のように行き成り雪が降り始めたのだった。

そしてこれが次の異変の始まりだった。

雪が降つて来たことや氷那のことを雪に問いただすと自分は魔獣ざからに殺された雪女の生き残りで氷那と共にざからを封じ込めていたと言う。雪が外に出て、その後を追う様にして氷那が外に出た為にざからの封印が解かれ始めた為であると一緒に話した。それから少ししてさざなみ寮に木の枝や触手等が襲い掛かつてきた。それに

対応した一行だったが数が減らず寧ろその数を増やしていった。一行は二手に分かれて行動することにした。そして戦闘力のない人達&寮を守る防衛組みと封印&その護衛組みという風に決めた。組み合わせは以下の通りである。

戦闘力0&防衛組：忍、仁村知佳、薫、唯子、小鳥、ななか、みなみ、愛、陣内美緒、ゆうつひ

封印&護衛組：恭也、さくら、ノエル、真一郎、雪&氷那、いずみ、七瀬、弓華、耕介&御架月、薫&霊剣十六夜、真雪、リステイ・C・クロフォード

というメンバーになり、これから起こるであろう激戦に気合を入れるのであった。

所変わって何処かの上空

場所：何処かの上空

視点：レミリア

飛びながら海鳴に向かっていた私達は妖気の気配を感じ急に止まる。それを咲夜が口にする。

「どうやら目覚めたようですネ。」

その言葉に私は

「そのようね。それに聖風の魔装騎士と聖水の魔装騎士が近くにいるみたいね。」

と遠くからでも分かる状況を口にした。しかし、それは

「じゃあ、急いだ方がいいんじゃない？まだ二人は覚醒してないはずでしょ？」

そう。フ란の言うとおり二人は目覚めていない。目覚めた場合なら瞬殺できるでしょうが、今はこのままではまずい状態。何とかしなくてはと思い二人に

「ええ。二人とも、スピードを上げるわよ。」

と言いスピードを最大に上げた。

「了解です。」「ラジャ」

と言い二人もスピードを上げて私の横につく。

数時間後、遂に海鳴に着いた私達はそこで異変を感じた。

なんと、妖気の近くに三つの光の柱と共に巨大な魔力反応を三つ感知したのだ。

「どうやら聖風と聖水の魔装騎士が覚醒したようです。急ぎましょう。」

「ええ。」「うん。」

とその二つの魔力反応に懐かしさを感じながら急いで魔力の柱が立った方に向かうのであった。

視点終了

おまけ

霊力と魔力の違い

霊力は体力や肉体のエネルギーなもので気などもそれと同様と思われる。

魔力は精神的なエネルギーとされ、妖気等（とらは3の久遠も妖怪だから妖術を使えると思われる）もそれと同様と思われる。

ちなみに両方を同時に使うことも可能である。

序章7話「人外と武と異能の力」前編」（後書き）

次回から戦闘です。遂に恭也達が覚醒する予定です。ユニゾンレミリア達もあと少しで合流します。

序章 8 話「人外と武と異能の力」中篇」（前書き）

どなたか私に文才を下さい。

序章 7 話のあとがきを少し変更しました。

それとこの「人外と武と異能の力」は長いので前・中・後に分けます。

序章 8 話「人外と武と異能の力」中篇」

恭也達がざからがっている湖に向かって既に数時間が経っていた。

場所：湖付近

視点：雪

私達はざからを封印する為に湖に着いた私達でしたが、さくらさんや七瀬さんにノエルさんはまだ大丈夫そうでしたがざからの攻撃はより

激しくなり武器を持たない真一郎さんの手は既にぼろぼろで、いずみさんや恭也君といった武器を持っていた人達もざからの猛攻により武器が壊れたり、リステイさん達や薫さん達も能力の使いすぎで立っているのがやつと云うところであった。それでも皆は立ち止まらずにざからの猛攻を凌ぎ切っていた。そこで私はある決断をする。その決断とは・・・。

「皆さんもういいです！！ここから封印します！！」

と言った私に七瀬さんが

「え、何を言ってるの？そんなことをしたら貴女が死んでしまう。」
と言う。私がこの距離でざからの封印をすれば私が生きていないと言うことを分かっているから。

「しかしこのままでは皆やられてしまいます。」

と言った私に反論したのは恭也君だった。

「そんなことはありません！！諦めなければ必ず勝機があります。」

それに貴女は骸さんの子孫に待つんじゃないんですか！？」「

と触手を斬りながら恭也君がそう言った。

「もう待てないんです！！こんなに待っても来ないのに来てくれませんでした。だから・・・！！」

私には絶望しか残されていなかった

「だから死ぬんですか！？いつか会えるかもしれないという可能性まで捨ててしまうのですか！？」

「君に何が分かるの！？私がどれだけあの方を待っていたか！！」

「確かに分かりません。けど貴女はまだ数百年という時間が有るじゃないですか！！それに雪さんが気づいていないだけで骸さんの子孫には既に会っているかも知れないんですし、もしかしたら俺達の中にいるかもしれない！！貴女にはまだ可能性があるんですよ！！それでも自らの命を捨てるつもりなんですか！？」

「恭也君の言う通りだよ。雪さん。」

「そうです。諦めるにはまだ早いです！」

と恭也君の言葉に援護をしたのは真一郎さんにさくらさんだった。そうでした。確かに私は骸様の子孫が何をしているのかやどのような姿すら分かっていない状態。なのに何もかも捨ててしまふところでした。

それに恭也君と真一郎さんの目は骸様と同じような目をしていた。もしかしたら……。などそんなことを考えながらも恭也君達に感化された私は自らの命を犠牲にすることを止め、湖まで行って封印することを決めた。

「分かりました。もうそんな馬鹿なことはいけません。では、参りましょう。」

と言う私の言葉に皆さんは

「応っ！！」

と一斉に答え触手に向かって一斉に走り出した。

それから数十分後

何とか湖に着いた私達だったけど能力や体力がもう限界でした。しかし、誰も諦めることはしませんでした。

「影丸がきれた。また最後にこの子が残ったか。頼んだよ、円架。」

と言いながらいずみさんは最後に残った武器を握り締めて思いを込めているのが分かった。その時、湖が盛り上がった。

「いけない、さからが……。」

と私が言ったその時、ざからが完全に湖から出てきてしまった。

皆さんは遅かったかと言いながらも戦っている。それに比べて私はまだ何も出来ない自分の無力さに嘆いた。そしてその時、恭也君も触手や枝に向かって小太刀を振るっていたが遂に最後の小太刀が壊れてしまった。それでも恭也君に一齐に触手やざからの炎が襲いかかるが近くには誰もいなくてさくらさんが彼の名前を呼んだとき、奇跡が起こった。なんと恭也君とさくらさんからそれぞれ青色と水色の光の柱が出てきたのだ。少しして、その光がなくなると私達は驚きを隠せなかった。何故なら恭也君とさくらさんの姿が変わっていたからだ。恭也君は白銀の鎧、さくらさんも青い鎧を着けていて手には槍を持っていた。その時から二人とも気配が変わった。まるで歴戦の戦士のように。そして、さくらさんは

「来て、アイスシュヴェルト。」

と叫び片手を空に向けた。すると何処から跳んできたのか青い指輪が現れ、さくらさんの手に収まった。恭也君も何処からか二本の小太刀がクロスしたアクセサリーを取り出して

「行くぞ。影牙、光牙。セットアップ。」

と言う。するとアクセサリーが光り、二振りの小太刀になってしまった。ただ、その小太刀は普通の小太刀ではなく機械的なものでした。一方、さくらさんも

「行くわよ、アイスシュヴェルト！形態・アイン！」

と言うと指輪が光る。直に光が収まると銀色の両刃の剣が付いた青を基調とし、ラインが殆ど金色という三角形の盾がさくらさんの右手にあった。その武装も恭也君の影牙、光牙と言う小太刀と同等に機械的なものであった。

視点終了

一方、その頃

恭也達に異変が起きた時、

場所：さざなみ寮

視点：忍

防衛組と封印組に別れて、もう数時間が経過していた。それでも向こうは封印できていないようで、まだ触手が襲ってきていた。

その時、私は夜の一族なのにまともに戦えない悔しさでいっぱいだった。私も皆を守る力が欲しいと思った時、私から黒い光が出てきて、それは寮の天井を突き破り、空に向かっていった。そして、黒い完全に光が私を包むと何処からともなく男の声がした。

「汝、力が欲しいか？」

「えっ？なに？」

「もう一度言う。力が欲しいか？」

「うん、皆を守る力が欲しい」

「そうか。なら我と契約を交わせ。汝に力を与えよう。」

「分かった。」

「ただし、この力は強大であると同時に人であることを捨て精霊と
言う存在になるがいいな？」

「私は元々人じゃないよ。だから精霊になってもあんまり変わらないよ。」

「・・・分かった。では契約を。私の言った言葉をそのまま言うだけでいい。わかったな？」

「うん！！」

と私は頷く。それを見計らったように謎の男の声は契約の言葉を紡ぎ、その後に私も続く。

「我、正しき闇の力を従えん。」

「我、正しき闇の力を従えん」

「我が力、悪しき闇を滅ぼす為のものなり。」

「我が力、悪しき闇を滅ぼす為のものなり。」

「故にその力、正しき心の者の前に現れん。」

「故にその力、正しき心の者の前に現れん。」

「今こそ目覚めよ。」

「今こそ目覚めよ。」

「ディアクス、セトアップ」

「ディアクス、セトアップ」

という契約の言葉が終わる同時に私の体に金色の爪が生えた膝まである金属製のブーツと同じく爪の付いた肘まである籠手に一枚の黒い羽が付いた黒い鎧が装着されていき、両刃の大剣が出てきた。私はその大剣を掴むと私は自分の姿を見て驚きを隠せなかった。

契約の言葉を口にした途端に鎧が付いたのだ。驚かない方がおかしい。とそこで先程の声の主が

「此処に契約は完了した。我が主よ。」

と言った。その言葉に

「あ、主!？」

と私は素っ頓狂な声を上げた。更に謎の男の声は

「そうだ。汝はこの闇の精霊タナスによって選ばれたのだ。では、これからよろしく頼むぞ。主」

と言った。それに対し私は

「わ、分かった。これからよろしく。タナス」

と戸惑いながらも返事をするのであった。

「うむ。」

とタナスが返事をするると周りの黒だけの景色が割れるように崩壊していった。

視点終了

序章8話「人外と武と異能の力」中篇」（後書き）

相変わらずの駄文ですみません。

大分オリジナルが入っています。

忍のデバイスの元ネタはイスマイルです。ただ、忍にはそんな名前は似合わないからオリジナルの名前に改名しました。オリジナル設定も入ってます。タナスも同様です。由来や設定などはデバイス設定などを書く予定なのでそちらを参照してください。書くのは無印に入る前ですが……。

序章9話「人外と武と異能の力」後編」

場所：さざなみ寮

視点：知佳

忍ちゃんが黒い光に飲み込まれてしまった。私はサイコバリアの展開で精一杯で手を出せずにいたし、他の皆も同様で光に迂闊に触れないので手を出せずにいた。そんな中、忍ちゃんを覆っていた黒い光の柱が割れるように壊れていき、中から忍ちゃんが出てきた。だけど目の前にいる忍ちゃんは荒々しい鎧を着けていた。そして、忍ちゃんは寮から出てきた。そこで私は注意をする。

「忍ちゃん、外に出ちゃ危ないよ。」
と言うが

「大丈夫です。私も手伝います。」

と私に返す。そんなことを黙ってられない私は

「何いつてるの！？危険よ！！」

と反論するが忍ちゃんは

「大丈夫です。」

と自信を持って言い、私の横に来て

「エリアガード」

と叫ぶと黒い光の膜が寮を覆っていった。この現象について忍ちゃんに

「忍ちゃん、これは一体。」

と聞いてみる。そこで帰ってきたのは超ド級の言葉であった。

「これが終わったらちゃんと説明します。何でも私と同じようになった人が向こうの組にいるみたいですから。」

「っ！！」

と言うとさっきの青色と水色の光もこれと同じなのか。だとすると向こうでも忍ちゃんと同じことが？等と思考の海に浸っていると忍ちゃん

んが声をかけてきた。

「それよりも此処は私に任せて知佳さんは体を休めてください。」

「で、でも……。分かったわ。後はお願いね。」

と反論しようとしたが忍ちゃんの目を見てやめた。その目には強い意志が宿っていたからだ。

「はい、任せてください。」

と忍ちゃんも笑いながらそう答えると直に前を向き真剣な顔つきになっっていた。

視点終了

場所：湖

視点：全員

恭也とさくらの二人が鎧を着けそれぞれ武器を出した後、二人は空を飛ぶと直に大量の風の刃や氷の矢でざからを攻撃するとさくらの体には傷が付いていた。そしてざからは倒れこみ、暫くすると恭也が自分の守護獣にして助け、更に人型にできるので知識を与えればいいと言うと策を出した。その事にさくらは自分がすると言いつたが自分の言い出したことなのと言うとさくらも引くしかなかった。こうして守護獣にすることに決まったざからの下には魔法陣が展開されるとざからは光に包まれた。光がやむとそこには少年と化したざからがいた。そこで「さてとっ！……そろそろ降りて来たらどうですか！？レミリア、フラン、ジェシア」と言い、恭也とさくらが何か気がついたらしく空を見上げる。それにつられて全員が上を見上げるとそこには三人の少女が飛んでいた。そして、その三人は徐々に降りていき、とうとう恭也達の目の前に降り立ったのだった。

視点終了

視点：レミリア

妖気の大本が倒れて、少ししてからランドールの生まれ変わりが魔物を守護獣にすると上空にいる私達の方を向いてから

「さてとっ！・・・そろそろ降りて来たらどうですか！？レミリア、フラン、ジェシア！」

と言った。この様子だと二人とも記憶を持ったまま覚醒したみたいねと思いながら彼らの前に降り立つ。そして

「久しぶりね。ランドールにティッティ。その様子だと覚醒したみたいね。」

と言った私にティッティの生まれ変わりが

「ええ、でも私が継承したのは記憶と力だけよ。今の名前は綺堂さくらだから。」

と返して来る。それにランドールの生まれ変わりの少年も

「俺も同じです。俺は高町恭也と言います。ちなみに2代目ランドールである不破正樹の兄の不破騰樹の血を引いています。」

と返し、自己紹介もしてくれる。それに対し今度は咲夜が

「そうですか。私も今はジェシアでは無く十六夜咲夜と名乗っておりますのそちらでお呼びください。恭也様。それから恭也様、私に敬語はやめていただけると助かります。」

とそれに返し、自己紹介する。

「ああ。よろしくな、咲夜。では、皆さんも不思議がっているので一度さざなみ寮まで戻りましょうか。色々とお話しますから。咲夜、レミリア、フランも行こうか。」

とランドールの生まれ変わりの恭也が言い呶然としている他の人間達に話しかける。他の人間達も頷くと山を下りて建物のある方に向かっていったのであった。そして私達も呼ばれたので付いていくこととなった。

視点終了

その数十分後、さざなみ寮に着いてから忍を含めた6人で魔法や理由等について話すことになるのであった。

序章 9 話「人外と武と異能の力」後編」（後書き）

無理終わらせました。と言うよりこの話（前、中、後含めて）が一番駄作な気がします。二人の覚醒時とざからとのまともな戦闘と守護獣にする理由等を次回から何話かに分けて説明をします。それとざからと雪が如何するかも説明が終わった後にします。

序章 10 話「二つの魔と説明」前編」（前書き）

サブタイトルの二つの魔については魔法と魔物と言う意味です。

序章10話「二つの魔と説明」前編」

場所：さざなみ寮

視点：全員

気を失っている人間形態のざからと先程海鳴に文字通り飛んで来た咲夜とユニゾンスカーレット姉妹を恭也達封印組が連れて帰ってきた。勿論寮組に聞かれたが、後で話をするといった。ざからについては守護獣にしたことや、ミッドチルダ式やベルカ式魔法や守護獣について話した。寮側も話さないといけないことがあった。忍の覚醒のことである。忍は自分の知る限りのことや光の中での出来事などを全員に話した。

「そう、魔力反応がしたと思ったらやっぱり忍だったの。それにしても忍もラ・ギアス式の適合者とはね。やっぱりこれだけのデバイスとなると殆んどの術式が使えるかもしれないわね。」

「ラ・ギアス式？」

とさくらの言葉に恭也と忍以外の全員が反応し、一斉に聞く。

「そうです。かつて滅んだラ・ギアスという世界の名をとってそういわれています。ちなみに私と恭也君の前世は元はベルカ式魔法の使い手でしたが、ヴォルクルスとの戦いの最中でラ・ギアス式のデバイスを手に入れました。しかし、その戦いで私達の前世は死んでしまいました。」

と語るさくらの後を続くように恭也も語りだす。

「ですがその時、俺の前世が相打ちの状態で奴を倒すことに成功したんです。その後はどうなったのかは、なのはに聞いた方がいいかもしれません。」

といい終わると、そこで真雪が気になったことを聞く。

「少年、ヴォルクルスってなんだ？それになんてお前ん所の赤ん坊に聞くんだけ？」

その間に恭也が答える。

「ヴォルクルスと言うのは破壊神で、かつてラ・ギアスの3柱神に数えられていました。実際には破壊神ではなく、大昔に存在した巨人族の怨念等の集合体だと言われていますが……。なのはに關してはまだ確証はありませんが十中八九、俺達の前世での主、聖王オリヴィエの生まれ変わりです。まあ、記憶はまだ覚醒してないみたいですけど。」

「そうか。でもなんで二人は前世の記憶を持っているんだい？」

耕介も気になったことを聞く。

「それも話します。」

と恭也が答えた。そして今度は知佳が

「じゃあその時の話をしてくれる？二人とも。まず恭也君からお願いできる？」

と言う。それに対し恭也は

「分かりました。」

と答え、恭也は語り出した。

「俺が覚醒したのは……………」

視点終了

視点：恭也

「俺が覚醒したのは……………」

そういうと俺は回想に入った。

回想

場所：湖

ざからとの戦いの最中、俺は全ての武器を失ってしまった。けれども尚迫り来るざからの攻撃に成す術も無くやられるの待つしかなかったその時、急に体から青い光が出てきた。その事に驚きつつも俺は眩しさで目を閉じた。光が止むとそこは青い空間だった。そこにいたのは

見知らぬ男の人が一人立っていた。

「あなたは？」

「俺の名は2代目ランドール・ザン・ゼノサキスであり不破正樹でもある。君の前世だ。」

「どういうことですか？それになぜ俺の前に？」

「時間が無いから、簡単に説明させてもらう。まず俺が君の前に現れたのは君が死にそうになっていたので助けたのと君に俺の力と記憶を受け継いで欲しいからなんだ。」

「何故、力と記憶を？」

「詳しいことは記憶を受け継いだら全部分かることだから省かせてもらうよ。時間が無いことだしね。勿論拒否権は無いよ。」

「そういうと俺の頭に手を載せた。すると急に頭痛がして次の瞬間、色んな情報や正樹さんの記憶が流れ込んできた。更には膨大な量の魔力が俺の中に入って行くのが分かる。」

「ふう、これで終了だな。じゃあ、俺は行くから後は頼んだ。」

「あ、ちよつと……。」

流し終わると正樹さんはそういつて俺の言葉も聞こえなくともせずに俺の中に入って消えてしまった。

「は、このままじゃ皆を助けられないし此処から出るか。」

「と言うと前世で死ぬ前に相棒となったデバイスを呼ぶことにした。」

「来い！！サイバスター！！」

すると何も無いところから白銀の腕輪が出てきた。そして、

「汝が我が新しい主か？」

「そうだ！俺の名は不破恭也だ。よろしくな、サイバスターにサイフイス。」

「良からう。此方こそよろしく頼むぞ。」

「ああ。それでは……行くぞ。サイバスター、セットアップ！！」

「了解。」

会話が終わると俺の体に白銀の鎧が装着されていき三枚の白い羽が生えてきた。装着し終わると急に辺りの青い景色に輝が入り、割れるように消えていった。そこはさっきいた場所だった。すぐ近くと

さざなみ寮付近から魔力反応がしたが今はもう一つの相棒を取り出し、

「行くぞ。影牙、光牙。セットアップ。」

と呼びかけデバイスを起動させる。すると念話で

「はい、新しい我が主。」

「了解、新しいマスター。」

と答えてきたので俺も

（ああ、俺の名は不破恭也だ。よろしくな、光牙に影牙。）

と念話で挨拶をする。

「はい、よろしく願います。」

「よろしく頼む。」

と光牙と影牙が答える。

こうして覚醒した俺は同じく覚醒したさくらさんと共にざからと対峙するのであった。

回想終了

そして俺は記憶の中の主な出来事や彼がどう思いどう感じたのかなどや俺に何を託したかったのかを話した。例えば何故が発生した次元震のせいで空間が歪みそこに入ってしまった後、当時の聖王であったオリヴィエに拾われてからのことから俺の最後の記憶であるヴォルクルスとの戦いのことまでのことや、なのはがその聖王オリヴィエの生まれ変わりだと言うことも感じ取っていたらいいと言うことも話した。まあ、まだ話してないこともあるけど、それは個人と言うか俺たち一族についてのことだったのであえて話さなかった。リステイさんはそのこと話さないのかと聞いてきてそれを聞いた皆も聞いてきたけどこれからは一族だけの話なのでと納得してもらった。ちなみに寮側の人に俺の魔装機姿を見たいとせがまれたがそんな理由で戦闘形態は出来ないといい、どうしても見たいのなら教導をする為にまだ記憶も知識も持っていない忍と模擬戦を後でするかその時と言った。

「と言うわけなんです。それとざからとこの三人についてはさくら

さんの話が終わってから詳しくしましょう。」

「そうね。じゃあ、今度は私ね。」

と言つとさくらさんは語りだした。

視点終了

おまけ

ラ・ギアス式

アルハザードやミッドにベルカとは異なる進化を遂げた魔法体系を持つ。

使い手のことは魔装士と呼ばれ、ベルカ式とラ・ギアス式の二つのときは魔装騎士でミッド式は魔装導師、アルハザード式は魔装術士ちなみにアルハザード式は魔術師と呼ばれている。

違う所其の1：鎧型デバイスが殆んどであり、武器型や杖型は存在しない。仮にあったとしても既にラ・ギアスと共に消滅している。

違う所其の2：デバイスに精霊や神と契約させる。精霊は魔法制御や魔力制御をAI以上にしてくれるので魔法に詳しくなくてもある程度使えるので初心者向きとも言えるがそれは下位クラスだけの場合であり中位や上位となるとかなり扱いにくくなっている為、上級者向きともいえる。尚、魔装機神と契約している精霊には意思があり、自らの認めた人間にしか扱えない。ちなみに上級クラスの精霊と契約を交わした場合その使用者も精霊となり誰かに殺されるまで永遠の時を生きることとなる。

違う所其の3：小型の高出力魔力炉を持っている。特殊なデバイスにはそれに擬似リンカーコアも存在する。魔装機神にそれ以上の能力を持った超魔装機やディアクスがその特殊デバイスに該当する。

それぞれ擬似リンカーコアの数が異なる。ただしグランゾン系は魔装機系には入らないが擬似リンカーコアがある為ここに記す。

擬似リンカーコアの数

魔装機神が4

グランゾンと超魔装機が8

ディアクスが12

ネオ・グランゾンが16

極稀に全ての体系に適応した人間がいるがその数はあまりに少なく過去に確認されているだけでも200人いるかいないか程度だったと言われている。魔装機神のマスターがそれに該当し、魔装機神の精霊がマスターの資格を選ぶ基準の一つであるという声もあったが定かではない。また、精霊の契約に頼らないで魔装機神より強力なデバイス造ると言う超魔装機計画も存在し、忍のデバイス「ディアクス」はその超魔装機と魔装機神のデータを元に造られた。超魔装機は魔装機神を遥かに上回る性能を持っていて、ディアクスはその超魔装機を更に凌駕するデバイスである。

序章10話「二つの魔と説明」前編」（後書き）

魔装機系や鎧型デバイスはまだ出てくる予定です。なのはの鎧型デバイスも無印編に出てきます。まあ、無印編とA's編の事件自体は早く終わりますがそれ以外に時間を費やす予定です。次回はさくらとざからについてです。

序章 11 話「二つの魔と説明」中編」

場所：さざなみ寮

視点さくら

恭也君が話し終え、遂に私が話す番となった。

回想

場所：湖

「恭也君！！」

恭也君がざからの攻撃により窮地に瀕していたとき、私は自らに向かってくる触手を相手にしながらのそう叫んでいた。そして恭也君を救えない自分に無力さを感じた。

（このままじゃ恭也君が……。恭也君や皆を守れる力が欲しい。

）

と思っていると何処からか

「その願い、聞き入れましょう。」

と言う声がした次の瞬間、私の体から水色の光が出てきて私を包み込みこんだ。その光が一層強くなると私はその瞬間目を閉じた。その光の輝きが収まったのが分かると私は目を開けた。そこは水色の空間だった。

「ここは？」

と言うがここは誰も居ない空間であつた。なので誰もその問に答えられる者は存在しないはずだった。しかし

「ここは貴女の魔力で出来た世界。」

と言う誰も居ない空間で私以外の声が聞こえた。そして周りを見渡しなが

ら「だ、だれ？」

と問う。それに答えるかのように水色の光の粒が集まり、それは段々と人の形を作っていた。そして、そこにいたのは金髪碧眼の女

性だった。

「始めまして。私は、ティッティ・ノールバック。貴女の前世よ。」
とその女性は名乗った。驚きつつも

「えっ！！あ、始めまして。綺堂さくらです。それにしても前世ですか？」

と答えると何故私の前世が今ここに？と思った。

「そうよ。だけど驚いている所で申し訳ないけど、時間が無いか説明はなしよ。どうせ私の記憶を継承するときに分かるから。それよりも貴女は誰かを救える力が欲しいんでしょう？」

とティッティさんの問いに

「はい。」

と頷きながら答える。それに対しティッティさんは私に近づきながら
「そう。なら、今から力を与えるわ。」

と言う。そして、私とティッティさんの距離は60cm程にまで近づくと彼女が私の頭の上に手をのせた。すると彼女の過去らしきものや力の使い方、それに魔力が彼女から流れ込んできた。

「これで私の役目は終了ね。・・・それじゃあ私は貴女と融合するけど、貴女は貴女のまま居なさい。貴女、彼の事が好きなんでしょう？なら早めに言った方がいいわよ。私みたいに後悔したくなかったらね。」

と言うと私の中に入っていった。私はまだ聞きたいことや言いたいことがあったのと思っていたが本人が居ない為、言うことは出来なかった。それよりもこの空間から出て恭也君や皆を助けなきゃ。その為に私は前世での相棒の一つを呼び出すことにした。

「来て、ガッデス。」

と言うと一つの青い腕輪が私の前に現れた。そしてそれを左手で取ると

「貴女が新しいマスターですね。」

「ええ、綺堂さくらよ。よろしくね。ガッデスにガッド。」
と挨拶するとガッデスのコア部分が光り

「はい、此方こそ。マスターさくら」

と返事をくれる。

「じゃあ、いくよ。」

と言いガッデスの真の姿を現す準備をした。腕輪を持った左手を上に掲げる。

「はい。」

ガッデスもそういう。戦闘がいつでも可能と言うことだ。そして「ガッデス、セットアップ。」

と叫ぶと私の体に青いオリハルコン製の鎧が装着されていく。そして、装着が完了すると今度は三つ又の槍「グングニール」が現れた。グングニールを手に持つと周りの景色に輝が入り、それが徐々に大きくなる。そして最終的に割れるように消えていった。青い空間が消え

るとそこは元の場所だった。皆、驚いていたし、恭也君の方から覚醒状態の魔力反応を感じ取れた。恐らく彼も覚醒したのだろうと思

いな

がらも私はもう一つの相棒を呼ぶことにした。

「来て、アイスシュヴェルト。」

と私は叫び、片手を空に向けた。すると何処から跳んできたのか青い指輪が現れた、私の手の平に収まった。そして

「行くわよ、アイスシュヴェルト！形態・アイン！」

と自らの相棒に呼びかけた。すると指輪が光り、それが収まると銀色の両刃の剣が付いた青い六芒星が描かれた三角形の盾が私の右手にあ

った。そして恭也君も私同様に前世での長年の相棒を取り出して起動させたようで、彼の両手には影牙と光牙という恭也君の前世の正樹さ

んが持っていた二つの小太刀型デバイスがあった。こうして私と恭也君は目を合わせると大地を蹴って飛びながらざからに向かっていった

のであつた。

回想終了

私も精霊（恭也も精霊）になったことや恭也君みたいに過去や彼女の思いをある程度は口にした。心や頭の中が読めるリスティさん（知佳

さんも出来るが彼女はイヤリングでその能力を封印しているし無、暗に聞いたりしない。）に何か聞かれると思つたが、恭也君の時みたい

に他人にはいえない事情があるんだろうと思つたのか、聞かないで居てくれた。

「これで私が覚醒した時の話は終了です。次にざからについてなんですが恭也君がしてくれれます。」

と言っている途中に

「その必要はない。なぜなら・・・。」

と言う声がざからを寝かせてあるソファの方から聞こえた。恭也君以外は驚いていた。そこに立っていたのはなんと、気を失っていたは

ずの人間形態のざからだったからだ。ちなみに恭也君はこのことに気づいていたらしい。

視点終了

視点：ざから

視点：ざから

「その必要はない。なぜなら・・・。」

と一区切りしてから我は

「我が直々に説明してやるからだ。」

と言っていた。恭也とか言う我を使い魔にした小僧以外は我が驚いたらしく。そのことをさくらとか言う小娘が

「貴方、起きてたの？」

と我に聞く。我は仕方なく答えることにした。

「ああ、お主が説明している最中からな。」

と言うと今度は

「ざから、もういいのか？それにこの体はきついだろうが我慢してくれ。この世界ではお前の本体は目立ちすぎるからな。」

と恭也が言う。

「ふん、分かっておるわ。それよりも、我が封印されずにこうして居られるのはお主のお陰であるからな。恭也とか言ったな、小僧。不本

意ではあるがお主に使えることにするぞ。目的を果たしたことだしの。」

と言う。そこで恭也や他の人間共に雪が驚いた。そしてそのことを恭也が

「どういうことだ？もしかして骸さんの子孫がこの中にいるのか？」と聞く。それに対し我は

「その通り。しかもその者は骸の生まれ変わりらしい。」

と言い我は女顔の小僧の方を向き

「会いたかったぞ。骸の子孫にして生まれ変わりよ。」

と言った。

「え、ええ。俺が！！見間違いとか勘違いじゃなくて？」

と聞かれた。それに対し我も腹が立ちながらも

「そうだ。私の魂を見る目は間違いないのだ。骸の魂を見間違えるはずがない。」

と自信を持ってそう答えた。

「真一郎さんが骸様の子孫で生まれ変わりだったなんて・・・どうして今まで気がつかなかったのかしら。」

と雪が言った。

「お主ら雪女はそこら辺は弱いからの。仕方あるまい。」

「では、何故恭也の守護獣になったのか話すとするかの。」

と我は本題を切り出した。

回想

精霊化した小僧が近づき攻撃を加えようとしたが我は小さな声で「何故だ、何故。貴様らは骸の子孫に会うのを邪魔をする。」

と言った。それを聞いた小僧は

「それはお前の姿が問題だしお前は害があるみたいだから。だから封印しなければならない。」

と言い、今にも攻撃しそうな勢いだった。しかし

「今更そんなつもりはない！！我はただ骸の子孫に会いたいだけなのだ！！」

と言うと我は涙を流した。暫くして小僧はある提案を持ちかける。

「だから、お前が暴れたり無暗に人を殺さないと言う条件で何とかしよう。」

そんな方法があるのかと小僧に

「なんだと！！そんな方法があるというのか！？」

と聞く。小僧も頷き。

「ああ、今の俺とあそこにいるさくらさんなら可能だ。」

「で、ではその方法とはなんだ？」

と聞く。すると

「ああ、俺がさくらさんの守護獣になることだ。この場合は言いだした俺だな。」

と訳の分からない言葉が出てきたので聞いてみることにした。

「守護獣？何だそれは！」

それはとんでもないことだった。

少年説明中……

「なんだと！！この我に奴隷になれと言うのか？」

と怒鳴る我に

「あくまで形式的だな。」

と小僧が言う。

「何！？どういうことだ！！」

「守護獣や使い魔になれば人間形態になれるからな。それでお前の目的を果たせる。」

と言うことだった。その方法だけなのかと思い

「ほ、他に方法はないのか？」

と聞いてみた。

「ない！！」

そうきつぱりいわれるとショックだなと思っていながら

「分かった。お主の守護獣とやらになつてやるとしよう。」

小僧の守護獣になることを決めたのであった。

「そうか。では手順を説明する。」

少年説明中……

「これしかないから仕方がないか。」

「ああ、では俺はさくらさんに作戦を説明する」

と言い我から離れた。その後、小僧はさくらと呼ばれるものや他の者に作戦を説明した。その作戦は以下の通りである。まずは小僧とさくらが威力の低い攻撃を加え弱らせる。後は小僧が何とかするという作戦である（守護獣にすることは伏せた）。

回想終了

「その作戦は成功し、我は恭也の守護獣となつて今に至る。と言うことだ。しかし、ただの人間が言つても我は信じられなかっただろう。しかし、こやつ目の目には骸同様にそれだけ信じさせる何かがあったからこそ受け入れられたのだ。」

とだけ言う和我が守護獣になった理由の説明を終えた。ちなみに恭也についていく理由には「恭也という方が大暴れ出来そうだし」と言う理由もありそれを言ったら、その場に居た者達全員に呆れられたと言うことも記しておく。

視点終了

おまけ

アルハザード

ラ・ギアスとほぼ同時期に滅んだとされる。理由は不明ではあるが内戦が原因であると言う説が今のところ有力であるが定かではない。魔法技術がラ・ギアスとほぼ同等であるとされ、ミッドチルダやベルカよりも発達していたとされる。その代わり機械技術や魔力の使わない質量兵器などの発達はミッドやベルカ、それにラ・ギアスよりも劣っていたとされている。

アルハザード式の使い手の呼び名：魔術師

デバイスの種類は多種多様であったとされている。

序章 1 1 話「二つの魔と説明」中編」(後書き)

次回は三人組みの説明と雪についてです。

序章 12話「二つの魔と説明」後編」（前書き）

物語の大半は思い浮かぶのに文字にするのが難しいです。

序章12話「二つの魔と説明」後編」

視点：レミリア

さからの説明が終わり、次はとうとうレミリア・フラン・咲夜の番がやってきた。

「さて、次は私達ね。でもその前に二人の姉妹の話をする必要があるわ。」

と前置きをして話し出した。

「その姉妹はね、共に特殊能力のせいでモルモットにされていたの。その力とは姉が運命を操る、妹がどんな物でも破壊してしまうと言うものだった。そして姉妹はある日、その研究者達への恨みと月の魔力によって姉妹は吸血鬼として覚醒し、その晩の内に研究所を滅ぼして何処かへ行ってしまったの。」

「まあ、仕方ないね、自業自得じゃ。」

と薫が言う。

「そうね。酌量の余地はないわね。」

と瞳が相打ちを打つ。

しかし、それだけではなくそのデータが別の研究所に送られてその成果が姉妹方のユニゾンデバイスであり、私達だと言うことを話した。ユニゾンデバイスのことを聞かれたのでユニゾンデバイスは融合機とも呼ばれ主と融合することで絶大な力を発揮するが融合に失敗すればユニゾンデバイスに人格を乗っ取られ最終的に死亡してしまい、それが融合機の少ない理由とされていると答えた。そこで新たな疑問が生まれそれを聞かれた。なぜ二人はクローンではなく融合機なのかと、それについては私の予想ではあるがクローンだと寿命があるから長期の実験には期待できない事とオリジナルが暴走したことが関係しているのではないかと説明した。実はそれだけでなくかつてどこかに消えてしまった究極の魔道書型デバイスの能力の一つの能力に見ただけでその人間の特殊能力や魔法、それに魔力と

身体能力&知能をコピーし、更に強化して自分の主の能力にそれをプラスすると言う物があり、その能力の再現するというのもあった。今、その魔道書はある人物と共に完全覚醒の時を待っているのだがそれが誰であり何処にあるのかを知っているのは私、フランドール、咲夜だけだったりする。話を戻すが、私達二人がオリヴィエ様と出会ったのは戦争中で聖王軍が私達が居た研究所にやって来た時だった。聖王軍が来る直前に研究者達は私達を置いて研究所から逃げ出していった。そしてその聖王軍を指揮していたのがオリヴィエ様で手術台に縛られた私達発見して救ってくれたのもオリヴィエ様だった。その後はオリヴィエ様や正樹達4騎士が人間らしく扱ってくれたと言うところまで話した。

そして咲夜については吸血鬼ハンターだった彼女が吸血鬼と思われる私とフランの二人（正確には2機）を狙ったときに私の能力によって運命を変えられてオリヴィエ様の従者になったということを咲夜が自ら話した。

それから、この世界に來た理由やベルカについても恭也とさくらも知らない事なので二人に聞かれたので説明した。その内容とは・・・。

オリヴィエ様が復讐心によって暴走したこと。その結果がベルカの消滅であったこと。その時に生き残ったベルカの人々を別の星に移住させたこと。4騎士の一人であった正樹の供養のために地球に來た時にその兄の騰樹と出会い結婚したこと等、驚愕するのに十分な威力であった。事実、オリヴィエ様と共にしていた記憶を持つ恭也とさくらですら驚きを隠せないで居た。無理もない、自分の前世が死んだのが原因で復讐心を抑えきれずに戦争を仕掛けてきた連中を故郷の国と共に滅ぼしてしまったのだから。それからオリヴィエ様の結婚後は、三人は結界を張ってそこに館を魔法で作りそこに250年の間住んでいたと言うところまで説明した。こうして私達三人の話は終わった。

視点終了

そこで今まで黙っていた恭也の使い魔であるざからが声を出す。

「ところで雪は如何するつもりなのだ？」

「え、どうということ？ざから。」

とざからの言葉に反応する雪に

「既に骸の子孫が分かっているのだ。約束は果たされたも同然だろう。だから、これから如何するのかと聞いておるのだ。我と共に恭也の元に来るか、それともその骸の子孫についていくのか。」

とざからは聞く。それに対し雪は

「そんな、二人に迷惑がかかるんじゃない？」

と言うが当の二人は

「そんなことないですよ。寧ろ妹や家族も喜ぶと思います。」

「そうだよ。だから気にしないで。」

と恭也と真一郎がそれぞれ言う。

こうして少し考えた上で雪が選んだのは……。

「じゃあ、恭也君お願い出来る？」

「ええ、分かりました。」

と恭也が返事をする。その一方で選ばれなかった真一郎と恭也が好きな忍とさくらガツカリしていた。真一郎は可愛い子と一緒に住めな
いから、忍とさくらはライバルが増えたこととそれぞれガツカリした理由が違っていたが……。それに引き換え真一郎が好きな人達

は喜んでいたが。理由は言うまでもなくライバルが増えずにすんだからである。こうして雪の居場所も決まったことと既に夕方になったの

で解散することとなった。帰りもノエルの車と愛の車で途中まで帰ることとなったのだが、今回はメンバーが少し違っていた。

ノエル組：忍、さくら、みなみ、弓華、ななか

愛組：真一郎、小鳥、唯子、瞳、いずみ、七瀬（行きも帰りも位牌の中で小鳥が持っている。）

と言うメンバーだ。

恭也や雪にざからは恭也の転送魔法で家に直接転移していくからだ。レミリア、フランドール、咲夜はそれに同行する事が決まっている。ちなみに恭也が直接転移できるのは他の仲間の物だったデバイスの反応やなのは聖王魔力の反応を辿る事でピンポイントで転移できるのだ。こうして転移した恭也達がついたのは高町家の物置小屋付近だった。

家に着いた恭也達は家族に経緯を説明した。結果、全員が高町家の住人になった。ただ、来た全員に戸席がなかったのでアルバート経由で偽の戸席を作る事にしたのだった。こうして今までの中で一番長かった（勿論、前世とは関係なしに）恭也の一日は終わりを告げるのであった。

おまけ 1

高町勇吾

ざからの高町家に入ったときに付けられた名前であり、ざからの名前だと魔物だと気づかれてしまう可能性もあると士郎が考えたから。現代知識等を教えてから恭也と共に学校へ行くことが決定。容姿はとらは3の赤星勇吾を参照（その代わりに赤星くんには存在しないことになって貰います。）

軀川雪

むくろかわと読む

苗字は本人の希望で骸とその子孫の真一郎の苗字を合体させたもの。ただ、漢字的に骸だとまずいと士郎が感じ、此方の軀に変更した。

十六夜咲夜

高町家のメイド長（一人しか居ないけど）で翠屋のフロアチーフとして働くことに。

レミリア・スカーレット

小人形態でなのは世話係兼護衛1として働くことに。

戸席は作っていない。

フランドール・スカーレット

なのは世話係兼護衛2として働くことに

戸席は作っていない。

おまけ2

i f

真一郎が選ばれた世界

こうして少し考えた上で選んだのは……。

「真一郎さん、お願いできますか？」

と雪が言った瞬間、忍とさくらは喜び、真一郎が好きな女性達は皆ガッカリしていた。理由は語るまでもなく忍とさくらはライバルがこれ以上増えなくて良かったと言っ喜びで、真一郎が好きな女性陣はその逆でライバルが増えたことに対してのガッカリだった。

「え？いいの！？勿論、OKだよ」

と真一郎、それに対し

「ありがとうございます」

と雪が言う。

「あゝ、気にしないでいいよ。君みたいな可愛い子が家に来てくれるっていうんだもん。」

その言葉に雪はポツと顔を赤くさせる。

こうして雪は真一郎の家で暮すことになったのであった。

ちなみにその後、真一郎は彼の事が好きな女性によって袋叩きにされたのであった。合唱・・・チーン

それから数年後

真一郎と小鳥が共同で開いたレストランには真一郎とその妻である相川雪の夫婦の姿とそれを微笑みながら見守る小鳥の姿があった。

i f 終了

序章12話「二つの魔と説明」後編」（後書き）

魔道書の持ち主は、原作で管理局の悪魔、魔王、冥王と名高いあの方です。大体の方は既に分かっていたかと思いますが・・・。
雪は恭也と歩むことにしました。真一郎×雪の方には申し訳ないと思ったので申し訳程度ではありますがi fも書かせていただきました。

それにしても人数が増えると難しいです。なんか方法はないでしょうか？と思っている今日この頃であります。
それにしても強引に話を進めたような。

序章 13 話「説明と暗躍する者」

場所：さざなみ寮

視点：全員

魔獣ざから改め高町勇吾達が高町家の住人となって2年の月日がたった。

3歳となったなのは高町家長男である恭也と咲夜とレミリアとフランのユニゾン姉妹に連れられてさざなみ寮へと来ていた。なのはとさざなみ寮陣営の人間を会わせるである。レミリアと同じく2年前に高町家の住人となった雪は翠屋で働いている為、この場には居ない。ざから改め高町家次男（あくまで戸席上である）の勇吾も現代知識やひらがな、カタカナ、漢字等の文字の勉強中であるため今は高町家で勉強中だからである。ちなみにさくらや忍は予定があるらしくこれないらしい。

なのははリスティと会った時から心を読み取れるようになった。最初はHGSを疑われたが翼が出ていない為、別の可能性が高いという結論に達した。そんな時、意外なところから質問がくることになる。

「失礼ですが、この中のどなたかに心や思考を読む能力の方は居ませんか？」

と何かを考えるような仕草で咲夜が聞く。

「ああ、それなら僕と知佳が読めるよ。条件付だけどね。それがどうかした？と言うより何故僕達が心を読めることが分かった？」

とリスティが咲夜の質問に答え、不思議に思い、どうしてそんなことを聞くのか理由を聞く。それに対しその質問に答えると思いきや「その前に、皆様はなのは様が聖王オリヴィエ様の生まれ変わりだと言うことは覚えていますね？」

と咲夜は聞く。そこでリスティが

「覚えてるよ。でもそれと今回のこととどう関係してくるんだい？」

と聞く。そして咲夜は本題に入りだす。

「はい、オリヴィエ様はある魔道書の転生能力によりなのはお嬢様へと転生したのですが、その魔道書には他にも能力があるのです。今回の事はその能力の一つが働いたのではないかと。」

「その能力つてのは何なんだ？」

と真雪が聞く。

「人間を見ただけでその人間が持つてゐる特殊能力等をコピーし、強化や改造をして主にその能力を与えろと言つたものです。これは、先程のリスティ様の何故分かつたかと言つた質問の答えでもあります。」と咲夜が答える。

「なるほど、そうことが。」

とリスティが納得する。

「そういうことです。」

「じゃ、じゃあ、霊力とかもコピーしているのかい？」

と耕介が咲夜に聞く。それに対し咲夜も

「その可能性は高いです。その理由として2年前のざからや私達が来た日から急激に身体能力や魔力が上がっているのです。」

と仮説ではあるが答え、その理由を言う。

「つまり、他人の力を自分に上乗せできるつてこと？」

となのはが咲夜に聞く。

「恐らくは。それに、知能に関してもかなりのものとなつておりますので知識などもコピーしているのでしょう。」

と咲夜が言うとなのはが

「そういう自覚はないんだけどな。」

と言つた。

「ちなみにその魔道書つて言うのは何処にあるんだ？」

「それは、まだ眠っているのよ。主の中でね。」

「どういふこと？どうして私の中にそんなものがあるの？」

「それはね、なのはの前世のオリヴィエがこの世界に来る前に手に入れた物なだけで、ランドール達が死んでその後手に入れた魔

道書だから。」

真雪、レミリア、なのは、フランがそれぞれ言う。そこで

「どうりで、前世の記憶を辿ってもなかったのか。」

と恭也が言う。

「そういうこと。でもね、私とお姉さまはオリヴィエと出会う前から知っていたんだけどね。」

と言うフランの言葉に

「どういうことだ？」

恭也は聞く。そして

「私達がスカーレット姉妹の能力をコピーしたユニゾンデバイスだって事は2年前に話したよね？」

その間に真雪が

「ああ、どうやったかは知らねーけどな。」

と言う。

「つまりやり方が分からなければ私達はただのユニゾンデバイスとして存在しているか、廃棄処分になっていたはずだよ。そこで問題だよ。どうして2体でも成功しているんだろうね。」

「!!!!!!」

とこの場にいる全員が気づいたのである。そして

「データか資料があったと観るべきね。勿論、成功データがあるはずよね。」

と知佳が言うとそこでなのはが気づいた。

「まさか!!それが私の中に眠る魔道書？」

「うーん、半分正解だね。実はその魔道書のデータをコピーされてから何冊かの魔道書やいくつかのデバイスになったんだよ。そしてその魔道書は……。うーん、魔道書と言うのはおかしいね。能力を記録する記録書と言うことでいいかな?。」

とフランの説明になのはは

「そうだね。私もそれでいいと思う」

と相槌を打つとその場にいる全員が頷いた。

「他にも機能があるんだけどそれを使うには主が覚醒しないとダメみたいね。まあ、魔力を糧にしての覚醒だと思うわ。まあ、覚醒云々は気にしなくてもいいけどね。だって、この世界には魔法文化がないから魔法関連の危険が訪れるはずがないから使う必要がないもの。妖魔や妖怪もこの世界にうようよいるわけないから恭也やさくらみたいな目覚め方はないでしょうね。」

とレミリアがそういう言う。しかし、その数年後に妖怪や魔法関連の事件等が起きて、それになのはが巻き込まれることなど、今のなのは達は知る由もなかった。

一方その頃……。

場所：第147管理外世界アルファード

第147管理外世界アルファード、かつて繁栄していたが数百年前に滅んでしまった世界である。

そんな世界で黒紫の鎧を装着した少年と異形の者が戦っていた。戦況は少年が圧倒的に押していた。

視点：?????

広がる荒野で少年である私と一体の異形の生物が戦っていました。

私は黒紫の鎧くグランゾン>を着けていて全くの無傷でした。それに対し、異形の方は既にボロボロであった。そこに黒紫くグランゾン>を装着している私は

「さて、止めを刺す前に力を奪って差し上げましょう。ヴォルクルス。いえ、真・ウィゾール。」

ザシュツ……ウィー……!

と言い、私は真・ウィゾールの鎧部分にその手に持っている巨大な大剣を突き刺すと真・ウィゾールの力を奪い始めた。そして、全ての力を奪いつくすと私は

「これで最後です。滅びなさい。」

と言い、私の鎧ぐランゾン>の胸の装甲が開き黒みがかった紫の光を胸元で集めるとそれをさせて片手で真・ウィゾールに投げつける。するとその巨体を貫き後ろで止まると全ての物を吸い込み始めた。その力にさしもの巨体も吸い込まれるしかなく、とうとう吸い込まれていった。

「さて、これで一体撃破ですね。既に分身の内、私の前世と融合したヴォルクルスの分身は300年前に彼らによって倒されてますからね。後3体ですね。」

と言う。そう、私はかつて二代目ランドール達が戦ったヴォルクルスと融合した神官の生まれ変わりでした。容姿も同じと言うのはいささか驚きましたがそんな事は些細なことなのです。しかし、そんな私がどうしてこんなことをしているのかと言うと

「これから私が私を操って利用してくれた者達やヴォルクルスへの復讐が始まります。さて、次はどうやって復活させて倒しましょうかね。クッククッククッククック。」

と言い、私は笑いながら何処かへと転移していった。

視点終了

序章 13 話「説明と暗躍する者」（後書き）

サフィーネさんは台詞もなく早々に退場してもらいました。それと
ようやくシユウ様出てきました。次にヴォルクルスが出る時はある
作品とのクロスになります。

序章 14 話「友達」

なのはの能力が一部だけ分かって3年後、なのはは2年前に親友となった月村忍の妹、月村すずかやなのはの護衛役のスカーレット姉妹と共に名門である聖洋大付属小学校に入学していた。スカーレット姉妹の戸席なのはの護衛する為に1年前にアルバート経由で作ったものだ。入学してから次の日、クラスで自己紹介を含めた親睦会が開かれたのだが、注目はなのは、レミリア、フラン、すずか、それから金髪の少女アリサ・バニングスが注目の的となっていた。特に注目されたのは綺麗な金髪に翡翠と紅色のオッドアイのなのはであった。その時に

「その目、すごいね。」

「コンタクトじゃないよね？」

等と言われたが、その時のなのはの回答は

「私の先祖にはドイツの貴族がいて、その人が私と同じ髪と目の色だったらしく。私はその人の血をかなり濃く引いているらしいの。」
であった。勿論、ドイツと言うは嘘であるが本当のことが言えるはずもなくこういう回答となってしまうのであった。レミリアとフランのスカーレット姉妹との関係も、

「親戚だよ。」

と答えて納得させた。

事実を知るすずかやレミリア、フランのスカーレット姉妹は苦笑していたが・・・。

それを見ていたアリサ・バニングスは不審そうな顔をしていたがこの場では何も言わなかった。

ちなみなのはは3年前の時に兄の恭也やスカーレット姉妹の頭（心や記憶）の中を読んだ為、自分が何者であるかを知ってしまった。そして、自らや周りの人間に危険が訪れるかもしれないと考え、家族やさざなみ寮等の人々から剣術や武術、妖術や霊力技、魔法等を

習い始めた。とは言ってもなのは能力の為、模擬戦程度しかしていなかった。しかし、それでも前世の記憶が無いので実戦不足であることは変わり無い為にそれなりに充実していた。そして、3年後の現在では新しい技の開発したり、新しい戦術や戦い方（例を挙げると御神流と魔法等や御神流と霊力技等）の組み立て等を試す為の模擬戦へと変化していった。それに、この3年で頭の中を読む能力は自分で制御できるようにまでなっていたので精神的な苦痛も大分緩和されていた。

話を戻すが、親睦会でなのは達はそれなりに会話を楽しんでいた。しかし、なのはは親睦会が終わるとクラスメイトなどの前では隠していた疲れた顔をしていた。理由は言うまでも無く質問攻めによるものだ。もし頭の中を見る能力を制御できなかったらもつと疲れた顔をしていただろう。そして、なのはは気を取り直し、3人と一緒に会話しながら下校する為に下駄箱の所まで来ていた。そんな時ある少女に呼び止められたのであった。

場所：下駄箱付近

視点：なのは

普段会話している私とレミリアとフラン、それに昨日久しぶりに会ったずずかと一緒に歩きながら会話をしていた。内容はずずかの家で子猫が産まれたので見に来ないかと言うものであった。今日は何も予定が無いので

「いいよ。今日は予定ないし、久しぶりに忍さんと模擬戦出来るからね。二人は如何する？」

とレミリアとフランに聞いた。

「あはは、相変わらずね。私は行くわ。」

と相変わらずの私のバトルジャンキーぶりに苦笑しながら返事をし、フランも

「じゃあ、私も。」

と言い、二人とも行くことが決まった。

「じゃあ、それで決まりだね。着替えたら準備したらずすかの家に行くね。」

「うん、じゃあ待ってるね。」

等と普通の会話をしていると

「ちよつと！あんだ達、待ちなさいよ。」

と言う声が後ろからしたので振り返るとそこには金髪で翠の目をした少女、アリサ・バニングスが

いた。そして

「あんだ達に聞きたいことがあるの。でも多分、あんまり人には知られたくないことでしょうから校庭裏に行きましょう。」

と言い勝手に校舎裏の方に行ってしまった。私達も余計な面倒を起こしたくない事と彼女の言葉が気になったのでついて行くことにした。その時に私は前を歩いている彼女の心を読むことにした。結果、親睦会の時のことを怪しんでいたのと不器用ながらもどんな秘密があるかと友達になりたいと言うことが分かった。そして、私は彼女の内面を知り、そんな不器用で意地っ張り、けども優しい彼女と友達になりたいと思った。そして校舎裏についた私達にアリサは単刀直入に

「はつきり聞くけど、あんだ達何か隠してない？特に高町なのはの先祖の出身地について。私の勘はそういつてるわ。」

「そんなわけな」良く分かったね。その通りだよ。」・・ちよつ、主！？」

とレミリアが否定しようとしたが彼女は諦めてくれそうも無いので私はレミリアの言葉を遮り、肯定の答えを出した。そしてその時、何時も口癖である主と言う言葉が出てきてしまった。それを聞いたアリサ・バニングスは

「主？どうやらあんだにも聞きたいことが出来たようね。全部、話してもらおうよ。」

とレミリアの言葉で更に私達に対する疑問が増えたようである。そこでフランは

（如何しよう！このままじゃばれちゃうよ！）

と念話で言ってきた。そしてそれ続くようにレミリアが

（そうね。でもなんで、話す気になったの？いくら鋭いとは言っても拒絶されるかも知れないし、何より皆に言いふらされるかもしれないのよ？）

とレミリアが念話でそういう。そして私も

（彼女なら大丈夫。まあ、聞いててよ。）

と自信を持って念話を返す。その言葉にレミリアは

（主がそういうなら。）

と念話でそういい、フランも

（そだね。最悪、記憶消せばいいから大丈夫だね。）

等と納得してくれた。最後の言葉には少し疑問を持ったが。そして「分かった。じゃあ、話すね。でもその前に……。バニングスは魔法って信じる？」

と私は言った。それに対し

「はー！？」

とアリサは素っ頓狂な声を出した。まあ当然だろうね、行き成り魔法を信じるかなんて言われたらね。

そして、私は全てを話した。

私が魔法使い兼剣士であること、記憶を持っていない転生者でその転生する前は自分の先祖にして魔法使いの国の王様であったこと。レミリアとフランのスカーレット姉妹は私の前世からの従者であり、人間ではなくユニゾンデバイスと呼ばれる意思を持つ魔法の補助具であること。

すずかにも始めて言うがすずかとバニングスにも魔力があり練習すれば魔法が使えると言うこと。すずかに関してはさくらさんや忍さん、それに私達高町家組がそのことを黙っていた理由をすずかに話した。魔法と関わって居ないすずかに魔法がらみで危険な目に合わせなくなかったからだよ。そして今まで黙っていたことを謝った。それに対しすずかは気にしていない、寧ろ心配してくれて

ありがとうと言って許してくれた。そして、私とのそんな会話が終わるとずかばアリサに対して、自分の姉も魔法使いであり精霊であることと自分が夜の一族と呼ばれる吸血種であることをバニングスに話した。バニングスはそれを黙って聞いていた。そして、ずかばの話が終わると

「は、確かにこれは普通の人間には話せないわね。でも、なんで私に話したの？」

「それはね。ずかちゃんもだけど私はバニングスと友達になりたんだよ。」

といった。それを聞いたずかばは聞いた瞬間に驚いた顔をしていたが直に納得の表情を浮かべた。レミリアとフランも同様だった。ずかばの心を読んだことが分かったのだ。バニングスはと言うと驚いてはいたが直に持ち直し

「ふん、いいわよ。なつてやろうじゃない!!」

と言った。それに対し

「ありがとう、バニングス」

と礼を言った。

「私のことはアリサでいいわよ。その代わり、あんた達も名前ではせてもらうからね。」

と言った。そして私は

「うん、いいよ!!」

と返事をした。それを聞いた皆も

「私もいいわよ。」

「私も。」

「うん、私もいいよ。」

とレミリア、フラン、ずかばの順に言うのであった。

そして私達とアリサは次第に仲良くなり、親友と呼べる間柄になっていくのだった。

ちなみに携帯のアドレスと番号を交換し合いその時にずかばが子猫が産まれてきたことを言い、アリサも誘ったが、習い事があるから

来れないと言われて断わられてしまった。

まあ、あれだけ習い事をしていれば仕方ないかなど（すみません、記憶読みました。）と思いつつも残念そうにしている3人を苦笑しながら見るのだった。

その後、私達はアリサ誘いでアリサの家の車に乗ることになり、途中で送ってもらうことになった。

そして、これが当たり前になっていくのであった。

家に着いた私達は着替えが終わると直に転送魔法を使って、月村邸に移るのであった。

視点終了

序章 14 話「友達」（後書き）

なのはには少し悪党になってもらいました。心を読むのはやってはいけないことです。でも物語が進む上で必要だと思いこういう決断にしました。フェイトとヴォルケンリッターの時もそうしようと思っています。次回はアリサが誘拐されてしまいます。果たしてアリサの運命はいかに。

序章15話「誘拐、そして覚醒」前編」

場所：月村邸の庭

視点：なのは

私達が転移魔法を使って月村邸に着いた。まだすずかは帰っていない為、中で待つ為に玄関前に立ちインターホンを押す。出て来たのは、月村邸のメイド長、ノエルであった。

「いらっしやいませ、聖王陛下、レミリアお嬢様、フランドールお嬢様。」

と挨拶をした。そう、今の言葉通り、ノエルは私の正体を知っている。何故って？それは5年前のざから事件の時に一緒に居たからだ。あの時のメンバーの何人かは会うと必ずと言っていいほど私をそのネタでからかってくるのだ。今目の前にいるノエル同様に。そういえば真雪さんが私の前世をモデルにした漫画を書いてるって言うていたななどと思いながら

「あの、ノエル。聖王陛下は止めて。まだ襲名と言うか継承もしてないのに。」

とまたかというような顔をしながら反論する。

「失礼いたしました。なのはお嬢様。」

とノエルは笑いながら言う。本当に分かっているんだろうかと思いつつも

「すずかはまだ帰ってきてないと思うから中で待たせてもらって良い？」

と言い案内させることにした。

「畏まりました。では、どうぞこちらへ。」

と言う会話を交わして屋敷の中に入り部屋に案内される。相変わらず月村邸は大きいね。家も普通の家に比べたら大きい方だけど月村邸は洋館なので普通の家や私の家よりも遥かに大きい。何せ、ゲーム部屋だけで私の家の庭と同じくらいの大きさなのだ。

さて、それはさておき部屋に案内された私達三人は出された紅茶を飲みつつ庭にいる猫達を見ながらすずかを待っている。

それから10分後

すずかが帰ってきたようで私の気配を感じる範囲にすずかの気配がした。ちなみに私の気配を感じる技能、御神流・心の範囲は魔法で強化されているのでこの月村邸（庭全体を含む）全域である。
更に数分後

「なのはちゃん、レミリアちゃん、フランちゃんいらっしやい。」

と言いながらなにやら小さい鳴く声がする何かの籠を持ったすずかが私達のいる部屋に入って来て挨拶してきた。私達も後に続き

「うん、お邪魔してるよ。すずか。」

「お邪魔してるわ。」

「すずか、お邪魔してるね。」

と挨拶する。

「うん、それでね。この子達が昨日生まれてきたんだ。」

と言い籠の中を見せてくれる。

その中にいたのは4匹のまだ小さい猫の赤ちゃんだった。それを見たフランは

「可愛い！！」

と叫んだが直にレミリアに

「こら、静かにしなさい。」

と怒られた。子猫や他の猫たちをたつぷりと見て癒された私達は対戦用のゲームをした。

時には2対2の対戦だったり1対1だったりした。それから数分後、忍さんが帰って来た。そして、忍さんもゲームに加わることになり、5人で遊ぶことになった。その時にアリサのことを話した。忍さんも彼女に対し興味が出てきたとのことで会ってみたいと言っていた。なんせ、魔法が存在しないはずの世界にこうも頻繁に魔力を持った人間がいるのだ。研究者肌の忍さんが興味がないはずがない。あれこれ話したりゲームをしていると時計の針が既に7時を回って

いた。それを見た私達は急いで帰ることにした。私達転移するために庭に出ると月村家の皆に見送られながら足元に転移魔法の魔方陣を展開し、別れの挨拶をした後、転移していった。ついたのは勿論、高町家の倉庫付近だった。そして、家に入った私達は家に入り、既に出来ていた夕食を待っていてくれた家族と一緒に食べるのであった。

視点終了

それから数日後

場所：海鳴臨海公園

視点：アリサ

私と最近友達となったのはとすずかは学校の帰りに寄り道をしていた。

なのはの護衛であるレミアとフランは翠屋の手伝いがあったのでそのまま翠屋に向かっていった。

寄り道で海沿いを歩いていると急になのはが

「ごめん、ちよっとトイレ言ってくるから先に言っておて。」

と言った。そして私は

「早く帰ってきなさいよ。」

と言い、それになのはが

「うん。」

と言いながらトイレの方に向かっていった。そして

「じゃあ、なのはちゃんが来るまであそこのベンチで待ってようか。」

とすずかが言った。私もそれに

「ええ。」

と頷き、ベンチに向かう。

ベンチの前に着くとすずかと一緒にベンチに腰を下ろす。そして、1分がたったその時急に後ろから布で口と鼻を塞がれ、意識が段々

と無くなっていく。恐らく布には薬がしみこませているんだろう。そしてそんな意識が朦朧とした中、隣のすずかの方を見ると私と同じように布で口と鼻を塞がれていた。私達は何にも抵抗も出来ずに気絶させられていった。

視点終了

それから5分後、なのはがトイレから帰ってきた。しかし回りには二人の姿は無く。先に言っただろうか？でもあの二人が先に行くはずがないし等と思考しながら周りを見る。するとベンチには二人の鞆があつた。

それを見たなのはは直に理解した。

（そんな、二人が誘拐された？！）

思い当たる節が有る。

なぜならアリサもすずかも大財閥の娘だ。だとすると金銭目的のライバル企業やそのすずかかアリサの家が経営している企業に恨みを持つ人間や組織の犯行と言う線が見えてくる。

そこまで思い浮かぶとなのはの行動は早かった。

すぐさま念話で高町家の人間や忍にさくらにアリサとすずかが誘拐されたのでこれから助けに行くと報告すし、検索魔法で二人の魔力を探った。そして

（待つててね、二人とも。今、私が助けるから無事でいて。）

と願いながら反応がある方向に向かって走り出したのだった。それでも相手は車らしくどんどん距離が離されていくのが二人の魔力を通して分かる。

それから10分後

今まで動いていた二つの魔力反応が止まったので犯人のアジトに着いたと判断し最大速度でその場所に向かうのであった。

序章 15 話「誘拐、そして覚醒〜前編〜」（後書き）

相変わらずのグダグダで駄文で申し訳ありません。次回はアリサが魔装騎士&精霊になります。

序章16話「誘拐、そして覚醒」後編」

アリサとすずかが誘拐されて10分が経過していた。2人の誘拐犯は廃ビルの真下に車を停車させると眠らされた2人を誘拐犯の親玉のいる4階へと運んでいった。そして

「ボスー、掻つ攫つてきましたぜ。」

「無茶苦茶楽勝だったすよ。」

とアリサとすずかを担いだ誘拐犯が扉を開けて部屋に入っていく。その部屋は何にも飾り下が無くただ机と椅子があるだけであった。最もその椅子には

「当然だ。こんな子供を攫うのに時間をとられてたまるか。」

「そうだぜ。」

「それにしても可愛いんだな。早く犯りたいんだな。」

とボスと呼ばれる親玉とその部下達が3人程座っていて2人の誘拐犯にそれぞれ言っている。

そしてアリサとすずかは二人して廃ビルの柱に縄で縛り付けられていった。

2分後、二人は目を覚まし

「「んん（ん）、此处は？」」

と一斉に言った。その問に答えたのは

「お目覚めかな？捕らわれのお姫様方。」

と言うボスと呼ばれる黒スーツの痩せ型の男だった。そんな男に対して「んで、なにが目的？身代金目的の誘拐？それともパパ達が経営する会社への妨害？ならすずかは関係ないでしょ！！だったら今すぐ開放しなさい！！」

とアリサが勇気を振り絞って言う。

「目的は身代金目的と君のパパの会社の妨害の両方だよ。でも、彼女の開放についてはそういうわけにはいかないのだよ。何しろ、そちらのお嬢さんも攫ってくれて言う依頼が来てたんでね。まあ、

何てかは知らないけどな。」

と言うとアリサに近づく。それに反応したアリサは

「近づくんじゃないわよ!!」

と叫ぶ。それに反応したボスが

「ふん、少々喧しいな。黙らせてやるか。おいっ!! 犯ってやれ。」
と太った男に命令を下す。

「ひっひっひ、待ってたんだな。じゃあ、早速犯ってやるんだな。」
それを聞いた太った男が目ギラつかせ、そう言いながらも近づいてくる。それに恐怖と自分の貞操の危機を感じたすずかは

「い、いや!! 来ないで!!」

と叫び、アリサは叫びはしないものの

「く、来るんじゃないわよ!! この変態!!」

と顔を悔しさで歪ませてそう言った。そして内心は恐怖と自分の無力さでいっぱいだった。そして、力が欲しいと思った。その時

「え? 何? 何なの?」

と何故かそう言った瞬間、アリサの体から赤い光が漏れ出し、やがてそれは光の柱となって天高く伸びていった。

一方その頃

なのははアリサとすずかの魔力反応を辿って廃ビルへと向かっていった。そこへ向かっている方向から赤い柱が立つのが見えた。それを見たなのはは

（あれはアリサの魔力。アリサが兄さんたちみたいに覚醒するの?）
そして、なのはがしたことは封時結界を張り、周りの一般人から見えないようにして飛行魔法を行使するのであった。

場所：廃ビル

視点：アリサ

私達が太った変態が近づいて来た。それを見たすずかは

「い、いや!! 来ないで!!」

と叫び私は

「く、来るんじゃないわよ！！この変態！！」
と怒鳴った。

私は無力を思い知った。そして、こうも思った。力があればこんな奴ら。力が欲しい、自分自身を守れる力が欲しい、すずかを助けられる力が欲しいと。

本来な叶えられずに何も起きるはずが無い筈の願いに
(ならば目覚めさせろ、我が力を。)

と声が聞こえ私は

「え？何？何なの？」

と言った時、私から赤い炎の様な光が私から出てきた。そして、その光は私を包み込むと光の柱になった。それに巻き込まれたのは私を襲おうとしたデブだった。私はただその光の眩しさに目を閉じるしかなかった。

場所：異空間

目を開けると周りが赤い光の空間にいた。そこへ炎の人が現れた。それに驚きながらも

「へ？あ、あんた誰よ！此処は何処なのよ！！」

と聞く。そしたら、私の斜め上を言って答えを言ってきた。

「我が名はグランバ、炎の精霊を束ねる精霊の長の一人だ。此処は我が精神の内部だ。」

それにうるたえながらも

「せ、精霊？」

と聞く。

「そうだ。選ばれし者よ。」

「選ばれし者？」

「そうだ。我ら高位の精霊は人を選ぶ。そして選ばれたのがそなただ。」

「私？」

「そうだ。我と契約できる者。それはすなわち強大な力を持つに相

応しき者であり、我が力と同調できるものだ。」

私が何で？どうして？

「何で私なの？」

「それはそなたの魔力の波長が我が魔力の波長と酷似しているのが大きいのだろうな。同調できなければ選ばれぬのだしな。それに危機だったのだな。」

「そ、そうなんだ。」

「そうだ。では、仲間を助けたくば、我が器を叫びながら呼べ。我が器の名はグランヴェール。」

「分かった。」

そういうとグランバは消えていった。その後、直に景色も光だしたので私は目を閉じた。目を明けるとそこには驚いた様子の4人とすずかがいた。あれ？さっきのデブは？とそんなことを気にしながらも私は力を得る為に

「来て！！グランヴェール！！」

と叫んだのだ。すると何処から現れたのかは知らないが炎のように赤いブレスレットが跳んできたのだった。そのブレスレットは私の右腕に装着された。それを見た男達やすずかは驚きのあまり硬直し言葉も失ったようだ。そのブレスレットは

「では最後の仕上げだ。」

と言った。っていうかこの声ってグランバじゃない。

「あ、あんた。なんでブレスレットから声出してるのよ。」

「これは我が器の待機状態だ。詳しくは後で説明する。」

「分かったわ。で、如何すればいい？」

「グランヴェール、セットアップ。ただこれだけを叫べば良い。」
それを聞いた私は

「分かった。」

と頷いてから

「グランヴェール、セットアップ」

と叫んだ。そして、私はまた赤い光に包まれていき、赤い装甲の鎧

が次々と装着されていく。装着されている時に体を作り変えられているような激痛を感じた。

装着が完了すると赤い空間は割れるように消えていき、廃ビルの一室に戻っていった。

ちなみに私に絡まった縄は最初の光に包まれた時に燃えて消滅している。

「な、なんだお前は？その格好は？それに何で腕輪が喋ってるんだ？」

と震える声で犯人グループのボスが聞く。でも、私も知らないのだから「そんなの！こつちが聞きたいくらいよ！！」

と叫んだ。その時、人の形をした何かが窓の硝子突き破ってこの部屋に入ってきた。その何かを見て私は硬直してしまった。なぜなら「大丈夫？二人とも。」

と言っ親友の姿があつたのだから。

視点終了

序章 16 話「誘拐、そして覚醒〜後編〜」（後書き）

次はアリサに魔法の説明と犯人達やその大元をやっつけます。
駄文ですみません。頑張ってはいるんですがなにぶん文才がないの
で。

序章17話「すずかの決意と黒幕逮捕」

場所：廃ビル

視点：なのは

廃ビルに着いた私は魔力の反応が有る部屋に文字通り飛んで硝子を蹴り飛ばして来た。ちなみに魔力で体を保護したので硝子の破片に気を遣う必要はない。硝子を突き破った後に

「大丈夫？二人とも。」

と私は親友に言う。それに対し、一番に口を開いたのは、魔装騎士に覚醒したばかりのアリサだった。

「な、なのは！？なんて現われ方してるのよ。危ないじゃない！！」と私に怒鳴りつける。

「大丈夫よ。魔力で保護してるから、それよりも目覚めたみたいねん……。でも、記憶は目覚めてないね？アリサは転生者じゃないのかな？」

と心配無用と言い、アリサの頭の中を読むが魔法関連の記憶は私達が話していた事と契約した以外の記憶がなかったので疑問を口にしていた。そこへ硬直していた誘拐犯の一人が

「てめえ、何者だ！」

と言う。

「さあ？何者だろうね？それよりも……。私の友人を攫ったんだ。」

と言い。そして、

「貴様ら、覚悟は出来てるんだろうな。」

と鋭い殺気を放ちながら冷たく低い声で言う。それに恐れをなしたのか、何人かは逃げ出して下の階へと行ってしまった。しかし、その逃げた奴らはコテンパンにやられてしまう事だろう。下で待ち構えているある存在によって。

残ったリーダー格も殺気で動けなくなっていた。そのリーダー格も

直に私が手刀で気絶させた。

私はすずかの縄を解き、私とアリサの魔法に關しての記憶を記憶操作系の魔法で消して都合の言い記憶に変換した。二人を連れて1階まで降りると倒れ付している男達と兄さんの使い魔であるざからが見えた。そして

「お疲れ様、ざから。」

私達が勇吾をざからと言う時は事情を知っている時か、仲間だけの時である。私の言葉になんでもないように

「この程度の奴ら、どうと言うこともない。それよりも魔法使ったのだろう?」

と言う。それに対し私も

「うん、だから今から記憶操作するよ、」

と言った。そこへすずかが喋る。

「それよりもなのはちゃん。」

どうやら聞きたいことがあるらしい。

「ん、何? 如何したのすずか。」

とりあえず聞いてみることにした。

「どうしてざからがいるの?」

どうやらざからがいることに驚いているの不思議がつているようだ。なので

「それは念話で皆に二人が攫われた事を話してね。それで兄さんが念の為にと思って、応援を出してくれたんだよ。」

と答えた。その答えに納得したようで

「そっか。」

と笑いながら言った。そういえばすずかも兄さんを狙ってたな。と思ひながら話を変えることにした。

「さて、話は変わるけど。アリサ、貴女はこれから如何するの? グランバと契約したんだから貴女もう人じゃないでしょう?」

そこへざからも話に加わる。

「そうだな。主も高位精霊サイフィスとその器のサイバスターと契

約したことで精霊となつたのだし、ほぼ同等の力を持つ高位精霊ならば同じように精霊化することになるだろう。」

と頷き説明をする。アリサは人外になつたことで落ち込んでいるのかと思いきや

「うーん、とりあえず気にしてないわ。それよりも魔法や戦い方を覚えたいわ。さっき、気づいたんだけど、私って魔法とか戦闘の知識がないからさっきの戦いで戦闘経験がないから無暗に動けないことに気がついたのよ。」

どうやら、本気で気にしていないみたいで、それよりも魔法や戦い方などを知りたいと言ってきた。

私もそれには反対しないので私が教えることにした。兄さんやここにいるざから、それに忍さんやさくらさん達では会える時間が少ないので多くを教えられる私が適任だと判断したからだ。なので

「わかった。私が教えるよ。他の皆より私の方が長く一緒にいるからね。」

と言う。それを聞いたさすがが何か考え事をしているように見えた。多分、自分も戦えるようになりたいか思っているんだろうなと思っ

ていると

「私もそれに参加していいかな？」

とさすががそう言った。それにはアリサが驚いたようだった。だけでも直に

「ああ、なるほどさっきのことね。」

と納得して言う。すずかはアリサに答える。

「うん、また今回と同じように誘拐が起これば、私は足手まといになるから二人や皆に迷惑がかかるかもしれないから。」

と言った。私はすずかの目を見ると、彼女の目には決意とやる気に満ち溢れていた。こんな目を見たら断われるわけじゃないじゃないと思

いながら

「いいよ。ただし、忍さんやさくらさんにも許可貰ってね。多分、家では忍さんやさくらさんが教えるだろうから。遊ぶ時や下校後と

かは私が教えるね。」

と言い、すずかも

「分かった。」

と言った。

こうしてアリサとすずかは私から魔法を教わることになるのだった。ちなみに皆にそのことを話したら、暇などがあればざからや兄さん、それに咲夜にユニゾンスカーレット姉妹も手伝ってくれるという。

視点終了

数日後、初めての魔法練習の時になのははアリサにかつての仲間であつたホワン・ヤンロンのデバイス「炎龍人の爪」を渡した。理由は、なのははアリサがヤンロンの生まれ変わりかどうかを確かめるために渡したのだ。

結果はアリサはヤンロンの生まれ変わりであつた。つまり、記憶や知識も手に入れたので魔法を習う必要がなくなったわけである。しかし、すずかに魔法を教える為になのはの助手として練習場にはついて来ている。

ちなみにアリサとすずかを攫つた誘拐犯達は失敗したことを依頼者に報告した。その依頼者は次にそれなりの戦闘集団を使つての誘拐をしようとしたが失敗し、今度は上位クラスの戦闘者数名と依頼者自らが誘拐の実行をする事になった。なのはは態とアリサに誘拐されることを念話で提案して依頼者と会うことに成功し、依頼者は跳んできたなのは達により気絶させられて、その間に警察に通報されて、逮捕された。勿論、魔法の記憶は消してからである。その後、リスティの能力により黒幕が判明し、その逮捕された。黒幕はアリサの家が経営している会社のライバル企業であるワガクトクア社の社長である悪徳川久信と言う男だった。警察が調査した結果、悪徳川久信が他にも様々な犯罪を染めていたことが分かり、それについての追求もされるとのことだった。こうして、アリサの危機は去つ

ていった。しかし、すずかを狙っていた黒幕については判明しなかったと言う。それもそのはずで、すずかの方の黒幕は吸血鬼が関係してたのではが記憶を消去して改変されたからである。その後、黒幕は夜の一族からの追放と力の封印という罰を受けたという（忍談）。

序章 17 話「すずかの決意と黒幕逮捕」(後書き)

黒幕の名前が……。ネーミングセンスも無くてすみません。

次はなのはが覚醒する前段階に入る為にある世界に行ってしまう予定です。

序章 18 話「異世界ハルケギニア」

さすが魔法を習い始めて、三日程経過していた。さすがは姉譲りの魔力と才能でほとんど腕を上げていき、今ではマルチタスクを5割程習得している。

そんな中、教師役兼親友の高町なのははあることを悩んでいた。それは……。

「はあ、如何すればデバイスが出て来るんだろう。」
と溜息を吐きながらそう言った。

そう、なのはの場合はデバイスが完全に無いすかと違い、自身の中にあるのだ。しかし、彼女は困っていた。それはなのはが漏らした溜息と共に出した言葉通り、デバイスの取り出し方が分からないからだ。そんな中、一人の青年が通りかかった。なのはの兄、恭也である。彼はなのはの様子を見て

「如何した？落ち込んだ顔をして。何か困ったことがあれば相談に乗るぞ？」

と真剣な顔をして聞いた。

「う、うん。実は、デバイスの出し方が分からないの。」

となのはは自身の悩みを打ち明けた。なぜなら同じ転生者であり既に覚醒した存在だからだ。それを聞いて納得したように

「ああ、そういうえば咲夜達が言ってたな。オリヴィエが持っていたデバイスも一緒に転生したって。」

と言った。それ対しなのはは

「そうなんだよ。だから如何して良いのか分からなくて。」
と落ち込んだ声で言った。すると恭也は

「なら、心から願えば良いんじゃないか？もしくはそうならざる事態に陥るとかな。まあ、お前のことだから前者の方が楽だろうな。後者だと、お前でも対抗できる存在は殆んどいないからな。」

と言った。それを聞いたなのはは

「そつか、そうだよ。ね。ありがとっ、兄さん。」

と言い元氣を取り戻していた。

「いや、気にしなくて良い。」

と恭也は顔を赤くしながらもそう言った。照れてるのだ。

しかし、なのはの覚醒は、前者ではなくある意味で後者になってしまふ事はそれから数時間後になるまで誰もわからなかった。

その数時間後、なのはと咲夜とユニゾン姉妹は歩いている時に急に現われた鏡もどきによって何処かへ消えてしまった。なのはが鏡もどきに吸い込まれた時、咲夜とユニゾン姉妹が助けようとしたが一緒に吸い込まれてしまったのである。その時、一緒に歩いていたはずかやアリサが二人＋二機が鏡もどきに吸い込まれて消えたことに驚き、慌てながらそのことを皆に報告した。

一方、鏡もどきに吸い込まれたなのは一行はハルケギニアのトレステイン王国にたどり着いていた。

場所：トレステイン魔法学園

視点：ルイズ

私達は今、使い魔を召喚する為に学園内の草原に来ていた。皆それぞれ使い魔を召喚していき、最後に私の番となった。隣国のゲルマニア出身で我がヴァリエール家にとって倒さなければならぬ敵（色気沙汰が多い）のチエルプストー家のキュルケはサラマンダー（火蜥蜴）を召喚したので、それ以上に強力で尚且つ神聖で美しい使い魔を召喚してやろうと意気込んだ。しかし

「宇宙の果てのどこかにいる私のしもべよ！神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ！わが導きに、応えなさい！」

と杖を振り上げて声高に呪文を唱える。すると何時ものように爆発が起こった。

私は、何故かどんな魔法も爆発してしまう。どうしても分からないけどそのことをネタに

「おい、ゼロのルイズ。お前は何度失敗させれば気が済むんだよ！」

「本当ね。勘弁して欲しいわ。」

などと馬鹿にされる。それを見返そうと努力するが、その努力は全て無駄になってしまっている。

そして、今回も爆発したので馬鹿にされていた。ムツとしたが今は使い魔を召喚できたかどうかという事が気になった為、爆発後の煙の中を見ようとした。すると人らしきものが見えた。それも一人ではなく4人もいた。煙が晴れると、そこには金髪で翡翠に紅玉の瞳をした平民の格好をした少女と貴族の娘らしい銀髪赤眼の少女と金髪赤眼の少女、それにその二人の従者らしきメイドがいた。その4人の中で一番存在感を放っていたのは平民の格好をした少女だった。なぜか雰囲気自分より上の方だと思ってしまったのだ。皆それは同じようで、硬直していた。すると4人の中のメイドが

「あの、すみませんが此処は何処なのでしょう？」

と聞いてくる。その声に硬直が解けた私は

「ここはトレスティン魔法学院よ。平民でもその位は知っているでしょう？」

と言ったが

「トレスティン？知らない地名ね。何処かの辺境の世界かしら。」

と周りを見渡しながら銀髪紅眼の少女が知らないと言い、由緒あるトレスティンを田舎扱いし、更には異世界などと言う単語を発したのだ。それにムカついた私は

「何よ！？トレスティンを知らないなんて、そっちこそ田舎なんじゃないの？それに、何よ！！異世界って！！」

と言ったが、4人は驚いた顔をしながら私を見つめた。そして、四人は

「似てるね。」

「ええ、似てるわね。」

「うん。性格まで似てそうだね。」

「そうだね。」

と口々にそう言う。そして、4人揃って

「「「アリサ（お嬢様）に声がそっくり（です）。」「」」
と言った。

「アリサって誰よ！！そんなに似てるって言うの！？」

と言う。それに対し金髪で翡翠と紅玉の眼の少女が

「うん。それにプライドが妙に高い所と気が強い所も似てるよ。そうそう、さっきの質問なんだけどね、少なくとも此処よりは都会よ。それに、異世界は違う世界のことよ。」

と答える。私が発言に対し、色々突っ込もうとした時に

「取り込み中申し訳ないが、話を進めさせてもらっても良いかな？」とミスタ・コルベールが会話に割り込んできた。そして

「自己紹介が遅れたね。私はジャン・コルベール。ここの教諭を務めている者だ。」

と挨拶し、それに習い

「ご丁寧にどうも。私は高町なのはといいます。」

と挨拶を交わした。そして

「この子は私専属の護衛を勤めるスカーレット姉妹の長女、レミリア・スカーレットです。」

となのはと名乗る少女がレミリアという少女を紹介すると貴族らしい挨拶をしてきた。どうやら本当に貴族みたいね。と思っていると「この子はその次女のフランドール・スカーレットです。」

今度はその妹を紹介した。すると姉の様に優雅に挨拶するのかと思いきや

「よろしく。」

と笑いながら言っただけだった。そして

「この彼女は、高町家のメイドの十六夜咲夜といいます。」

と顔をメイドの方に向け言うメイドは一礼した。

そして、私を無視して勝手に話を進めだしたのだ。

コルベールが使い魔になってくれと頼むが4人はそれを拒否した。

そして

「これ以上言うのなら力ずくとさせてもらいますが？」

と恐ろしい殺気が私達を襲った。コルベールは怯みながらも

「それは……」。しかし、さっきの話が本当だとするとあなたは帰れないのでは？でしたら帰る方法が分かるまではミス・ヴァリエールの使い魔となっていただと言うのは？」

と説得する。それに対しレミリアが

「くだいわね。それに使い魔と言うからには洗脳効果みたいなものがあるはずよ。そのことは頭に入っているのかしら？」

と言う。そういえばあったわねと思いながら私は眺めていた。そして、その言葉にミスタ・コルベールは思い出したよう

で「あつ！」

と言う。どうやら気づいてなかったようね。そこへレミリアが

「心当たりがあるのね？それでよく使い魔になれと言ってくれる！そんなことが本当に許されると思っているのか？」

と途中で切れた。コルベールはそれでも抵抗しようとする。すると

「それに、私達を使い魔にするというのなら、エルフ達や精霊達を敵に回すことになるわよ？」

となのはが言う。そこへ私は

「ちよつと！どういうことよ！！！」

と叫んだ。すると

「私の友人に精霊がいるよ。風、水、火の精霊のね。」

と言う。つまり異世界とはいえ、精霊の友人を攫ったことになるのだ。それはとても不味い事だった。何しろこのトレスティンは水の精霊と契約して成り立っているといっても過言ではない。もし、このことが精霊たちに分かれば契約は破棄され、それどころかエルフや吸血鬼等の先住魔法を使う奴等や精霊たちが一斉にこのハルケギニアに攻め込んでくる可能性があるからだ。その事を聞いたコルヴェールは

「なんですと！！それは本当ですか？」

「本当よ。ただし、異世界のね。でも、このことが此方の精霊にも
ばれれば間違いなく、戦争になるでしょうね。」

と脅してくる。すると今度は、青髪の小柄なクラスメイトがなのは
に近づき

「それ、本当？」

「ん、貴女は？ん……。ふん、なるほどね。確かに私が精霊
に関われば、貴女の母親を助けられるかもしれないわね。」

とまるでその子の心を見透かしたような表情でいう。そして、クラ
スメイトは

「！！！！どうしてそのことを？」

それを図星と言うような表情で尚且つ殺気を込めて言う。それを見
て笑いながら

「分かったって？簡単ですよ。貴女の記憶や心を読んだんですよ。

まあ、それよりも貴女。お母さんを戻してから如何するつもりです
？ジョゼフ王に復讐するにしてもお母さんにも危険が及びますよ？」
と警告する。それに対し彼女も殺気を解いて

「なら、どうすれば良い？」

と聞く。すると、なのはは私の斜め上をいく言葉を発したのだった。
「簡単なことですよ。貴女と復活したお母さんを私の世界に来ても
らいます。復讐は出来なくてもこれでお母さんは守れるはずですよ。」

と。それを聞いた彼女は

「分かった。でも私は如何すればいい？」

「それは、見返りのことかな？」

となのはがそう言うところんと頷いた。そして

「ん、とりあえず。貴女の屋敷に行きたいんですけど、貴女は使
い魔と一緒に来てくれます？」

となのはがそう言うところと青髪のクラスメイトは頷きくと直に口笛で使
い魔の風竜を呼んだ。青髪クラスメイトは竜に跨った。そして

「じゃあ、行こうか。」

となのはが言う。しかし、私の問題が解決されていない。なので「ちよつと！！待ちなさいよ！！まだこっちの話は終わってないわよ！！使い魔は如何するのよ。」

と言う。すると、なのはの代わりに

「そんなの。もう一度召喚なさい。」

レミリアが言う。そして、なのはが

「そうそう、貴女は自分が魔法使えないと思い込んでいるけど、それは違うよ。貴女の系統は間違いなく虚無よ。」

と言い、更になのはは

「虚無の覚醒条件は分からないけれど、多分王家に伝わるものだと思うわ。それをどうにかして魔法の安全装置をはずせば、貴女は魔法が使えるようになるよ。元気でね。じゃあ、行くよ。シャルロットさんも案内よろしくね。」

と助言？を言い、4人＋一人を乗せた1匹は飛び去っていった。そして、私達は呆然としてそれを見送っていくしかなかったのであった。そして、暫くして何とか気を持ち直した私は

「ああ、何だったというのよ！！！」

と大きな叫んでいた。それにしても、虚無か。調べてみる価値はありそうだと思うた。

そして、それと同時に、如何してそこまで知ってるんだろうと思いつながらなのは達が飛んでいた方角を向いていた。そして、私の使い魔召喚はと言うと明日に延期になった。

視点終了

場所：上空

視点：レミリア

私達は飛んでいた。そして、私、フラン、咲夜は重大なことを忘れていた。それは、私達は青髪少女の名前を何も知らないことだった。主は記憶や心が読めるから名前を知っていたが私達はそんな芸当は

出来ない。それに気づいた私は

「そういえば、直接の自己紹介がまだだったわね。私の名前はレミア・スカーレット。あなたの名前は？」

と聞いてみた。すると

「タバサ。でも今日からはまたシャルロット・エレヌ・オルレアン。」

と自己紹介をしたが、気になる発言をしたので

「どうということ？」

と聞いてみた。しかし、

「シャルロットは私の本当の名前。ある理由でタバサに変えていた。ただそれだけ。」

とだけ言うのと黙り込んでしまった。

「そう、これからよろしくね。シャルロット。」

と言うとシャルロットは無言で頷いた。

それから、フラン、咲夜も自己紹介し、シャルロットの名前を知っていた主も改めて自己紹介したのだった。

それから数時間後、オルレアン邸前に着いたのであった。

視点終了

おまけ

なのはがルイズを虚無だの使い手だと判断した理由

なのはが記憶や心を読む能力があるが、その時に何をやっても爆発してしまうことも読み取っており、呪文が間違っていないのに違う現象が引き起こされていた。その時に同じく名前だけで効果などが分からない虚無のことも読み取った為、虚無に目をつけた。そしてルイズが虚無ではないかと推測を立て、それをルイズに話したのだ。何かが必要だと言ったのも強力な魔法なら安全装置があるかもと推測した為。

序章 18 話「異世界ハルケギニア」(後書き)

やりたかったネタをやってみました。次回はシャルロットの母親の救済となのはが覚醒します。

序章 19 話「オルレアン親子救済と聖王の完全覚醒」

なのは達がオルレアン邸について、執事などの歓迎などがあった。それから直にシャルロットの母親に会った。その時に暗殺者と間違えられたが眠らせて大人しくされた。そして、なのは達は彼女の心の病を治す方法を二つ提示した。一つ目は精霊の力を使うこと。

二つ目つは、なのはの時間操作の能力を使うことである。

結局、シャルロットは二つ目を選択した。その時、シャルロットもその頃に戻すという案もあったが、それはシャルロット本人から否定されることとなった。

結果は成功し、屋敷にいた全員を喜ばせた。そして今までの事をシャルロット達は地球に亡命することも含めて説明し、オルレアン親子は一緒に地球に亡命することとなった。勿論、その時になのは達によって助けられたことも説明され、シャルロットの母親がなのは達に感謝したことも記しておく。

そして、翌日

場所：オルレアン邸の庭

視点：なのは

私は元の世界に戻るためにデバイスが必要となった為、デバイスを呼び出すことにした。

私のデバイスはかなり特殊で今は私の中にある状態だ。そして今、それを取り出そうとオルレアン邸の庭を借りていた。

オルレアン親子、ユニゾン姉妹、咲夜が見守る中、私は精神を落ち着かせていた。そして

「我が胸に眠りし魔の器よ、今こそ姿を我が前に現し、我が力となれ。」

とアルハザード式の魔方陣を展開しながら唱える。何でも、ユニゾ

ン姉妹が言うには、これが魔道書と呼び出す為の呪文らしい。今まで黙っていたのは、単に聞かれなかっただけであると言われた。先代のマスターであるオリヴィエが言われたら教えるようにと言っていたらしい。

唱え終わると私の目の前に虹色の光が目の前に集まり、それは段々と魔道書の様な形をしてきた。そして、光が収まるとそこには太い一冊の魔道書が目の前に現われた。この魔道書こそ、古代のアルハザード、ラ・ギアス、ベルカ、ミッドチルダが共同で開発した次元世界最古の魔道書、法の書である。この魔道書は特殊な暗号を正しく解読した者に強大な力を与えると云うものである。事実、私はこの魔道書の機能の一つであるコピー能力＋追加能力と強化&改良能力を無意識に使用し、様々な能力や能力、更にもっと強大な魔力を手に入れられるようになったと3人の記憶にはある。レミリアとフランが作られた技術も元はと言えばこの魔道書を参考にして作成されたに出来た一冊の技術書に書かれていたものである。そして、その魔道書には魂の鼓動を感じる。その魂の鼓動を感じつつ、私は宙に浮かんでいる法の書に手を触れた。すると眩い光が私と法の書を包み込んだ。

場所：虹色の空間

私は法の書を持ったまま光に包まれて、気がついたらこんな虹色の空間にいた。聞いた話によると兄さんたちもこれに似た様な空間で前世の記憶を手に入れて覚醒したんだっけ？と思っている。

「そうです。あの子達もこの空間を通して覚醒したのですよ。」

この声は？でも、なんで私の考えていることが……ってまさか！！

「そう、そのまさかですよ。なのは。」

といい、次の瞬間私と同じ髪の色と瞳の色をした女性が現われた。この人こそが私の先祖にして前世の

聖王オリヴィエなのだろうと確信した。

「そうです。そして貴女にも私の全てを受け継いでもらいます。」

私の答えは決まっている。

「元よりそのつもりです。説明は不要ですので始めてください。」
と言った。説明不要と言ったのは彼女の全てを受け継げばどうせ全てが分かるから。

「そうですね。では、始めましょう。」

と言いオリヴィエさんは私の頭に手をのせた。次の瞬間、頭に色んな知識が流れ込んできた。それだけではなく、彼女が生前持っていた能力や集コピーした魔力も受け継ぐことが出来た。

そして、全てを与えると私に

「貴女は私と違って正しく力を使ってください。」

そういうと、オリヴィエさんは私の中へと消えていった。そして全てを継承した私は

「出て来て、インデックス（以後アイデ）、レイジングハート・エルトリウム（以降エル）、ライトプリンガー（以降ライト）、アルテマウエポン（以降アルテ）。」

と呼ぶ。すると法の書からは管制人格兼融合機であるアイデが現れて、エル、ライト、アルテがそれぞれ待機状態で現われる。それらに私は

「始めまして、皆。これからはよろしくね。」

と挨拶し、アイデも

「うん、始めましてだね。よろしくね、マスター。」

と挨拶を返してくれて、続いてエルも

「始めまして、新しいマスター。」

と挨拶をしてくれる。そして、それに続き

「これからよろしくな。」

とライトが気軽に挨拶してくれた。そして最後のアルテは

「うむ、これから宜しく頼む。」

と渋い男性の声で挨拶してくれた。

そして、私はそれぞれのデバイスを起動させる為に

「皆、セットアップするよ？準備は言い？」

と呼びかける。すると

「了解！！」

と言う声が一斉に出て来た。

そして、私は

「OK、じゃあ行くよ。セットアップ。」

と三つのデバイスを着けた左手を上に向け叫ぶのだった。

そして、叫んだ私は虹色の光に包まれ、白と青を基調としたドレス型の騎士甲冑が着けられ、その後、両刃の剣と片刃の剣になったライトとアルテを私はそれぞれ手に取り、エルは右腕に盾として装着されるのであった。

それが完了すると私を包んでいた光が消えた、その後、周りの虹色の空間も消えていった。私が完全に聖王として目覚めたからだ。

そして、目の前にある光景は元のオルレアン邸の庭だった。

こうして私は聖王として完全覚醒を果たしたのであった。

視点終了

おまけ

能力説明

なのはの時間操作について

なのはの能力は咲夜の能力のコピーである。しかし、オリジナルの能力とは違い、壊れた物も元に戻るというチート能力である。しかも、心が壊れていたら、それを以前の状態に戻すことや死んでいる人間に対しても蘇らせることが可能である。

ただし、完全に白骨化したものなどには使用できないという欠点がある。

序章19話「オルレアン親子救済と聖王の完全覚醒」(後書き)

レイジングハートを早めに出しました。そのため、ユーノには別の超高性能どころか究極クラスのデバイスと聖遺物を持たせます。後、なのはと出会った後にユーノはパワーアップする予定です。それにしてもグダグダで駄文ですいませんorz。

何とかしようとは思っているんですが。次は地球に帰る前にミッドに寄つてある人物に会います。原作では悪役として登場していたあの人たちです。その人たちはある理由でなのはを神として崇めます。更には改心して良い人になり、味方陣営に加わります。

序章20話「さらば、ハルケギニア」

なのはと法の書&アイデが元の空間へと戻ってきた。しかし、なのはの姿と今までいかなかったなのはの右隣にいる小人状態のアイデを見て、オルレアン母子は驚きのあまり固まってしまった。それはそのはずで、行き成り何もないとところから本が現われて、それに触ったら虹色の光に包まれたことだけでも驚きなのなのはの服装が変わったのと白い法衣を着た小人がいたことは相当の驚きだったのだろう。そんな中、レミリアがなのはに

「へー、この甲冑はオリヴィエ様の色違いね。オリヴィエ様の色は黒が主だったものね。こうして前世の甲冑を着けてるってことは、完全に目覚めたと判断してもいいのかしら？」

と聞くレミリア。その問いになのはは頷き

「うん。記憶も全ての力も継承したよ。」

と肯定する。そこへなのはの右隣で飛んでいた小人形態のアイデが「久しぶりだね。レミィ、フラン、咲夜。」

と2機と1人に向かって挨拶をした。挨拶された2機は居たのかという表情をしながら

「えっ？アイデ居たの？久しぶりね。」

「あっ！アイデだ。久しぶり。」

と挨拶し、1人は驚きの表情を見せたが、直ぐに持ち直し笑顔で「お久しぶりです。アイデお嬢様。」

と挨拶する。その反応にアイデは

「三人とも酷いよ。」

と怒理ながら言う。そんなアイデだったが

「まあ、いいや。それよりも、そこに居る二人は？」

と怒りを収めてオルレアン母子の事を聞く。それに対しなのはが

「ああ、この人達は・・・って固まってる！！」

とオルレアン母子の方を向きながら紹介しようとするが、見事に固

まっていた。そんな二人になのはは溜息を吐くと二人に声を掛けながら揺さぶりだす。

数分後、ようやく正気に戻った二人になのははアイデとオルレアン母子の互いの紹介をし、なのは騎士甲冑についての事などを説明した後、屋敷に居る全ての人間に別れと感謝の言葉を告げると4人と3機と1匹は咲夜の転移魔法でトレスティン魔法学院へと向かった。理由は別れの挨拶などを済ませていない事とシャルロットの本を取りに戻るためであったのだが、それは不可能となったのは現地についてから思い知る事になる。なぜなら……。

場所：クレーター

視点：なのは

咲夜の転移魔法で座標ではトレスティン魔法学院があるはずの場所に到着した私たちだったが、目の前に広がっていたのはクレーターだった。そのクレーターには魔力反応があり、その反応により魔法で消滅した事とその魔法を使った魔法使いがかなりの魔力を持っている事が分かった。私はその犯人を見つけるためにハルケギニア全体に索敵魔法を発動させる。すると、その魔力反応はシャルロット曰く、トレスティンの王都であるトリスタニアの方にあった。私達は早速、その方向に向かった。

数分後

場所：クレーター2の上空

急いでトリスタニアがあると思われる場所に着いた私、アイデ、ユニゾン姉妹、咲夜（シャルロットの使い魔である風竜のシルフィードとそれに乗っているオルレアン親子は私達が飛ぶよりもかなり遅いため後から来ることになった。）が見たのはクレーターとなったトリスタニアとそのトリスタニアを破壊したと思われるグランゾンのデバイスを装着したクリストフそっくりの姿をした白河愁だった。

なぜ彼のことを知っているのかというと、兄さんが

「俺の前世が300年前に倒したはずのクリストフがそのままの姿で白河愁として転生している可能性がある。」

と言っていた事を思い出したからである。その事を兄さんがそれとなく聞いてみたりしたのだが、邪魔が入ったり、誤魔化されたりした為に分かっていなかった。しかし、記憶を読んではつきりと分かった。この人物はクリストフの転生者、白河愁だと。すると白河は私達の方を向き

「お久しぶりですね。聖王オリヴィエの転生者とその従者達」

と不気味に笑いながら挨拶をする。それに対し私も

「久しぶりだね、クリストフ。うん、今は白河愁だったかな？兄さんから聞いてるよ？」

挨拶する。何故、記憶を読んだことを黙っているのかというと、彼がそういうことを嫌っているからである。

「兄さん？ああ、成る程。そういうことでしたか。」

どうやら、私が誰なのかが分かったようだ。それに対し私は

「なに考えてるのは知らないけど、多分貴方の考えてる事であつてると思うわ。」

と言う。それで完全に分かったのか

「やはりそうでしたか。この世界に来たのはルイズという少女に召喚されたからですか？高町さん？」

と聞いてくる。それに対し私は

「そうよ。やっぱり、アレの復活が目的？」

と肯定し、襲った理由を聞くために質問をする。答えは

「ええ。しかし、学園を破壊した理由はそれ以外にもあります。」と答えた。

「それ以外？もしかして使い魔と関係があるのかな？」

と聞く、すると素直に

「ええ、よく分かりましたね。まあ、貴女方もルイズに呼び出されたようなので分かったと言う事ですか？」

と答え、私に分かった理由を聞いてくる。

「そういうこと。で、どうするの？今此处で戦う？」

と肯定し、戦うかどうか聞くと

「いいえ、止めておきます。勝てる気がしませんし、貴女方と戦う気はありませんから。」

と言うと愁は魔力で大量の重力の塊「グラビトンカノン」を作り出すとそれを私達に向けて投げた。そして、転送魔法の準備をした。

「さようなら。そして、またお会いしましょう。」

と言い、私達が「グラビトンカノン」を防御している間に術式を完成させて転移してしまった。

ちなみに避けなかった理由は後ろにシルフィードに乗ったオルレアン母子がいたからだ。恐らく、愁もそれを計算して魔法を使ったのだろうと思いつつも2人と1匹を待った。

数十分後、ようやく着いた母子に逃げられた事を話した。

そして、ようやく地球に戻るかと思いきや、今度は私のデバイスのエル、ライト、アルテがミッドに寄ろうと言い出したのだ。理由を聞いてみると、何者かにミッドに封印したはずのゆりかごの一部が動いている事がわかったということだった。なぜ、分かったかという^{アンチマギックフィールド}とエル、ライト、アルテの3機にはゆりかごの封印が一部でも解けていたら自動的にその事が分かる機能があるのだ。それに危険を感じた私は直ぐにその事を皆に説明し、今度は私の転移魔法でミッドのゆりかごのあるはずの場所の近くに転移するのだった。

視点終了

ミッドに転移したなのは達は会議の結果、なのはだけでゆりかごに向かうことになった。魔力を持ったまま近づく^{アンチマギックフィールド}と警戒されてしまい、迎撃の準備を与えてしまっし、ゆりかごにはAMFがあるので魔法を使えなくても戦闘が行えるのはが行く事になったのだ。

なのはが洞窟の中に入り、しばらく歩いているとゆりかご内部にあ

る筈の迎撃用の4足歩行の機械兵がやって来た。しかしなのは敵ではなく、その機械兵達はただの鉄くずと成っていくのだった。こうして、倒しながら奥に向かっていくと、広い空間がなのは目の前に広がった。しかし、その空間の左右には、多くの番号付きの生体ポッドが並べられており、その中には裸体の女性が入っていた。なのはそれに怒りを感じるが、それは近づいてくる気配に気づき直ぐに戦闘体制に入る。そして、なのは目の前に現れたのは白衣を着た男とその護衛らしい4人の女性だった。その中の白衣を着た男が

「我が研究所にようこそ、聖王陛下。まさか、存在しているとは思わなかったよ。」

と言う。しかし、それをなのはは無視して自身の能力を使い、その男の頭を覗き込んだ。そして

「成る程、お前は時空管理局とかいうの組織の最高評議会なる奴等の命令で作られた。それを知ったお前は発狂し、このような事をするようになったのだな？ ジェイル・スカリエッティ。」

と白衣の男「ジェイル・スカリエッティ」の過去を口に出す。するとジェイルは

「！！！何故それを？ それに何故名前まで知っている？」

驚いた表情で聞いてくる。それに対しなのはは

「貴方の記憶を読んだんだよ。無限の欲望さん。」

と言う。すると今度は落ち着いた様子でジェイルは

「成る程。それで、我々を如何する積もりなんだい？」

と聞いてくる。その質問になのはは

「そうだね。とりあえず、貴方達には眠ってもらうよ。」

と答え、直ぐに

「眠りよ。」

と唱える。すると、ジェイル達は眠ってしまった。

ジェイル達が完全に眠った事を確認すると、なのはは待機している仲間達を念話で呼び出すのだった。

おまけ

技術・魔法紹介

A M F

正式名称はアンチマギリンクフィールド

効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するA A Aランクの高位の防御魔法で、フィールド系に分類され、その効果範囲内では攻撃魔法や移動系魔法もほぼ無効化される。しかし、無効化するのは魔力の結合だけであり、魔力によって加速された物体や魔力以外のエネルギーは防御出来ない。また、強化が成された物体にも十分な防御はできないという欠点を持つ。

グラビトロンカノン

グランゾンの両腕に付いている重力制御装置で大量の重力球を作り出し、それを打ち出して使用者の周囲の物体を押しつぶすという広域攻撃魔法。この作品ではゲーム同様の使用方法以外にも、この話で愁が使用したように敵の居る方向だけに打ち出すということも出来る。

睡眠術

眠りよというだけで発動する魔法で、それを聞いた人間が眠ってしまう。ただし、使用した人間には効かない。

元ネタ：「眠りよ」と唱えただけで周りが眠ってしまう魔道具。ただし、3回ぐらいしか使えない使い捨て。（スパロボEXのマサキ

の章で人質救出前にティツティがショウに渡したアレの事)
尚、元ネタの魔道具とは違い、何度でも使用可能な上に強力。

序章20話「さらば、ハルケギニア」(後書き)

遂にやってしまった、眠りよネタ。
それにしてもグダグダで駄文だ。
次回はとうとう地球に戻ります。

序章 21話「地球への帰還」

なのはがジェイル達を眠らせてから数分後、3機の融合機と3人がそれぞれ、なのはの居る生体ポッドの並んである空間までたどり着いた。そして、なのははジェイル達が目覚めるまでユニゾンデバイスや咲夜と協力し、生体ポッドに入られている女性達の救出と処置を行った。

それから3時間後、ジェイル・スカリエツィ達が目を覚ました。目を覚ましたジェイル達に、なのは達は生体ポッドの中にいた人物全員を救出し、蘇生や回復処置を行ったことを話した。そして次にジェイル達に対して如何するかを話し合う事になり、なのはが

「貴方達はどうして人造魔導士や戦闘機人の作製といった非人道なことをするようになったの？それについて何か感じかったの？」と聞くが、

「最初は依頼されたからだだったが、心が壊れてからは次第に楽しくなっていくてね。まあ、非検体についてはは大事な実験体といった程度の感情しか持ち合わせていないよ。」

とジェイルが答え

「私は実験体については同情はするし仲間意識もある程度は持つてゐるが、ドクターの意思こそが私達の意志だ。」

とナンバーズの長女であるウーノが答え

「あら？ウーノ姉様だったら、お優しいことですね。私からしたら人間なんてどうでもいいですもの。何とも感じてないですね。」

とナンバーズの4女、クワットロが答え

「私も基本的にはウーノと似たような意見だ。」

とナンバーズの3女、トーレが答え。

「私にはそんな事はどうでもいい。」

とナンバーズの5女、チンクが答えた。

その後もなのはは質問をするのだが全ての答えにおいて危険な思想

が感じられた。そして、最後の質問となった。

「じゃあ、これが最後の質問。もし管理局を倒したとして、その後は如何するの？」

この質問には

「そうだね、取り合えずは支配とかは考えていないよ。私達は実験できればそれでいいからね。」

「その通り、その後の事など、何処かの企業や組織が支配するでしよう。」

「そうですね。私達にはそんな事どうでもいい事ですものね。」

「「そうだな。」」

というそれぞれ答えが返ってきた。それから数分後、会議を行って彼らに対する処遇が決めた。そして、それ実行するために、またあの呪文を使う。

「眠りよ。」

と唱えるとジェイル達はまた、夢の世界へと旅立って行った。

それから数分後、なのはは彼らの精神と記憶を操作する事となった。ハッキリ言って彼らの思想はかなり危険で下手をすれば地球にもその脅威が訪れるかも知れないからだ。そんなことさせる訳にはいかないと思いこの判断を下すのだった。ハッキリ言って殺してもいいかと思ったが、ジェイルの知識は殺すには惜しいし、優秀な助手も付けたいということでこういう判断になったのだ。

こうして精神と記憶を操作されたナンバーズ達はその後、普通の人間と同じような体に戻された。

数時間後

ジェイル達が目を覚ましたが、数時間前の様な性格ではなく真面目で優しい名医と助手と成っていたのだ。しかし、そこへ警報が鳴り響く。ジェイル曰く、管理局員だと言う事らしい。しかし、襲撃してくるのはもう少し後だったらしい。

なのははジェイルに機械兵を出させないように指示を出し、そして

「私が言って説得して来る。」

と言って、洞窟の外側へと向かおうとした。それに対しジェイルは「ああ、よろしく頼む。」

と後ろ向きのなのはにそう言った。なのはもそれに答えるように頷き「任せて。」

と自信を持って言い、襲撃者である管理局員の元に向かうのであった。

場所：スカリエツティアジトの洞窟内部

視点：ゼスト

我々は今、戦闘機人プラントと思われる場所にいる。本来なら、数日遅くに突入する筈だったのだが、上司であり、親友のレジアスによつて妨害され、焦った俺達は、今日突入する事になったのだ。

「それにしてもAMFが展開されている以外は迎撃の意思が有りませんね。ゼスト隊長。」

と部下の青髪の女性、クイント・ナカジマが言う。それに対し俺は「そうだな。メガーヌ、お前は如何見る？」

と頷き、同じく部下のメガーヌ・アルピーノにこの状況について何かの罨ではないかという意味で聞いてみる。しかし、彼女から驚くべき言葉が発せられた。それは

「少なくとも罨の可能性等はないと思います。罨であるならば、此処まで迎撃が無いのはおかしすぎます。恐らく、既にこのプラントが破棄されているか、抵抗する気が無いのかも知れません。」

という返事が返ってきた。そこへクイントが何か言おうとした時「その通りですよ。管理局の皆さん。」

と言う幼い少女の声が俺達の前からした。その声の主は岩陰から姿を現したのだが、その声の主の容姿を見て俺達は愕然とした。それもその筈で目の前に居るのは、今や伝説の存在である古代ベルカの聖王家の証を持った少女だったのだ。その聖王家の証を持った少女は「ドクターが待ってます。全て話しますので、着いて来て下さい。」

と言うと踵を返し、歩き始めたのだった。俺達はこの少女の言った事が気になったので着いて行く事にした。そして、その少女から恐ろしい事を耳にする事になったのだ。

曰く、ジェイル・スカリエッティが最高評議会によって作られた存在であり、戦闘機人や人造魔導士もその最高評議会によって依頼され、作らされていた事。

曰く、さっきまでは自分の出生を知ってしまった為、狂っていたが、目の前に居る聖王なのはにより今では真面目で優しい名医だと言う事。

曰く、俺達が来ることはレジアスや最高評議会がリークしていた為に知っていた。

との事だった。そして、それに関するデータも見せられたり、ジェイル・スカリエッティと会ったら、そのことを信じせざるを得なかった。そして、それらを知った俺達は重大な決意をする。

視点終了

その後、ゼスト隊はなのは達やジェイル達に協力する事を約束し、クイントも同じく管理局員である夫のゲンヤにそのことを伝え、夫婦共にジェイルやなのはに協力することを約束し、メガーヌは生まれたばかりの娘のルーテシアを連れて、ジェイルのアジトに住むことを決め、ゼストもレジアスに会いに行きレジアスの目を覚まさせた後、メガーヌとルーテシアと共にジェイルのアジトで暮らす事を選択した。

そして、ジェイル一味はなのはの技術協力により、小型魔力炉搭載型の自動人形の開発を始め、管理局と聖王協会に潜入しているナンバーズの次女、ドゥーエには聖王の遺伝子は必要がなくなった事と一時戻るようにと命令し、他のナンバーズ同様になのはが普通の人間へと戻し、精神や記憶も改竄してから再び最高評議会の秘書としてスパイとして送り込むのだった。

そして、なのは達一向は、ジェイルのアジトでの4日程の滞在が終了すると、ジェイル一味や管理局組みから見送られて地球へと帰っ

ていった。

こうして、なのは達のハルケギニアから始まった5日間もの異世界の旅は地球に帰還した事によって終わりを告げるのだった。

序章 21 話「地球への帰還」(後書き)

地球に帰還するといっても家族や友人への再会はあえてしませんでした。再会や色々な手続きは次の話からある程度やる予定なので、それが終わったら、無印編の始まります。もしかしたらその間に、キャラ設定やデバイス設定なども入るかも知れません。

それと、ナンバーズは人間に戻しましたし、ジェイルを真面目に変更し、研究対象も完全な機械に感情や思考を持たせ、尚且つ戦力にするという研究に変えました。

序章終了「帰還後」（前書き）

すいません。本当は前編と後編に分けるつもりだったんですが、思いの他文章量が一話で収まる範囲でしたので、サブタイトルと一緒に変更させていただきました。

序章終了「帰還後」

なのは達はミッドチルダから地球の月村邸の庭へと転移した。地球では既に夜と成っていた

月村邸に転移した理由は、シルフィードを匿えそうな所が綺堂邸と月村邸しかなかったからである。

本当なら綺堂邸でも良かったのだが、自宅からも遠かった為に月村邸にしたのだ。

月村邸のインターホンを鳴らすと返事が返ってきたのでなのはだという事を伝えると直ぐにノエルが出てきた。そして、居間に通されるのだった。通されたなのは達は何処にいたか、オルレアン母子の事を聞いてきた。なのは達は素直に事情を説明すると、月村邸の主である忍の判断によりオルレアン母子やシルフィードは月村邸に住む事になったのだ。その後、月村邸に住む事になった2人と1匹以外のなのは、アイデ、ユニゾン姉妹、咲夜は家族に顔を見せる為に、転送魔法で帰宅へする事になった。

帰宅したなのは達は真っ先に美由希の抱き付きという洗礼を受けた。その後、アイデを紹介し、家族にハルケギニアに使い魔として召喚したが断った直後に、父親を殺され、母親までも心を壊された少女を見つけ、その母親を助けるという願いを叶え、そのままにしてもまた狙われるだろうと判断したなのは達が母子と娘の使い間の竜を連れてこの世界に戻ってきた事を話した。もちろん、愁がクリストフの転生者であり、そこで生け贄の為に多くの人を殺した事や地球に戻る前にミッドに行き、そこで管理局という組織の存在の事や、その組織の闇を見てきた事も話した。もつとも、愁を知る恭也はやっぱりかという表情をしていたが。ちなみにこの話しは月村家で話した内容とほぼ同じである。

翌日、送迎バスの中でアリサにも念話で高町家や月村家で話した事と同様のことを話した。

なのは達にとつては5日振りの学校が終わると、なのはとすすかとユニゾン姉妹は直ぐにアリサを月村邸に連れて行き、アリサとオルレアン母子を会わせたのだった。その時、シャルロットが亡くなった級友とそっくりの声に驚いたのは言うまでも無い。

一週間後、なのははミッドチルダに来ていた。理由は魔導式自動人形の実験機の動力炉に必要な聖遺物を探すためだ。

なのは達と分かれたジェイル達は直ぐに自動人形の製作に着手した。この5日で何とか起動して動けるようにはなったものの、肝心の心がある魔導兵器ではなく、普通の電力での動作なのと心が生まれていないので完成には程遠いといえた。その理由として、超小型の新型魔力炉の作成が難航していたのとAIやプログラムが未完成だからだ。そんな時、なのはから激励の通信が着たのでついではかりにジェイルはなのはに相談した。そして、その答えこそが聖遺物の使用である。そして、そのジェイルから相談されたなのはは2日後、特に用事も無かったのでその封印場所であるミッドチルダのエルセアの森林にある遺跡に行く事にしたのだ。

場所：ミッドチルダの上空

視点：なのは

私は、あるロストロギアを見つけるためにミッドチルダのエルセアの森林の上空を飛んでいた。

このエルセアの森林にある遺跡には、前世のオリヴィエが封印して隠したロストロギアがあるのだ。

それは人間が使う場合は聖王家の人間にしか使えない代物で、それ以外の人間が使用しようとする死ぬという物だ。

名を虹の欠片といい、レリックと呼ばれる聖王家で使用されていた物の改良型で安全かつ、更に高密度の魔力を内包しているという代物で、見た目は虹色のレリックといった感じで聖王家以外の人間の体に埋め込むと間違いなく死んでしまう。理由は聖王の魔力にだけに正常作動

しそれ以外には適性が無いために暴走して死んでしまうという（様は、魔力光の問題で融合機と似たようなもの）。

オリヴィエはそれを自らの体内に入れて、ゆりかごを制御していたのだが、今回は別の物に内包されるのだ。ちなみに、対象なのは人間や生物といった生きている者だけで、それ以外の無機物は対象ではない。

その内包される物の名は試作型魔導自動人形1号機【JX-01ウ

ジェイルエックス

ーノ】。の通りジェイルが製作した物で名前だけは戦闘機人だったウーノが元になっている。ついでに旧ウーノを始めとした元ナンバーズは名前を変え、ウーノはステラ・スカリエッティ、ドゥーエはタリア・スカリエッティ、トーレはルナ・スカリエッティ、クワツトロはフレイ・スカリエッティ、チンクはラクス・スカリエッティとなっている。スカリエッティ姓なのは、5人ともジェイルと結婚したからだ。

そして、私はその虹の欠片をウーノに付ける事を提案したのだ。

ミッドに転移してから15分、遺跡付近まで来た時

「マスター、近くで戦闘が起こっています。」

とエルが教えてくれた。私は驚いたが、直ぐに持ち直した。そして、正確な場所が分からないし、鉢合わせする可能性もあるので

「場所は？」

と聞いた。すると

「丁度遺跡の上空です。このまま行けば鉢合わせますが、如何します？」

と聞いてくるエル。正直、あんまり関わりたくないんだけどな。なので

「ちなみに、そこから動く気配は？」

と聞く。しかし

「無いようです。どうやら、管理局員と犯罪者が戦っているようです。」

と返ってくる。なので

「は、仕方ない。もしなんかあれば助けよう。」
と言う。するとエルが

「よろしいのですか？聖王が復活した事がばれますよ？」

と聞いてくる。しかし、私にはオリヴィエから受け継いだ、記憶を操れる能力があるので

「問題ないと思うよ？記憶消せばいいわけだし。」

と言った。それなら安心したと見たエルは

「マスターがそう判断したのならば私達はそれを全力でサポートします。」

と言ってくれた。そして私はそのエルの言葉に不敵な笑いを浮かべ
「ふふつ。それは心強いね。じゃあ、速度上げるよ。」

と言うと速度を上げて戦場へ向かうのであった。

視点終了

場所：エルセア森林の遺跡上空

視点：?????

僕は、航空武装隊の一員としてロストロギアを密輸犯を追っていた。
しかし、その密輸犯の実力は高く、既に傷を負っている。向こうも
ほぼ同等の傷を負っているが、それでも実力は向こうの方がわずかに
高く、少しでも油断してしまえば間違いなく僕は死ぬだろう。

そこへ、犯人はある物を取り出した。それは……。

「実弾銃……。」

と僕は呟いた。そして次の瞬間

ドーン……。

僕に向かってスラッグ弾らしき弾を撃ち込んできた。僕のシールド
ではスラッグ弾は受けきれないので、シールドを張りながらも僕は
覚悟を決め、目をつぶる。しかし……

……シュッ……カキン

いつまで経っても撃たれた痛みは無く、何がおこったのかを確認

するために目を明けるとそこには二刀の剣を持った金髪の少女が犯人と向かい合っていた。しかも何故かその少女を見て密輸犯は驚いた顔をしていた。そして、その少女は犯人の方を向きながら

「大丈夫ですか？」

と僕に言った。そして、僕も

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

と礼を言った。しかし

「まだ全て終わったわけじゃないです。礼を言うなら犯人を捕縛してからにして下さい。」

と言って来た。正論だったので僕は頷いて

「そうだね。でも如何するつもりなんだい？」

と返した。すると

「こうします。」

とだけ言うと、少女の体が消えて気がついたら密輸犯の懐に入り、目にも止まらぬ速さで密輸犯を切り刻んだ。しかし、防護服が破れているだけで、血が出ていないという事は非殺傷で攻撃したようだ。それにしても早すぎて太刀筋が見えなかった。だけど、防護服に4つの傷があるということは4回は切られているという事になる。

その密輸犯を倒した少女は此方を向いた。そして、さっき密輸犯が驚いていた理由が分かった。なぜなら、その少女は伝説でしか存在しない筈のベル力聖王家の象徴である翡翠と紅のオッドアイの目をした少女だったからだ。そして、僕は驚きながらも

「申し訳ありませんでした、聖王陛下であるとは知らずにご無礼をいたしました。そして、先程は助けていただき、真にありがとうございます。」

と畏まって謝罪と礼を言った。しかし聖王陛下は

「いいですよ、別に。それに私は公式に聖王をついではいませんから。それに今、この密輸犯の心を読んだ所によると、元々は管理局の依頼でこんな事をしていたようですね。」

と気にもしないように言い、更にはとんでもない事が聖王陛下の口

から飛び出してきた。僕は陛下が嘘を付く様な人間では無い事が会話をしている内に分かったのだが、念のために聞く事にした。もしそれが本当ならば管理局は犯罪に加担している組織だと言うことである。そして、その疑問は僕が聞く前に答えられる事になる。

「本当ですよ。しかも、管理局が犯罪に手を染めている証拠もあります。」

という陛下に

「な、何故僕の考えてる事が分かったのです？僕は口に出してはいはずなのに。しかも証拠って？」

と言った。すると

「言ったはずですよ？心を読んだ所によるとって。つまり私は心を読めるんですよ。ああ、それよりも証拠の方が気になりますよね？」と聞いてきたので、素直に頷き

「はい。見せてもらえるのならお願いします。」

と返事をしてから頼んだ。しかし

「まあ、貴方は真面目でまともな局員ですから見せても良いんですが、本当にいいんですか？」

と言い、確認してきた。僕はどうしてこんな事を聞いてくるのかが分からなかったのだ

「といたしますと？」

と聞く。そして返ってくる答えは

「じゃあ、はっきり言わせてもらいます。もし全ての証拠や証人を見たら貴方は間違いなく管理局に絶望します。それでも良いんですか？」

と言い、再度確認してきた。恐らく覚悟を試すためだと思い、僕は完全に覚悟を決めた。最悪、管理局を辞めて敵対することも考えてそして

「怖くないといえば、嘘になります。しかし、知らないで管理局で働くよりは知ってから辞めるなり、敵対した方がマシだと思います。」

と答えた。すると陛下は

「そうですね。じゃあ、貴方はこの密輸犯を地上本部へ連れて行ってください。そしてその後、何かしらの理由をつけて、直ぐにこの場所に来てください。全てをお話しますから。それと、管理局には私のことは内密にお願いします。ちなみに、この犯人には記憶を弄ったので、私の事を喋る事はないですから。」

と言い、僕は陛下って何でもありだなと思いつつも頷き、密輸犯を連れて地上本部へと向かっていった。そして、その時僕は重大な事を聞くのを忘れていた事に気が付いた。それは……

「あつ、陛下の名前を聞くの忘れてた。」

そう、名前を聞くと言う基本的なことを忘れていたのだ。しかし、後で会うことを約束したのでその時に聞けばいいと思い直したのだ。つた。

視点終了

場所：遺跡内部

視点：なのは

管理局員の男性、ティードさんと一時分かれた私はそういえば名乗ってなかったなと思いつつも地上に降りて、遺跡の入り口に差し掛かった。その遺跡の入り口は扉で守られており、その扉には特殊な方法が使われていて、扉を開けるには聖王家の虹色の魔力を流すしかない。無理に押し開けようとしたら、破壊しようすると警報が鳴り、扉の両隣にある石造に偽装した2機の迎撃用のロボット兵が動き出し、その相手を攻撃するというシステムとなっている。ちなみにその戦闘力は管理局でいう所のSSランク相当と封印した、当時のオリヴィエでも苦戦していた相手である。私はその扉に自身の虹色の魔力を流すと何も障害なく遺跡に入り込めた。

そして、幾つもの仕掛けを解除して、奥の虹の欠片が安置してある部屋へと着いた。私は直ぐに虹の欠片を回収すると部屋を閉じ、また罫を復活させてから封印した後、ティードさんを待つために上空

へあがるのだった。封印する理由は、もしも、この場所が発見されて、聖王家の魔力でしか解けないと分かった時に聖王が復活した事をばらさない為である。もちろん、念のために罫を復活させたのも同じ理由だ。

管理局なら聖王協会から聖王の遺品を奪い取って、そこに残った遺伝子からクローンを作り出し、そのクローンに扉を開けさせようとする可能性もなくはないので、そういった罫も必要となるのだ。まあ、奥に行っても何もなし、もしクローンが作られていたら、私が攫うんだけどね。と私は考えながらジェル達に虹の欠片を回収した事と管理局員の客が来ることを連絡した後、ティーダさんを待つのだった。

それから、50分が経過し、ティーダさんは私より小さい妹を連れてやってきた。理由を聞いたら、妹にも聞かせたいとの事だった。そして、私達は互いに自己紹介をした後に私は二人をジェイルのアジトに連れて行き、そこで私はジェイルに虹の欠片を渡し、ティーダさんの治療をした後、元管理局員のゼスト隊の皆やスカリエッティ一家と共に最高評議会の正体や管理局の悪事等を証拠のデータや映像と共に話した。結果、二人共管理局との戦いの時に協力してくれると約束してくれた。そしてその後、私はジェイルの自動人形製作の手伝いと私自身の従者となる魔導式自動人形の基本フレームを製作した後、地球へと帰った。その翌日、ティーダさんは管理局を辞め、住んでいた自宅も売り払い、ジェイルの研究所で兄妹ともども住む事になったと言う連絡がジェイルからあった。因みに、ティーダさんやティアナが私を呼ぶ時に陛下と呼んでいたのだが、私はそれを否定して名前で呼ぶように言った。すると、ティーダさんはなのちゃん、ティアナはなのはさんと呼ぶようになった。

視点終了

その一週間後、桃子のお腹の中に新しい命が二つも宿っている事を知ったのははオリヴィエの記憶を辿り、第42管理外世界「ポッ

ケ」に向かった。理由はダイヤモンドの原石を採掘してから加工し、それを生まれてくる二つの命に贈る為だ。こうしてダイヤモンドを2つ掘り出した後に、ジェイルから工房を借りてなのはが加工したのだ。因みに、この第42管理外世界【ポツケ】は、聖王家が先祖代々使っていた鍛錬場所だったのだが、それ以外にも宝石の類や鉱石等も豊富にあったので、オリヴィエは鍛錬以外でも良く行っていたのだ。

それから更に、1年が経過した。

4月になるとなのは、すずか、アリサ、ユニゾン姉妹は、聖洋付属小学の2年生に進級した。そして、その一ヶ月後には、桃子のお腹の中にいた双子の姉弟が生まれたりした。その時に、なのはが自分で採掘して加工したダイヤ2つを双子達にと桃子に贈ったのは、言うまでもない。

それから一年後、21の青い結晶から始まる出会いと新たな力があるのはの運命を変えることになるとは、本人であるなのはも含めて、誰もが予想出来なかった。

おまけ

ハルケギニアを去った後の白河愁

なのはに邪魔をされてハルケギニアを去った白河愁だったが、4日後には再びハルケギニアに行き、一方的な虐殺を行った。そして、ハルケギニア中の人間や人外を全て殺した後に邪神の宝玉に向けて復活の言葉を唱えると直ぐに愁はその宝玉を地面へと投げつける。地面に当たると、宝玉は割れて、5体の異形の化け物達が現れた。そう、破壊神と呼ばれるサーヴァ「ヴォルクルスの分身である。その分身ヴォルクルス達は、それぞれに空と陸がそれぞれ2体とそし

て両方の特性を合体させたような物が1体といった感じである。一体だけでも、普通の魔導士や達や並みのエース達では太刀打ちできない代物だったのだが、今回は相手が悪かった。なぜなら世界を一日で滅ぼす事ができるような存在が相手なのだ。そんな相手に流石の邪神の分身達も勝てるはずもなく、縮退砲で全て葬られていった。因みにこの縮退砲、実はまだ威力と使用魔力に問題がある。本来ならそれらを解消させてからグランゾンを進化させたネオ・グランゾンに取り付けるはずだったのだが、なのはと戦うためにはどうしても必要だったのである。そして、今回使う必要がない縮退砲を使ったのは、威力や使用魔力の調整の為である。分身ヴォルクルスを葬った愁は威力や使用魔力で何かを？んだように成る程と呟いた後、不気味に笑いながらハルケギニアを去ったのであった。こうして残りのヴォルクルスの宝玉は、後2つである。

序章終了「帰還後」(後書き)

次は魔力ランク表です。その後に無印編スタートとなります。

魔力ランク値表

この作品での魔力設定です。

因みに魔導士ランクや技能ランクもこれに準じます。
ただし、適当です。

測定不能〓 1500万〓

EX+〓 1400万〓 1499万9999

EX〓 1300万〓 1399万9999

EX-〓 1200万〓 1299万9999

SSS+〓 1100万〓 1199万9999

SSS〓 1001万〓 1099万9999

SSS-〓 900万〓 1000万9999

SS+〓 860万〓 899万9999

SS〓 780万〓 8599万9999

SS-〓 700万〓 779万9999

S+〓 660万〓 699万9999

S〓 601万〓 659万9999

S - 〓 5 5 0 万 〓 6 0 0 万 9 9 9 9

A A A + 〓 4 9 0 万 〓 5 4 9 万 9 9 9 9

A A A 〓 3 5 6 万 〓 4 8 9 万 9 9 9 9

A A A - 〓 3 0 0 万 〓 3 5 5 万 9 9 9 9

A A + 〓 2 6 0 万 〓 2 9 9 万 9 9 9 9

A A 〓 2 0 0 万 〓 2 5 9 万 9 9 9 9

A A - 〓 1 5 0 万 〓 2 0 0 万

A + 〓 1 2 0 万 〓 1 4 9 万 9 9 9 9

A 〓 7 6 万 〓 1 1 9 万 9 9 9 9

A - 〓 5 0 万 〓 7 5 万 9 9 9 9

B + 〓 3 5 万 〓 4 9 万 9 9 9 9

B 〓 2 0 万 〓 3 5 万

B - 〓 1 0 万 〓 2 0 万

C + 〓 7 万 〓 9 万 9 9 9 9

C 〓 3 万 〓 6 万 9 9 9 9

C I = 1万 ~ 3万

D + = 9800 ~ 9999

D = 5200 ~ 9799

D I = 5000 ~ 5199

E + = 4800 ~ 4999

E = 1101 ~ 4799

E I = 1000 ~ 1100

F + = 800 ~ 999

F = 201 ~ 799

F - = 100 ~ 200

こうした理由は、アニメでアースラ側がなのはとフェイトの戦いを分析した時に、平均値がなのはが127万、フェイトが143万で、最大発揮値がその3倍以上と言っていたので大体この位かなと思って、設定しました。値もEXと測定不能も含めてこの作品でのオ리지ナルです。

それと測定不能以外のランク後に付いてくる+は固有技能や特殊能力があっても付きます。

例は

Sの技能や魔力+固有技能や特殊能力=S+

といった感じです。

魔力ランク値表（後書き）

次は、序章にでてきたキャラの設定です。その次が、デバイス設定です。

プロフィール〜序章編1〜

高町家や地球にいる人々

高町なのは（不破なのは）

年齢：8

容姿：なのはの髪と瞳の色を金髪と翡翠と紅のオッドアイにして、

髪型はポニーテイル。

魔力光：虹色

魔導師ランク：測定不能（少なくとも1億以上はいつている）、ス

クエア

妖気：SS

霊力：SS+

騎士甲冑：白と青を基調としたドレス型にマントとvividの大
人形態ヴィヴィオの物と同じ物。

能力：聖王の鎧、高速学習、運命操作＋、完全破壊＋、時間と空間
の操作＋、超能力＋（テレポートや読心等のHGSが使えるもの全
て）、記憶と精神の操作＋、生きている存在を見ただけでその力を
自分にプラスして改良する能力、?????、?????。

デバイス：杖型のレイジングハート・エルトリウム、長剣型のラ
イトプリンガー、変幻自在型のアルテマウエポン、魔導書型の法の
書、?????、?????。

管制人格・ユニゾン：インデックス、レミリアとフランドールのユ
ニゾンスカーレット姉妹

術式や適正：古代ベルカ式、古代と近代ミッドチルダ式（近代はま
だ適正のみ）、アルハザード式、ラ・ギアス式、4系統と虚無（た
だし、虚無はルイズの様な爆発だけで、それ以外は他の虚無の担い
手と一緒にの手順が必要なので事実上使えない。）

この小説の主人公で、聖王オリヴィエの生まれ変わりで、直系の子

孫でもある。

また、生まれた時点で既に魔力がSSS+級という恐ろしい力の持ち主で、現在では運動能力や寿命も人間離れしているが、まだ遺伝子的には人間である。

性格は原作とかなり違い、いつもは冷静である。しかし、敵対する者や仲間や家族を傷つける者に対しては容赦がない。

実は結構な努力家で時間停止してから魔法や武術の鍛錬をする為、咲夜以外に見られる事はない（ただし、特殊な結界を張っているため、咲夜にも見られるとはしない）。ただし、料理の練習等は普通にやっている。

十六夜咲夜

年齢：不明

容姿：東方の十六夜咲夜

魔力光：銀色

魔導師ランク：SSS

能力：時間と空間の操作

騎士甲冑：スカートの丈が少し短いメイド服（要は仕事服と同じ）

デバイス：銀ナイフ型のダキアーシュ

術式：古代ベルカ、古代ミッドチルダ式

高町家のメイドで、偶に翠屋の手伝いをさせられる。

その正体は、敵国の依頼でオリヴィエとある意味勘違いでレミリアとフランドールを暗殺しようとした暗殺者であったが、敗北。その後はレミリアの運命操作により、オリヴィエ達の配下となり、オリヴィエ達と共に敵と戦った。それから300年の間、自らの体内時計や細胞等に時間停止を掛けてたので、そのままの姿をしたままでなのはの従者として再び聖王家の人間に仕えることになる。

高町恭也（不破恭也）

年齢：18

容姿：とらはの高町恭也より

魔力光：白みがかった青

魔導師ランク：SSS

能力：魔力変換【風】、?????

騎士甲冑：?????

デバイス：鎧型のサイバスター、小太刀型の光牙と影牙

術式や適正：古代ベルカ式、ミッド式（適正だけ）、ラ・ギアス式、アルハザード式（適正だけ）

現在の聖風の魔装騎士で、聖王オリヴィエ直系の子孫にして前聖風の魔装騎士【不破正樹】の生まれ変わり。序章前編の主人公とも言える人物で、なのはとは、母親の違う兄。今は人間ではなく、風の精霊では不老不死である。本来なら高校3年なのだが、一年間の武者修行の為に一年遅れているので高校2年。

ざから

偽名は高町勇吾

年齢：400年ぐらい

容姿：とらはの赤星勇吾

魔力光：黒みがかった青

妖気：SS

魔導師ランク：S+

騎士甲冑：なし

デバイス：なし

術式：古代ベルカ式、妖術

元々は国守山の湖に封印されていた魔物だったが、封印が弱まっていた事と、封印の要である氷那が御神体から出てしまった為に復活

しかし、恭也とさくらによって瀕死の状態にされ、形だけとはいえ恭也に守護獣にされる。その後、目的の人物であった真一郎に会った事と、真一郎よりも恭也に興味を持った為、そのまま恭也の守護獣となった。因みに、今では魔物形態でも小型化できるようになったので、最近ではそちらでいる方が多い。名前は、ざからだと怪しまれるのと戸席を作る為である。

因みに、高校では主の恭也、主の前世を殺した愁と共に風校の三大美男子と呼ばれている。尚、本人と主の恭也は自覚なし。正に、使い魔（守護獣）は主に似るとはこのことである。

躯川雪

年齢：400年ぐらい

容姿：原作の雪と同じ

妖気：S -

国守山にいた雪女の生き残りで、仲間を殺したざから（今の勇吾）とは同じ目的であった為に友情が芽生える。しかし、目的だった真一郎よりも恭也に惚れた為、高町家に住む事になった。尚、戦闘能力は殆どない。名前は、雪の意見を参考に士郎がつけた。

氷那

容姿：原作と同じ

年齢：400年ぐらい

妖気：A A A +

謎の獣でざからの封印の要であったが、雪が外に出してしまった為、彼女を追って外に出た所をゆうひに見つかる。ざから事件後は雪と一緒に高町家でお世話になっていて、高町家のマスコットの存在となっている。因みに、戦闘力が全くない。

高町家

原作と違い、士郎は光牙と影牙の加護によりテロから無傷で帰っている。更に住人が増えたので騒がしくなっている。それに伴い、人数が多くなったので家を改装して部屋等を増やした。その時に月村邸でお世話になったのでオルレアン母子とは会っていて、復讐のことについてもなのはに頼まれた士郎が話している。

今現在の住人は、高町なのは、インデックス、高町恭也、高町士郎、さから高町勇吾、軀川雪、氷那、高町桃子、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット、十六夜咲夜、高町美由希、高町??、高町??の14人である。因みにとらはで喧嘩して、なのはに止められる例の二人組み（レンと明の格闘家コンビ）は原作と違い、親との関係が良好だったり、心臓に病がないので海鳴や高町家にはいないし、会った事もない。ただし、桃子だけはレンの母親が友人なので、名前だけは聞いている。

月村忍

年齢：17

容姿：原作と同じ

魔力光：黒

魔導師ランク：測定不能

デバイス：鎧型のディアクス

騎士甲冑：なし

元夜の一族で、今は闇の精霊となった天才科学者で資産家の当主。

ただ、夜の一族ではなくなったのと恭也の方に嫁いても良い様にと

月村

家の当主をすずかに譲る予定である。因みに、ジェイルとは気が合うため、共同で開発などを行う事もある。

因みに恭也と勇吾ことざからとは同じ学校でクラスメイトである。

ノエル・綺堂・エーアリヒカイト

年齢：不明

容姿：リリカルなのはの方の原作と同じ

月村邸のメイド長であり忍の専属のメイド。自動人形であり、その力は人間を遥かに超える。

ドジな妹に手を焼かされてはいるが、それをどこか楽しんでいる節がある。

さくらの屋敷で壊れていたまま眠っていたが、忍が独学で不完全ながら直した。しかも、メンテナンスの時に次いでとばかりにワイヤー式

のロケットパンチを搭載している。改造と小型魔力炉がレリックの搭載する予定がある。恐らく次は武装にドリルが付くでしょう。自爆装置？そんな物はガジェット系にでも付ければいいんです。

月村すずか

年齢：8

容姿：原作同様

魔力光：白

魔導師ランク：EX+

騎士甲冑：なし

デバイス：なし

月村家の次女で、夜の一族と呼ばれる吸血鬼（もしくは吸血種）であり、なのはやスカレット姉妹とは幼少の頃からの友人である。魔法を習い始めた理由は、誘拐の時に何も出来なかったことが原因。

ファリン・綺堂・エアリヒカイト

年齢：15（実は7か8）

容姿：原作同様

ノエルの妹であり、すずか専属のメイド。姉と同じく自動人形ではあるが、ファリンの場合は忍がすずかのお世話の為に1から製作した。

しかし、バランスー部分に問題があるのか、何も無いところで良く

転ぶ。姉と同様に改良と小型魔力炉かレリックの搭載予定あり。

綺堂さくら

年齢：23

容姿：原作同様

魔力光：水色

魔導師ランク：SSS

騎士甲冑：?????

デバイス：アイスシュベルト、ガッデス

聖王家に仕えていた小国の第2王女で聖水の魔装騎士だったティツティ・ノールバックの生まれ変わり。更に月村姉妹の叔母に当たる人物で、人浪と夜の一族の混血雑種だったが、今は水の精霊として生きている。

アリサ・バニングス

年齢：8

容姿：リリカルなのはの方の原作同様

魔力光：赤

魔導師ランク：SSS

騎士甲冑：????

デバイス：鎧型のグランヴェール、爪と盾の一体型の炎龍人の爪
現聖炎の魔装騎士にして、前聖炎の魔装騎士であるホワン・ヤンロンの生まれ変わり。

バニングス家の跡取りだが火の精霊となったことを親に話し、早く妹か弟を作るように進言しているらしいが、今だ進展はない様子なのはとすずか、それにスカーレット姉妹とは一年からの付き合い。覚醒はアリサとすずかの誘拐事件時だったが、アリサ自身の戦闘経験不足となのはの介入で結局、誘拐犯を自力で倒せなかった。

シャルロット・エレーヌ・オルレアン

メイジランク：トライアングル

容姿：原作のタバサに表情が柔らかくなった感じ

術式：系統魔法の風

なのはがルイズに召喚された時に心を読まれたのとなのはの精霊に知り合いがいる発言が縁でなのはに母親の救出を依頼。そして、見事に母親を救出。その後は母の心を狂わせたり、父を殺した伯父でありガリア王であるジョゼフに敵討ちをしようと決意するも、なのはによって説得させられて地球の月村邸に住む事になった。

性格面については最初は無愛想、無関心だったが、次第に良く笑い、会話するようになった。

シュリア・フローヌ・オルレアン（名前等がオリジナル）

メイジランク：ライン

容姿：原作のオルレアン婦人を健康的にしたような感じ。

術式：系統魔法の水

シャルロットの母親にして、今は亡きオルレアン王弟のシャルルの妻だった人。原作同様、心を壊されていたがなのはによって助けられた。非戦闘組み

さざなみ女子寮の住人達については原作のとら八とほぼ同じ設定なので省かせていただきます。

相川ラバーズ（さくらは恭也ラブなので入らない）やその友人達も原作とほぼ同じ設定です。

格魔装機神の騎士甲冑は前世と同じものを使用。なので、過去編で書きます。

+は強化されている事を示す。

オルレアン親子については、月村家やバニングス家といった日本でも有数の大企業の権力により、戸席が作られた。

プロフィール～序章編1～（後書き）

次はスカリエッティ一家やなのは陣営側の管理局員達です。

プロフィール〜序章編2〜

管理局関連

レジアス・ゲイズ

年齢：43

容姿：原作同様

管理局地上本部の中将で、精神と記憶をを弄られる前のジェイルと最高評議会と手を組んでいたが、ゼストの説得により最高評議会とは手を切る。それからは達と共に管理局をより良い形にしようと思っている。魔力なしだが、頭はかなり優秀。因みに、娘のオリスも同様である。

ゼスト・グランガイツ

年齢：43

魔導師ランク：S+

容姿：原作同様

デバイス：原作同様

騎士甲冑：原作同様

術式：古代ベルカ式

レジアスの右腕的存在でストライカー級騎士。戦闘機人プラントを見つけたので報告をするも、レジアスに止められる。しかし、それを怪しんだゼストはレジアスの命令を無視して、部下のクイントとメガーヌと共に突入する。だが、なのはが道中に現れ、彼女によりジェイルと最高評議会の正体と管理局やレジアス達がしてきた事を聞かされて部下の二人と共になのは達に強力を約束し、管理局を離反。その後はレジアスと和解して共に管理局を変えていこうと誓う。今は部下達と共にジェイルのアジトを住处としている。

クイント・ナカジマ

年齢：26

容姿：原作のギンガを大人っぽくしたような感じ。

魔導師ランク：A

術式：近代ベルカ式

デバイス：箆手型のリボルバーナックル（原作のナカジマ姉妹が着けている物を両腕に装備）、ローラ型のロードキャリバー（ナカジマ姉妹のキャリバーズに酷似している。）

騎士甲冑：原作でギンガの纏っていたバリアジャットの色違いで、白い所が黒で、黒い所が白で薄紫の所が青。

自身の所属するゼスト隊と共に管理局の裏を知ってしまった為、管理局を離反。

現在は、ジェイルのアジトで暮らしている。尚、そのことは夫のゲンヤと娘のスバルとギンガには全て説明済み。

メガーヌ・アルピーノ

年齢：27

容姿：原作同様

魔導師ランク：A

デバイス：グローブ型のアスクレピオス（原作でルーテシアが着けていた物）

バリアジャケット：紫のジャケットに薄紫の腰マントと紫色のズボンといった紫で統一された甲冑

術式：ベルカ式ベースの召喚術、近代ベルカ式

召喚獣：ガリユー

ゼスト隊のフルバック担当の召喚師で管理局の裏を知ってしまった為、上司のゼストや同僚のクイントと共に管理局を離反する。

召喚獣のガリユーについては、原作同様。

原作のルーテシア・アルピーノは、彼女の娘。因みに、ルーテシアは0歳

ティード・ランスター

年齢：17

容姿：原作同様（ティアナの持っている写真参照）

魔導師ランク：S

デバイス：原作同様の銃型（原作のティアナの引き出しにあるものがそうでないかと思われる。）で、名前はミラージュガン

バリアジャケット：白を基調とし、オレンジのラインが入った上着に白いズボン

首都航空隊の隊員で一等空尉だったが、密輸犯を追っている時になのはに救われる。その後、その密輸犯が、管理局による回し者だとなのはから教えられて、管理局を離反。その時に妹のティアナと共にジェイルのアジトに住む事になった。尚、執務官の夢は諦めている。

ティアナ・ランスター

年齢：5歳

容姿：原作同様（原作でティードと一緒に写っている写真を参照）

魔導師ランク：C

デバイス：なし

バリアジャケット：なし

兄のティードと一緒になのはの話を聞いて、管理局を許せないと思います、ティードと共になのは陣営に加わる事を決意する。

スカリエツティ一家

原作と同様の性格だったがなのはにより精神と記憶等を操作された。その時に戦闘機人組みは体を1日で人間に戻されている（なのはの時間制御能力を使えば余裕）。因みに、戦闘機人の6番から12番の人間は存在しない。それと、元ナンバーズは、新ナンバーズ作成が決まった際に名前を変えている。何故かジェイルの妻兼研究の助

手（娘なのに）になっている。尚、元戦闘機人組みはISが健在だが、戦闘には参加しない。尚、タリア以外は白衣を着ている。

ジェイル・スカリエッティ

最高評議会によりアルハザードの技術で作り出された存在で、コードネーム「アンリミテッド・デザイア」。ある時、そのことを知って発狂した。反乱の準備が整うまでは評議会の命令に従う気でいたが、なのはの精神操作や記憶操作により、正気に戻り、立派な医者兼科学者として再誕する。

元ナンバーズ

ステラ・スカリエッティ

元ウーノ

容姿：原作同様

魔導師ランク：A

特殊能力：原作同様

タリア・スカリエッティ

元ドゥーエ

容姿：原作同様

魔導師ランク：S

特殊能力：原作同様

ルナ・スカリエッティ

元トーレ

容姿：原作同様

魔導師ランク：S

特殊能力：原作同様

フレイ・スカリエッティ

元クワットロ

容姿：原作同様

魔導師ランク：A

特殊能力：原作同様

ラクス・スカリエッティ

元チンク

容姿：原作同様だが、ゼストと戦っていない為、目を負傷していない。よって、眼帯もしていない。

魔導師ランク：A A A

特殊能力：原作同様

6〜12は生まれていないので存在しない。

新ナンバーズ

元ナンバーズが人と機械の融合なら、新ナンバーズは完全な機械である。しかし、機械といっても思考や感情があり、魔法の使える自動人形がコンセプトである。因みに、尚、開発当初予定していた魔力炉については、人間サイズに入るほどに小型化が出来ていない為、不採用となった。このことが切欠でジェイルがレリックを探すことになる。

ウーノ

年齢：1（見た目は17ぐらい）

正式名称はJX-01ウーノ^{ジェイルエックス}

容姿：とらはのイレインと同じ顔立ち

魔力：SSS

バリアジャケット：なし

デバイス：なし

魔導式自動人形の試作機の1号機。

動力には魔力炉ではなく、聖遺物の1つである虹の欠片を使用。感情や思考についてはまだ赤ん坊状態だが、ユニゾンデバイスと同じAIを積んでいる為、いずれは意思や感情を持つことになる。尚、服装はたらはのイレインと同じ。

おまけ

密輸犯

年齢：20代後半

容姿：とらは1に出てくる氷室遊の目をきつくした感じ。

魔導師ランク：S+

ロストロギアを渡す所を、見張っていたティードに見つかり、逃亡。ティードと戦闘に入る。その最中になのはが介入したことでティードを殺しそこなう。その後、なのはにより倒されて、ティードにより地上本部に移送される。この時、なのはに一部記憶を改ざんさせている。

ちなみに、ロストロギアを買った闇商人は、既に捕縛されて、先に地上本部に移送されている。

なのはの能力で分かった事は、管理局が依頼した犯罪者の1人という事らしい。

尚、とらはの遊とは違い人間である。

オリジナル設定が多々あります。

ゼスト隊は公式には死んだ事になっています。

プロフィール 序章編 2 (後書き)

次はデバイス設定1です。

デバイス設定1

序章編時での設定

レイジングハート・エルトリウム

種類：インテリジェント

待機状態：赤い宝石のついた指輪

形態：盾（手持ち式ではなく、腕に装着するタイプ。エクシードモードの槍頭部分を大きくして、柄部分が無い状態。しかも、盾の先端部分からエクセリオンモードACSみたいに魔力刃が出てきて魔力短剣や魔力剣としても使えるし、砲撃も使用できる。尚、その時は翼は出ない。）、突撃槍（エクシードに酷似している。）

特殊武装：ファンネルが12機（名前が違っただけで見た目はブラスタモードのブラスタビット）

原作ではユーノがなのはに渡した謎のデバイス。この作品では、オリヴィエのデバイスだったが、子孫にして生まれ変わりのなのはがこれを受け継いだ。聖王家の魔力に耐え切れる様な構造をしていて、原作同様のカートリッジシステムを搭載している。素材はオリハルコンが使われている為、かなりの物理的防御力と魔法的防御力を持っている。ベルカのオリヴィエがどうしてミッドの物を持っているのかというと、当時はベルカとミッドの交流が盛んだったので、その時に原型機を試験運用で使っていたが、オリヴィエが気に入ってしまった為、そのまま聖王専用に改良されて使用されることになった。因みにエルトリウムはガバターの戦艦の名前から。

色は金（槍頭部分）、青（柄や槍頭の一部）、白（柄部分や槍頭の一部）、赤（槍頭を中心部分にあるデバイスコア）

ライトブリンガー

種類：アームド

待機状態：銀色の指輪

形態：両刃の長剣、小太刀

オリハルコンで出来ていて、リボルバー式のカートリッジシステムを搭載している。

本来は両刃の長剣だけだったが、小太刀はジェイルに依頼して追加してもらった。長剣型には専用の射撃魔法と長距離の収束砲が存在する。

色は刀身が白銀、鞘と柄が黒（排気装置とカートリッジシステムは鍰にある。因みに、カードリッジシステムはデバイスコアの上の部分にある）、金色（鍰の中心にあるデバイスコア）

アルテマウエポン

種類：インテリジェントアームド

待機状態：白い菱形の宝石のついた首飾り

形態：長剣（片刃か両刃かは選択可能）、大剣（片刃か両刃かは選択可能）、小太刀、大鎌、弓、ライフル銃、槍、短剣、鞭等

特殊能力：アルテマドラゴンという神話クラスの竜を呼び出せる（アルザスの守護竜であるヴォルテールより巨大で強力で次元世界に存在する竜の頂点に君臨する。尚、原理やどうして呼び出せるかは不明である）、形を持ち主の思考や命令で変化できる（ただし、武器限定）。

聖王家の秘宝で、先祖代々から伝わってきたデバイス。アルハザード最強の武具といわれていたが、実際のところは不明。ただ、法の書と同時期に存在していることだけはデータから分かっている。しかし、どこで製造されて誰が作ったのかは不明。素材に液体金属と魔法反射の特性を持った特殊な金属が使用されている。無印編の1、2話ぐらいで製作者や特殊金属名が分かります。

法の書

種類：複合ストレージ

待機状態：本型のアクセサリ

形態：魔導書

管制人格：インデックス（通称アイデ）

実は法の書という名前の由来は、作った人物ではなく最初に発見した人物により付けられた物。この魔導書のデータから様々な稀少能力を持ったデバイスや魔導書が作られたともいわれている。ただ、マスターがこの魔導書や管制人格から認められなければ、完全な力は引き出せないし、改竄も出来ないようになっていて。因みに、発見した人物は、途中で力を溺れた為にこの魔導書によって殺された。その事を恐れた人間達によって遺跡に封印された。その後、オリヴィエに発見されて彼女の物となる。彼女の死後は機能の1つである転生機能で主共々子孫であるなのはに転生した。ハルケギニアから地球に帰るときに、この魔導書が必要だったので、なのはに覚醒の呪文を唱えられて呼び起こされた。実は本当の名前があり、それが分かるのは無印編の1、2話ぐらいで、パワーアップもしますし、製作者も分かります。

サイバスター

種類：魔装機

待機：銀の腕輪

形態：鎧（外見と色は魔装機神のサイバスターだが、背中のスラスタが無。その代わりに2対3枚の純白の羽がある。）

契約精霊：風の上級精霊サイフィス

特殊武装：ファンネルが2機（見た目と攻撃方法はサイバスターのハイ・ファミリと一緒に）

上位機種の魔装機で、1機しか存在しない。300年前は4騎士の1人、少しの間だけではあるが正樹のデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球に來た為に不破家や高町家の秘宝として眠っていたが、正樹の生まれ変わりである恭也の呼びかけに答え、目覚めた。

影牙・光牙

種類：アームド

待機状態：小太刀をクロスさせたようなアクセサリ

形態：小太刀、斬艦刀（元ネタはスパロボシリーズの参式斬艦刀で、ジェイルに依頼して追加した形態）

カートリッジシステムは、持ち手の方に手動で3発入るように出来ている。

見た目は機械化しただけの小太刀で、色は柄の部分は影牙が黒で、光牙が白で、刀身は銀である。

正樹がオリヴィエから貰ったデバイスで、彼の死後はこの序が持っていたが、300年後には彼の子孫であり転生者の恭也に受け継がれる。

恭也の危機により完全に覚醒。因みに、フィアッセ・クリステラのテロ未遂時に士郎とフィアッセを助けたのは半覚醒時の彼（男性人格だから）。

ガッデス

種類：魔装機

待機状態：水色の腕輪

形態：鎧（見た目は魔装機神のガッデス）

契約精霊：水の上位精霊ガッド

特殊武装：ファンネル2機（見た目と攻撃方法はガッデスのハイ・ファミリと一緒に）

300年前は4騎士の1人、ティッティのデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠っていたが、さくらの恭也を守りたいと心により覚醒。三又槍「グングニル」を常に装備している。

アイスシュベルト

種類：アームド

待機状態：青い指輪

形態：両刃の長剣（V2ガンダムのアサルトシールドに両刃の長剣をつけたようなもの）、弓（盾の部分はそのまま、剣身部分が分かれて

弓となる）

特殊装備：3つのシールドビット（3つのシールドビットは攻撃は出来ないものの守る対象の周囲に展開することで大出力魔力バリアを展開しその中にいる人間を守ることが可能。）

300年前までは4騎士の一人、ティツティのデバイスだったが主が死んだ後、オリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家及び高町家の秘宝として眠っていたがさくらの呼びかけに応じ、再び戦場を駆け抜けることになる。

色はどの形態も盾部分は青と金が基本で刃や弓の部分は銀色

グランヴェール

種類：魔装機

待機状態：赤い腕輪

形態：鎧（魔装機神のグランヴェールと同じ）

特殊武装：ファンネル1機（見た目と攻撃方法はグランヴェールのハイ・ファミリアと一緒に）

300年前は4騎士の1人、少しの間だけではあるがヤンロンのデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠っていたが、アリサやずかが拉致されて、強姦されそうになった時にアリサの願いに答え、覚醒。

炎竜人の爪

種類：アームド

待機状態：赤い指輪

形態：三本の爪が付いた盾（見た目はデジモンシリーズのウォーグレイモンXとノーマルWGのドラモンキラーが合体したような形）

形通りに格闘戦が得意なデバイスではあるが、専用の遠距離魔法や技が存在する。

300年前は4騎士の1人、少しの間だけではあるがヤンロンのデバイスだったが、主が死んだ後にオリヴィエが他のデバイス達と共に地球に来た為に不破家や高町家の秘宝として眠っていたが、アリスが高町家を訪れて、これの待機状態時に触り、前世の記憶を思い出したアリスの呼びかけに答え、目覚めた。

ディアクス

種類：魔装機

待機状態：黒い腕輪

形態：鎧（見た目はイスマイル）

特殊能力：高速再生

契約精霊：闇の上位精霊タナス（由来はタナトスから）

名前と契約精霊と製作理由がオリジナルのデバイス

この作品でのイスマイルの名前で名前の由来は闇

イスマイルの名前はラ・ギアスにおいては復讐の女神の名前なので忍にふさわしくないと思いネーミングセンスの無い作者が改名した元々は17番目のオリジナル魔装機（正魔装機ともいう）デバイスとして作られるはずだったが、途中で魔装機神や超魔装機を超える為の実験機として作られた。ザムジードとグランヴェールを参考にしているが、火力、防御力、再生能力が以上に高い。

この作品での精霊は姿無き管制人格兼融合機の役目をしている。

デバイス設定1（後書き）

次にデバイス設定2です。主になのはや3騎士以外のデバイスの説明となのはユニゾンデバイスや管制人格の設定です

デバイス設定2

なのはのユニゾンデバイスや反管理局側のデバイスとグランゾン

インデックス

種類：管制人格

容姿と服装：とある魔術の禁書目録のインデックス

魔力：測定不能

法の魔導書（又は法の書）の管制人格であるが、法の書の真の名称や機能については製作者によってブラックボックス化していて、管制人格であるインデックスですら分かっていない。性格はほぼ原作通りで、子供っぽい。しかし、原作のように異常な食欲は無く、食欲は普通の子供並みである。愛称はアイデ。なのはとオリヴィエにだけに適正があるので、他の騎士や魔導師等には使えない。

レミア・スカーレット

種類：融合機
ユニゾン

容姿と服装：東方プロジェクトのレミアと同じ

魔力：SSS+

特殊能力：原作やオリジナルと同様

研究者が能力者の研究の為に試作した融合機姉妹の姉で、基になった存在は、今現在幻想境にいる。

妹のフランドールと共に自身と妹を造った研究員達から実験体にされていた時にオリヴィエに助けられたという過去を持つ。性格はレミアから貴族の誇り云々を外した様な感じ。なのはとオリヴィエにだけに適正があるので、他の騎士や魔導師等には使えない。

本物や本物を知る人物が現れたら、レミア・スカーレンと名乗る事を決めている。

フランドール・スカーレット

種類：融合機
ユニオン

容姿と服装：東方プロジェクトのフランドールと同じ

魔力：EX

特殊能力：原作やオリジナルと同様

研究者が能力者の研究の為に試作した融合機姉妹の妹で、基になった存在は、今現在幻想境にいる。

姉のレミリアと共に、自身と姉を造った研究員達から実験体にされていた時にオリヴィエに助けられたという過去を持つ。その為、人体実験という言葉が出るだけで怒り出す。なのはとオリヴィエにだけに適正があるので、他の騎士や魔導師等には使えない。性格は子供っぽく、同じ性格のインデックスことアイデと気が合う。本物や本物を知る人物が現れたら、ルーラ・スカーレンを名乗る事を決めている。

ゼストの槍

種類：アームド

待機状態：紫の腕輪

形態：槍（原作同様）

ジェイルの手により、フルドライブの反動が抑えられている。

リボルバーナックル

種類：アームド

待機状態：青い宝石の首飾り

形態：簞手（原作のスバルとギンガが使っていた物）

原作では、元の持ち主であるクイントの形見として娘のスバルとギンガが使っていたのだが、本作では死んでいない為、彼女が使っている。

ロードキャリバー

種類：アームド

待機状態：紫色をしたクリスタル型の宝石のついた首飾り

形態：ローラーブーツ（キャリバーズの色違いで、灰色）

オリジナルのデバイスで、原作のキャリバーズより性能が低い。

アスクレピオス

種類：ブースト

待機状態：紫色をした宝石の首飾り

形態：グローブ（原作同様）

原作では、メガーヌの娘であるルーテシアが使っていたが、本作ではメガーヌが怪我すら負っていないので、メガーヌが使用。

ミラージュガン

種類：ストレージ

待機状態：銃の形をしたアクセサリ

形態：銃（原作でティアナの引き出しにあった物）、短剣（原作のクロスミラージュのダガーモードに似たような形態）

銃の形をしているが、射撃だけでなく砲撃も可能。

原作では、ティードが死んだ事により、ティアナが形見として銃形態で引き出しの中に入っている。

グランゾン

種類：アーマード・モジュール

待機状態：????

形態：鎧（魔装機神に登場するグランゾン）

特殊機能：重力装置、グラヴィティ・テリトリー（重力バリアーで、普通のフィールド系魔法と違って魔力を使わない）、自己修復、ワームホール発生装置

アーマード・モジュールと呼ばれる他系統のデバイスではあるがラ・ギアス系の技術やオリハルコンが使われている。アーマード・モジュールはベルカ、ミッド、アルハザード、ラ・ギアスとは違う次元世界の技術で造られたデバイスで、このグランゾンは、その世界のエリック・ワン博士と愁の前世であるクリストフが共同で開発したデバイスである。その力は、使用者の力量や魔力次第で一日でラ・ギアス等の戦力を殲滅させる事も可能とされる。ただ、それ以外は謎の多いデバイスである。

因みに、吸収した邪神の力と他の術式や技術と合わせる事でネオ・グランゾンというグランゾンを遥かに超えるデバイスとなる。

魔装機神やそれ以上の魔装機にはオリハルコンが使われている。魔装機やアーマード・モジュールといった鎧型デバイスには兜も存在する。しかし、恭也達や愁の様に一般兵や下級仕官以外魔装士達のは

何故か着けなかったとされている。

デバイス設定2（後書き）

次はいよいよ無印編突入です。
とはいってもいきなり原作ブレイクですが。

無印編1話「神への覚醒と青い宝石」前編」

生まれた双子の姉の七瀬と当麻は生まれて9ヶ月ぐらいで前世の記憶を持っていたことが判明した。だが、高町家では近い前例があるのでそこまで驚きはしなかった。しかし、恭也にスカーレット姉妹、ざから、雪、咲夜は驚いたていた。なぜなら、七瀬の前世である春原七瀬とは、彼女が地縛霊時代からの知り合いだからだ。転生した理由を聞いてみると、風芽丘学園の旧校舎が取り壊される前にさくらの説得によって成仏したらしい。その後、どういう訳か記憶を持ったまま転生したと言う。そのことは直ぐにさくら、忍、真一郎達、さざなみ寮にも知れ渡る事になり、彼女を知っている人はさざなみ寮を含めて全員七瀬に会いに行った。因みに、真雪がその時に宴会だと騒いだという。次に当麻だが、そちらはなのはや恭也といった300年前の前世の記憶を持つ者や、咲夜、スカーレット姉妹が驚いた。それもその筈、なのはにとっては幼馴染であり、恭也や咲夜達から見れば、前世の主の幼馴染にして同盟国の王だったからだ。そう、彼の前世の名は、クラウス・G・S・イングヴァルト。なのはの前世であるオリヴィエのライバル兼幼馴染にして、シュトゥラ王国の王である。当麻はオリヴィエが先の戦争で生き残ったベルカの民を移住させた後の話した。その中で、ゆりかごの話題もあったが、なのはは今別の人達が住処として使っている事をに話した。その時はいい顔をしなかったが、悪い事には使わない人たちだと言つて納得させた。他にも、ベルカが滅んだ後は別の世界同士の戦争でベルカの地が完全に消滅した事もの口から出てきた。そして、なのははに管理局と言う組織の事やその組織の闇について話した。それを聞いて、当麻は人間ってどうして同じことを繰り返すのかなと呆れながら言った。しかし、彼の幼馴染の生まれ変わりのなのはには直ぐに裏での感情が分かった。それは、管理局への怒りであった。それもその筈、このまま管理局が間違つた道を歩めば、いつかはか

つてのベルカや周囲の世界の様に争いだけの世界になってしまっただ。事実、一部の管理世界は質量兵器云々、魔法云々を理由に力づくで管理局に征服されたのだ。その後、当麻にかなりの量の魔力があることが分かった。しかし、当麻には言っていない。だが、魔力については前世の記憶もあるので本人は直ぐに気が付くだろう。それから数カ月後、なのは達は9歳となり、双子は1歳となっていた。そして、そんな年の4月のある日、なのははジェイルのアジトに来ていたのであった。

場所：ジェイルのアジト

視点：なのは

私は今、自分に貸し与えられた手術台に横になっている赤い鎧、白い鎧、黒い鎧を持つ騎士の形をした魔導人形の前に立っていた。そして、今さっき完成した3体を前に

「よし、完成したよ！！私作の魔導人形第1号と2号と3号、【TNX-1デューク】と【TNX-2オメガ】と【TNX-3アルファ】！！」

と1人で喜んでいると、少し遠くから気配がした。その気配は段々とこの実験室兼手術室に近づいて来る。気配からして私の仲間の1人であるジェイル博士だからだ。彼は私が入る研究室に入ると直ぐに「どうかね？なのはくん。」

と聞いてきた。どうやらこちらの製作状況を見に来たようだ。それに対し、私は

「今、完成したところですよ。ジェイル博士。」

と答える。ジェイル博士はこちらに近づき横になっている3体の出来を確認する。確認が終わると

「ほう、素晴らしいね。流石なのはくん。でも何で鎧姿なんだい？」

と出来を褒めてくれる。そして、気になったであろう彼らの外見を見て聞いてきた。

「それはですね。やはり、外見が人だけと言うのも寂しいので騎士型にしてみました。とは言っても最終的に人間形態にもなれる様する予定で、他にも天使型とか人外系等も造る予定です。生き物もそうですけど、色々の種族が居たほうが良いですからね。」

と私は答える。すると、それに感化されたのか

「確かにそうだね。では私も何かそういう形をした魔導人形を製作するでしょう。というわけで私は失礼するよ。」

と言うと、ジェイル博士は私の研究室を出て行った。私はジェイル博士が出た直ぐ後に3機を起動させた。3機は起きて、私の前に跪き

「「「おはようございます。なのは様。」「」」

と口を揃えて言った。それに対し

「うん、おはよう。調子はどう？」

と言う。すると3機同時に

「「「はい、問題ありません。」「」」

と答える。そう。じゃあ、さっきから気になった事を直してもらおうかな。

「そう。じゃあ、君達にお願いがあるんだけど。」

その言葉に3機は

「「「何なりと。」「」」

と言うが、この態度や言葉遣いを、私は直してもらいたいのだ。なので

「敬語や様付け禁止ね。私の事はなのはでいいよ。」

と言う。3機は反論しようと口に出そうとした瞬間、私が発した有無を言わさないオーラによって渋々納得した3機は

「「「・・・分かった。」「」」デューク、オメガ

「「「・・・了解した。」「」」リアルファ

と答えるのだった。

「うん、それでいいよ。それよりも、私以外の人間のデータも入ってるよね？」

「ああ、それなら問題ない。ちゃんと入ってる。」

その質問にデュークが最初に答える。それに続き

「私もだ。」

とオメガとアルファが同時に答える。それを聞いて、私は満足し、更には特に問題はないと判断して3体に立つ様に言ってから付いて来る様に言い、研究室を出る。その後、3体をジェイル博士のアジトに居る仲間達に紹介した。

その数十分後、私は3体をアジトに預けて地球に帰っていった。

私は地球に着いてから、特に用事や約束も無かったので、直ぐに家に帰った。

それから数時間後、もう直ぐ就寝時間だと言う時間帯に張つてある結界に何者かが転送魔法で侵入してくる反応があつた。しかも、誰かと戦闘している様子だ。しかし、その戦っている反応は人ではなく魔力の塊みたいな相手みたいだ。それにこの魔力反応からして、ロストログアだろう。私は、何か危険な事が起こる可能性もあると判断し、兄さん達に念話してから窓から外に出るのだった。

視点終了

場所：森

視点：？？？

「くっ、魔力が足りなくて封印できない。このままじゃ。」

と僕は呟く、しかし此処には僕と化け物しか居ない。しかも、化け物には知性が無く、無秩序に攻撃してくる物だ。そしてそれは、僕に向かって飛び掛つてきた。僕は、構えていた自分のデバイスをそれにぶつけて跳ね返すことに成功するが、またそれは襲い掛かってきた。しかし、今の僕のデバイスにそんな耐久力は無い。さっきので大分、罅が入っていたのだ。つまり、このままデバイスをぶつければ間違いなく壊れて化け物を封印できなくなるし、シールドを張

ろうにも封印する魔力がなくなってしまう。それに避けようにも僕にはそんな体力は残っていないつまりはジリ貧で、僕は目を瞑った。だけど、化け物の攻撃は僕に通る事は無かった。なぜなら、僕と同年ぐらいの金髪の少女が右手を突き出して、三角形をした虹色のバリアを張って僕を守ってくれたのだ。その魔力光を見て、僕は聖王？と疑問に持った。そして、その少女は僕の方を向いて

「その様子だと大丈夫みたいね。」

と僕の怪我の具合を見てからそう言った。そして、僕は彼女の瞳を見て、やっぱり聖王だと確信した。しかし、それを聞いたり、驚いたりする時間は無いし、助けてもらったお礼も言っていないので

「はい、ありがとうございます。」

と僕は言うが

「お礼なんてこれが終わってからにして！！」

と言うと、御尤もだと思っっている内に少女は化け物の方を向くと、魔力を左手に集めてから殴り、その後、人差し指に魔力を集中させて砲撃魔法を撃った。すると、その砲撃を食らった化け物は元の姿であるデュエルシードに戻っていった。どうやら、封印機能付きの砲撃だったらしい。その後、直ぐに彼女は直ぐに槍型のデバイスを起動させて、デュエルシードに近づくとデバイスに触れさせて槍型のデバイスコアに収納した。そして、僕の方を振り向くと

「さて、これで終わりだね。出来れば詳しく事情を聞きたいんだけど、いいかな？」

と言ってきた。それに対し僕は頷き、そして

「はい。僕も聞きたいことがありますし、それとお礼をしたいのですが……。」

と言いながら、ポケットの中を探していると、そのポケットから、2つの待機状態のデバイスコアを落ちてしまった。1つは正体不明のデバイス、もう1つは聖王家の遺産であった。その二つは少女の足元まで転がった。それを拾おうと少女がコアに触れた時、強烈な光が彼女と2つのデバイスを包み込んでしまった。僕はそれを呆然

と見つめる事しか出来なかった。
視点終了

おまけ

人物紹介

高町七瀬

年齢：1

霊力：A A

高町家の3女。魔力を持たないが、結構な量の霊力を持っているので、霊が見える。春原七瀬の生まれ変わりで、生前や霊だったころの記憶を待ったまま生まれた。戦いには参加しない。

高町当麻

年齢：1

魔力：S（1歳児で、此処までのレベルはかなり異常）

デバイス：なし

高町家の2男。双子の姉とは逆で、魔力はあるが霊力が少ない。その為、霊が見えない。

ベルカの王の1人、クラウド・G・S・イングヴァルトの生まれ変わりで、双子の姉同様に記憶を持ったままの状態で生まれた。

魔導人形設定

デューク

正式名称：【TNX-1デューク】

容姿：デジモンシリーズのデュークモン・クリムゾンモード（背丈も同じ）

魔力：EX+

武装：原作同様

特殊能力：なし

作者の趣味によって誕生した魔導人形で、名前はデュークだけであるがクリムゾンモード（勿論、作者の趣味）の姿をとっている。機能としては、試作型のレリック用の魔力増幅装置とツインレリックシステムを組み込んでいる。尚、この2つのシステムは、オメガとアルファにも搭載している。

オメガ

正式名称：【TNX-2オメガ】

容姿：デジモンシリーズのオメガモンX（違う部分としては、両腕が違い、人の腕に近い形になっているのと、背丈がデュークと同じこと）

魔力：EX+

武装：オメガブレード（元々はインベリアルドラモンのパラディンモードの武器）

特殊能力：なし（原作だと、オメガインフォースと言う能力を持っているが、形を真似ただけなので、能力はない。）

作者の趣味によって誕生した魔導人形で、名前はオメガだが、オメガモンX（作者の趣味）の姿を取っている。デュークやアルファ同様に試作型のレリック用の魔力増幅装置とツインレリックシステムを組み込んでいる。

アルファ

正式名称：【TNX-3アルファ】

容姿：デジモンシリーズのアルファモン（背丈はOVAのアルファ

モンと同じ)

魔力：E X +

武装：王竜剣

特殊能力：なし（原作だと、アルファインフォースと言う能力を持っているが、形や武器を真似ただけなので能力は存在しない。）

作者の趣味によって誕生した魔導人形。

デュークやオメガ同様に試作型のレリック用の魔力増幅装置とツインレリックシステムを組み込んでいる。

T N X

高町なのはが造った試作型と言う意味。

レリック用の魔力増幅装置

レリックの魔力を虹の欠片並みに上げて、尚且つ虹の欠片並の安定性を持たせる装置である。

ツインレリックシステム

レリックの魔力を二乗化するシステム。元ネタはガンダム00のツインドライブシステムである。

霊力上位者（5位まで）

1位・・・高町なのはでS S S +（七瀬と那美の分でパワーアップした。）

2位・・・楨原 耕介でS +

3位・・・神咲薫でA A A

4位・・・高町七瀬でA A +

5位・・神咲那美でA A -

無印編1話「神への覚醒と青い宝石」前編」（後書き）

デジモンの形をした自動人形、前からやりたかったのでやってみました。とは言っても、活躍するのは裏方ですが……。ユーノにデバイスを持たせてみました。更に、多少は状況が分かる人にしてみました。

次はとうとうなのはが完全に人間を卒業して、法の書やアルテマウエポンの秘密が明らかになります。そして、原作では淫獣のユーノがこうなった経緯を話します。因みに、ジュエルシードは魔力が抜かれ、その魔力は後で役に立ちます。

無印編2話「神への覚醒と青い宝石」後編」

場所：森

視点：なのは

私は、家を飛び出してから魔力反応がある所に向かった。そこには結果以内に侵入したと思われる少年と、ロストロギアの暴走体と思われる黒い何かが戦っていた。少年は既に傷だらけで、魔力も少なくなっていて、彼のデバイスにも罅が入っていた。そこへ暴走体が彼に向かって体当たりしてきた。それでも彼は、動かない。いや、動けななかった。恐らく、シールドを張っても封印に使う魔力がなくなることを恐れて、デバイスでガードしようにも、あの状態では無理だと判断したのだろう。だから動けないでいたのだ。それに、避ける体力も残っていないようだ。なので助ける事にした。私は直ぐに時間停止して彼の前に出る。そして、直ぐに時間停止を解いてシールドを張る。そして、顔だけを彼の方を向いて

「その様子だと大丈夫みたいね。」

と一応、彼の体の様子を見ながら言う。それに対し、彼は

「はい、ありがとうございます。」

とありきたりな場面で、ありきたりな言葉を使う。そんな彼に

「お礼なんてこれが終わってからにして!!」

とありきたりな台詞で返す。その後、顔を直ぐに暴走体の方に戻して、魔力を空いている左手に集めてから殴り、人差し指に魔力を集中させて封印機能付きの砲撃魔法を撃った。そして、暴走体は元の青い宝石に戻っていった。その宝石を見て、私はジュエルシールドだと気づいた。ジュエルシールド・それは、かつて存在した魔導兵器の動力源だった物で、ある程度の願いなら叶えられることと、その高密度の魔力により次元干渉が可能という副作用がある。ある意味で動力源だけでも危険な代物である。それが何故こんなところに、

と思いつつも、私は、エルを起動させて、封印したジュエルシードを収納する。そして、気になったことを聞くために

「さて、これで終わりだね。出来れば詳しく事情を聞きたいんだけど・・・いいかな？」

と言う。それに同意したのか、彼は、頷いて

「はい。僕も聴きたいことがありますし、それとお礼をしたいのですが・・・。」

と言いながら、ポケットの中を探している。すると、その彼のポケットから、2つの待機状態のデバイスを落した。1つは正体不明のデバイス、ただ、法の書やアルテマウェポンに似た波動を感じ取れた。もう1つは、聖王家の遺産であった。それを見た時は驚いたが、そんな様子は顔には出さずにいた。そして、落ちた2つの待機状態のデバイスは、何故か私の方に転がってきた。それを不審に思いつつも、それを拾うために、その二つに触れた。その瞬間、二つのデバイスから光が出て、私を包み込み、私は目を瞑った。その光は、私に色々な知識や能力を与え、更には、私の体に異常な痛みを感じ取った。その前に、身に覚えの無い痛みがリンカーコアのあたりにあったがそれは気にしない事にした。与えられた知識によると、神の体にされてしまったようだ。そして、目を開けたら、何故か異空間にいた。その空間には、目の前にある祭壇がなく、それ以外は真っ白い空間であった

場所：異空間

何故か異空間に来ていた私だったが、以外に冷静で居られた。なぜなら、この空間を創り、私をこの空間に連れてきた存在を、与えられた知識や情報で、知っているからだ。なので私は

「どうして私は、貴方が創ったこの空間に居るの？創造神ギゾース・グラギオス!!」

と叫ぶ。すると

「分かっている。それと、始めましてだな。高町なのはよ。」

と前から声が聞こえる、すると私の前にある祭壇から丸い光体が現れた後、私の目の高さの所まで浮かんだ。この丸い光こそが、創造神ギゾース「グラギオス（以後グラギオス）」の精神体だ。そして「ええ、始めまして。創造神グラギオス。それで、理由は？」

と挨拶はそこそこに、此処に連れてきた理由を促す。すると

「それでは話そう。何故そなたがここに居るのかを……。」

と言った後、続けて

「それは、謝罪の為だ。」

と言った。私は、何の謝罪が分からず

「謝罪？」

と聞いてしまった。それに対し、グラギオスは

「そうだ。そなたを勝手に神にしまった事に対してだ。」

と教えてくれた。だけど、もうなったものは仕方ない。なので

「うーん、もうなったものは仕方ないよ。」

と言う。しかし、グラギオスはまだ気にしているのか

「そうか。そう言ってくれるとありがたい。しかし、それでは我も気がすまないのだな。そなたには、新しい能力を与え、更には、デバイスを強化しよう。これで、手を打つては貰えぬだろうか。」

と言う。新しい能力にデバイスの強化か、まあ貰えるんなら貰ったことかな？ と思い

「別に、いいんだけど。まあ、貰える物は貰うよ。」

と言う。グラギオスは

「そうか。今回の事、そして、そなたに神の使命を押し付けてしまった事、本当にすまなかった。」

と言う。そして次の瞬間、グラギオスの精神体から小さな光の球体が出た。それは、私の方に向かっていき、私の中に入ってきた。恐らく、新しい能力がこの中に入っているのだろうと推測し、私は、その光の中にあるであろう能力の解析を始めた。因みに、その解析能力は、この空間に来る直前に貰った物だ。その解析能力は、能力

やロストロギアの名称、使い方が分かると言う能力だ。その結果、さっきの光の中に入っていたのは、やはり能力で、その能力は【幻想殺^{イマ}シムブレイカー】という超能力や魔法、それに、霊力技や妖気を使った技といった異能の力を無効化する物であった。尚、この能力は、自分の意思で制御可能となっている。その後、グラギオスが

「そなたの全てのデバイスを我が祭壇の上に。既に出しているそのデバイスは、待機状態に戻してくれ。」

と言う。私は言う通りに、エルを待機状態に戻して、残りのデバイスを待機状態のまま、ポケットから取り出した。そして、それをグラギオスの祭壇の上に置いた。すると、私のデバイス全てが、光りだした。光は直ぐに収まったが、見た目的には、全く変わってはいなかった。

しかし、この創造神のことだから、内部に改良や材質の強化とかだろうと思いつつ

「終わったみたいだけど、見た目的には変わってないよね？つてことは、材質を強化したの？」

と聞く。すると

「ああ、そなたの魔力に耐えられるように、我が改良型のゾル・オリハルコニウム合金を使って強化したからな。神の書のような金属で強化が出来ない部分は、我の神力で強化した。それと、我が神の書とアルテマウェポンに封印していた機能を開放しておいたぞ。その機能については、後で調べてくれ。」

と返ってきた。それに対し、私は

「そつか。それで、どの位まで耐えられるの？」

と聞いた。グラギオスはそれに対し

「神力については、そこそこの力を使ったので、魔力値10億までなら耐えられるぞ。改良したゾル・オリハルコニウム合金も同じくらいだ。もし、それ以上の魔力を手に入れた時は、そなたの魔力自体にリミッターを掛けるか、そなたの神力と我の神力を合わせるかをすれば何とかなるぞ。本当は、そなたのリンカーコアにも、色々

施したかったのだが、そちらの方は、能力を与えたと同時に聖王の心臓を強化したので大丈夫であろう。」

と答えてくれた。ってことは、まだ大丈夫だね。なぜなら、私の魔力値は3億位だからだ。つと言うより、いつの間にあれが私の中に？もしかして、光に包まれた時に、リンカーコアが痛んだ時？と思い、グラギオスに聞いてみる事にする。私は思い切って

「ねえ、グラギオス。聞きたいことがあるんだけど。いつの間にある私が私の中に入ってたの？」

と聞く。すると予想通りの答えが返ってきた。

「あれ？・・・ああ、聖王の心臓の事か。それなら、そなたも予想していると思うが、神になる前に少しだけではあるがリンカーコアの部分が痛んだであろう？その時についたものだ。因みに、聖王心臓の能力はそなた自身で、確認すると良い。」と答えてきた。私は、やっぱりと思いつつも、リンカーコアについている聖王の心臓を調べた。すると、とんでもない結果が返ってきたのだった。結果は以下の通りである。

解析開始

聖王の心臓

第12代聖王クラウド・ゼーゲブレヒトの依頼で造られ、彼によって使用したデバイスではあるが、彼が戦死してしまった為、共に棺おけの中に眠る事になる。しかし、260年後（戦史224年あたりの事で、冥王イクスベリアが生まれた時期）に盗掘に遭い、盗まれてしまった。その後は、聖王家の人間にしか使えなかったので売られる事になる。その後、世界を転々とし、最終的には、今までグラギオスの眠っていた世界【サルデーニス】の都市遺跡で、1週間前に、スクライア一族の少年に発見される事になった。因みに、サルデーニス自体はいまだに存在しており、第29管理世界として管理局に管理されている。機能としては、主の体に入り込み、リンカーコアを包み込む。そして、主の魔力を取り込み、リンカーコアに異常や亀裂が生じた時に修復する。更には肉体の強化なども

してくれる。先程、グラギオスによってその部分が強化された。

解析終了

と言う風だった。

解析が終了した後は、他にも会話などをした。その10分後、「少年にも聞きたいことが事だし帰りたい」と言いを承を貰った。そして、自分の神力で元の場所に帰ろうとしたその時、グラギオスに

「いつでも来て良い。」

と言われたので、私は

「分かった。またね、グラギオス。」

と返して、元いた夜空の森へと帰っていった。

場所：森

自力で異空間から戻った私は、呆然としている少年の記憶を読み、彼が異世界の発掘などを生業としているスクライア一族ということと、どうしてこの世界に彼とジェルシードが辿り着いたかが分かった。その理由とは、21個のジェルシードを発掘したのは彼で、そのジェルシードを管理局に運ぶ最中に、何者かの襲撃を受けたという。そして、何故か21個全てのジェルシードが、この海鳴の町に落ちてしまったらしい。それを責任を感じた彼、ユーノ・スクライアは21個のジェルシードを回収する為に、この世界に来たらしい。その余りの突っ込み所に、私は疑問を持った。もしかしたらこれは、作為的に起こされた事だとしたら？とか、管理局の誰かがジェルシードを欲しがっている連中にリークしたとか等、色々と考え出してしまった。しかし、私はその間にユーノ・スクライアを正気に戻した。その時に、名前を呼んだので、その事を正気になったユーノに、何で自分の名前をしているのかと聞かれた。それに対し、私は正直に話した。私には人の記憶を読む能力があつて、この世界に、どうしてジェルシードや彼が来た理由も分かった事も話した。その後、彼の名前だけ知るのも変だと思い、私の事も自己紹介した。そして、お礼として二つのデバイスを貰う事にし、後の

話は明日聞く事になり、私はユーノを連れて家に向かうのであった。
視点終了

こうして、なのははユーノを連れて家に帰っていった。勿論、帰る前に、ユーノに回復魔法を施して傷を治していた。なのはが家の門の前に着き、門を通る。その門の先で待っていたのは、咲夜だった。咲夜は、ユーノのことには、特に何も言わずに家に入るように促した。なぜなら、なのはが咲夜達に念話で前もって連絡したからだ。なのはとユーノは、家に入ると、今に集まっていた家族に事情を説明した。更には、ユーノを泊める事を頼んだ。その時に、士郎と恭也は渋ったが、桃子の圧力により黙りこくってしまった。こうして、高町家の住人が一時的ではあるが、1人増えたのだった。
一方、その頃

場所：幻想郷

ここは幻想郷の奥地。その奥地で、幻想郷の主神である龍が「ん、これは・・・間違いない。我らの創造神様がお目覚めになられた。これは、直ちに皆に知らせなくては。」と呟く、その後、直ぐに幻想郷全域に知らせる為に飛ぶのだった。こうして、龍等を創った創造神ギゾースⅡグラギオスが目覚めた事は、直ぐに、幻想郷全域に知れ渡るのであった。そして、その後、恭也達といった精霊達と契約した者達は、なのは+グラギオスと共に幻想郷に招かれることになるのであった。因みに、紫も龍と同時に知りました。

おまけ

解説

なのはが言っていた「あれ」とは、聖王の心臓の事

神の使命

1つ以上の世界や次元を救ったり、守る事。

創造神ギゾース・グラギオスの頼み、もしくは命令を聞く事等がある。

3種の神器

神の書（法の書の真の名称で、真の力を解放した姿である）、アルテマウエポン、グラギオスの3つの事を指す。尚、3つ揃えて、一定の魔力（1億以上）があり、更にはグラギオスに認められると、その者は、人間を卒業して、神となる。

ゾル・オリハルコニウム合金

結晶型の金属で、好きに形を変更できる。ただし、アルテマウエポンには、武器だけにしか変更できない特別製で、その分強度が丈夫。更には、魔力や物理に対しての防御力が高い。

改良型のゾル・オリハルコニウム合金

スパロボで登場した、液体金属やマシセルの機能も追加した物で、破壊されたとしても、それ以上の強度になって元に戻る。更には、魔力や物理に対しての防御力がかなり強化されている。

人物紹介

ユーノ・スクライア

容姿：原作同様

魔導師ランク：原作同様

デバイス：管理局が使用する物と同規格の物（要は、武装局員が持っている物）

自分のデバイスと、2つのデバイスを持っている以外は、殆ど原作どおりの人物。

高町なのはの追加設定

魔力値：測定不能（あくまで、管理局の測定器で調べた場合）で3億
神力：測定不能

デバイス追加：グラギオス、聖王の心臓

能力の追加：イマジンブレイカー＋（魔法や超能力と言った異能力を打ち消す事が出来る。ただ、原作と違い、不幸体質や自分の能力も使えないといったデメリットは存在しない。それに、自由に発動できるのと、バリアやシールドにこの効果を付ける事や、全身でも発動可能。）、未来予知、解析能力（ロストロギアでも、感じたり、見たるだけで、使用方法や効果などが分かる。また、破損していた場合では、修復方法や破損状況がわかる）等 e t c

デバイス設定

法の書について追加。

真の名称：神の書

能力や機能の追加：防衛プログラム、守護騎士プログラム（神の騎士と呼ばれる存在ではあるが、今だ未登録。）、ページがかなり増えた（これにより、多くの能力を得られるようになった。）また、グラギオスの神力により強化された。魔力値が10億までなら耐えられる。

最強のチートデバイスの1つ。

防衛プログラム

容姿：インデックスの目を赤くした感じで、後は、インデックスと同じ容姿と服装

魔力値：EX+

インデックスとは対照的に、大人しい性格で、小食である。

夜天の書に防衛プログラムがあるのは、この魔導書を元にしたためでもある。

アルテマウェポン、レイジングハート・エルトニウム、ライトブリンガー

追加：材質は改良型のゾル・オリハルコニウム（上記の改良型ゾル・オリハルコニウム参照）

改良型のゾル・オリハルコニウムのおかげで、刃がある武器の場合は切れ味もあがった。

魔力値が、10億までなら耐えられる。

アルテマウェポンは3種の神器の一つでもある。

グラギオス

種類：不明

待機状態：虹色の指輪

形態：鎧（色は、白、青、金）

特殊能力・機能・武装：ファンネル×8、広域魔法無効、精神攻撃無効（幻影なども無効）、重力フィールド、特殊AMF（登録した特定の人物にはAMFは効かない、特定の人物は何も影響なしで魔法が使用できる）、デバイスの強化・改良・創作、自らを契約者の適性に応じた色や形の変化を強化することが出来る（契約者の意見も取り入れられる）、使用者の魔力光により待機状態の色が変わる、平行世界移動、特殊幻影機能（使用者や登録している人物の姿を隠

したり、リーダーなどに感知出来ない。両方を一度にすることもできる）

神：創造神ギゾース・グラギオス

創造神ギゾース・グラギオスの魂を宿した肉体代わりのデバイスで、その力は正に、究極デバイスの名が相応しい。3種の神器の一つで、主を神にする鍵とされる。

最強のチートデバイスの1つでもある。

聖王の心臓

種類：寄生型（あくまで性質だけで生きてはいない）

待機状態：虹色の丸い宝石

形態：球体

体の中に入り込み、リンカーコアを包む、そして、魔力を一定分貰う代わりにリンカーコアの修復や強化を行う。12代目の聖王が使用した代物で、経緯や詳しい設定に関しては、この上の解析のデータを参照。

創造神ギゾース・グラギオス

神力・魔力：測定不能

ラ・ギアスの神の1体だった存在で、幻想郷の主神である龍や、八雲紫といった1000年以上生きている妖怪等といった者達を作り出した存在で、ヴォルクルスを封印した存在でもある。尚、彼の本当の肉体は、その時の戦闘で、修復が追いつかないほどの重症だったので、自らの肉体として、鎧型デバイス【グラギオス】を作り出した。サポートのために、神の書とアルテマウェポンを作り出し、その3つを3種の神器とし、それらを揃えた状態、もしくは1億以上の魔力を手に入れた後に3つ揃え、最後には創造神ギゾース・グラギオスの勝手に行う選定によって合格すると、自動的に神となってしまう。尚、これは3つの内の1つが覚醒しないが、3つの内の2つや3つだと覚醒してしまう。それと、神の書が、なのはに与え

た能力、見ただけでその生物の能力を自分に上乘せするは、グラギオスには効かない。選定の基準については、真の平和を願う心ということだけは分かっているが、それ以外は不明。

ユーノが使っているデバイス

簡単に言えば、管理局が使っている一般的なデバイスで、入手経由は今のところは不明。

無印編2話「神への覚醒と青い宝石」後編」（後書き）

なのはを神にしてみました。ある事を考えているので。まあ、今の段階では何もいえませんが。さて、次回は説明となのはがユーノに協力することを約束します。

それと、ジュエルシードの回収が一日早まったので、原作のA'sから登場している人を出そうと思っています。

無印編3話「協力と車椅子の少女」(前書き)

の中の言葉は念話です。

無印編3話「協力と車椅子の少女」

なのはが神になり、ユーノが高町家に居候する事が決まった次の日、なのはは何時も通りに学校行きのバスに乗り、学校へ行った。その時に、アリサやすずかにユーノやジュエルシードの事を念話で伝える。その後、ユーノに念話で話し、その時に出たある話しを持ちかけた。それは

協力？

とユーノがなのはに念話で返す。なのはは更に続ける。

うん、アリサとすずか、それに兄さんや他の騎士組みや融合機達もそれに賛成してるんだよ。

という。それに対し、ユーノは

だめだよ。君達にこれ以上迷惑は掛けられない。僕だけでやるよ。

と言う。勿論なのはは、ユーノがそう言うのも分かっていたのでじゃあ何？貴方だけがやってこの世界を滅ぼす気？はつきり言つて貴方が支援型程度でしかない君が戦っても状況が悪くなるだけだよ？

そこの所を分かって言ってるの？

と攻め立てる。それに対し、ユーノは反論する。

そんなつもりは無いよ！！ただ、あれは僕が……。

その後の言葉を予測し、なのはは

君が発掘したせいでこうなったから自分1人でって言いたい訳？・

・・・ふざけるのもいい加減にして！！

と念話で怒鳴る。

なっ！！

貴方1人でどうするつもりなの！？たとえ君が管理局の連中通報していても、来るのはかなり遅くなるはずだよ。それにね、私達はね。管理局なんてこれっぽちも信用してないの。

な、なんで管理局にことをしてるの？君達はこの管理外世界の住人なのに。それに管理局が信用できないってどういうこと？その根拠はあるの？

あるよ。証拠もね。それと、これはあくまでも私の推測なんだけど、このジュエルシードが散らばった事件。多分、管理局が関わってるよ。

な、何だって！！！！

とユーのは驚く、そして

不自然だと思わない？どうして襲撃者はその船にジュエルシードが積まれていることが分かったんだろうね？それに、なんでこの地球付近で襲撃したんだろうね？そこで気がついたの。恐らく、襲撃者にジュエルシードあることをリークしたのは管理局で、それを捕まえる事で、自分達の評判を上げようとしてるんだろうってね。もし失敗しても、危険なジュエルシードのせいで管理外世界が滅んだ程度で済ませられるから。連中がやりそうな事だよ。と自分の考えを述べた。

なっ！！！！

それに言葉を失ったユーノ。それを見たのはまあ仕方ないかと思いつつ

そついうの昔から有ったらしいし、今までの功績だって自作自演が殆どなんだから。たとえば、ロストログアを悪改して世界にばら撒いたり、違法化学者に依頼したり、その違法研究者をアルハザードの技術で造ったりね。それに最高評議会って知ってる？

となのはは管理局の悪行を話し、更には、最高評議会という存在について聞く。すると、ユーノも名前だけなら知っているようで

うん、聞いたことはあるけど、その実態は謎だらけだよ。

と答える。そして、更に

うん、そうだろうね。なぜなら奴らこそが、広域次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティを文字通りに造った張本人であり、色々悪行を重ねている連中なんだよ。それに、管理局が創設されて、

150年が経過してるらしいけど、代替わりしたって聞いたこと無いよね？

と聞く。それをユーノは

うん。

と肯定する。それに追い討ちを掛けるかのように

それもそのはずだよ。奴らは今も脳髓だけの姿になっても尚、最高評議会という管理局の最上位の地位にいるのだから。信じられないなら、証拠を全部見せようか？それから、証人にも会わせようか？

と言う。すると、観念したのか

そこまで言われると反論できないな。分かった。君達にお願いするよ。

と言った。こうして、協力するかしないかの念話での言い合いは、なのはの勝利で決まったのであった。そして、なのはは学校が終わると、忍に連絡し、ユーノを連れて、ジェイルのアジトに連れて行くように頼んだ。なのはは家に帰り、ユーノを連れて、月村邸に行き、忍達にユーノを紹介した。尚、忍は本来学校だったのだが、ジェイルの所へ行ってノエル改造を行うために休んでいた。その時に、なのはからユーノの話聞いて、なのは達が来るまで待っていたのだ。因みに、なのはは宿題の為に必要な資料をすずかやアリサ、スカーレット姉妹、それに新しく転入生として来たインデックスは探すために図書館に行っていた。

場所：?????

視点：なのは

忍さんが、ジェイルの所にユーノとノエルさんを連れて行った後、私達6人は、図書館に行っていた。私は、調べ物の事が載っていない

棚を見ていた時に

「んしょ、んしょ」

と言う声が聞こえた。その声の方を見ると、車椅子に座った、ボブカットの少女が本を取ろうとしていた。私は、その少女に可笑しな気配と言うか、変な反応があるような気にした。しかし、座っている少女には届かなかったようで、それを見かねた私は、少女の方に歩み寄ると

「どれが読みたいの？」

と言う。すると少女は

「ひゃあ!!」

と叫んでしまった。私は

「しー」

と口元に人差し指を向けて、静かにのポーズをした。その驚いた少女は

「すいません。驚いてしまつて。」

と誤る。私は気にせず彼女が探しているであろう本を聞いてみることにした。

「うん、いいよ。それよりどれが読みたいの？」

と言うと、少女は指を指して

「これや。」

と言う。私は指された本を棚から取り、少女に渡した。それに対し、車椅子の少女は

「おおきにな。そういえば、名前がまだやったね。私は八神はやています。」

とお礼と自己紹介を始めた。それに習い、私も

「私は高町なのは。聖洋小学3年生だよ。」

と自己紹介するのだった。そうすると

「同じ年やね。」

という彼女も9歳か8歳らしい。それを分かっていた私は

「そつみただね。はやては1人で読んでの？」

といい、はやてにそう聞く。すると

「そうや。」

と頷いて返す。それに、たぶんこの雰囲気から察するに、親や友達が居ないのだろうと推測する。なので

「そっか。じゃあ、友達と調べ物とか本読んでるんだけど、一緒にどう？」

と誘う。しかし迷惑だろうと思ったのか

「そんな！悪いです。そんな気を使わなくても。」

と言う。しかし、私はそんな事、気にしないでいいのじゃないながら

「ああ、違う違う。私は、君と友達になりたいから言ってるんだよ。たぶん他の皆も君に会ったら、同じ気持ちになると思うよ？」

と本心を打ち明ける。すると、はやては嬉しそうに

「そうなん？じゃあ、ご一緒させてもいます。」

と頷いて言う。そして私は

「うん、じゃあ行こうか。」

と言い、確認を取る。彼女はそれに対し

「うん。」

と頷く。それを見て、私ははやての車椅子を押しながら、皆の居る席へと戻っていった。

席に戻ると、皆にはやてを紹介した。皆も私と同じ気持ちになったのか、友達になってよというのであった。こうしてはやてと友達になった私達は、調べ物をして、はやては自分の読みたい本を読むのであった。そして、私達は調べ物を終え、はやても読み終わると出した本や資料を元の棚に返し、私達と、はやては家が違う方向だったので、別れるのであった。しかし、そこに結界が張り巡らされ、そこに2人の女性が現れた。その2人は魔力を持ち、変身魔法も使用している。尚且つ、それなりの経験を積んでいる。結界を張ったのもこの2人だと、検討づけた。結界の解析をエルに頼んだ結果、ミッド式だと言う事だった。私は、悟られないように警戒する。そして、その2人組みは

「ねえ、君達？」

と言う。私は何かいやな予感を感じたが

「何ですか？」

と答える。すると

「いえね、ちよつと忠告をね。」

と言つてきた。私は疑問に思い、頭の中を覗く能力を使いながら

「忠告、ですか？」

と言う。そして、その2人は

「そう。忠告だよ。単刀直入に言うよ。……あの子から身を引いた方が貴方達のためよ。」

「そうそう。あの事一緒に居ると、不幸になるよ。」

と言う。それに怒った私たちの心を代弁するかのように

「そんな事、あんた達には関係ないわ。あんた達いったい何者なの？」

とアリサが怒り、彼女達の正体を聞く。しかし、それを

「誰でもいいじゃない。それよりも、忠告はしたわよ。」

と言うと、結界を解除した。その瞬間、私たちは通常空間に戻り、何事も無かつたかのように去っていく2人を見つめるのだった。その後、私は、頭の中で読んだ彼女達の正体等を話した。その内容は、八神はやては、夜天の魔導書、今は改変されて闇の書となっている物の主として選ばれた。そして、さっきの2人の使い魔であり、主である管理局の提督であるギル・グレアムの命令で監視しているらしく、その目的は、闇の書を完成させた後にはやてごと闇の書を葬るつもりだと言うことを伝えた。それを伝えた皆の目には、怒りの表情をしていた。勿論、私も怒っていた。しかし、それには理由があり、部下が殺された事への復讐だと言う事も伝えた。しかし、アリサは

「復讐で、ただ選ばれた身寄りの無い子供を殺そうとするの？許せない！！」

と怒っていた。私を含めた皆もそれを同意し、何とかしようと考えるのであった。そして、家に帰ると、早速はやてと別れる前に教え

てもらったアドレスを選択して、はやての携帯に繋ぐのであった。どうして、はやてに連絡を取ったかと言うと、彼女の家に行って、闇の書、もとい夜天の書の破損率を調べるためだ。そうする事で、彼女を助けようと言う事だ。因みに、ギル・グレアムに対する対策も考えないといけないが、そちらは後回しと言う事にした。こうして、考え事をしていると、ユーノが帰ってきた。私は、ユーノに話しかけた。すると、ユーノは

「ごめん。」

と頭を下げて謝って来たのだ。それを何事かと思い、理由を聞いてみた。すると、次元航行船の襲撃の時に、管理局に通報してしまっていると言うのだ。ただそれだけなら誤る必要は無い。寧ろある意味、管理世界に住む者達の義務と言えたからだ。しかし、ユーノは、忍と一緒にジエイル博士に会った時に全てを聞いた。そして、証拠も見てしまった。なので、管理局に失望し、呼んだことを後悔したと言う。そのことで地球や私達を巻き込んでしまうかもしれないと言う意味で、謝ったらしい。私はそれに対し、気にしてないからと慰める。そして、今日の出来事を話した。ユーノも、私たちと同じように怒りを感じ

「許せない。」

と聞きづらい声で言っていた。その後、夕食でも、ユーノに話した事と同じ事を話した。恐らく、さくらさんや忍さんにも、すずか経由で伝わっているだろう。そして、夕食を終えたと、お風呂に入った。お風呂を出ると、パジャマに着替えて直ぐにベッドに潜り込むと、私は重たい目蓋を閉じるのだった。

視点終了

次の日、なのはが学校が終わると、ジュエルシードの搜索を開始していた。すると、八束神社の方からジュエルシード反応がしたので直ぐ向かった。今日のジュエルシードは、犬らしき生物を取り込んでいた。しかし、なのはの敵ではなく、バインドを掛けて最初のジ

ユエルシード同様に封印機能付きの砲撃を放つのであった。
こうしてなのは2つジュエルシードを手に入れたのだった。そして、別の所でもアリサやすずか、それに恭也に忍、さくらも手伝ったので、なのは達は、今日だけで一気に6個のジュエルシードを手にするのだった。

無印編3話「協力と車椅子の少女」（後書き）

相変わらずの駄文ですみませんorz

次は、幻想郷メンバーを出そうと思います。
更に、ギル・グレアムとある契約をします。

無印編4話「幻想郷と交渉、そして・・・黒い影」(前書き)

一話に収まりました。

無印編4話「幻想郷と交渉、そして・・・黒い影」

なのはが犬に取り付いたジュエルシードを封印してから、2日が経っていた。

場所：八束神社

視点：なのは

今日は、土曜日と言う事で学校が休みだった。そんな休みの私の日課は朝5：30に起床すると、ランニングやストレッチをしてから魔法と御神流、それに御神流を元に開発した格闘術の鍛錬をし、6：50に朝食の手伝いをして、7：20に朝食を食べる。それがいつもの朝のパターンだ。そして、そこからは平日と違い、家でくつろいだり、ゲームをしたりしていた。しかし今日は違っていた。なぜかと言うと・・・今、私とグラギオス、それにアイデは、八束神社にいる。理由は、誰かに手紙で呼び出されたからだ。そして、私の目の前には1人の女性が、多く目がある赤い空間から出てきた。その女性は

「お久しぶりでございます。創造神グラギオス様に、インデックス様。」

「ああ、久しぶりな。」

「久しぶりー。」

と再開の挨拶をする。そして

「そして、始めまして、創造神に選ばれしお方。私は八雲紫と申します。以後お見知りおきを。」

といい、私に挨拶した。そして私も、彼女の頭を読みながら

「ご親切にどうも。高町なのはです。」

と挨拶する。そして、紫さんは

「単刀直入にお願いがあるのですが・・・。」

といきなり切り出した。私は頭の中を読んでいるので

「分かりました。私とグラギオス、インデックスを幻想郷に案内するんですね？」

と言う。それを聞いた紫さんは

「どうしてそのことを！！前の方は、此処まで分からなかったのに。……ま、まさか！！」

と驚いていた。それを肯定し

「そうですよ。私は生き物と言うか意思の有る者の頭の中が読めるんです。まあ、知り合いの力をコピー強化しただけですけどね。」
と言う。すると

「そうですか。では、早速参りましょうか。隙間能力は使えますね？」

と言う。どうやら、彼女も私の能力を知っているらしい。なので

「はい。それと様付けは止めてください。」

と言う。彼女はグラギオスに聞くと

「なのは言う通りにしてやれ。」

と言うのであった。それを聴いた瞬間

「それではそうさせて貰います。では、なのはちゃん。行きましょうか。」

と言う。

「はい。」

と言い、私達は隙間を作り出し、その中に入って、幻想郷に向かうのであった。

場所：幻想郷の奥地

私たちが隙間を出ると、そこは神秘的な洞窟であった。因みに、紫とは隙間でいったん別れた。そして、目の前には、大きな龍がいた。

そして、その龍は

「遠路はるばるご苦労様でございます。そして、お久しぶりでございます。創造神グラギオス様に神の書の管制人格インデックス様。」と挨拶する。すると

「ああ。」

「久しぶり〜。」

とグラギオスとアイデが挨拶し返す。そして、それを聞いた龍は更に言葉を続ける。

「そして、そのグラギオス様に選ばれしお方。始めまして。我はこの幻想郷の神の1つ、龍です。以後お見知りおきを。」

と言う。私も

「始めまして、高町なのはです。貴方については龍様でよろしいですか？」

という。しかし龍様は

「いえ、呼び捨てで構いませぬ。なのは様。」

という。なので私は

「じゃあ私も、なのはでいいです。龍さん。」

と言う。すると

「分かりました。なのは殿。」

と言う。まあ、どっちもどっちだと思い

「それでいいです。それと目的は大体分かってます。久しぶりに会いたかったのと私の顔を見たかったのでしょうか？それに、他の幻想郷の方達にも会わせたいのでしょうか？」

と聞く。すると

「そうです。申し訳ありません。何しろ数百、数千年も前のことです。」

と謝った。しかし私は

「気にしなくていいです。それよりも、幻想郷を見て回りたいのですが、よろしいですか？」

と頼み込む、するとグラギオスとアイデが私を援護するかのよう

「そうだな。我もこの地の事を良く知らないのな。一度見ておくのも悪くなからう。」

「そうだね。」

と言った。龍も、そう言われたらそうする気だったらしく、直ぐに

「分かりました。では紫にもそう伝えといてください。」

と返事をしてくれたのだった。こうして、私達は龍と別れて、紫さんと合流した。その後は、幻想郷の各勢力に行き、挨拶などをし回った。そして、私は色んな能力を手に入れることに成功するのであった。因みに、各勢力を人達（人じゃないけど）と会に行った時に、かつて吸血鬼となった、ユニゾン姉妹のオリジナルともいえるスカーレット姉妹に会った。紫さんの記憶から性格が違っているのはしてはいたが、やはり戸惑ってしまうものがあつた。因みに、スカーレット姉妹に戦いも挑まれたが、速攻で倒した。とは言つても気絶させただけだ。それと、いったん家に戻り、ユニゾン姉妹と会わせてみた。すると、本物のレミリアの方は、レミア（これからはレミア・スカーレンと名乗る事にしたユニゾンレミア）と戦い挑んだり、本物のフランとルーラ（これからはルーラ・スカーレンと名乗る事にしたユニゾンフラン。）は結構仲良しになっていた。そんなこんなで、色々な妖怪や人外更には、人間達（霊夢にもあつて、その時に、小銭を賽銭箱に入れたらお茶をもてなされ、もしこれからも来るんなら、できれば入れて欲しいと言われた。それを聞いた私は、この人、どれだけお金に困ってるんだろうと思ひ、涙ぐんでしまった。）に会った。そして、私は、その中の上白沢慧音の能力である歴史を食べる程度の能力（人間時）と、歴史を作る程度の能力（妖怪時）に注目した。何を考えているのかと言うと、ギル・グレアムの事である。彼は、部下を失くしたせいで復讐の道に走ったならば、その部下の死を何とかすればいいと思ったのである。それを実行するために、私達は、紫さんに家に帰ると言うのと、隙間で自宅へ帰っていった。そして、私はグレアムに接触するために、2

匹の記憶の内容を思い出す。これにより、今の時間帯、ギル・グレアムが何をしているかが予想できるからだ。因みに、今の時間帯は2時半を回っている。幻想郷にいたのが午前からだから結構な時間が経っている。ついでに、昼食は向こうで済ましてきた事と家族には隙間を使つて、知らせた事も追記しておく。

その内容を思い出した。それが今日も同じなら、今は彼専用の執務室で書類仕事を行っている可能性が高いと推論づけた。後は、実行するのみである。という事で、私は再び隙間に入りつて、管理局の本局にあるグレアムの執務室へ向かうのだった。

視点終了

場所：本局・グレアムの執務室

視点：ギル・グレアム提督

私は、いつものように業務をこなしていた。しかし、頭の中にあるのは、闇の書に対する復讐心と、偶然にもその闇の書の主となつてしまった少女、八神はやての事だ。彼女は確かに悪くない。だが、私は凍結の杖【デュランダル】で闇の書ともども封印しなければならぬ。

その為に、彼女に少しでも言い思いをしてもらおうと、彼女の両親の知り合いと偽り、支援をしているのだ。偽善なのは自分でも分かっている。しかし、いまさら引けないし、あれを完全に封印するには今しかないのだ。そして、その妨げになろうとしている存在を、私の使い魔であるリーゼ姉妹から、報告を受けた。その1人に、何故か聖王家の血筋の子供がいるという。そのことに対しても対策を練らないとならない。なぜ、聖王家の血筋が私の故郷でもある地球にいるのかは分からない。しかし、かなりの脅威となるのは間違

いないと言っていたのを思い出す。そして、聖王達の対策も考えていると、噂をすれば影というべきだろうが、その聖王の血筋の子供が、私の執務室に、魔法を使わずに現れた。しかも、その現れ方は、赤くて、周りには目が無数にあるような空間から現れたのだった。そして、聖王家の少女が口を開く。

「始めまして、ギル・グレアム提督。私は、高町なのはといいます。聖王家の人間です。私いえ、私達の事は既にリーゼロッテ姉妹から聞き及んでいると思います。」

と言う。私は、その高町なのはという少女の言動に可笑しなことを見つけた。それは、私の名前をしている事とあの2匹の名前知っているということだ。あの2匹の報告では、私や自分の名前を出していないというし、私自身もそれはありえないと確信している。なので、そのことを聞こうとした時

「ああ、それはですね。リーゼ姉妹の頭の中を覗いたからなんですよ。」

となのはという少女が言ってきた。私は今の頭の思考を読まれた事や2匹の思考や、私の思考を読まれたことに驚いた。そして

「それで、聖王である貴女が何故こんな所にいるのです？」

となのはという少女に聞いた。すると驚くべき返答が帰って来た。それは

「それはですね。交渉をする為なんですよ。」

と言ってきた。私はそれに、啞然とした。そして

「こ、交渉って何をするんだい？」

と言うのが精一杯だった。いかな、相手のペースに乗せられてると思いつつも、その交渉の内容を聞いてみる事にする。まあ、彼女の事だからとんでもない内容だろう、と内心決め付けてしまっていた。そしてその決め付けは正解であることを彼女から口に出される。それは

「私の事だからとんでもない内容って酷いですね。まあ、合ってますけど。」

と言ひ、続けて内容を言う彼女、その内容は、やはりとんでもないものであつた。それは

「交渉の内容は、はやての監視や闇の書への復讐を諦める代わりに、貴方の部下であつた、クライド・ハラオウンの死を、なかつた事にしましょう。」

と、有り得ないことを言うのであつた。そして、それを聞いた私は、しばらく言葉を発することが出来なかつた。

それから数分後、私は思考を復活させてから

「ば、バカな！！そんな事、出来る筈がない。」
と言う。しかし、彼女は自信を持って言う。

「出来ます。ただし、此処では不味いので、地球での貴方の家に連れて行つてください。そこでやりますから。ああ、そんなに時間取らないですし、移動手段もこれがあるので心配ないですよ。いざとなれば時間操作もできますから。」

となのはという少女は、赤い空間を指して言う。しかも、その時いまさらにとんでもない事を口にしなかつた？と思いつつも、気にしただけと考えるのであつた。そして、彼女が赤い空間に入る。更に、私の下にも彼女が展開したのと同じ

空間が出てきて、私はその中へ落ちるのであつた。

視点終了

なのはが、グレアムを無理やり隙間空間に連れてきて、10分後。なのはとグレアムは、地球のイギリスにある、グレアム邸に着いた。そして、なのはは直ぐに、上白沢慧音の能力である、歴史を食べる程度の能力と、歴史を作る程度の能力を使い、表向きではクライドは、アルカンシエルで自身の艦と共に散つたとし、裏では、その時の影響で、5分後にグレアム邸に來ると歴史を改変した。

そして、それから5分後が経過した。

そうすると、設定通りにクライド・ハラウンが現れたのだった。
ズドン

という音と共に。

クライドがグレアム低に來た後、なのはは自己紹介をしてからグレアムと共に現状を説明した。それからなのはは更に管理局の裏の部分を、証拠を見せながら説明した。その時に、ジェイルに頼んで調べてもらった結果、闇の書もとい夜天の書も、管理局が創設時に信頼を獲る為に悪改したという事も話した。それらを話したなのはは更に

「その為には、まともな人材を必要としています。どうか私に力を貸しては貰えませんか？」

と2人に頭を下げて言うのであった。結果は2人ともOKだった。因みに、なのはは、一度グレアムを本局の執務室に戻して、自身はその事を皆に報告する為に地球へと帰るのであった。

グレアムの方も自身の使い魔に、クライドがなのはによって復活した事、なのはの計画を話した。こうして、リーゼ姉妹も、主が賛成ならとなのはの計画に乗るのであった。

しかし、なのは達は知らない。管理局を利用して、あることをしようとしている存在がいる事、そしてその存在は着実にそれを実行しつつある事を。

その夜、あるビルの頂上に1人の黒いデバイスに黒衣にマントを羽織った金髪で紅の瞳を、悲しみの色に染めた少女と狼がいた。その少女は

「搜索対象、21個のロストログア、名称【ジュエルシード】。早く見つけ出さないとね。」

と言うと、金色のデバイスコアは光り、狼は

「ワオーーーーーン!!!」

と返事をするかのように吠えるのだった。

無印編4話「幻想郷と交渉、そして・・・黒い影」（後書き）

フェイトを最後にフェイトを出しました。そして次はサッカーです。ただし、その時のジュエルシードは、既に回収しているので登場しません。そして、夜天の書の破損状況も分かります。因みに、次のジェルシードは、正に灯台もと暗しともいうべき場所に有ります。そう、原作で、なのはとフェイトが出会ったあの場所です。

無印編5話「闇の書の主と雷の親子とジュエルシード」前編」

なのはがグレアムの執務室から帰還して、1日が経過していた。この日、なのはは午前に関が監督をする少年サッカーチーム「翠屋JFC」の応援に行き、午後ははやくと図書館前で待ち合わせして、闇の書の状態を見るために、はやくの家に行く予定であった。しかし、なのはとユーノは午前でのサッカーは応援ではなくなってしまう。なぜなら、チームの2人が病気と怪我で欠席になってしまった。そこで、土郎はなのはとユーノに

「代わりにサッカーをやってくれないか？」

と頼み、2人はそれに頷き、参加する事となったのだ。

結果は、12対0という翠屋JFCの圧倒的勝利で決まるのであった。因みに、ユーノはなのはから格闘戦を習っており、基礎体力もやっているので運動能力も上がっている。ルールについては、覚えが良かったので土郎が教えたただけでは聞いた事は一度で覚えてしまった。その事を一緒に住んでいる時にその才能を見つけたからこそユーノに頼んだのだ。なのはについてはもはや語るまでも無いであろう。その後、翠屋でなのは、スカーレン姉妹（元ユニゾン姉妹）、ユーノ、アイデ、アリサ、すずかのメンバーで、昼食を食べ、その後のデザートのケーキとお茶を楽しんでいた。そして、そろそろはやくとの約束の時間が近づくと、ユーノはそのまま翠屋の手伝いに入り、アリサは家の都合で来れなくなったので家に帰った。そしてなのは、すずか、アイデ、スカーレン姉妹だけで待ち合わせ場所である図書館に行く事になった。

その数十分後、図書館に着いたなのは達ははやくと合流し、はやくが住んでいる家に、彼女の案内で向かっていった。

場所：はやくの家

視点：なのは

はやての家に着いた私達は、変わった本が無いかと聞いた。すると「あるよ。私が少し前に見つかった本なんやけどな。本の名前が無いんよ。」

と答えてから、机にある1冊の本を持ってきた。そして、はやては「これなんよ。なのはちゃん達はこれが何か分かる？」

と言う。その本を見たアイデ、そしてスカーレン姉妹は

「「これは・・・夜天の書！！！」」

と驚いた。私は知ってたから驚かなかったけど。それを聞いたはやては

「何や、知ってるんか？」

と聞いた。そこで私は

「うん、私もアイデもスカーレン姉妹も知ってるよ。そして、訂正があるんだよ。確かにこれは夜天の書だよ。だけどこの魔導書、管理局によつて悪改されて闇の書つて名前になってるよ。」

と真実を言う。すると

「「また管理局！？」」

とアイデとスカーレン姉妹はまた驚いたのであった。しかし、状況のつかめていないはやては

「どういうことや？魔導書やら管理局やら可笑しな単語が出てきてるんやけど。私にはわからへん。出来れば説明して。」

と言つて来た。まあ、そうだろうねと思っていると、さすが

「魔導書つて言うのは魔法が載っている本のことで、デバイスつて言うのは魔法の補助具だよ。管理局つて言うのは、正式名が時空管理局と言つて、簡単に言えば治安組織なんだよ。」

と説明する。

「けど、なんでその管理局が悪改する必要があるん？治安組織なんやろ？それにそんな組織、聞いた事も無いんやけど。」

と困った顔をしながら言う。まあ、そこまで聞いていたら当然の反応だろうなと思いつつも、今度は私が答える。

「聞いた事が無いのは当然だよ。異世界の組織だもん。」

その答えにはやては

「い、異世界やて!!」

と驚く。そして、更に私は続ける。

「うん、ミッドチルダって言うね。他にも有名どころがあつて、既に滅んだベルカという世界やアルハザード、それにラ・ギアスがあつただけだね。現在でも色々な世界があるよ。因みに、この夜天の書はベルカ聖王家に仕えていた小国の王の物だつただけだね。300年前は間違いなく正常に動いてたよ。」

と私が説明し、レミアも

「そうよね。300年前はまともな魔導書だったものね。」

と過去を振り返りながら言う。それに続き

「そうだね。いつ管理局の連中が悪改したかどうか分からないもんね。」

とルーラが言う。それに対しわたしは

「それなんだけど、ジェイル博士に調べてもらつて分かつただけで、100年ぐらい前らしいよ。その当時、管理局は信用が無かつたから信用や権力を得るために、ロストログアを悪改したり、犯罪者を自ら作つたりして信用を得たらしいよ。だけど、その改悪のせいで転生機能や防衛プログラムとかが壊れて無理にアクセスしようすると主を取り込んで転生したり、封印したとしても防衛プログラムが暴走し

て転生するから、管理局は手が付けられない状態なんだよ。まあ、私なら修復できるからね。」

と答え。自分なら修復できると言った。それに心当たりがあるレミアが

「ああ、そっか。なのはにはあれがあるもんね。」

と言い、私も正解だとばかりに

「そういうこと。(コクン)」

と頷いて言う。そこで今まで置いてきぼりにされていたはやては

「あの、何のことか分からないんやけど、あれって何や?どうし

てなのはちゃんやアイデちゃん、それにレミアちゃん、ルーラちゃんが何で300年前の事なのに詳しいん？それにまるで、300年前からいるような口ぶりやったけど。どういうこと何や？」

と聞いてくる。まあ、気になって当然だよなと思いつつ

「あれって言うのは、時間を操る事なんだよ。それに私はベルカ聖王家の血を引いていて、更にその300年前の聖王であるオリヴィエって人の生まれ変わりで記憶も持ってるんだよ。」

と私は言う。それに続き

「私達は、ユニゾンデバイスって言う特殊で希少なデバイスなんだよ。500年くらい生きてるよ。」

とルーラが説明した。そして、はやてが最も驚くであろう経歴を持つアイデは

「私は、数千年以上前から存在していて、元々この夜天の書は私が管制している魔導書である神の書の一部を、一機のデバイスにして出来た物なんだよ。つまりこの魔導書は、私の娘同然なんだよ。大切にしておいてね。」

と言う。それ聞いたはやては驚きつつも事態を重く受け止めたのか「分かった。アイデちゃんの思い、確かに受け取ったで。」

と頷きながら言うはやてだった。それから更に

「それにしても、時間を操れるなんて、なのはちゃんはすごいな。確かにこれなら、300年前の正常な状態に戻しせるな。」

とはやては続ける。それを聞いた私は

「うん、そうだね。それと、他にもあるよ。心読んだり、ロストロギアの情報が分かったり、破損状況が分かったりね。」

と言う。そこからさっきまで話しに入ってこなかったさすがが

「じゃあ、なのはちゃん。今から夜天の書の解析と破損状況確認できるの？」

と聞いてくる。それに対し、私は

「もうやったよ。結果は・・・破損が奥まで進んでたよ。はやての足が不自由なのもそのせいでもあるんだよ。」

と答える。それを聞いたさすがは

「じゃあ、今から直すの？」

と聞くが

「残念だけど、暴走してる部分を切り離してからじゃないとどんな影響が出るか分からないよ。因みに、切り離すには管理者権限って言うのが必要で、夜天の書を完成させてからじゃないと使用できないだよ。ただ、その完成方法がまともじゃなくてね。他人の魔力を奪う事によってページが埋まる仕組みになってるんだよ。つまり、他人に迷惑掛けるって事だね。」

と答える。すると5人同時に

「「「「「なっ！」「」「」「」

と驚く。そして、

「そんなこと出来る訳あらへん！！」

とはやては言う。まあ、はやてはやさしいもんねと思いつつ

「だけど、1つだけ人様に迷惑を掛けしないで済ませる方法があるよ。」

「

と言う。それに食いつくはやては

「ど、どうしたら良いん？」

と聞く。それを答える為に私はエルを起動させ、ある物を取り出して

「このの魔力を使うんだよ。」

と言う。その物を知っている4人は一斉に

「「「「「ジュエルシード！」「」「」

と驚いた声で言うのであった。はやてはこれが何か分からないので

「これを使うと迷惑をかけんですむの？」

と言う。私はそれに頷き

「うん。ただ、これはもう魔力を抜いてるから空っぽだよ。後で管理局に渡すつもりだから。それに、まだ第1覚醒もしてないから、覚醒してからね。」

と言う。そして、そこでルーラが

「たしか、第1覚醒って、守護騎士が出るんだっけ？」

と第1覚醒について聞いてくる。私はまずルーラの方を向いて「うん。そうだよ。だからはやて、覚醒する時にかなり驚きことが起こるから、気を確かに持つんだよ？」

と途中ではやての方を向いて言った。その後、私達はロストログアについてや守護騎士についての事、どうして管理局にジュエルシードを渡すのかをなどの説明をし、それらが終わると、雑談をしてから帰っていった。そして、それらの内容はアリサや兄さん達に伝え、すずかの方も忍さんやさくらさんに伝えたようだ。その後の私は、いつも通りに鍛錬をしてから夕食をとり、お風呂に入って寝るのであった。

視点終了

それから6日が経ち、残りのジュエルシードは7個となっていた。原作よりも早くこんなに集められたのは、なのは以外に手伝った人間がいたというのがあるのは勿論の事だが、それ以外にもなのはの頑張りが大きかった。この一週間の間に4個のジュエルシードを確保していたのだ。そして、それらのジュエルシードの魔力を奪い取る。そうする事によって、例えば、管理局に渡したとしても、利用する価値が無くなるからである。勿論、それ以外にも目的がある。それは、6日前になのはがはやてに言ったように、闇の書の覚醒に使うのである。その事は、なのはがはやてに話しているので、後は第1の覚醒を待つだけとなっていた。そんなこんなで、今日は月村邸に行く予定があった。ジュエルシード搜索の会議の為である。参加したのは、なのは、恭也、さくら、忍、咲夜、アリサ、すずか、アイデ、スカーレン姉妹の7人+3機である。その会議の結果、何個かは海にあるのではないかと言う話になった。そしてどうやって海中にあるであろうジュエルシードをどうやって探すかと言う議題名になったが、それは直ぐに片付くことになる。なぜなら、さくらの能力を使えばいいと言う事になったのだ。さくらは、水の精霊だ。つまり、海の中にも入るのではないかと言う結論になった。他に

も、ジュエルシードを暴走させてから封印すると言う案も出たのだが、それだと管理局に減らない茶門付けられる可能性があるので、その案はなしだと言う事になり、先ほどのさくらが海に入ると言う案が、さくら自身の口によって出たのだ。そんなこんなで会議を進めていると、結構近い所、それも月村家の敷地内にジュエルシードの反応が出た。しかし、どういうことなのか、その反応には暴走の類ではなく、純粹に願いを叶えられたような反応であった。それをいち早く感じ取ったのはは、1人で行くと言い月村邸を飛び出した。その時になのはは、A A Aクラスの力を持った人間が近づいた事を感じ取ったので、急いで封印して、そちらに向かおうと思った。その後のなのはの判断は素早く、幻想郷にいる天狗、射命丸 文以上の速度で、ジュエルシードの元へと向かっていった。

場所：月村家の敷地内

視点：なのは

私は、ジュエルシードの発動して所へ着いた。するとそこには、大型化した猫がいた。それを見た私は、大きくなりたいと願った結果、望み通りに成ったと推測しつつ、可哀想ではあったが、いつも通りに封印機能付きの砲撃を放ち、猫を元の大きさに戻し、ジュエルシードも回収した。そして、魔力をぬいてから、侵入者の方へと向かっていった。

視点終了

場所：月村家の敷地内

視点：金髪紅眼の少女

私は今、母さんの命令で、ジュエルシードを探している。しかし、そのジュエルシードの反応を、見つけたのは良かった物の、誰かに封印されたようでその反応がなくなっていた。すると、そのジュエルシードを封印して回収したと思われる魔力反応が、超高速でこちらにやってくるのを感じ取れた。私は好都合だと思いつつも、出来

れば争いたくないと思ってしまった。なぜなら、その魔力反応が、
とんでもない大きいのだ。少なくとも母さん以上である事は、遠く
に離れていても分かってしまった。つまりそれは、私に勝機がない
と同じことだった。だけど、母さんの為に引くわけにはいかない。
なので、私は譲ってもらおう交渉しようと思った。そして、そんな事
を思っていると、急にその強大な力を持つ人が現れた。その姿を見
て私は愕然としてしまった。なぜなら、見た目は私と同じぐらいに
見えるのにその存在感、強さはとんでもないものだった。そして、
私は悟ってしまった。この子は人間、それも少女の形をした化け物
だと。だけど、母さんの為にジュエルシードを渡してもらおうように
言おうとしたその時

「ふん、母親のためにね。」

と少女の姿をした化け物は私を見てこういった。私は

「えっ！！！（どうして？私は何口にしてないはずなのに）」

と驚き、思ひ口にしようとした瞬間

「それはね。貴女の頭の中を覗き込んだから。それと化け物ってひ
どくない？確かに私は人間じゃないけどそんな言い草は無いんじや
ない？」

と私の思考に対する答えを言い、更に、彼女は自分は化け物じゃな
いと言い張った。だけど、今はそんな事を気にしてる場合じゃない。
ジュエルシードを確保しないと思い、彼女に

「そう。そこまで分かっているのなら、さっき封印したジュエルシ
ードを渡して。」

と言う。しかし少女は

「ん、どうせ、意味ないと思うよ？だってこれ、もう魔力ないし。
」

と言う。そして

「貴女は母親の願いを叶えたいんだよね？多分だけど、私ならジュ
エルシードが無くて叶えられるかもしれない。私の予想通りなら
ね。」

と言ってきた。しかし、いまだ信じられない私は

「貴女の言ってる事は、まだ信じられない。だけど、内容を聞いた
い。」

と言う。それも予想の範疇だったのか、彼女は

「うん。多分だけど、貴女の母親であるプレシア・テッサロッサさんは、実の娘であるアリシア・テッサロッサが死んで、その代わりを造ろうとした。それが貴女だと私は推測した。だけど、貴女がアリシアとは全くの別人だった。だからプレシアさんは発狂してしまい、ジュエルシードで何らかの方法で蘇らせようと考えた。だけど、その必要は私の能力で無いと分かるだろうね。」

と言う。私はそれを聞いて

（たしかにそれだと私にきつく当たることの説明はつく。だけど、それでなんで目の前の子は叶えられるなんて言ったの？まるで死者を生き返らせることが出来るっていているようにしか聞こえないんだけど、ってことはこの子の能力は人を蘇らせる力があるともい
うの？）

と思っていると

「そうだよ。ただし、灰になってたりしてたら出来ないけどね。だから、形が残っているのかは賭けになるかな。」

また読まれた。そして、とんでもない事を聞いてしまった。そして、少女は続けて

「ねえ、貴女も一緒にについて来てくれない？もしかしたら貴女も必要になるかもしれないから。」

と言う。それを聞いた私は考えてしまう。だけど、次の彼女の言葉で私は頷いてしまう事になる。

「もしかしたら、貴女にも優しくしてくれるかもしれないし、お母さんだって笑ってくれるようになるかもしれないよ？勿論、私もそれに協力するよ。貴女がこの案に頷けばね。」

と言う甘い言葉に私は

「分かった。（コクン）」

と頷いてしまった。そして、彼女は

「あつ！！そうそう自己紹介がまだだったね？私は高町なのは。なのはって呼んでね。フェイト、貴女は？」

と名乗り、知っているのにもかかわらず、名前を聞いて来た。私はそんな彼女の考えが理解できず

「言う必要があるの？さっき私の名前呼んだのに。」
と聞く。すると彼女は

「やっぱりこういうのは本人から言ってくれた方がいいよ。」
と言って来た。私は彼女の眼差しを見て、本気なんだと感じた。なので

「フェイト・テッサロッサ。」

と名乗ってしまった。その後、私は彼女が開いたと思われる赤くて不気味な目が沢山の空間に落ちていった。その時に思ったのは、こんな事まで出来るこの子、なのはなら母さんの願いを叶えてくれるかもしれないと思った。

視点終了

無印編5話「闇の書の主と雷の親子とジュエルシード」前編」（後書き）

次はプレシアの病気を治し、アリシアも復活させます。それからカリム達を出します。クライドは名前を変えて働く事になります。ヒントはなのはが生まれる前に士郎がやっていた事です。

無印編 6話「闇の書の主と雷の親子とジュエルシード」後編」

場所：月村家の敷地内

視点：なのは

私は侵入者である少女のいる所についた。侵入して来た理由は、多分聞いても答えないだろうと判断し、罪悪感があったが勝手に頭の中を見せてもらった。すると、母親に命令されてジュエルシードを探してここにやってきたこと、虐待を受けている事が分かった。しかし、1番気になったのはアリシアと名前であった。記憶の中の彼女は、アリシアと呼ばれ、母親に可愛がられていた。しかし、その記憶が途切れると次に映し出されるのは、リニスという母親の優しい使い魔と狂った様子の母親の姿だった。そして、その時の母親は彼女をフェイトと呼び、虐待をしていた。私はそれを見て確信してしまった。目の前にいる少女、フェイトはクローンとして生み出された存在で、その目的は自身の娘であるアリシアの代わりする、もしくは代わりの肉体にと思っていたのである。だからアリシアの記憶をフェイトに与えた。けれど、フェイトはアリシアの変わりになりえなかった。だから発狂し、彼女を虐待しているのだと思った。しかし、目の前のフェイトという少女は虐待されながらもジュエルシードがあれば昔のように笑ってくれる、愛してくれると思っているのだ。偽りの記憶だとも気づかずに。けれども今の状態だとそれは絶対に叶えられる事は無いと思った。なぜなら、彼女の母親であるプレシア・テッサロッサはフェイトを見捨てる気だと気がついてしまったからだ。なので私は、アリシアを復活させた上で、フェイトも笑っていられる道を探し、それを導き出した。そして、それを実行するためにフェイトの力が必要になるかもと言い、協力を求めた。その時に、母親の願いを叶えた上で自分の願いも叶うかもと言う私の言葉にフェイトは頷いた。その後、私達は自己紹介をした。

まあ、フェイトには無理やり名乗らせたけど……。その後、フェイトと一緒に時の庭園まで隙間で行くことにし、フェイトを強引ではあるが、隙間へと落とした。そして、フェイトの1言目は「ねえ……。君。」

だった。だから名前と呼んでっていったのにと思いつつも

「ん、なに？フェイト。けど、君じゃなくてなのはって呼んで欲しいな。」

と言った。そして

「じゃ、じゃあ。なのは、此処は何処で何処に向かっているの？」と聞いてくる。それに分かる所だけを答える。

「此処は隙間と言っただけ私にも良くわかんない。でも、虚数空間みたいなものだと思えばいいかもね。」

と言う。すると

「虚数空間！それってかなり危険なんじゃ……。」

と驚いていつるが安心させるために

「私から離れなければ大丈夫だよ。」

と言い、続けて

「それに、この能力を持つて存在はもう1体いるよ。ああ、そういえば私は人じゃないって言ったけど、種族とかわかんないよね？それ

から、もう1体の種族も。」

と言うと、フェイトは驚きながらもコクンと頷いた。

「じゃあ言うね。私の種族は……。」

と間をおく。

「なのはの種族は……。」

その言葉を復唱するフェイト。そして

「神です。」

と言った。フェイトは、それを聞いた瞬間、私を見ながら目を点にってしまった。そして

「……………は？はあ~~~~~!!」

と素っ頓狂な声をあげるのだった。まあそういえば誰だっけそんな
るよね。と思いつつも

「からかってるわけでも、嘘ついてるわけでもないからね。正真正
銘の神なんだよ。元人間のね。まあ、どうして神になったのかは秘
密に

させてもらうけど。それから、もう1体は妖怪です。それも神に近
いね。」

と言った。そして時の庭園に着いた。そして、それをフェイトに知
らせるために

「さて、着いたよ。」

と言った。フェイトも外の場所を確認し

「うん、間違いないよ。家だ。」

と言った。私はフェイトに

「じゃあ、プレシア・テッサロッサの所に行くけど。フェイト、覚
悟は出来てる？」

と聞く。すると、即答で迷いの無い声で

「うん。」

と頷くフェイトだった。それを見て頷いた。そして

「そう、じゃあ行こうか。」

と言うと私とフェイトは隙間を出るのだった。

視点終了

場所：時の庭園

視点：プレシア・テッサロッサ

フェイトに、ジュエルシードを探すように命令して数日まだあの子
は帰ってこない。

「遅いわ！ーあの子は何をしているの！ーこっちは時間が無いのに・

・・ゴホゴホ」

と独り言を言ってる時に血を出してしまった。

そこに謎の空間が現れ、そこから見知らぬ只者じゃなさそうな少女とフェイトが出てきた。そしてフェイトは

「母さん！大丈夫？」

と近寄ってくる。しかしそんな事よりも

「それよりもフェイト、ジュエルシードは取って来たの？」

と言うと、フェイトは立ち止まり

「この子が持ってます。」

と見知らぬ少女の方を見て言う。そして

「ですがこの子、なのはによってジュエルシードの魔力を取られて使えません。」

それを聞いた瞬間、私は頭が真っ白になりそうになりながらも

「な、どういうこと？直ちに魔力を戻しなさい！！！」

と怒鳴る。しかし少女は

「それは出来ません。その代わり、貴女の願いであるアリシア・テッサロツサの蘇生を行いましょう。ただし、条件付ですが・・・。」

と言って来た。なので私は

「出来るの？って言うよりどうして私の最終目的が分かったのかしら？フェイトにも言ってるのに。」

と聞いた。その答えは

「はいできます。どうして分かったかと言うと・・・貴女とフェイトの頭の中を見たからです。」

だった。それを聞いた私は

「なっ！！！」

と声を上げて驚いた。そして今度は少女ではなくフェイトが

「本当ですよ、母さん。それと聞きたいことがあるんですけど。」

と言う。その聞きたいこととやらに少しではあるが興味を持った私は

「なにかしら？フェイト」

と言う。そして

「私がクローンって本当？ 母さん。」

と聞いて来た。それを私は

「それもこの子が言ったの？ フェイト？」

と聞く。すると

「はい。」

と肯定の返事が返ってきた。そう、じゃあ彼女が言ってる事は本当みたいねと思った。

「そうよ、その通りよ。貴女は私がアリシアの代わりに造った。だけど、貴女はアリシアになりえなかった。ただ、見た目だけそっくりの紛い物だった。」

そこまで言つと、フェイトからではなく少女から返事が返ってきた。「そうですね。確かにフェイトはアリシアには成りえません。でもそれで良いじゃないですか？ アリシアの願いが叶ったですから。」

と言う。私は、アリシアの願いとはどういうことかと思ひ

「どういうこと？ アリシアの願いが叶ったって。」

と少女に聞く。すると少女は呆れた顔をして

「はあ、忘れているみたいですね。アリシアは生前言いませんでしたか？ 誕生日には妹が欲しいって。」

と言ってきた。

「！！！！！！！！！！」

それを聴いた瞬間、私は驚きつつも、忘れていた記憶を引っ張り出だそうとしていた。

「ですから、フェイトを酷い仕打ちをするという事は、アリシアの妹に酷い仕打ちをする事という事なんです。そして、そんな事をアリシアが望むとも思っているんですか！？」

と止めの言葉が来た。

「！！！！！！！！！！」

確かにそうだった。確かにあの時、アリシアはそう言っていた。それを私はアリシアが死んだ事によって記憶の奥底に閉じ込めてしまった。そして、今更ながら、自分のして来た過ちを気がいた。そし

て私は泣きながらフェイトにすがり付いて

「私は、私はなんて事を！？・ごめんなさい！！ごめんなさい！
！フェイト。私は・・・！」

と謝った。そしてその途中でフェイトは私を抱きしめて

「もう良いよ、母さん。それにアリシア姉さんももう直ぐ蘇るんだよ？」

と言ってくれる。それを聞いた瞬間、こんな良い娘に私はなんという事かと思いつく

「本当にごめんなさい、フェイト。そうよね。もう直ぐで生き返るのよね。」

ともう一度謝り、頷いてそう言った。そこへ

「もうそろそろアリシアの遺体を持って来てくれませんか？それに貴女の体、もう持たないでしょ？一緒に直すと言うか健康な状態に戻してあげますよ。」

「そんな事まで出来るの？それに条件が必要だって。」

「はい。と言うよりは生き返ると言うより死ぬ前や病気になる前に戻すと言った方が正しいです。私の能力の1つに時間操作があります。その能力を使う予定ですから。勿論、貴女も若返りますよ、プレシアさん。本当はもう1つあるんですが、そっちの方が良いですよ？それにその条件はもう満たしましたからいいですよ。」

その言葉を聞いた時、私はまたあの子とそして、今度はその妹と長い間過ごせるのだと思い涙し

「ええ、そちらでお願いしできる？」

と言った。そして

「分かりました。それでは手術室の方に遺体を持ってきてください。」

と少女がそう言った後にフェイトを呼ぶ

「それとフェイト？」

「なに？なのは」

とフェイトは返事をする。少女はこう言った。

「今から、アリシアの記憶を戻すから手伝ったくれる？」

つと、それを聞いた瞬間、私も

「フェイト、私からもお願い。今さら私にそんな事が言える資格が無いのは分かってるわ。ただどお願い、フェイト！！」

と頭を下げてフェイトに頼み込んだ。

「分かってるよ、母さん。その為に来たんだから。」

と言う。本当に優しく良い娘だなと思いつつ、私はフェイトに手術室の少女の案内を頼み、その間に私は急いでアリシアの元に向かうのだった。

視点終了

その後、フェイトはアリシアの記憶を返し、アリシアはなのはの能力で死ぬ前に戻った。そして不治の病に蝕まれていたプレシアもなのはの能力でアリシア共々病気になる前へと戻るのだった。勿論、プレシアがその時に若返ったのは言うまでも無い。

そして、なのはは家族の邪魔しないために、その時にフェイトのデバイス【バルディッシュ】に連絡先を渡し、更に伝言を頼んでから生き返ったアリシアとフェイト、それにプレシアを置いて地球へと帰還していった。

時の庭園から戻ったなのはは、イギリスでクライドと合流し、クリステラ邸へと来ていた。なぜ、そんな所にいるかというと、クライドはミッドでは死んだ事になっているし、この世界での戸籍が存在しない。それによって働いてお金を稼ぐ事が出来ない。グレアムはずっと此処に居れば良いと言っていたが、それだとクライドは気が住まないで住む所とお金を稼ぐ場所を探していたのだ。そんな時なのははかなり危険だけど、良い住み込みの仕事があると聞き、なのはと一緒にその住み込みの働き先に成るであろう場所に向かうのであった。

場所：クリステラ邸

視点：クライド

なのはちゃんから危険だけど信頼できる良い住み込みの仕事があると聞いて、なのはちゃんと共にその雇い主になるであろう方の屋敷に来ていた。ドアが開くと3人の親子が出てきて、その中の少女が「なのは！！久しぶり！！！」

となのはちゃんに抱きつきながら挨拶をした。それに対し、なのはちゃんも

「フィアッセさん！！お久しぶりです。」

と挨拶で返す。その光景はまるで中の良い姉妹のようであった。それに続き

「久しぶりだね、なのはちゃん。」

「久しぶりね、なのは。」

と夫妻がなのはちゃんに挨拶をする。それもどこか自分の子供か孫を見ているかのような眼差しで言った。それに対し、やはりなのはちゃんも

「はい、お久しぶりです。ティオレさん、アルバートさん。」

とフェアッセという少女に抱きつかれたまま挨拶をした。どうやらかなり仲が良いようだ。

「本当にね。前に会った時はまだ小さかったからね。」

などと昔話を始めた。そして、クリステラ親子は私の方を向き、アルバートさんという方が

「で、この方がなのはが言っていた方？」

と言う。それをなのはちゃんが

「はい。」

頷いて返事をする。そこで私は

「始めまして、ミスター・クリステラ、ミセス・クリステラ、ミス・クリステラ。私はクライド・ハラウンと申します。」

と自己紹介をした。その後は、仕事や給与、それに住む場所について話した結果、護衛が主な仕事で普通はクリステラ邸で住む事になった。

それと、この世界での戸席もアルバートさんの力によって造って貰うことになった。仕事である護衛は、管理局でもやっていた事だったので知識はあったが、それは魔法世界での話で、こちらでは質量兵器しか存在しない為、こちらの武器について学ぶ事や対抗策等も学ぶ必要があった。それをなのはちゃんが暇な時にそれらに対する知識を教えてくれるという。それと魔法だけではこの世界では生き残れないので、武術を習う事となった。私も一応は武術は習っていたが、それはあくまでも魔法の補助的なものしか考えていなかった。だが、この世界だと立場が逆転して、魔法が補助になるのだ。それもなのはちゃんが教えてくれるという。大人としては何とも情けない物だったが、なのはちゃんはこの世界でも最強クラスの武人である父親ですら勝てないほどの武を持っているという。そこでなのはちゃんに弟子入りする事を決意し、翌日から基礎体力をつける為のメニューを、なのはちゃんの指導の下、受ける事となった。

視点終了

一方その頃、ミッドチルダのベルカ自治区にある聖王教会では、2人の少女と1人の少年が集まっていた。そして

「それで、意見を聞きたいというのはどういうことだい？カリム。」と緑髪で長髪の少年、ヴェロツサ・アコース がカリムという金髪の少女に聞く。すると

「そうですね、確かに聞きたいですね。一体何があったんです？」

とピンク髪のショートヘアの少女、シャツハ・ヌエラも続いてカリムという少女に聞く。すると

プロフェーティン・シュリフデッ

「それはですね。私の予言紙に厄介な予言が書かれているのです。」という答えが返ってきた。それに

「「なんだって（ですって）！！」」

と驚く2人にカリムは

「これを見てください。」

と言い、予言の書いてある紙を2人に見せた。その紙にはこう書かれてあった。

死せる王の血を引く者と旧き結晶と無限の欲望と機械仕掛けの人形と精霊が集い交わる地、死せる王の血を持つ者の下、聖地より彼の翼が新たな力を得て蘇る。

人達や人形達や精霊達は踊り、闇に染まりし法の塔は焼け落ち、それと同時に闇に染まりし数多の法の

船も砕け散る。それを先駆けに、それらを利用していた大いなる闇も滅び去る。

「というのが予言の内容ですね。」

と言うとシャツハは

「まさか、これを教会には教えたんですか？」

と聞いた。その答えは

「いえ、まだです。ですから貴方達に見せたんです。これを上層部や管理局に教えるかどうかを貴方達にも考えて欲しいの。」

と言うカリムに、シャツハは

「うーん、難しいですね。せめて死せる王と大いなる闇とかが何か分かれればいいのですが。」

と返した。すると今まで聞いていたヴェロツサから

「それなら、死せる王なら分かるよ。」

と言う。そんなヴェロツサの方を向く2人、そして

「多分なんだけど、聖王なんじゃないかな？」

と言う。

「ま、まさか。それって!!」

それに驚く二人に

「そう、聖王の血を引いている人が何処かの世界にいますと言う可能

性があるという事だね。」

と言

「そう。では、どうするの？教会や管理局にで教える？でも、下手に管理局に伝わると聖王の血を引く存在が殺されかねないわ。それに、聖王教会に教えてもきつと聖王の血を引く存在を利用しようとするわ。」

と言うとヴェロツサが

「じゃあ、管理局の3提督以外には言わないでおこう。」

と言う。すると2人も

「そうね。彼らなら信頼できるものね。」

「ええ、それがいいですね。」

と同意するのであった。

「ただ、3提督には直接伝えた方がいいかも知れないね。盗聴される可能性が高い。」

と言うヴェロツサ。そして、2人もそれに頷いたのであった。その後、ヴェロツサは3提督に会って、その事を伝えて予言の事は6人だけの秘密と言う事になった。それが原因で、予言が成就される時期が早まることになるとはまだ誰もわからなかった。そう、聖王の血を引く者ですらも。

無印編6話「闇の書の主と雷の親子とジュエルシード」後編」（後書き）

あと1、2話で無印編終了です。テッサロッサについての処遇なども決めるつもりです。テッサロッサ的にはハッピーエンドですが、管理局としては納得できないというような処遇をしたいと思います。

無印編7話「テッサロッサ家の選択」(前書き)

ハラオウン親子を再会させるつもりでしたが次回にします。本当に
すいません。

無印編7話「テッサロッサ家の選択」

クライドがクリステラ邸に住み込みの護衛として住むようになった翌日、なのははクリステラ邸に来て、クライドを鍛えていた。国が遠く離れているせいで時差があつたが、それは偏在のお陰で何とかできるのだ。つまり、その偏在を学校へと向かわせたてイギリスに來ているのだ。記憶の方は、共有できるので本体にも授業内容が伝わってくるし、偏在の方も鍛錬状況を見れると言うわけだ。どうしてなのはがハルケギニアのスクエアの風の偏在が使えるのかと言うと、シャルロットが実家から持ってきていた魔導書の中に書いてあつたのだ。因みに、その偏在はシャルロットも使用できる。ハルケギニアに居た時のシャルロットはトライアングル中位であつたが、今ではなのは達との模擬戦や鍛錬などでスクエア上位となっているのだ。そんなわけで本物のなのははクライドの鍛錬の指導をしているのだ。そしてその数日後、プレシアから通信が來たのであつた。

場所：テッサロッサ邸

視点：なのは

私は、プレシアさんに呼ばれてテッサロッサ邸に來た。その時に使つたのは隙間では無く、ベル力式の転移魔法だ。今回は魔力を感知されても問題ないからだ。そして

「プレシアさん、着ましたよ。」

と言う私に

「來てくれたのね。さあ、立ち話もなんだから座つて。」

と座るように促す。そこへ3つの足音が聞こえる。2つは子供の気配で、もう1つは大人の気配であつた。そして扉が開く。入つて來たのはフェイトと生き返つたアリシアと見知らぬ獣耳と尻尾の生えた女性だつた。私はその女性を見た瞬間にフェイトの使い魔だと分

かった。なぜなら、主であるフェイトと使い魔の間には魔力ラインがあるからだ。それと補足になるが、使い魔はそれが切れたらすぐにはないが消滅してしまう。もし、主との契約もしくは魔力が切れた場合は再契約か、別の主と契約する事によって消滅は避けられる。

部屋に入って来た2人と1匹は私に

「あ、なのは！！いらっしやい。」

「いらっしやい。」

「いらっしやい。」

挨拶した。それに対し私も

「うん、お邪魔してるよ。それよりもアリシアはもう大丈夫？」

と挨拶してアリシアに復活して何かおかしいことが無いか聞く。するとアリシアは

「うん、おかげさまで生前と同じように過ごせてるよ。フェイトって言う妹も出来てたし。私を生き返らせてくれてありがとう。」

と頭を下げて来た。それに続き

「本当にありがとう。なのはが助けてくれてなかったら今頃、私はどうなってたか分かんないし、地球を滅ぼしてしまう手助けをしてしまう所だったよ。」

「そうね。貴女が居なかったら間違いなく私は地球を滅ぼすような事をして平気だったし、アルハザードに行くにしてもフェイトを捨てて行くつもりだったわ。だけど、貴女のお陰でそんな事をせすにすんだわ。本当にありがとう。」

「いえ、私もしたかったからやっただけですので気にしないで下さい。それよりも、アリシアとプレシアさんにはまだ自己紹介してません

でしたね。私の名前は高町なのは、地球人です。」

「知ってると思うけど、私も名乗るね。私はアリシア、アリシア・テッサロツサだよ。ミッドチルダ人だよ。」

「私は始めましてだね。私はフェイトの使い魔のアルフ。フェイト

達を救ってくれて本当にありがとう。」

「では私も改めて名乗らせていただいわ。私はプレシア・テッサロツサ。魔導師兼科学者よ。」

するとそこにモニターが映し出される。

「やあ、なのはくん。」

そこに映し出されたのはジェイル博士であつた。私は

「こんにちは、ジェイル博士。ちょうど良いところに。あの結果はどうでした？」

挨拶をした後、昨日頼んでいた調べ物の結果を聞こうとした。すると「君の予想通りだったよ。それと理由は、どうやら管理局はプレシア女史の技術を盗みたかつたみたいだね。」

と言う。どうやら当たりだったわね。すると

「ねえ、なのはちゃん。どういうことかしら？管理局が私の技術を盗みたかつたって。」

とプレシアさんが聞いてくる。するとジェイル博士は驚いた顔でプレシアさんを見ていた。しかし、それには気にせずに私は

「ああ、それはですね。実はアリシアが無くなったあの新型魔力炉【フュードラ】の実験にはある秘密があつたんですよ。ジェイル博士、

説明の方をお願いします。」

と言う。ジェイル博士は私の頼みを聞き、頷くと

「ああ。でもその前に、久しぶりだね。プレシア・テッサロツサ。」と返事をしつつプレシアさんに挨拶する。それに習い、プレシアさんも

「ええ、本当に久しぶりね。ジェイル・スカリエッティ。それにしても大分雰囲気と言うか性格が変わっているかのように見えるけど？」

と挨拶をして、博士の雰囲気が彼女が会ったときと違うと言う。そして

「ああ、それはね……。」

ジェイル博士は自分が私によって性格や思考を変えられたこと、自分が最高評議会の命令で作られた人工生命体であったこと、今は生命操作の分野では手を出してはならず、その代わりにロボット分野に集中していると話す。そして

「まあ、こんなところかね。それでフュードラの事なんだが……」

と話し始めた。

管理局は、フュードラを製造していた前の製造責任者の不手際により遅れていたことを逆手にとって、プレシアに次の責任者を指名して失敗させて、それを理由に前から欲しがっていた彼女の技術を奪おうとした。しかし、プレシアの技術力は管理局の予想を超えて完成わずかとなっていた。なので、業と実験の時期を早める事と暴走させる事によって失敗させて彼女を失脚させようと企んだ。そしてあのフュードラの事故が起こったのだ。つまり、それは管理局がアリシアを殺した事と同義あることを示しているのである。そして、実験に失敗したプレシアはそれを理由に失脚させられて管理局に利用される事となった。しかし、プレシアは途中で姿を消していったという記録があったらしい。

そして、此処からプレシアさんがジェイル博士の代わりに話し出した。

その頃のプレシアさんはアリシアの代わりにフェイトを創る為にジェイルの造ったクローンの基礎理論を発展させていた。それがプロジェクトF・A・T・E（通称プロジェクトF）であった。しかし、それは失敗に終わり、良くて見た目が同じだけの別人、悪くて死亡というものであった。プレシアさんはそれを知った時に発狂し、アリシアの復活の術を自らの体を壊すまで探し続けた。そんな時、どこからかジュエルシードの情報が流れ込んで来たという。そこでジュエルシードを積んだ次元航行船を襲撃して地球に落とし、そのジュエルシードをフェイトに探すように命令し、私と出会ったという事であった。そこまで話すと、アリシアとフェイトは怒っていた。

そして私はあるスペシャルゲストを呼ぶことにした。

「という訳です。グレアムさん、クライドさん。」

呼んだのは管理局員のグレアム提督と元管理局員のクライドさんだ。彼らを呼んだ理由は彼らにもっと管理局の闇の部分を知って欲しかったからだ。そして

「ああ、話は聞かせてもらった。やはり今の管理局には色々と問題があるみたいだね。」

「ええ、それは正さなければなりませんね。」

とそれぞれに感想を言う。そして

「ああ、失礼。始めまして、プレシア・テッサロッサさんにジェイル・スカリエツィ博士。私はギル・グレアム。管理局の提督にしてな

のはちゃんの考えに賛同する者だよ。」

「始めまして、元管理局員のクライド・ハラOWNです。私もなのはちゃんの考えに賛同する者だよ。」

と2人はジェイル博士とプレシアさんに挨拶する。

プレシアさんは大分驚いていたがジェイル博士は驚かなかった。それもそのはず、私が彼らのことを教えたからだ。そして私は

「管理局や元管理局で私の味方をしてくれる方はまだいますよ？例えばレジアス・ゲイズ中将とかね。」

と言う。するとグレアムさんが

「レジアス中将ってミッド地上本部のトップじゃないか！！それと歴史操作って何だい！？」

と驚く。クライドさんやプレシアさんも驚いている。因みに、フェイト、アリシア、アルフはどうして

驚いているのかわからなかったたので、疑問符を浮かべていたので私が念話で説明している。

「私も歴史操作なんて初耳だね。いつそんな能力を身に着けたんだい？」

とジェイル博士が聞く。その質問に私は

「最近手に入れた能力で、その名の通り歴史を操作する能力です。まあ、色々と条件があるのでそんなに融通の利く能力ではありませんが」

「。。。。」

と答える。するとプレシアさんが

「そうだったの。じゃあ、アリシアもその能力で復活が出来たってこと？」

と聞いてきたが、私はそれを

「いえ、条件の中には遺体がある者には使用できないとあります。」と否定した。更にプレシアさんは

「そう、そういえばあの時にもう1つの手があるって言ってたけど、もう1つの手って何なの？」

と聞いてきた。そこで

「神の書に記録されている2つの蘇生魔法です。その名はザオリク、アレイズと言い、この2つの魔法はアルハザードの時代より前から存在しています。」

と答え、更にはラ・ギアスや神の書を含めた3種の神器のこと、それに私が神になった理由なども話す事となった。

その後は、最初は管理局に次元航行船襲撃の件で自首しようとしたプレシアさんだったが、ジェイル博士の話しやテッサロッサ親子内での話し合いの結果、管理局と敵対する事を選び私達の同志となった。因みに、私を呼んだのも自首するからフェイト達を頼むと言いたかったらと言う理由も1つだったがそれはジェイル博士が調べた事を聞いた事により考えが変わったと言う。そして、今後の事などを色々と話して今日はそれで解散となった。私は帰り際に、友達になろうと2人に言うと、2人もそれを頷いて

「うん。いいよ。」

と言い、友達になってくれた。その時にプレシアさんとアルフに

「私の娘（ご主人様）達の友達になってくれてありがとう。」と感謝された。

それから数日後、管理局が来ると言う情報がグレアムさん経由で入って来た。来るのはリンディ・ハラウン提督とクロノ・ハラウン執務官と言う事が分かり、クライドさんにもその情報は伝わっていた。そして更にその日後、その親子がやって来るのである。その2人がどんな反応をするのが楽しみだと考えながら、私はその日を待つのであった。

視点終了

無印編7話「テッサロッサ家の選択」（後書き）

今度こそハラOWN親子が再会します。そして、ハラOWN母子やその友人のレティ提督、それに伝説の3提督にも管理局の闇を知ってもらい、協力者となってもらいます。そして、次回で無印編が終了します。

無印編最終話「ハラオウン親子」

なのはとテッサロッサ姉妹が友達になって、数日が経過した。その数日間に、異次元からの迷い人が現れた。その迷い人は、投薬やゲーム・システムというマン・マシン・インターフェースの影響により、体がボロボロになっていた。しかし、なのはやグラギオスの力によってそれらの影響が完全になり健康な体へと戻った。そして、なのははその次元に行こうと思ったので、次元発信機付きの次元通信機を取り付けた人型起動兵器型デバイス「ラピエサージュ」を与えてからその人物を元の次元に返した。その他にもトラブルはあったが、なのはが日常を過ごしていると、とうとうリンディ・ハラオウン提督の指揮するアースラが地球圏にやって来たのだった。

場所：イギリス・グレアム邸

視点：ギル

私はなのはくんの指示でアースラの艦長、リンディ提督とその補佐官であるクロノ執務官に通信で現地の民間協力者達によってジュエルシードは回収されて、今はこのグレアム邸にいるという理由でこのグレアム邸に呼び寄せた。そして

「グレアムさん、ご無沙汰してます。」

と言うのはリンディ・ハラオウン。彼女は私の古くからの友人で、クライドの妻である。

「お久しぶりです。グレアム提督」

というのはリンディとクライドの息子、クロノ君であった。

「ああ、2人とも久しぶりだね。それとクロノ君、今私は休暇中なのでね。そんな言葉遣いは禁物だよ。」

とクロノ君に注意する。そう、今私は休暇をとっているのだ。するとクロノ君は

「しかし、僕は任務中なので「クロノ君！！」こういうのは時と場合

によるよ。今の私は管理局とは関係なく君達2人と話しをしているのだから君もそのつもりでいてくれ。」…………分かりました。ではそうさせてもらいます。グレアムさん。」

と反論しようとするが、私は途中で彼の言葉を遮って、そう言った。そしてそこに

「そういえば、グレアムさん。ロッテとアリアは見当たりませんが？」

とリンディが聞いてくる。それを私は

「ああ、今は教導隊の補佐をしているよ。それより中に入ってくれ。」

と答えて、屋敷の中に入るように言う。そして、私は2人を居間に案内して、椅子に座るように言う。と本題に入る事にした。

「ああ、それよりもジュエルシードだったね。今は通信で話した民間協力者の子が持っているから、今から呼ぶよ。」

と言うと、2人して

「「お願いします。」」

というのであった。それを聞いた私は直ぐに彼女とあの2人を呼びに彼女らがいる部屋へと向かっていったのだった。

視点終了

その後、グレアムはなのはを呼び、21個のジュエルシードを渡すように頼んだ。するとなのはは

「いいですよ。でもその前に…………。御2人共入って来て下さい。」

「

と言い、ドアの向こう側にいるある2人を呼び寄せた。そして、クロノとリンディは驚愕していた。なぜならその2人組の片方は

「久しぶりだね。リンディ、クロノ。11年ぶりかな？」

と久しぶりに再会した最愛の妻と息子に挨拶を交わした。それを聞いたクロノとリンディは

「え、本当に貴方なの？」

「ほ、本当に父さんなの？」

と今だ信じられないと言う表情をしながらそう言った。その反応も当然といえた。11年前に死んだはずの親族が行き成り現れたのだから。

「ああ。それにしても大きくなったな、クロノ。」

と言うと、クロノは任務中だと言う事を忘れて

「父さん、父さ〜ん。」

とクライドにしがみ付き泣き出してしまった。リンディも抱きついたが、直ぐに落ち着き抱きつくのを止めた。そして、クロノが落ち着くの見計らってリンディがどうして生きているのか、どうして今まで連絡をして来なかったと問い詰められた。するとクライドからではなくのはがその説明をした。その説明を聞いたリンディとクロノは驚きを隠せなかった。それもそのはずだ、こんな少女にそのような能力があるなんて誰が予想しただろうか。しかし、驚くのはそれではなかった。なぜなら……

「失礼。そろそろ良いかね？」

と言うのは……

「な、ジェイル・スカリエッティ！！どうして此処に！！！」
と言いながら驚くクロノとリンディ。そう、なのはが呼んだもう1人とは、管理局から広域次元犯罪者として指名手配されているジェイル・スカリエッティその人であった。どうしてそんな人物が居たのにジェイルの事に気が付かなかったかというと、単純に死んだはずの人間であるクライドの方ばかりに気が行ってしまつて、ジェイルの事を忘れていたためだ。そして、ジェイルから自分が管理局の最高評議会の命令で作られた人造生命体であり、その事を知り、発狂したがなのはにより性格などを変えられて今に至ると言う風に話した。クロノは

「そんなの出鱈目だ！！管理局がそんな事をするはずが無い！！」
と怒鳴っていたが、なのはやクライド、それに現管理局員であるグレラムが証拠の資料などを見せてクロノは納得するしかなかった。

リンディの方はジェイルが嘘を言っているように見えなかったので半信半疑だったが、証拠の資料を見た事により信じるようになった。更に夜天の書を改竄して闇の書にしたのも管理局だと知った時、今まで信じていた物に裏切られていた事に気づく。そして、管理局を変えようと決心し、その事をこの場に居る者達に話す。すると、クロノも賛同し、なのはやクライド達は元よりそのつもりだと言い、クロノとリンディに同志になるように言った。結果は2人もOKだった。更にはその事をリンディが開いていた回線で聞いていたアーススタッフ達もなのは達に協力する事を約束した。そして数日後、その事をリンディの親友のレティ提督や3提督にも証拠を見せながら話すとレティ提督に3提督もなのはに協力するという事を約束した。

因みに、ジュエルシードとテッサロッサ家についてだが・・・ジュエルシードはなのはが魔力を奪った事で、価値がなくなったのでそのままなのはがただの宝石として所有する事が決定し、リンディ達アース組は管理局の上層部に現地に來ていたフリーの魔導師の力により消滅したと報告した。テッサロッサ家についてはリンディがなのは側についたので、お咎めなしであった。襲撃事件については、依然として謎のままとリンディが上層部に報告をした。

プレシア・テッサロッサ

こうして、原作ではジュエルシード事件、P・T事件と呼ばれていた出来事は、原作とは違った結末で終えるのであった。

おまけ

ある日のテッサロッサ邸で、なのは、フェイト、アリシア、プレシア、リンディ、クロノが集まっていた。そしてプレシアが突然

「ねえ、なのはちゃん。」

となのはに声を掛ける。それに

「なんですか？プレシアさん。」

と返事をするなのは。そして

「その瞳と髪の毛の色、そして虹色の魔力光の事で聞きたい事があるんだけど。」

と切り出すプレシア。なのはは内容を知っていたが、あえて質問を全部言わせることにした。なぜなら、なのはには少し考えがあるから

だ。そして、なのはは

「はい。」

と頷き、プレシアが質問を全部言うのを待った。しかし、そこへリンデイが

「それは私も聞きたかったことなのよ。もしかしてなのはさんって聖王？」

と質問の続きを言ってしまった。その時にクロノも聖王の事を知っていた様でかなり驚いたような顔でなのはを見た。それをなのはは気に

せずに

「はい。そうですよ。その事は聖王教会や管理局には他言無用でお願いします。」

と正直に答え、更になのははその事を内緒にするようにと、この場に居る人間に話した。それを聞いて納得したのはプレシアとリンデイとクロノだった。聖王教会は次元世界ではかなりの信者が居る。その信仰の対象である聖王が復活したとなれば、最悪は聖王であるなのはを暗殺しようとするか、利用しようとする者が現れる。なので、出来るだけ知られないようにしていると考えているのだ。まあ、クロノは少し考えてから納得したが。しかし、テッサロッサ姉妹は、聖王についてのことを知らなかったのどうしてと聞いてきたが、プレシアの説明により、その理由が分かったので

「「わかった。」」

と頷いたのだった。

なのはが態と全部言わせたのは、聖王を知らないテッサロッサ姉妹に聖王の事に興味を持つて、聖王についての話を貰うためである。そうする事によって、聖王の事が知れたら政治的に不味いという事を教えられるからだ。それによって外部に漏れる可能性が低くなる可能性があるからだ。もしこの姉妹からなのはが聖王だということが知られると厄介だからである。まあ、その心配は殆ど無いのだが、念の為の処置であった。その事はプレシアとリンディもこの考えはなのはから聞いていたのでこういう話になったのだ。

因みにクロノはこの話しは知らなかったが聖王の伝説や影響力は知っていたので、内緒にしようと言われた時に納得したのだという。

無印編最終話「ハラOWN親子」（後書き）

無印編ようやく終わりました。海中のジュエルシードはなのはがフエイトと出会ってから直ぐに回収されて封印されてなのはに渡されました。その後は他のジュエルシード同様に魔力を取られてただの宝石になっています。

次回は番外編を書く予定です。

アンケート（前書き）

番外編1話を投稿する予定だったのですが、そちらは私の時間の都合上とPCの不調により難航しております。ある程度は書けたのですが、それでも投稿するまでには至っておりません。

アンケート

行き成りで申し訳ないのですがアンケートを行いたいと思います。

アンケート内容は、死んだはずのハルケギニアの一部の人間が何故かブラックホールクラスターのせいで地球に飛ばされ来るというものです。地球に来るハルケギニア人は以下の人物を考えております。トリステインからはアンリエッタ王女、ギーシュ、モンモランシー、ゲルマニアからはキュルケ

アルビオンからはウェールズ皇太子、マチルダ（ロングビル又はフーケの本名）

を想定しております。

これらに賛成の方は1を、不賛成の方は2をお願いいたします。

因みに、1の場合はアンリエッタとウェールズは結婚します。それと、地球に来たハルケギニア組全員がデバイスを持ちます。そして、なのは達の仲間になります。因みに登場はA's編に入ってからを予定しております。2の場合は、そのまま死んだままとなります。尚、この中の誰かだけを登場、もしくはこの中に名前の無い人物の登場と言うのは想定しておりませんので、予めご了承ください。期限は番外編1話が更新されるまでです。

アンケート（後書き）

次回こそ本当に番外編1話です。いつになるかは分かりませんが、出きるだけ早く更新したいと思っています。それと、人数を一人増やしました。

無印番外編1話「異次元の迷子」

場所：平行世界の地球のアースクレイドル内部

オウカ・ナギサのラピエサージユがアギラ・セトメのベルゲルミルを捕らえ

「逃がしはしない．．．．．！コードATA、発動．．．．．！」
とオウカが言う。するとピ・ピ・ビューと起動音が鳴り響く。そして
「コ・コ・コードATAじゃと！？き、貴様！自爆するつもりか！
？」

「さしものマシンセルも完全に消去してしまえば、再生不可能でしょう！？」

「オ、オウカ姉さん！！」

「アラド．．．．．ゼオラ．．．．．ラト．．．．．。これが姉として、
貴方達にしてあげられる最後のことよ．．．．．！」

「！！」

「待ってっ！オウカ姉様、やめてえっ！！」

「ち、ちつきしょう！俺がアギラをブツ飛ばしてやる！！」

「来てはなりません！！」

「！！」

「来ては駄目．．．あなた達まで私と同じ目にあってしまう．．．
。だから．．．」

「で、でもっ！！」

「どのみち、長らくゲーム・システムの支配下にあった私は．．．
もう．．．．．」

「ね、姉さん！！」

「え、ええい！離せ！離さんか、人形めが！！」

「いいえ．．．！お前は私と共に．．．逝くのです！」

「ね、姉さまっ！！」

「．．．さようなら、ラト．．．。私の可愛い妹．．．」

「そして、アラド・・・」

「姉さん!!」

「ゼオラ・・・」

「姉さま!!」

「あなた達と過ごした日々・・・楽し・・・かった・・・」

「そして・・・最期にそれを・・・思い出せて・・・良かった・・・た・・・」

「

とオウカが妹や弟達との最期の会話を交わした後にアギラが

「や、やめろ、アウルム1! やめろおおおっ・・・!」

と言うと、そのアギラを道ずれに自爆をした。そして、その爆発でオウカ・ナギサは死んでしまう筈だった。しかし・・・

場所：地球

なのはとテッサロツサ姉妹が友人となつて2日後の早朝、なのははクライドの鍛錬を見ていた。そこへなのはは日本で異常な空間の歪みが現れた事を結界で知った。なのはは急いでその原因を突き止めた。何者かがこの次元に来た事が分かったので、次元逆探知を行い、何処の次元からなのかを探った。そしてそれは成功した。なのはは急いで日本に戻り、異次元から来た来訪者の元に向かい、その次元の迷子を見つけた。その迷子は女性で怪我を負っていたので、月村家で看病する事になった。その時になのはは迷子である女性の体に異常を感じ取り、それで彼女の記憶を読み取った。すると、ゲーム・システムというシステムや投薬や肉体改造のせいで体がボロボロだという事が分かったので、その体を正常な状態まで戻しつつ、直す前以上の身体能力を与えた。更には彼女の記憶にあった人型機動兵器【ラピエサージュ改】を機動兵器型デバイスとして造った。そして、後は彼女の目が覚すだけの状態となった。

それから2日が経過した。

場所：月村邸

視点：オウカ

私は朦朧とした意識の中、目を開けた。そしてベッドから上半身だけを起こして

「ん、うん。此処は？それにどうして私は生きているの？」

と言いながら周りを見渡す。周りの雰囲気から察するに何処かの金持ちの家らしいことが分かった。私は外の見える窓の方に目を向けていると、そこに扉が開く音がしたので扉の方を向いた。そして、その扉を開けた人物は

「目を覚ましましたか。もう直ぐ覚ますだろうとは思っていました
が意外と早かったですね。それにしても驚きましたよ。転移の反応
がしたと思つてそこに来てみれば、貴女が怪我をして倒れていたん
ですから。それとも上半身を起こしても大丈夫なんですか？」
と言つたのだ。そして

「ええ、お陰様で大分良くなったわ。ありがとう。」

「いえ、大したことはしてませんから。それに寧ろ私が謝らないと
いけないので・・・」

「どういうこと？」

「はい。実は・・・」

と彼女は語りだした。それを聞いた私は驚きを隠せなかった。

なぜなら、目の前にいる少女が私の傷を治してくれただけでなく、
薬やゲーム・システムの影響でボロボロだった体を正常な体に戻し
つつも強化を施してくれたと言う。しかし、それでどうして謝られ
るのが疑問に思った。なので

「でもそれでどうして謝る必要があるの？聞いた話だと謝られる理
由が無いんだけど？」

と言った。すると彼女は

「貴女の許可無くそれらをやってしまった事や貴女の記憶も勝手に

見てしまったことを謝りたいんです。」

と言う。体を直してもらった事も驚きだがそれ以上に驚いたのは記憶を見たという事だった。しかし私は怒る気は無く、寧ろ感謝の気持ちの方が上回っていたので

「うん、気にする必要は無いわ。やっぱりお礼を言わせて貰うわ。助けてくれてありがとう。」

と言った。すると

「そうですか。でもお礼は私ではなくこの屋敷の主にしてください。此処は私の友人の家なので。」

と言う。なので

「じゃあ、その人達にもお礼を言わせて貰うわ。でもその前に……」

と言うと私はあることに気が付いた。それは互いに名乗っていないと言う事だった。しかし、私は頭の中を見られている。つまり私だけ知らないのだ。なのでまずは

「そつえば名乗って無かったわね。私はオウカ・ナギサ。元ノイエ・DC所属のパイロットよ。」

と名乗る事にした。そして

「私は高町なのと言います。では此処の主達を呼んできますので「待つて。私も行くわ。挨拶やお礼がしたいし。」……ん、もう殆ど調子を取り戻したみたいですし……分かりました。では、行きましょうか。」

と言うとなのはちゃんと私は部屋を出てからこの屋敷の主やその家族に会って、お礼を言った。その時に驚いた事は自己紹介の時に元ノイエ・DC所属と言ったが、彼女達はノイエ・DCやDCの事を知らない事だ。しかし、異星人に関しては驚かずに、なのはちゃんが自分は地球人とベルカという世界、もとい星の人間との間に生まれた子供の子孫だと言う事を教えられた。そして、なのはちゃんから新たに驚く事を知らされた。それはなんとこの世界は私の居た世界ではなく、平行世界の地球で、此処にはCDや連邦軍だけでなく、

P.TやA.Mといった人型機動兵器は存在してなくて、今だに私達の世界では旧式と呼べるような戦闘機や戦車等が主流となっている世界なのだと教えられた。その事に驚きつつも元の世界に返れないかと聞いた所。なのはちゃんが

「帰りたいんですね？分かりました。では私が元の世界に返しませう。幸い貴女が来た次元のデータを取っていますので直ぐに帰れますよ。」

と言った。それを聞いた私は

（この子、何処まで規格外なの？）

と驚いたのであった。それを感じ取ったのか、なのはちゃんは苦笑していたが急に真剣な顔をして

「オウカさん。貴女が帰りたいのであればこれを渡します。」

と言いい私に黒いペンダントを渡してきた。そして私は

「これは？」

と聞くとなのはちゃんは

「これは貴女の記憶を読んだ後にそれを参考にして造った物です。」

と言うと、私を外に連れ出して

「詳しい事に関しては、いつか貴女の世界に行った時にでも説明しますが、とりあえず今からこれを手に持った状態で私の言う言葉を復唱して下さい。」

と言った。私は疑問に思いつつも頷いた。そして

「ラピエザージュ、機動兵器モードでセットアップ。」

と言う。私はそれに驚き

「ラピエザージュ？！それって、私の機体じゃない！！」

と叫んでしまった。するとなのはちゃんは

「ええ、貴女の記憶から私が造りました。機体性能や武装などが強化されているので気をつけて下さい。それと、ゲーム・システムは排除しているので心配は無用ですよ。」

と言うのであった。その後、なのはちゃんからラピエザージュのモ

ードの説明を受けた。まずは先ほど私に言わせようとした機動兵器モードは、私が乗る機体も状態の事らしい。次に、デバイスモードは鎧型デバイスと呼ばれる私が鎧として身に付ける事の出来る形態のようだ。そして、最期の待機モードは、今の黒いペンダント形態の事でいつでも持ち運びできるようにした形態らしい。そして、ある程度の説明を受けた後に私は先ほどなのはちゃんの言っていた言葉の口にする。

「ラピエザージュ、機動兵器モードでセットアップ。」

すると、待機状態のラピエザージュが、私の手を離れて光りだした。私はその光の眩しさに目を瞑った。そして、光が収まるとそこにはかつての私の愛機であるラピエザージュを少し大きくして武装が増やしたような機体が立っていた。私は機体になる事は知ってはいたけどここまで完成度の高い機体に仕上がっているとは思わなかった。ので驚いてしまった。そして、私は彼女達に別れを告げてなのはちゃんの手で元の世界へと転移をするのだった。

視点終了

オウカが元の世界に戻った時、そこはヘルゲートの内部であり、ハガネ&ヒリュウ・改がデユミナスと対峙していた。そして、オウカの登場でジュミナス達に隙が出来て、ハガネとヒリュウ改はヘルゲートより離脱できた。その後、オウカはハガネに招かれて、スクールの弟や妹達と再会を果たした。その後、なのはと出会う前はゲイム・システムや投薬により体がボロボロだったのでその事を調べたのだが、異常は見られなかった。それを驚く者と喜ぶ者がいた。更には機体も調べられ、オリジナル以上の性能となのはが言った通りゲイム・システムが見当たらない代わりに、ハガネ&ヒリュウ・カイの技術者達曰く、未知の動力源（擬似リンカーコア）が追加されている事や性能が変われずに鎧に変化する事や次元通信と次元発信機等が搭載されている事に驚き、その事を聞いた。するとオウカは「私を助けてくれた少女が造ったので詳しい事は分からないのです。

です。機体の事や私の体の事に関しては彼女に聞いた方が良いでしょう。幸い、次元通信機も付いているので聞いてみます。」
と言った。そして、その後オウカは直ぐに通信を開き、なのはを呼び出した。オウカはなのはにその事を聞いた。すると返事は
「此方も今は厄介な事にかかわっているのです。直ぐにとは言えませんが、必ず行きますので待っていてください。そうですね・・・」
6日後位に連絡します。」
と返ってきた。その事は直ぐにクルー達に伝わり、そのクルー達は
その日が来るのを待つのであった。

おまけ

オウカ・ナギサ

スクール出身のパイロットでその腕は一流だが、アギラ・セトメにより精神や肉体等を操作されていたが、アースクレイドルでの対ハガネ戦で記憶を取り戻し、精神操作も解けた。その後は洗脳していたアギラ・セトメ諸共自爆した。しかし何故か聖王なのはがいる平

行世界の地球に流れ着き、そこでなのはに救われる。その時、正常な状態ではあるが肉体強化が施されている。尚、スクールでのコードネームはアウルム1でスクールで初期からいた披験体だった。他のスクールメンバー同様にスクールよりも前の記憶は完全に無くなっている。

ラピエサージュ改

通称：ラピエサージュ

魔力量：EX

アサルトドラグーン

基本的にA・Dラピエサージュを模しているが、少しだけ大型化しているのと機体の重量が重くなっている。性能と武装は強化されており、スプリットミサイルH以外はそれぞれ2つに増えている。ただし、スプリットミサイルHの積載量も増えているので、その分多く撃てる。また、防御面や機動性もパワーアップしており、オリジナル機であるラピエサージュよりも強力になっている。ただ、その性能をフルに活用する為には操縦者兼マスターであるオウカの肉体を魔力で強化しなければならない。それと、自己修復機能や自己補給機能なども有しており、長期の単独行動も可能。内部にもインテリジェントデバイスにも積まれているAIが補助の為に組み込まれている等の強化がされている。製作者であるのはとグラギオスの意向により、ゲーム・システムが外される代わりに、次元発信機と次元通信機が組み込まれている。特殊防御に魔力フィールドを追加しているが、オウカが魔力を持って無いので、擬似リンカーコアをその為の動力源としている。尚、実弾系の武装面の補給に関しては魔力で実弾を造れる。更には、2挺のオーバー・オクスタン・ライフル（O・Oライフル）はビルトファルケンのオクスタンライフル級にまで小型化された状態ではあるが、威力が変わらない。尚、デバイス同様に待機状態にする事や鎧化する事が可能。

ラピエサージュ

アサルト・ドラグーン

ノイエDCの改良型A・Dで、アースクレイドルで自爆した機体。アースクレイドルで造られたアシュセイヴァーをベースとしたカスタム機でATXチームのアルトアイゼンとヴァイスリッターのデータが流用されている為、武装に共通点がある。操作系にゲーム・システムが使われている。名称の意味はフランス語で「継ぎ接ぎ」である。

おまけ2

「アンケート結果発表」

ハルケギニア組みの登場についてのアンケートの結果、登場することが決まりました。

ご協力ありがとうございました。

無印番外編1話「異次元の迷子」(後書き)

遅れてすみませんでした。次は無印番外編2話です。この2話が終
われば、いよいよA's編が始まります。

無印番外編2話「アダムとイブと母子」(前書き)

PCをようやく換えました。とはいっても父のお下がりの物ですが・
・・・。

無印番外編2話「アダムとイブと母子」

なのはがオウ力を元の世界に送り返した後、直ぐに次の異変が起こった。それは……

場所：月村邸上空

視点：アクセル

「ここか！？ 転移反応があつたのは？」

と俺はアルフィミイに話しかける。そして

「そうみたいですの。しかも、目的地は私たちがキヨウスケやエクセレンと分かれた次元に似て非なる世界のようなのです。」

と答える。俺はそれに驚くことなく

「そうか。まあ、何かあつても向こう側のベーオウルフやラミアなども何とかするだろうな。まあ、俺たちの知っている奴らに似ている性格や力ならな。」

と言う。それを頷いて

「はい、それは信じるしかありませんの。」

と答えてくる。そして、俺はそこで気になったことがあつたので

「しかし、妙だな。」

と口にした。するとそれに反応したアルフィミイが

「何が、ですの？」

と聞いてくる。そして、俺はそ

「考えても見ろ？！ さっきこの世界の町並みを見る限り、此処はかなり昔の時代だ。なのに何故このような次元転移が出来る技術が存在す

る！！ これはどう考えてもおかしいだろう！？」

と理由を言う。そう、俺達はアスレスを展開しながら、この近辺の町を見ていたのだ。そしてアルフィミイも

「確かにそれはおかしいのです。ではこれから調べますの？ アクセル。」

と聞いてくる。俺はそれを

「ああ。」

肯定して、更に言葉を続ける。

「まずは転移反応があったこの近辺から探す。」

と言うと突然、下から高エネルギー反応を示すソウルゲインの警戒音が鳴った。それを意味する事は即ち、転移をした人間が居る可能性を示していると言う事だ。すると、現れたのは空を飛んだ金髪に翠と紅の瞳をした小娘だった。その小娘は

「先ほどの転移について調べに来たのですね？それなら、下に降りて話をしましょう。」

と言って来た。どうやらこの小娘は誰がやったのかを知っているらしい。それに畏も無さそうだったので

「ああ。」

とソウルゲインのスピーカーから返事を出した。アルフィミイも異存が無い様で

「分かりましたの。」

と同じように小娘に聞こえるように返事をした。そして俺たちは空を飛ぶ小娘の指示通りに下に降りた。そして、俺は機体からも降りたが、アルフィミイは降りられない体らしく、降りられないと言うのであった。すると

「分かりました。では降りられるように貴女の体を人間にしましょう。それからそのお兄さんも人間に戻しましょう。」

と言って来たのだった。アルフィミイは半信半疑で

「本当にそんな事が可能なんですか？それに何故私達が唯の人じゃないと分かったのですの？」

と俺も思った疑問を口にした。すると

「出来ますよ。何故分かったのかと言うと、私には生き物の記憶や心等を読む事が出来るのです。」

と返してきた。そして更に

「それに私も人ではありません。そのお姉さん、アルフィミイさ

んになら分かりますが。」

と言って来たそれをアルフィミイが頷き

「はいですの。確かに彼女は人ではありません。しかも、かなり高位の存在ですの。」

と言う。それを小娘は

「よくそこまで分かりましたね。その通りです。私は聖王教と言う宗教の神にしてラ・ギアスと言う嘗て滅んだ世界の3神の1柱である創造神グラギオスと契約して完全な神となった存在なのです。」と苦笑しながら言うて来た。しかし俺達の知っている地球にはそんな宗教が存在しないはずだと言おうとした時に

「まあ、他の世界と言うより他の星での神ですから信者は地球には全く存在しません。居るとしても1人か2人でしょうね。」

と言うて来た。その後、小娘はその理由を話した。何でも、この世界に紛れ込んだりこの地球出身の騎士が居るからだそうだ。因みに騎士というのは、ベルカという嘗て滅んだ世界での優れた魔法使いの事らしい。そして、目の前に居る小娘こそその頂点に君臨する存在だと言うのだ。俺はオカルトには興味が無かった為、無視した。

その後、本当にアルフィミイを人間にしてペルゼインのコックピットから出られるようになり、俺も身体機能を向上させた状態で人間に戻った。因みにペルゼインやソウルゲインにも強化が施されて、性能が向上したとの事だった。確認してみると、本当に上がっていたので驚くしかなかった。さすがにそこまでされると神だと言う事を信じるしかなかった。

視点終了

視点：アルフィミイ

神だということを得た私達はそれぞれ自己紹介をして、ようやく転移の事を話せると思ったその時、次元の歪みが私達の上空に現れました。その次元の歪みは、人を2人放り出すとすぐに消えてしまった。どうやら何らかの理由でこの世界に来てしまった、人らし

いです。しかし、高高度からの落下してくる為、このままでは2人は死んでしまうと判断した私はペルゼインに乗り込もうとした時、なのはが既に動いていた。アクセルも私同様にソウルゲインに乗り込もうとしていたのですが、なのはがその2人を素早く助けた為、必要がなくなっていました。それにしても物凄い速度ですの。機体も無いのに良くここまで速度を出せるものですねと感心している間になのはが2人を抱えて降りてきました。そして。そんなのはは

「は、さっき別の人を送り返したのに、また別の世界から人が迷い込んでくるなんて・・・これは調べる必要がありそうだね。」と独り言を喋っていました。その独り言は私達の耳に届いていて、それに過剰に反応したのはアクセルでした。

「おい！！貴様！！今なんて言った！！」

となのはを問い質しました。するとなのはは

「質問の答えはちゃんと答えます。でも、その前にこのお2人を屋敷の中に運ぶのが先決です。質問の答えを聞くつもりなら貴方方も来てください。」

と言い、私達2人は怪我を負って気絶した2人を何かの力で浮かせたまま屋敷の方に向かうのはの後に着いて行くのでした。

視点終了

視点：なのは

私は怪我を負った2人を魔法で浮かせて運んでいた。その後ろにはアクセルさんとアルフィミイさんが着いて来ていた。そして、その間に話せる事だけを話そうと思い

「このお2人を運びながら、貴方方の機体についての話をさせて貰います。」

と言い、私はまずは彼らの機体に施した改造についての説明をした。

その説明が終わった頃には空いてる部屋、それもさつき元の世界に返したオウカさんが寝ていた部屋であった。そして、私はドアを開けてから2人を寝かせて体の怪我を治した。勿論肉体強化付きで。傷を完全に治した後、アクセルさんとアルフィミイさんの方を向いて「では、ある程度落ち着いたので先ほどから聞きたがっていた転移の事をお話しましょう。」

と言った。そしてオウカさんがこの世界に怪我を負った状態でこの世界に来て、それを見つけた私が怪我を治し、序に肉体強化した事、彼女に機体を与えたことを話した。そして、彼女が元の世界に帰りがったので、元の世界に帰したと言うことを話した。勿論なぜこの世界に存在しないはずの次元転移の技術を持っているかと言うのも「確かにこの世界には存在しません。しかし、私は転移魔法が使えますし、装置を作る事もこのグラギオスの力を借りてではあります。ができます。」

と首に架かっている虹色の宝石を触りながら教えた。因みに、アクセルさんはオウカさんの事を、平行世界の事とはいえ知っていたので、信用してくれた。そして、それを黙って聞いていたアクセルさんは

「それは分かったが、貴様がこいつ等に使っていた力は何だ？それに、こいつ等もアウルム1・・・いや、オウカ・ナギサ同様に元の世界に帰すつもりか？」

と怪我をして寝ている2人、レイ・ザ・バレルさん（以降はレイ）とタリア・グレイスさん（以降はタリア）を指してこう言った。

勿論この2人の名前は記憶を読んで分かったことである。そして私は「私がさつき使ったのは魔法です。そして、彼らを送り返すかについてには彼ら次第です。」

と返した。それに対しアクセルさんは

「そうか、あれが魔法か。」

と言う。もっとも興味がなさそうではあったが……。そして更に私は

「はははっ、でもこれから貴方はどうするんです？また、居場所を探す為に旅を続けるんですか？」

と聞く。すると

「ああ、そのつもりだ。……って貴様！！また記憶を読んだな。」
と言う。

「またではなく先ほど記憶を読んだ時に貴方の思考パターンも理解したので、こう考えているのではと読んだだけです。」

その答えにアクセルさんからではなくアルフィミイさんから

「……正直、何でもありで、神を超えていると思いますの。」
と呆れた様な声と表情でそうこぼしていた。

そしてこの後、直ぐにアクセルさんとアルフィミイさんは月村邸から出て、機体に取り込んで飛び立った後、直ぐに転移していった。

私は2機が転移して消えるまで見送ったのであった。

視点終了

アクセルとアルフィミイが異世界又は異次元に旅立つてから5時間が経過した。

レイとタリアの2人は目を覚まし、なのは達は自己紹介をしてから

コスミック・イラ

此処が違う世界の地球であり、C・Eの世界では無いと教えてから、2人の怪我を治した序に肉体を強化したことを話した。更にレイの寿命を怪我の治療や肉体強化と共に普通の人間の寿命まで引き上げた事を話した。その後、レイとタリアになのはは元の世界に戻るかと聞いたが、2人とも元の世界では死んだことになっているからこの世界で平穩に暮らしたいと言うことだったので、なのはの知り合い経由で、戸籍と仕事を用意して様子を見ることとなった。勿論、日本語は出来なかったのだ、なのはが先生となり日本語や法律、更には一般常識なども教えたが飲み込みが早く、なのはが暇つぶしに開発していた機械の1つ、睡眠学習装置の使用も手伝って4日で教えたこと全てをマスターした。そしてその後、バニングス家が用意

していた仕事に付き、2人仲良く働き始めるのであった。

おまけ

キャラクター紹介

アクセル・アルマー

なのはにより人間に戻った。その後なのは達と別れて、また別世界へ旅立つ。

アルフィミイ

なのはにより、アクセル同様に強化された状態で人間にされる。その後、また別世界へ旅立つ。

レイ・ザ・バレル

なのはに救われた後、なのはにより普通の人間と同じ寿命を手に入る。そして、例のごとく身体能力が強化されている。次元の歪みが現れたのが殆ど一瞬だったので、なのはやグラギオスの力を以つてしても逆探知が出来なかったが、時間操作により何とか元の世界へ帰れるようになったと言われたが、自分は死んだことになっていると判断し、聖王なのはの居る並行世界の地球で平穏に暮らすことを選択する。

タリア・グラデイス

死に掛けていたので治す序に強化された。
レイ同様の理由で、聖王なのは居る地球で平穩に暮らすことを選
択する。

尚、4人共聖王なのはがいる地球に来るまでの経緯は原作を参照。

機体設定

ソウルゲインとペルゼイン・リヒカイト

全ての性能が向上し、尚且つラピエサージュ同様に魔力フィールド
が展開でき、次元通信等を出来るようにした。更には、ラピエサー
ジュには搭載していなかった別次元や時空を自由に転移できる転移
装置も内蔵されている。もちろん、デバイス形態や待機状態にも変
化できる。

起動パスワードは、ラピエサージュのパスワードと同様に「
（機体名）、ー（形態名）モードでセットアップ。」である。

因みにこれはなのはがアクセルとアルフィミィに説明した内容でも
ある。

無印番外編2話「アダムとイブと母子」(後書き)

なんとか今年中に書き上げることが出来ました。来年からはいよいよA's編に突入します。

来年はもっと頑張りますので、今後も宜しくお願い致します。それでは良いお年を。

A、S 編第1話「管理局対策会議とテロ組織壊滅と造られた闇／前編」(前書

明けておめでとう御座います。今年もよろしくお願い申し上げます。

A' S 編第1話「管理局対策会議とテロ組織壊滅と造られた闇」前編」

管理局のリンディ提督とその息子のクロノにクライドを会わせてからかなりの時間が経ち、6月になっていた。そんな中、なのはは聖王騎士3人を連れて管理局の穏健派である伝説の3提督&ハラウン家族&グレアム提督&レティ提督と無所属のプレシア・テッサロツサと管理局に犯罪者指定されているジェイル博士と聖王教会の穏健派であるカリム&シャツハ&ヴェロツサと会っていた。勿論、その3人の聖王騎士とは、なのはの兄にして聖風の魔装騎士の高町恭也、夜の一族内での名門である綺堂家の次期当主である聖水の魔装騎士の綺堂さくら、地球で経済を牛耳るバニングス家の令嬢にして聖火の魔装騎士であるアリサ・バニングスである。何故、こういったメンバーが集まったかと言うと、自己紹介を兼ねた顔合わせと管理局と聖王教会の間についての今後における対策についての話し合いである。勿論それは秘密裏に行われ、なのはの隙間で行われる程の徹底振りだった。なのはの隙間に自力で入るのは、同じ能力を持つ八雲紫だけである。つまり、他の存在はなのはや紫の隙間には入れないのである。これ以上に機密性の高い会議室はあるだろうか？否、在る訳がないのだ。つまりそれほどの機密性を持たなければならぬ会議なのである。会議では、以下の事が議題として挙げられた。

どうやって戦力を集めるのか、民間人の避難について、破壊神ヴォルクルスや信者達に対しての対策、戦後の事後処理について等であった。

この第1回で決まった事は、戦力については聖王のゆりかごの強化とガジェットや自動人形の新型開発や戦艦や空母の新規製作等兵器関連だけに留まった。

民間人の避難については、なのはが暇つぶしで開発していた空間転移装置”リユケイオス”を使用することが決まった。この空間転移

装置”リユケイオス”は、仮想空間に対象の人物や物を送り込んでその空間で生活してもらおうと言うもので、細かい設定が可能で、クラナガンの都市部分だけを切り取り、地上本部周辺だけを現実の空間に残すと言う事も可能だ。何故地上本部を潰すかと言うと、単に管理局の地上のシンボルを潰すことが目的である。勿論、理由もある。それは、怪しくもシャドウミラーが平行世界の地球に行く時に使用した物と同じ名称ではあるが、機能は大分異なる。なのはがこの名称にした理由は、なのはが名称について困っていた時にアクセル達が来て、その時に彼の記憶を読んで、ピンと来たのがこのリユケイオスだったという訳である。

ヴォルクルスや神官達への対策は、風の遍在を行った後の本体の聖王なのはが指揮する3人の魔装騎士（4人目が目覚めれば4人）となのは付きの自動人形であるアルファ&オメガ&デュークと現在秘密裏に製作中ではあるが、4機目のなのは付きの自動人形で挑むと言う事が決まった。

戦後の事後処理などについては、管理局を解体して8つの組織に分割する事が決まった。解体する内容は以下の通りである。

- 1つ目は司法組織（裁判所等）
- 2つ目は軍事組織（そのまま軍）
- 3つ目は警察組織（簡単に言えばタイムパトロール）
- 4つ目は保護組織（環境や自然、野生動物の保護等で、分かり易く言えばSTSのエリオやキャロが所属している自然保護隊を、部隊ではなく、大掛かりな組織にしたもので、ボランティア活動等も行う。）

5つ目は政治組織（国家元首については、アメリカなどの大統領制を予定している。ミッドの最高権力者は、管理局の最高評議会なので、大統領や国王等といった国家元首は存在していない為。作者の見解で言わせてもらうと、もし管理局の上に国家元首や政治組織が存在していたら原作であそこまでの腐敗はしていないはずだと思う。理由としては、まともな政治家が1人でもいれば、絶対に誰かに気

づかれる可能性があるから。もし、仮に政治家がいたとしてもそれは多分、腐った政治家が無能な政治家のどちらかか両方。」

6つ目はロストロギア管理組織（名称とおりロストロギアを安置組織で、他の組織が手に入れたロストロギアを預かる所である。また、それらを組織が無断で使用したり、隠したりしていないかの調査をする事が出来る。自分達で手に入れた場合も、他の組織に連絡をしなければならぬ。）

7つ目は監視組織（上の6つにそれぞれに不正な事をしないかどうか監視を付ける。勿論その逆もあり、監視組織もそれぞれの組織に不正を行っていないかを監視される。）

8つ目は民間には知らされることのない組織（世界が危機に晒されると動く組織で、主なメンバーは、なのは、恭也、さくら、アリサ、まだ覚醒していない人で構成される。）

因みに、聖王教会については、なのは、紫、さとり（幻想郷にある地霊殿の主で心や意識を読める能力がある）、リスティ、フィリス、知佳が協会に所属する全員に会ってから判断すると言う事で決まった。こうして会議は終わり、それぞれの場所に戻るのであった。

その翌日、なのはは交渉の為にさざなみ寮と病院に行き、更には幻想郷に行つて該当者と会った。その結果、全員がOKを出し、なのははそれに深く感謝を込めながらそれぞれに対して深々と頭を下げてお礼を言った。その時、幻想郷に来たなのはは、ついでとばかりに、にとり&詠林に会つて、それぞれにある依頼をしたのであった。更にその翌日の日曜日、なのはは朝方から、なのは付きの3機&咲夜と紫、幽々子、レミリア、フラン、ルーミアといった幻想郷の者達と共に、ある所に行っていた。

場所：香港にある香港マフィア兼テロ組織”龍”の本拠地

視点：なのは

私は薄暗い室内で、2人の内1人の男を切り殺した。

「ぐわー！！」

と悲鳴が聞こえるがそんな事は気にせず、もう1人の男を殺気を込めて睨み付けた。その男の右腕には刺青が彫つてあり、その刺青には龍という文字があつた。そう、此処は私の親戚である御神家と不破家の人達を殺した組織”龍”のアジトだ。しかも、その総本山である。つまり、私は今いる所に龍の頭がいるのである。他のアジトには、実践訓練を兼ねて私付きの自動人形3機、つまりアルファ、オメガ、デュークの3機も参加していた。ただ、移動手段は紫さんに頼んだ。更に、その3機が担当している場所以外には幻想郷の住民が参加しており、全ての龍のアジトは、もう直ぐ壊滅という状況であつた。因みに幻想郷の住民は、外の世界では力が弱まってしまうので、紫さんや私の境界操作のおかげで幻想郷と同じように戦えるようになった。今さつき切り殺したのは、龍の最高幹部にして最強戦力の黒龍である。そして、まだ五体満足の目の前にいる男こそ、龍のボス”神龍”である。その神龍が私に向かって

「き、貴様！！御神の生き残りか！！」

と言う。それに答える義理はないが、とりあえず答える事にした。

「そつだ！！貴様らに殺された一族の敵、今此処で討たせてもらう！！」

と言つた私に対し、神龍は

「フハハハハハ、やはり生き残つておつたか！！人食い鴉が生きていた事で、ある程度は予想は付いていたが……。そうか！！はははははははははは！！」

と狂つたように笑い出した。因みに人食い鴉とは私の叔母である美沙斗さんの異名である。そして

「私は今すぐ貴様を殺して、他の御神も殺さなければならぬ！！しかし、私には貴様を倒す術がない。」

と言う。私はある程度奴の考えを読んでいたので

「じゃあ、自爆で私と一緒に死ぬの？」

と余裕の態度で聞く。すると

「ははははは、よく見破ったな。では共に朽ち果てようぞ。」

と狂ったように笑いながら私に向かって走り出した。それも予想の範囲内だったので、私は直ぐに時間停止をしてから風の遍在を使用する。そして、本体の私は遍在を置いてから隙間に入っていた。

その後、時間を戻した。すると、神龍は私の遍在に組み付いてから爆弾とライターを取り出してから爆弾の導火線に火を付けた。導火線に火が付いて、その火が爆弾に辿り着くと爆発した。その後、神龍の死を確認した後、私は

「これが本当の無駄死にね。」

と神龍の焼死体を見ながらそう言うと、仲間達と待ち合わせ場所に向かっていった。

視点終了

おまけ

このA's編1話における色々な補足事項

この会議に出席できる筈の忍とレジアスとゲンヤは、予定が入っていた為に参加できませんでした。なので会議での参加は、第2回以降になると思います。それと、本来は会議に入る事が決まっていたゼスト隊とティード元一尉は、会議出席を自分達は戦場の方が合っていると言う理由で辞退した事になっています。因みに、第一回でカリムの预言詩も読まれている為、内容は第1回会議に出席した人間全員が知っています。その後はその会議に出席した人経由で予言や会議内容が伝わるでしょう。

民間に知られる事のない組織については、まだ名称が決まっています。存在目的は上記に記してありますが、何故このメンバーなのかは、なのはは神で、世界を守るという義務がある。勿論、それは魔装機神のマスターも同様の使命を持っているからです。その義務の代わりに男性は一夫多妻制で、妻を何人も持つ事が可能である。女性を決めた男性を妻が居ようが居なかつても強制的に夫にする事が出来る。その時の男性には、例え魔装機神のマスターであつても同じ組織に所属していたとしても拒否権は存在しないという決め事もあります。それを決めたのはなのはで、その決まりに眉を潜めたのは恭也で、喜んだのはさくらとアリサ（アリサにも好きな人が居ます。）である。因みに、他の人達は苦笑や暖かく見守つたりしていました。

なのはがにとり&詠林に依頼した内容はまだ秘密です。ただ、管理局の秘密兵器や対抗策だと言う事だけは言っておきます。

龍壊滅時に、原作で美沙斗を騙して利用していた龍の構成員も、デュークによって殺されています。

神龍が狂つたのもなのはが部屋に入つた直後に時間停止と精神操作の能力を使用して精神を狂わせて冷静な判断が出来ないようにしたからです。その為、遍在のなのはが何かしらの行動を取らなくても不信には思わなかつたのです。

A' s 編第1話「管理局対策会議とテロ組織壊滅と造られた闇／前編」(後書

恭也のハーレムフラグが立ちました。次は後編でいよいよ夜天の書が覚醒の日を迎えます。でもその前に美沙斗さんが登場します。それにある人たちも復活します。ただし、復活した人たちは本編では殆ど登場しません。登場するとしても番外編です。それと、もしかしたら管理局を利用している闇も動き出すかもしれません。

A ' S 編第2話「管理局対策会議とテロ組織壊滅と造られた闇」後編」

なのは達が龍を完全に壊滅させたのを皮切りに、その他のテロリスト集団や大規模犯罪組織が壊滅した。勿論、なのは達の仕業である。なのはは、龍の事も含めて香港国際警察防隊に伝えた。その事が理由でスカウトされたが、他にやる事があるからと言って断った。それから数日後の土曜日、なのははある廃ビルに来ていた。

場所：廃ビル付近

視点：なのは

「此処・・・だね。」

と言いながら私は目的の廃ビルの中に入り、私は完全に気配を消しつつ、気配を探りながら奥へと向かっていく。そして、目的の気配の主がいる部屋へと辿り着くと、一気にその部屋の扉を開けた。それに反応したの気配の主は

「誰だ！！」

と女性の声でそう言った。その声の主こそ私が探していた目的の人物。

「始めまして、御神美沙斗さん。」

そう、私の叔母の御神美沙斗さんである。その後、私は

「龍への復讐は、もうしなくても良いですよ。」

と言った。すると、龍が壊滅した事を知らない美沙斗さんは

「何故、私が龍へ復讐している事が？それに、なんで復讐しなくて良いなんて言う？」

と言ってきた。私は仕方ないと言うような顔をして

「それはですね・・・私や私の仲間が龍を壊滅させたからなんです。」

と言うと

「本当だろうね。でも、なんで君みたいな子が・・・龍を倒したのかって？それに、何故龍を倒したのか理由も知りたいと・・・ほうほう。」っ！！！！」

と美沙斗さんが喋っている途中で、私は心を読んだことを口に出した。それに驚く美沙斗さんに私は

「ああ、心を読んで意ことが分かりました？」

と笑いながら言う彼女から普通の人間や武人が卒倒しそうな殺気を出して

「そうやって人の心の中に無断で入り込むのは・・・感心しないな！」

と言うと私に向かって小太刀を抜き、居抜きの構えを取った。しかし、それに臆することなく私は懷から待機状態のライトを取り出してから小太刀形態にしたライトを構える。ライトを小太刀にした事には驚いていたが、直ぐに私に向かって神速を使ってきた。しかし、それは丸見えであり、直ぐにライトと彼女の小太刀をぶつける。パワーもスピードも私の方が圧倒的に上だったので押し返してから「は、此方としては話し合いがしたかっただけなんですけどね。」と溜息を付いた後にそう言いながら彼女を見つめ

「どうして私が龍を討つのか・・・それは私の目と髪を見てもらえば分かると思いますが？」

と言った。その言葉で私の顔を見る。すると、私は何者かが分かったように

「確かに・・・龍を倒す理由はあるな。でも、どうして兄さんの娘が此処に？」

と言った。その言葉に

「それはですね。貴方に龍を壊滅した事を知らせたかったんですよ。それにある人達に会せようと思ったからなんです。」

と言い、更に私は

「一旦此処を出るので、お互いに、武器はしましましょう。ああ、それとですね。誰に会わせるかはお楽しみです。それでは、一名様

隙間にご案内。」

と言うと、隙間が現れて

「なっ！！！！！！」

と驚く美沙斗さんを余所に飲み込んでいった。それを見届けると私も隙間の中に入っていた。

視点終了

隙間に入ったのはと美沙斗が着いた場所は、月村邸であった。美沙斗はかなり怒っていたが、何とか宥めた。そして、なのはに

「会わせたい人って誰なんだい？」

と聞くと、なのははクライドの時同様に能力を使った。すると、クライド同様に空間に歪が出来た。ただ、その大きさがクライドの時よりも大きくその大きさがある程度まで固定されると、そこから多数の人間が落ちてきた。そして、美沙斗はその全員に見覚えがあり「静馬さん！！母さん！！父さん！！一臣！！それにみんな！！」と大声で叫んでいた。それをなのはが

「落ちて置いて下さい。彼らを安全な所に置くのが先決です。」

と宥めた。その後、なのはは静馬&母さんこと御影&父さんこと勝&一臣&琴絵を高町家に送り、咲夜に面倒を見るようにと念話で命じた。

その他の御神や不破の人間はそれぞれに月村家&バニングス家&綺堂家の別荘や部屋を借りて寝かせた。その御神と不破の人間が寝ている間に、なのはは美沙斗に龍が彼女を利用して、龍の敵対者や邪魔者や暗殺対象を殺させたと言うことを話した。それを聞いた美沙斗は深い絶望と後悔を感じて、自分を責めた。なのははそんな彼女に「もし、関係のない人達を殺めてしまった事に後悔をしているのなら、その人達の方まで生きて、その人達の方まで幸せに生きて、その人達の為に働けばいいんです。」

と諭した。すると

「直ぐには無理だけど。そう出来たらいいな。」

と何とか持ち直した。そこへなのはは

「なら、私達と一緒にある組織を潰しませんか？」

と言う。それに対し、美沙斗は

「組織を・・・潰す？」

と聞く。その質問になのはは

「はい。今、私は時空管理局と言う組織相手に戦争を仕掛けようとしています。その組織は、表向きは真つ当な組織ですが、裏では彼らが

禁じている違法実験等を行っているのです。」

と言う。すると

「なっ!!」

と驚く美沙斗。しかし、なのはは無視して

「美沙斗さんはそんな組織聞いた事がないと思いますが、それはあくまでも地球上のことです。」

と言葉を続ける。そこに美沙斗が

「じゃあ、どこの組織なんだい？まさか宇宙人が作った組織だなんて言わないだろうね。」

と言う。その言葉になのはは

「正解です。そして、その組織の名前は、ミッドチルダと言う星に存在しています。宇宙船については、今は建造最中ですので、大分先になります。」

と言う。下手に次元世界の事を話すと頭が混乱するので宇宙という事にした。それに対し

「でもどうして私なんだい？私にはたいした力が無いのに・・・。」

と言う。それを聞いたなのはは

「向こう側での戦力は、殆ど魔法です。つまり、剣士がいることによって混乱が生じるのです。それに・・・」

と途中で言葉を止める。それに不審に思い

「それに？」

と聞く。そして、なのはは

「それに貴方にも魔力があるのです。それも、管理局側で言うSSランクのね。ああ、魔法使いには実力や魔力によってランク付けされま

す。そして、美沙斗さんの魔力値は、管理局でも一握りしか存在しないAAランクの更に上のSSランクなのです。」

その後、なのははランクについての説明をしてから、魔法を覚えて共に戦ってくれるかと聞いた。結果は、恩返しと罪滅ぼしの為と言う理由でOKだった。その事は恭也達にも直ぐに伝えられ、歓迎された。こうしてなのは達は、新たな仲間を手に入れたのであった。因みに、士郎や美由希とは再開して、理由を話して美由希とは和解した。その後の美沙斗は、家を買ってから静馬と美由希、それに一臣と琴絵の夫婦と一緒に暮らした。

そして、なのはは、その日の夜の0時半頃にはやてから夜天の書の守護騎士プログラムが起動したとの連絡を受けた。その連絡により、なのはは急いで八神家へと向かうのであった。

一方その頃、ある場所では2人の男が会っていた。その一方は白河愁としてもう1人は暗い緑の髪の色を持つ老人であった。その老人に愁は

「お久しぶりです。ルオゾール。300年ぶりですね。」

と挨拶をした。それに対し、ルオゾールと呼ばれた男も

「ええ、本当にお久しぶりですね。クリストフさま。」

と挨拶をした。そして

「さて、再開の挨拶はそのくらいで良いでしょう。それよりもお伝えしたい事があって此処に来ました。」

と愁が言う。それに反応したルオゾールは

「何でしょうか？」

と聞く。すると愁は

「地球と言う世界で闇の書が覚醒をしました。ヴォルクルス様の復活の為に、それを利用しないではありませんよ。」

と言う。すると、それに食いつき

「ほう？確かにそうですね。しかし、何故そのような事が分かったのです？」

と聞く。その問いに

「それはですね。私の転生先が地球だからなのです。」

と愁は答える。それに納得したのか

「なるほど、では早速向かいましょう。」

と言うルオゾールを止めて

「待ってください。迂闊に動いては危険です。時期を窺いましょう。」

「

と言う。それに不審に思ったルオゾールは

「何故です？」

と聞き、その答えは

「少しばかり厄介な人達がいましてね。貴方も300年前に何度か会っていますよ。」

と言うと、心当たりがあるのか

「まさか！！」

と驚く。それに頷き

「そうです。魔装機神の何人かが覚醒しているのです。更には、聖王も復活しています。」

と言う。それに対し

「な、なんと。それは確かに厄介ですね。では、下準備は念入りにしてから動くとしましょう。」

と言うと、ルオゾールは何処かへと転移していった。それを見送った愁は

「さて、此方は旨くいきました。では向こう側にもこの事を教えるとしましょうか。」

と云うと、転移を使って地球の海鳴市へと向かっていた。

A' s 編第2話「管理局対策会議とテロ組織壊滅と造られた闇」後編」(後書

次回はなのはと愁が再開します。更にその後は、なのはがはやて&
ヴォルケンリッターに会って色々と話します。

A's 編第3話「取引と守護騎士と強化」

はやてからの連絡を受けたなのは、高速ではやての家に向かっていった。しかし、なのはは途中で止まった。なぜならば、白河愁が真っ直ぐなのはの方に向かってきているからだ。

「ようやく見つけました。お久しぶりですね。聖王陛下。あの世界以来ですね。」

と愁は、なのはから6メートル位の所で止まるとそう言った。なのはは

「ええ、久しぶりですね。でも、世間話をしに来た訳じゃなさそうですね。単刀直入に聞きます。目的は何ですか？」

と挨拶を返して、なのはの前に現れた目的を聞く。すると

「流石ですね。では此方も単刀直入に言わせていただきます。取引をしませんか？」

と褒めてから目的を言う。なのはは頭の中を読んでその目的を知ってはいたが、この目の前にいる男がそれを知ったら怒り、どんな手を使ってでもなのはを殺そうとするだろう。下手すると地球や他の世界を巻き込みかねないと判断してあえて愁の手の平で踊っているのだ。そして、愁の言葉に

「取引？何を考えてるんです？」

と真意を聞き出そうとする。勿論目的や真理は知ってはいたがあえて芝居を打っているのである。そして、愁は

「何、そう難しいことはありませんよ。ある情報を渡す代わりに、力を貸して欲しいのです。」

と言ってきたのだ。その言葉に

「で、その情報と力を貸すと言うのは？」

と聞くと

「力を貸して欲しいと言うのは私のグランゾンの真の力を引き出す為の協力をして欲しいのです。」

と言ってきた。そしてなのはは

「情報っていうのは、それに協力すると約束しなければ教えてもらえないんですね？」

と聞くと愁は頷いて

「そうなります。で、返答は？」

と聞いてきた。なのははその問いに答える。

「分かりました。お引き受けしましょう。ただし、条件が1つあります。」

と条件付きで了承したのだ。愁はその条件を聞く為に

「何でしょう？」

と言う。するとなのはは

「強化する場所は私達で用意しますから貴方も来てください。罨はないですから安心してください。」

と言う条件を出したのだ。それに

「・・・分かりました。その言葉を信じましょう。それで、場所と
いうのは？」

と少し考えてから答える愁に

「少し厄介なことが起きたので今は無理ですが、兄さん経由で場所を指定しますので火曜日には学校へ来てください。」

となのはは今すぐには無理だから恭也経由で場所を知らせると言うのであった。

「分かりました。それで、厄介ごとというのは・・・闇の書絡み
ですか？」

その条件に頷くと厄介ごとについて聞く。それをなのはは大げさに
「っ！よく分かりましたね。その通りです。」

と驚いて見せた。勿論これも芝居である。その答えに

「フフフ、なら都合がいいですね。」

と笑いながら言う。それをなのはは知ってはいたが

「どういうことですか？」

と聞く。正直、なのはは内心腸が煮えくり返っていた。しかし、そ

んな素振りを見せずに愁の答えを聞く。

「私が交換条件に出した事なんですがね。闇の書絡みなんですよ。」
その言葉にオーバーに反応しつつ

「なっ何ですって！！というよりどういうこと？」

と聞く。すると愁からとんでもないような言葉が出てきた。恐らく、管理局の表側しか知らない人が聞けば卒倒するような内容でもあった。

「ルオゾールが闇の書を利用してヴォルクルスを復活させようと企んでいます。彼は万全に事を起こすつもりです。更に、管理局も関わってくるでしょう。」

と言う愁に冷静に

「ということは管理局と貴方以外のヴォルクルス信者は手を組んでるんですね？」

と聞く。それに不審に思いつつも愁は

「はい。というよりは管理局の創設者である最高評議会に管理局を造るように仕向けたのは他でもないルオゾールなのです。」

と管理局設立にルオゾールが関わっている事を話した。なのははその言葉で態と今更真理に気づいたと言うような表情で

「ということは管理局を利用しているということですね？」

と言った。そして愁は此処にいる用がなくなったので

「そういうことです。では、目的は終わったことですし、そろそろ失礼させていただきます。」

と言ってから去ろうとしたが、なのははそれを止めて

「はい、情報有り難う御座いました。火曜日は絶対に学校に来てくださいね。」

と言うのであった。愁はその言葉に頷き

「いえいえ、お互い様ですよ。学校の件、分かりました。では失礼します。」

というと、愁は転移魔法を使って何処かへ行ってしまった。

その後、なのははまた急いで八神家へ向かっていった。

それから2分後、なのはは八神家についてかつて共に戦った夜天の書の守護騎士達と再会したが、聖王の事すら覚えていなかった。なのははその事を覚悟はしていたが、実際にその事突きつけられると、辛いものがあつた。しかし、直ぐに気持ちを持ち直して自己紹介をしてからはやてにも話していた計画を守護騎士に話した。

「そんな事になっていたとは!!」

「でも、信用出来るのか？」

「そうねえ。でも、この子が嘘をついているとは思えないですし・

・・・」

「そうだな。それよりも主にどうすべきか聞くべきであろう。」
とそれぞれの意見を口にした。そして、彼女達は、自分達の主であるはやてに任せる事にした。そのはやては

「そうやな。私としてはなのはちゃんの意見に賛成や。私はシグナム達とずっと一緒に暮らしていきたいしな。だしたらなのはちゃんの考えた方法が一番ええと思うんや。」

と自分の意見を言った。それに対し、守護騎士達はそれぞれ

「それが主のお決めになった事ならば。」

「我等に異存はありません。」

「そうだな。あたし達のやる事ははやてを守り、支える事だからな。」

「そうねえ。考えてみたらそれが一番手っ取り早い方法でしょうね。でも、大量の魔力はどうするの？なのはちゃん。」

と言い、泉の騎士シヤマルが完成に必要な魔力について聞く。するとなのはは

「それについては大丈夫ですので心配しないで下さい。」

と言う。それに剣の騎士シグナムが

「まさか、高町。お前は自ら収集される気か？」

と聞いてくる。その質問になのは以外が驚くが、それを無視してな

のははそれを

「違うよ。実は少し前に21個のロストログアがこの世界に現れたんだけど、その魔力量が合計で690ページ分位あるんだ。」

と否定してジユエルシードから取り出した魔力を使った。すると鉄槌の騎士ヴィータが

「じゃあ、なんで今から使わねえんだよ！？今、それを持ってるんだろ？」

と言う。なのはは

「気持ちに分かるけど、焦ったら碌な結果にならないよ？物事には時期とかがあるからそれまで待ちなさい。」

と焦るヴィータを落ち着かせる。そして

「実はね。今開発中の兵器があるからその実験もその時にやろうと思うんだ。だからそれまで待つてね。」

と言うのであった。

こうしてなのはは本来起きるはずの魔導師襲撃事件を未然に防いだのであった。

それから火曜日に愁は約束通りに学校へ来て、学校が終了すると恭也と共になのはが用意した施設へと転移で向かっていった。勿論、転移魔法を使用したのは恭也である。そして、着いた先はなんとコテージだった。実はこの場所、バニング스가所有している別荘の1つを改造して、地下にかなり高度な開発施設を創設したのだ。因みに此処は、StSサウンドステージで六課の拠点となった場所でもある。そして、2人は地下室に入るとそこで待っていたのはなのとは忍だった。愁は忍が居る事に多少は驚きながらも

「聖王陛下、来ましたよ。それにしても月村さんまでいるとは思いませんでしたよ。」

と言った。それに対し忍は

「まあね。私も魔装士だし、趣味は機械弄りだからね。それにして

ものはちゃんから貴方が来ると聞いた時は驚いたよ。」

と言う。そこをなのはが

「まあ、そんな事より早く済ませましょう。愁さん、グランゾンを渡して下さい。」

と言う。それに愁は

「はい。では私も手伝いましょう。」

と言った。なのはは頷くと、愁に指示を出した。

それから約3時間が経過し、グランゾンは完全に完成した。

「出来た。これでこのグランゾンは完全に本来の力を引き出せますよ。はい。」

となのはがと言いながら愁にグランゾンを渡した。そして愁はそれを受け取って

「有り難う御座います。では、機能や性能を試したいので模擬戦をお願いできますか？」

と言った。それに名乗りを上げたのはなのはだった。

「じゃあ、私が相手をしましょう。ああ、全力で掛かって来て下さい。じゃないと死にますよ？」

と言った。それに対し愁は

「分かりました。貴女の力を見ておきたいですし、丁度良いですよ。」

となのはの言葉に賛成してから

「グランゾン・いえ、これからはネオ・グランゾンと呼ぶ事にしましょう。」

と言うと、それに反応してネオ・グランゾンのコアが光った。そして

「ネオ・グランゾン、セットアップ！」

と叫び、愁は黒い光に包まれたのだった。

おまけ

外伝オウカが元の世界に帰った後（前編）

なのはがオウカを元の世界に返して6日が経過した。

なのはは約束通りに連絡をよこし、その12日後に来る事が決まった。しかし、ハガネやヒリュウ改は任務の最中だったのでその作戦になのはも秘密裏に参加する事になり、なのはとはハガネとヒリュウ改の予定航路の途中で合流する手筈となっていた。そして、その場所に、出迎えと偵察を兼ねてATXチームとオウカが来たのであった。

「オウカ、この辺か？」

そっついうのはキョウスケ・ナンブ中尉。ATXチームの隊長である。

「はい。キョウスケ中尉」

と返事したのは、なのはに助けられたオウカ・ナギサである。

「それにしても、なのはちゃんってどんな子なの？オウカちゃん。」

と聞くのはエクセレン・ブrowning少尉。ATXチーム1の狙撃能力を持つ機体”ライン・ヴァイスリッター”を駆る美女である。

そして、そのエクセレンの問いにオウカは

「そうですね。人の心が読めて、機体を数日で開発できる可愛らしい9歳の少女で、金髪で翠と紅の瞳が特徴です。それと、此处に来る時に実験機に乗ってくると連絡がありました。」

と言う。しかし、そこへ警戒音がなり、敵が現れた事を知った。それに直ぐに反応したキョウスケが

「ちっ！仕方がない。各機、散開して各自敵機を迎撃！！」

と各自に指示を出して自らも敵機に向かう。今回の敵には、指揮官クラスであろう槍を持った蒼い機体がいた。そう、デュミナスの勢力が攻撃を仕掛けて来たのである。

「どんな装甲だろうと、討ち貫くのみ。」

と言いながら、キョウスケの愛機”アルトアイゼン・リーゼ”がバスターで装甲を打ち抜き、時にはプラズマホーンで敵を撃破してい

く。更には

「ハウリングランチャーEモードつと、いざ。」

と言いながらライン・ヴァイスリッターのハウリングランチャーからビームが連続で発射され、それに当たった敵機は次々に落とされていく。そしてオウカも

「なのはとの再開を・・・ジャマするな!!」

と言いながら、なのはから貰った機体にして愛機”ラピエサージュ改”が持っている2挺のオクスタンライフル改をEモードで発射して敵を撃破していく。それに続き

「行こう、クスハ。」

「うん、ブリット君。」

と言いながら敵機群に向かうのは、龍虎王を駆るクスハとブリットである。そして

「九天応雷声普化天尊!!!」

とクスハが叫ぶと、符から雷が出てきて敵を次々に落としていく。こうして敵はあっという間に減っていき、最後には槍を持った蒼い機体だけが残った。しかし、ピーンとクスハとブリットは何かを感じ取ると

「クスハ!!!この感じは!!」

「うん。何かが来る!!!」

と言うとオウカも

「皆さん気をつけて下さい。敵が0時方向から転移してきます。しかも、かなりの数です。」

と言う。すると、オウカの言う通りにかなりの数の機体が転移して現れた。その数は約40機、そして更にその先頭にいるのは

「遅いから着てあげたわよ。」

「助けに来たよ。」

と2人の少女が乗るシュガテールとエレオスの2機が現れた。

その声に安堵を覚えたのか

「ティスにデスピニス?!助かったよ。流石に僕1人じゃきつい相

手だったから。」

と言う少年。それに

「そうだね。でも、間に合ってよかった。」

と言うデスピニス。そして、そんな暢気な2人に

「そうね。でも話は此処までよ。ラリアー、デスピニス。奴らを倒さなきゃ。」

と言うのはティスである。そのティスの言葉に

「了解!!!」

と言うと3機は連れて来た約40機と一緒にキョウスケ達に向かっていった。しかし、彼女達は知らなかった。上空から来る圧倒的な力を持つ存在が現れるのをまだ知る由もなかった。そして、その圧倒的な前からの前に3人は恐怖する事になるなど、この戦場にいる誰もが予想出来なかった。

A' s 編第3話「取引と守護騎士と強化」(後書き)

やっぱり、かなり駄文ですねorzまあ、私の文才は小学生の低学年にすら負けますから仕方ないんですけどね。さて、次か次の次でようやくアンケートで出て来た名前の人物が地球に来ます。その他にもミッドにも誰か出す予定です。

なのはと愁はネオ・グランゾンの完成度と機能を確かめる為にコテージの上空で模擬戦を行う事となった。勿論、結界魔法を発動させて。そして、なのはと愁は

キン・・・キン・・・ガキン！！！！

つと大剣と2本の小太刀で激しい速度で切り結び合っている。その戦いを見ている忍はその速度を見て

「何これ、愁って本当に人間！？あのなのはちゃんが手加減しているとはいえ、あそこまで戦えるなんて！！」

と驚く。それに対し恭也は

「それは多分、愁が限界まで身体能力や感覚を強化しているからだろう。だから、あそこまでやれるんだ。愁は接近戦の技術では俺よりも低いからな。」

と分析をする。そして、その分析で疑問を思った事を聞く。

「って事はかなりギリギリのところまで強化してるって事？」

そして、恭也はその質問に答える。更に、なのはについても分析をしだした。

「そうなる。そしてなのはも手加減しているので精一杯と言う事も関係しているだろうがな。」

と2人の戦いを冷静に分析していた。それに対し

「へえ、じゃあ私も接近戦習おうかな。」

と驚きながらそんな事を言う。それに興味を持ったのか

「誰にだ？」

と聞くが、その質問は地雷だと言う事に気づいてしまった。なぜなら、恭也を見て悪意のある笑顔見ている。そして

「勿論、恭也によ。」

といった。それを反論しようと

「あの・・・家の剣は「部外者に見せたり教えたりする物ではな

いつて言いたいんでしょう？」・・・ああ。」

と恭也が何か言おうとした時に忍がその言葉を先に言い、更に「それなら、心配しないで。私、恭也の妻になるから。あ、そういえばさくらは恭也と結婚した言っていてたよ？あの会議の事をさくらから聞いたんだけど、なのはちゃん曰く、「兄さんの事が好きな人が多いから、もしそのことを知った兄さんはかなり迷うし、もし誰かを選んでも、その人達が悲しむ。私は知り合いが悲しむのを見たくないから。」って言ってたわ。ああ、それは錯覚だとかそういうことは私達みたいな本気で恭也が好きな人達を悲しませるだけだから止めてね？今までだってかなりきつかったんだから。」

と言う。その言葉に忍やさくらの気持ちを知った恭也は「本当にすまなかった。お前達がそこまで俺を思っていてくれていたとは気づかなかった。」

と言うと忍を抱きしめる。そして「分かった。お前がそこまで言うのなら剣を教えよう。その代わりに、今までの事は許してくれるか？」

と言った。その言葉に涙を浮かべて

「うん、うん！！」

と恭也の胸に顔を埋めながら頷いた。その目には薄っすらと涙が流れていた。そしてそこへ

「「いちゃついてる所悪いが、2人が戦いが終わらせて此方を見ておるぞ？」」

と言う声がする。その声の主は恭也のデバイスであるサイバスターの精霊”サイフィス”とディアクスの精霊”タナス”であった。そして、戦いが終わったと言う言葉にハッと気がついた。そう、此処には恭也と忍、そして模擬戦をしていた2人しかいないのだ。それはつまり

「中々、面白いものを見せてもらいました。」

「あはは、まだ続けていても良かったのに。」

と愁となのはに見られていたのだ。それを照れながら隠すかのよう

に恭也は

「そ、そんな事より模擬戦はどうなったんだ？」

と言う。それに続き、忍も頬を赤く染めながら

「そ、そうよ！！結果はどうなったの？」

と誤魔化そうとした。その問いに

「ああ、それなら私の負けでした。いや、それにしてもお強かったですね。かなり強化された上に新たな武装を手に入れたネオ・グランゾンが、本気を出した状態ですら手加減された状態で負けるなんて思いませんでしたよ。」

と愁が答えた。そしてその後、愁は2人をからかい始め、それをなのはが止めるというハプニングが発生したが、それは直ぐに収まり、その後直ぐに愁は

「お世話になりました。では聖王陛下、恭也、忍。またお会いしましょう。」

とお礼と挨拶を言うと、転移魔法で去っていき、それをなのは達3人は黙って見送るのであった。その時に恭也は

（あいつが礼を言うなんて・・・明日は槍か何かが降ってくるのか？）

と思ったのは秘密である。勿論それはなのはは心を読んで知っていたが、黙っている事にした。それから、恭也はなのはに

「なあ、忍がさくらさんや他の人が俺の事を好きだと言っていたが、誰が俺の事は好きなんだ？」

と聞くとさくら&雪&那美&知佳&フィリス&美由希&フィアッセだと教えた。そして

「だけど、本来はそういうのは自分で気がつくべきだけだね。」

と言い加えた。それからの恭也は皆と結婚するのは満更でもなく、更には、皆を悲しませたくないと言う理由で、該当者（全員、なのはの時間停止のお陰で来ても大丈夫なようになっている。）を同じ場所に呼び出して

「俺なんかで良ければ、管理局との戦争が終わった後に結婚してく

ださい。」

と対象者に言うのであった。その言葉に最初は戸惑った彼女達だったが、最終的には

「………はい！！」「……………」

と頷いたのであった。何故、こつも話が良い方向に進みすぎるのかと言うと、第1回管理局対策会議についての内容は、高町家やさざなみ寮にも伝わっており、更にはなのはや恭也の母親である桃子や祖母の御影の鶴の一声があつたのも原因である。こうして管理局との戦争後は、高町恭也はミッド限定ではあるが、一夫多妻という何とも羨ましい状況となる事が決まつた。これは完全に余談ではあるが、恭也が告白してから、地球でも数ヵ月後に何らかの力により歴史が大きく動かされる事になるが、それはまだ先の話である。

この模擬戦から4時間が経過した。既に、周りは暗くなりかけていた。

そんな中、又もや次元に歪みが出来た。しかも、今回は幾つかの歪が出現し、その全ては何故か海鳴市に集中していた。1つは月村邸の庭に、1つは国守山に、1つは八束神社に現れた。そして、その時にちょうど散歩をしていたシルロットが、月村邸に出来た次元の歪が発生した所を偶然見かけ、その場所に興味半分、警戒半分の気持ちで向かつて行つた。すると、そこには死んだはずのハルケギニアでの友にして同じクラスだったキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプスやただのクラスメイトであつたギーシュ・ド・グラモンやモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ、それに学院長のオールド・オスマンの秘書だつたミス・ロングビルことマチルダも横たわつていた。それを見つけたシャルロットは驚きながらも放つてはおけず、急いで自分の使い魔の風韻竜”シルフィード”を口笛で呼んだ。シルフィードが到着すると、直ぐに4人をシルフィードの背中に乗せて月村邸に向かつていった。そして、他の所にも次元漂流者が流れ着い

ていた。

おまけ1

外伝　オウカが帰ってきた世界（中編）

約40機（正確には42機）と指揮官機である3機と戦わなくてはならなかった4機はその圧倒的な数に驚きながらも戦っていた。しかし、指揮官もいたのでその戦いは一方的にATXチーム+オウカは追い詰められていく。しかし、そこヘクスハとブリットが上空で何者かの強大ではあるが優しい念を感じ取った。そして、その後直ぐにオウカからATXチームに向かって通信で

「皆さん、なのはちゃんが来ました。」

と言う。すると彼女の言葉の後に上空から白く機体が姿を現す。

その機体は、通常のPT又はMSのサイズと特機サイズの間位のサイズであった。そしてその白い機体から通信が入る。

「此方、高町なのは！！そちらを援護します。」

そう、その機体のパイロットはオウカの待っていた高町なのはであり、その白い機体は試作型のゴッド・グラギオスと言う機体であった。そして、その機体はデバイスであるグラギオスと瓜二つなのでそれもそのはずで、本来はグラギオスに機動兵器の機能を持たそうとしたのだが、なのはは別の方法を思いつき、同じ形状をした別の機体を製作。それがゴッド・グラギオスである。このゴッド・グラギオス、性能的にはグラギオスと同等なのだが、特殊機能がエネルギーフィールド、自己修復、自己補給しかない為に総合的にはグラギオスに劣っている。しかし、それでも高性能なのは確かで、これらの機体どこるか、この世界にも存在するグランゾンやネオ・グランゾンですら手を出せない代物となっている。そして、この機体の

コックピットにはグラギオスを詰め込む穴があり、そこにグラギオスを入れると性能が向上し、更にはグラギオスの機能も完全に使えるようになるというものだ。しかし、今回はグラギオスは詰め込まずにそのまま運用してデータを取ろうという訳だ。特に今回は1対多を想定していたので、大威力、又はMPW（簡単に言えば、広範囲の敵を纏めて殲滅するのに使う兵器の事）の性能を確かめたかったのだ。その時に任務の事を耳にしてそれに参加すると言い出したのだ。そして今、友軍機が数的に不利な状態で危機的な状況に陥っていた。なので、宇宙から降下すると直ぐに通信を送り、敵郡に単身で突撃する。それに怒りを感じたのか

「ふんっ！ たった1機で何が出来るっていうのさ！！ やっちなー！！」

と言う指揮官機の命令で、残りの31機がゴッド・グラギオスに向かって来た。しかし、なのはの狙いはMPWの威力と距離の実験である。つまり、この状況は、なのはの狙い通りなのである。そして「掛かったね！！！！」

と敵指揮官に言う。それに対し何が掛かったのか分らない指揮官の少女は

「何！！」

と驚くだけだった。それが最大の隙となった。既にエネルギーの充填は完了している。その為、ゴッド・グラギオスから途方も無いエネルギーがあふれ出していた。そこへなのはが

「行くよ！！ ゴッド・フラッシュ！！」

と叫ぶ。すると、今まで溜めていたエネルギーが一気に周りに溢れ出した。そして、それは残りの31機のみならず3指揮官機+1機（パテールで途中で呼び出した。）や味方のATXチームやオウカ機をも巻き込んだ。31機は全て撃墜され、指揮官機3機と1機はかなりのダメージを追った。そうになると、味方の方にも被害がでたかに思われた。しかし、なのはが使ったのは敵味方識別型の兵器なので、サイバスターのサイフラッシュと同じような物である。なの

で、味方には被害は無かったし、前もって敵側だけ時間停止して、その時に通信で知らせていたので驚く事も無かった。因みに、時間停止したのは「此方、高町なのは！ーそちらを援護します。」と言った直ぐ後である。こうして敵は撤退していき、なのはとオウカは再開を果たすのであった。

おまけ2

機体・デバイス設定 ゴッド・グラギオス

創造神グラギオスが宿っていないただの機体で待機状態にはなれるが、デバイス形態にはなれない。
性能はおまけ1に書かれている通りで、グラギオスに劣っている。しかし、待機状態のグラギオスを詰め込む事により性能がそのグラギオス分向上する。ただ、この機体は試作段階であり、完成に至るまではもうしばらく時間がかかる。因みに、完成型の名称はソル・グラギオスで、この機体は3機存在しているが、その内の1機は完成型のソル・グラギオスに改造し、もう2機はそのままの状態運用される予定で、その内の1機は平行世界の地球のテスラ研にグラギオスとの融合機能などの重要な所をオミットしてから研究材料として渡される事になる。それとグラギオスシリーズ3機で融合という計画がある。また、待機状態でデバイス形態のグラギオスとも融合が可能で、融合状態でもゴッド・グラギオス分の性能が上がる。オリジナル武装として、ゴッドブラスターとゴッドランサーが搭載されている。勿論、ファンネルもグラギオスと同じ数ある。

ソル・グラギオス

ゴッドグラギオス同様に創造神グラギオスは宿っていないただのデバイス。

ゴッド・グラギオスの完成型で、ゴッド・グラギオスに聖王なのは側のグランゾンやネオ・グランゾン等のデータを使用して完成する。また、グラギオス同様にデバイス機能や他のグラギオスとの融合機能を持っている。この機体とゴッド・グラギオス、そしてグラギオスと融合する事でカイザー・グラギオスとなる。尚、デバイス形態や機動兵器状態は、オリジナルのグラギオスよりもネオ・グランゾンの方に近い。耐えられる魔力値は10億。

オリジナル武装としてソルブラスターキャノン、ブラックホールクラスター改、縮退砲改、ソルワームソード、ワームスマッシャー改、グラビトロンカノン改等を搭載する予定。勿論、ファンネルもグラギオスと同じ数ある。

アルティメット・グラギオス

グラギオス同様に創造神グラギオスが宿っているデバイスで、グラギオスという名を冠するデバイスや機体の中で最強の性能を誇る。管理局やその他勢力との決戦用に使用予定のデバイスで、グラギオス、ゴッド・グラギオス、ソル・グラギオスが融合する事で完成するデバイスで、グラギオスの3倍以上の性能を予定している。耐えられる魔力値は1000億を予定。

グラギオスシリーズの攻撃や機能が全て使える。ファンネルは3機の合計分また、新たな攻撃方法として神の舞を使用予定（某勇者王に出てくる天龍神の攻撃である光と闇の舞が元ネタです。）更に、別の神との連携による神々の舞も予定している。（他の神が出ればの話ですが……。）

ネオ・グランゾン

種類：鎧型デバイス

待機状態：黒い宝石

特殊：強化型重力フィールド、ドラグーン（暁ガンダムのドラグーンの色をネオ・グランゾンと同じ色である黒にした物を6機）、魔力吸収、魔力反射、魔力回復、自己修復。

主な改造者は高町なのは（元になったグランゾンの製作者にして、マスターである愁はあくまで手伝っただけである。）

原作のネオ・グランゾンには無い魔力ライフル（ビームライフルの様なもので、暁ガンダムと同じ形で、魔力サーベル又はグランワームソードを繋げて銃剣形態に出来る。）魔力サーベル&内蔵型の魔力が実弾選択できるマシンキャノンを始めとした武装が搭載され、特殊な物もグランゾンの時にあったもの以外に追加されており、武装の数が多くなり、攻撃や戦術の幅が広がったといえる。シャイニングフィンガーと言う特殊なクローパーツを取り出して腕にはめる事で、超高出力の魔力サーベル兼クローアームを使用できる。また、ラ・ギアス、アルハザード、古代ベルカ、近代&古代ミッドチルダの英知に結晶である。更には、装甲には改良型のZ・O合金が使われている為、かなりの強度と再生能力を持つ。また、ある程度の魔力吸収や反射も可能。

愁さんをかなり強化してみました。少し子安さんネタがあるのは気にしないで下さい。これぐらいしないと愁さんが、最強の力を持ちながら、オールラウンダーであるのはにあっけなくやられてしまうので……。

さて、闇の書は何時覚醒させて助けようかな。もうそろそろ頃合いなんだけど、何か足りない気がするんですよ。

おまけ2にある神の舞はずっと前から暖めていた案でした。もっとも、考えていた時はオリジナル同様に光と闇の舞と言う名前でしたが……。

八束神社に出現した歪から出て来るのはウェールズで、国守山に現れた歪から出て来るのはアンリエッタを予定しています。

因みに、結婚については、アリサも恭也が好きだけどまだ幼いので、成長してから自分で何とかしてもらおうと考えていたので、なのはは態とアリサの名前を言いませんでした。

A's 編第5話「次元漂流者とイージス計画」

シユアルロットが、級友達を見つけて月村邸に戻って来る前、恭也となのははいつもより遅い鍛錬を八束神社でしていた。そんな時、その鍛錬していた所に、次元の歪が現れた。それに気づいたなのはと恭也は、その歪の中から出てくるであろう者と何時でも戦えるようにと、自らの得物を構えていた。しかし、その必要がなく王侯貴族が着る様な服を着た金髪の美少年が気を失って倒れていたからだ。なのはと恭

也は互いに顔を見合わせて

「とりあえず、さくらさんの所に行く？」

と言う。それに恭也が頷いて

「ああ、月村の屋敷はもう入らなそうだからな。」

と言う。そしてそこへ

「あっ！！もう1つ割と近くにこの歪と同じ物が現れたから、私はそっちの方に行くね。」

と言うなのはに恭也は

「分かった。じゃあ、そっちの方は頼んだぞ。」

と頷いてからそう言う。それに

「分かってる。じゃあ、さくらさんの屋敷でね。」

と言い、恭也も頷いて

「ああ。」

と返事してから、恭也は気絶している美少年を連れて転移した。そして、それと同時に隙間でなのは国守山で発生した次元の歪が発生した場所に向かっていった。そしたら、予想通りに人が倒れていた。その人物は今度は美少女ではあるが、王侯貴族の様な服装をしていた為、先ほどの美少年と関係があると判断しながら、綺堂邸に隙間を使っていくのであった。そして、綺堂邸に着いた時には既に恭也が着いていて、例の彼は客室のベッドで寝かされていた。なの

はとさくらは、その美少年が寝ている部屋を出て隣にある別の客室になのはが隙間を使って寝かせた。それから、その美少年と美少女が何故この世界に来たかという事を調べる為に記憶を読んだ。すると、あの2人がなのはが密かに気に入らないと思っていたハルケギニアの住人で、美少女の方はハルケギニアでなのはが呼び出され、更には愁と会った場所。そう、トレスティンの王女だということが分かった。確かに、愁はなのは達と別れた後にまたハルケギニアに現れた事を、取引の時に愁の記憶を読んで知った事だが、この世界に来るとは思わなかったし、こんなに遅く転移するとは誰も思っていなかったのである。そして、そこへ忍から通信が入った。その内容は、次元の歪から現れたのが、トレスティン魔法学院の関係者であると言う事だった。忍が知っている理由は、シャルロットが教えだからである。しかし、もう遅いと言う事もあり、なのはと恭也は自宅へと帰り、その事を家族に説明した。勿論、その事を聞いた人間の殆どがどうして？と考えていたが、なのはと恭也はなんとなくではあるが、何か近い将来良くない事が起こるのではないかと感じずにはいらなかったたのであった。なので、なのはは未来予知、恭也もラプラス・デモン・システム（サイバスターや他の魔装機神に搭載されているシステムで、最近恭也がサイバスターを使いこなせるようになった事で使用できるようになったのである。その機能は原作のラプラス・デモン・コンピュータとほぼ同じである。）を使って未来を見た。その事がきっかけで、第2回対管理局会議が行われる事になるのは、そう遠くはなかった。

それから翌日

なのはは、朝5時に起床して、1人で八束神社で鍛錬をしている時、ジェイルから通信が来た。

「なのはくん、少し良いかね？」

と言うジェイルの顔はいかにもすまなそうな顔をしている。それには気にせずに

「何ですか？ジェイル博士。」

となのはは聞く。すると

「実は、例のデバイスと兵器が完成した。」

とジェイルから報告が来た。それに対し、頷きながら

「そうですね。では、いよいよですね。」

と言っなのはに

「ああ、それで、何時計画を決行するのだね？」

と聞く。すると

「うーん、とりあえず早めに助けたいので、6月25日を予定しています。」

と答える。それに頷き、ジェイルは

「分かった。それともう1つ報告があるんだ。」

と言っ。その言葉に

「何ですか？」

となのはは聞く。すると

「管理局の艦隊が、地球に来る事が判明した。その中にはリンディ提督、レティ提督、グレアム提督といった穏健派のリーダー格の人達が指揮する艦や、穏健派の殆どの艦隊が集結するそうだ。」

と言っ。すると驚いた素振りを見せずに

「やはりですか。ということは、地球もろとも闇の書を葬るつもりなのでしょうか。」

と言っ。そのやはりと言っ言葉に少し引っかかりを覚えるも

「そうらしい。それで、どうするのだね？」

と聞くジェイル。それに対し

「そうですね。恐らくアルカンシエルが全艦に搭載されるはずですから、何は防御策を練らないとなりませんね。……あつ！

！」

と言っ、その最中何か思いついたようだ。その事を不思議に思っ

「どうしたのかね？何か良い案が浮かんだのかね？」

と聞く。するととなのはは

「はい、実は・・・・・・・・・・。」

とその計画をジェイルに話すのであった。そして

「なるほどね。それなら可能だね。それなら、その為のエネルギーはどうするのかな？」

とその計画を認めるような態度で言うジェイル。そして、その計画に必要な物について聞いた。すると

「それについても問題ありません。協力者達を連れて行きますので。」

「

と心当たりがあるようで、なのはは笑顔のまま言った。それに関心を持ったのか、「ほう。」と漏らしてから

「君がそう言えるほどの者達ならば大丈夫だろう。では、私はこれで失礼するよ。」

と言う。その言葉になのはは

「はい、それとリンディ提督達にもそう伝えといてください。」

と言うと、ジェイルは頷いてから

「分かった。」

と言った後に通信を終了させた。そして、通信を終えたなのはは

「あれは向こう側では既にプロトタイプが完成してるから、そのデータと私達の知識や力を加えれば、あの計画は完成したも同然。」

と言い、更に

「計画発動までに完成させなくちゃね。向こう側の物を凌駕した、イージスの盾を。」

と言い、その表情には自信が溢れた笑顔だった。しかし、またジェイルから通信が来た。そして

「ああ、言い忘れていたよ。実はね、ミッドに耳の長い女性が転移してきたんだよ。」

と言って来た。なのははそれを聞いて、ハルケギニアに住んでいたエルフではないかと推論を立てる。しかし、今の段階では何も分かっていないので、詳しく聞く事にした。

「それで？」

と聞くのはに

「一応、私の方で保護しているのだけでも、その転移の仕方が変なんだよ。」

と言う。それを聞いた時、なのはが自分の仮説は間違いじゃない事を確信した。そして

「もしかして、魔力反応がない代わりに、重力反応があつたとか？」と聞いた。それを驚きながらも

「そうだ。よく分かったね。」

と答えるジェイルになのはは

「実は・・・」

同じ現象が地球でも起こり、何人かが次元を超えて来た事を教えた。その偶然に疑問を抱きつつも、2人はハルケギニア組の事を話し合った。その話し合いは、そのハルケギニアから来た異邦人の話を聞いてからと言う事になり通信を終えた。

それから数時間後、ハルケギニアから来た綺堂邸にいる2人は目を覚まし、月村邸でもハルケギニアから来た人間達が目を覚ましたと言う。

その後、なのは達はハルケギニアに住んでいた者たちが全て死んでいる事を教えた。最初は信じるものが居なかったが、なのはによって現在のハルケギニアに連れて来られて、その事を信じるほかなかった。そして、ハルケギニアが消滅した最大の理由も明かした。それは、ルイズの召喚魔法によって連れて来られた愁が、その事を怒っていた事と自分の目的であるヴォルクスの分身体を復活させる為に、ハルケギニアに住む生き物達を、例外なく皆殺しにしたことである。そして、なのはは更に

「ルイズさんは虚無だった可能性が極めて高いのです。なので、貴方達がブリミルを信仰していると言うのなら、それは、貴方方以外のハルケギニアの行ける物全てが滅ぶ事も、貴方達の神の意思だと

いうことですね。」

と言う。その言葉によって何人かがブリミル信仰に絶望して止めた。そして、地球で生きる事を決意した。けれども、それでも割り切れないらしく平民がどうか言うギーシュも、この世界に生きる事を決めたモンモランシーの説得によってこの世界に生きる事を決めた。因みに、なのはが聖王という王族で、聖王教会の主神である事を知って、驚いたのは言うまでもない。その後、ハルケギニア組はなのはに恩返ししたいので一緒に戦うといった。こうして、なのは達に新しい仲間がまた出来て、戦力が増えた。尚、ハルケギニア組にはデバイスがなかったので、プレシア、ジェイル、忍に依頼する事となった。それと、シャルロットもデバイスを欲しがったので、一緒に造る事となったのだった。

おまけ1

外伝 オウカが帰った後の世界〜後編〜

なのはが敵部隊をほぼ壊滅させて数分後、なのははATXチーム+オウカによってハガネに案内された。その時に、機体は待機状態にして首に掛ける。その時に、出迎えとしてオウカのスクール時代の弟と妹であるアラド・バランガ、ゼオラ・シュバイツァ、ラトウーニ・スウボータがやって来て、それぞれがなのはにお礼を言う。しかし、気にしないで言った。そして、彼らや偵察に出ていたATXチーム+オウカによりなのははハガネのブリッジに案内され、今回の戦闘についての報告が行われた。そして、遂に今回の作戦についての話が始まった。その作戦とは、最近現れた修羅という勢力に制圧された、香港基地の奪還である。しかも、そこはかなりの重要

拠点と言う事もあり、かなりの部隊が展開されているとの事だった。そして、作戦会議にはなのも参加した。そして、今回の作戦ではなの、この世界のサイバスターの操手であるマサキ・アンドー、敵味方識別型殲滅兵器を持つヴァルシオーネのパイロットであるリユーネ・ゾルダークの3人で行くということになったのだ。最初は皆渋ったが、時間が限られている事と、多くの殲滅向きの兵器を持っているなのはゴッド・グラギオスとサイバスターとヴァルシオーネが適任とされ、ハガネとヒリユウ改は後方で待機となった。そして、香港基地へ向かう途中、なのがマサキに話しかけた。

「マサキさん、少し良いですか？」

と通信で聞く。

「ん？なんだ？」

とマサキが返事をする

「白河愁って知ってますよね？」

と聞くと頷いて

「ああ、ただこっちではシュウ・シラカワだけだな。それがどうした？」

と言う。すると、今度はマサキではなくリユーネから

「もしかして、シュウとは知り合い？」

と言う質問が来た。それに対しなののはは

「ええ、向こう側の・・・ですが。」

と頷いた。それにマサキは

「そうか。」

と小さく言う。なののは彼なりに思う所があるのだろうと思い、その事には触れなかった。その代わりに話題を変える事にした。

「それと、もうひとつ聞きたい事があるんですけど・・・。」

と言うなのはにマサキが

「なんだ？」

と反応する。そしてなののはが

「破壊神ヴォルクルス、創造神グラギオスって知ってます？」

と聞いたその瞬間、マサキの顔と声の質が変わり

「何故その名を知っている？」

と聞いてきた。しかし、ラ・ギアスの事を殆ど知らないリユーネは驚きながら

「ええっ！何？そのヴォルクルストかグラギオスって？」

と聞いてきた。それにマサキは

「ああ、ヴォルクルスって言うのは、俺の第2の故郷のラ・ギアスでは破壊の神として恐れられていてな。創造神グラギオスって言うのは大分大昔のラ・ギアスでの主神だ。もつとも、その信仰は既に精霊宗教に変わっていて、その信仰者は殆どいない。だが、シユウみてえにヴォルクルスと契約している奴もいるから、少なからず居るんだろっな。」

と答えた。それに

「へえ、ってシユウも信者なの？信じられない！！」

と驚いて聞くリユーネ。その質問に

「ああ、向こう側ではわからねえがな。」

となのはゴッド・グラギオスも方を向いて答える。それに対し

「私達の次元では、既に信者ではありませんが、自分を操ったヴォルクルスを倒す為に復活させようとしています。」

と答える。それに納得したようにマサキは頷くと

「なるほど、でも復活させようとしているのは一緒なのか。」

と言う。

「そうみたいです。因みに、私がこの2柱の神を知っているかと言うと、私もヴォルクルスとは前世から因縁がありまして、グラギオスに関しては、私のデバイス、まあ魔法の補助具のことですが、中には創造神グラギオスが入っていて契約しているからです。因みに今私が乗っている機体もグラギオスの名を冠しています。とはいっても名前ですが……っと思えてきました。香港基地です。」

そして、基地に着いたなのは達は、なのはの敵味方識別殲滅兵器”

サイコフラッシュ”により基地に駐在していた敵機全てを殲滅し、基地内部に居た修羅たちも機体を降りたなのによって全滅した。なのはが基地内部に居る途中、敵の増援が着たが、マサキとリユーネの活躍により、これを退けた。こうしてなのはの此方側での任務は終了したなのは達3人はハガネに帰還してテツヤ艦長に報告した。なのははこれから元の世界に帰ると言い、艦長に小さな箱を渡した。その時にテツヤ艦長が

「これは？」

と聞いた。すると

「この中身は、私が乗っていたゴッド・グラギオスと同型の機体です。詳しい事やデータは、この箱に入っている取り扱い説明書と端末を見て下さい。テスト研とマオ社に渡して参考にして貰えば、こちらの世界の機体性能がかなり上がりますよ。」

と言った。そして

「もしかしたら、私も貴方方に力を貸してもらうかもしれませんので、その前払いとお考え下さい。では、私はこれで……。」

と言うと、なのはは踵を返し、ブリッジを後にした。その後、オウカやハガネクルーやヒリユウ改クルー達に別れの挨拶をして、元の世界へと帰っていった。こうして、今代の聖王である高町なのはの第1回目の平行世界の旅は無事に終わりを迎えた。そして、なのはは3度この世界へ来る事となる。1回目は協力して貰いに行つて、2回目は対ソーディアン攻略戦での増援として、3回目はこの戦争が終わった後に、双子を見に浅草に行った時である。（因みにその世界では、デスピニスだけでなく、ラリアーやティスもなのはによって助けられて3人共人間になっていて、一緒に浅草に来ています。

）

おまけ2

なのはの魔力と寿命

なのはは神である為、本来は2000歳しか生きられない。(この小説での設定上)しかし、幻想郷の不老不死の人達と会う事によって、完全な不老不死になった。魔力においても今現在は6億を超えている。

用語

イージス計画：かなり莫大なエネルギーを消費すると同時に、地球やその周辺にある特徴を持ったバリアで守ろうと言う計画で、そのバリア発生装置の事をイージスの盾と呼ばれる事からその名が付いた。因みに必要なエネルギーは地球全体で使用される電力の2日分である。その為、なのはは異次元からの助けを予定している。なのは達、反管理局側の力でも間に合う量なのだが、その後の戦いなども考慮し、こういう計画になった。必要魔力は7億である。

A' S 編第5話「次元漂流者とイージス計画」（後書き）

地球に来たハルケギニア組のデバイスフラグ確定しました。

この外伝でのラリアーの機体はヒュポクリシスではありませんが、武器や腕の数が違います。（武器が剣ではなく槍になっていて、腕も4本から2本になっている。因みに、アポストレーの時は正反対に剣を回転させながら投げて、刺さったら剣が爆発します。パラディソスも使用する武器がが逆になります。）

ティスの性格が卑怯ではなくなり、気が強いだけの設定です。3人共デユミナスに対しては不信感を持っています。ただ、生み出してもらった恩があるので、従っていたに過ぎません。つまり、原作のようにデユミナスに忠誠を誓っているわけではありません。尚、デユミナスに取り込まれなかったのは、なのはがデユミナスを取り込まれる前に一時的に別の場所に移動させたからです。なので、人間にしてくれた事も含めて、なのはにはデユミナスの時以上に感謝をしています。3人の機体については、エレオス（デスピニスの意向）だけ自爆させていて他の機体は健在です。イージス計画の時にも出てくる予定です。因みに、無印番外編第2話で海鳴に来たアクセルとアルフィミイは、この外伝世界から来たのではなく、原作のスパロボOG外伝から来たという事になっています。次回は第2回対管理局会議が行われます。

A' s 編6話「闇の終焉」

シャルロット達にデバイスを依頼されて数日後、なのは達は2回目の会議を行なおうとしていた。

場所：ゆりかご内部の玉座の間

視点：なのは

私は皆をゆりかごの玉座の間に集めて知らないメンバー同士に挨拶や自己紹介をさせてから席に座らせた。主に、前回出席できなかった人ややしなかつた人達も参加している。勿論、夜天の書の主であるはやとヴォルケンリッター達もだ。因みに本来、ゆりかごの玉座の間には、会議室の様な机や椅子は無いのだが、一番広いと言う事で此処に会議用の椅子と机をスキマで持ってきたのだ。全員が席に座ると

「では、これより第2回会議を始めたいと思います。」
と私が言い、続ける

「今日此処に集まって貰った理由は二つあります。一つ目は、夜天の書の改ざんによって起きた悲劇を終わらせる為の準備が出来たので、その作戦会議。もう1つは、夜天の書の闇を求めてヴォルクスの手下と管理局がやってくるので、その対応やどうするかを決める大切な会議です。では、意見のある方はどうぞ」

と言う。こうして会議が始まったのだが、誰も手を上げずにいたところを私が作戦を提案した。すると。作戦は私が考えた物で直ぐに決まってしまった。私が計画した作戦と言うのは、で、管理局やヴォルクス教にの人間には地球に入れずに、夜天の書を完成させてから、管理者権限を使用して、オリジナルのデータを上書きするというものだ。前考えていた作戦は、止めて此方の作戦にしたのだ。因みに、地球に入れないための策は、イージスの盾を使おうと提案した。既に、イージスの盾発生装置は全て完成しており、いつでも

準備は万端となっている。もし入られたとしても、魔導師相手なら改良型AMFで一方向的に潰せるから問題ない。とはいっても、管理局の艦隊もリンディ提督達の裏切りによって降りてくる前に全滅させられるだろう。そう、この作戦で、リンディ提督達は完全に表立って管理局と戦うと言うわけだ。問題はルオゾールなのだが、そちらも兄さん、さくら姉さん（婚約している為そう呼んでいる。）、アリサ、忍さんで対応する事になった。本当は、愁さんも警戒する場所に入れるべきなのだが、私の能力により、此処には来ない事が判っている。とはいっても警戒しないわけではなく、念のために私の遍在を待機させる。そして、イージスの盾には膨大なエネルギーが必要となってくる。なので、仲間の魔力を温存させる為に、並行世界の力を借りる事となった。その交渉も私が担当となった。こうして会議は終了したのであった。

会議の翌日、並行世界に行った私であったが、ハガネ・ヒリユウ改・クロガネに居た戦力の内、SRXチーム、ATXチーム、教導隊（オウカさんも教導隊に所属している。）、シャイン王女、テスラ研、マオ社にいる人達にしかOKは貰えなかった。なので、エネルギーが不足という状態になりかけたが、幸い、テスラ研に預けていたゴット・グラギオスがまだ解体されずにいたので使用される事となった。そのお陰で、エネルギー不足という危機からは脱した。因みに、ゴット・グラギオスの機体制御や出力制御は、シャイン王女がやる事となった。

そして、更に3週間後、リンディ提督達からもう直ぐ管理局の艦隊が到着するとの報告があったので、私は2日後に作戦を決行する事を仲間達に連絡した。

場所：幻想郷

仲間達に連絡して数時間後、私は幻想郷の永遠亭に居て、詠琳と会っていた。目的は、少し前に頼んでいた代物が出来たので取りに来たのだ。

「はい。頼まれていたものが出来たわ。」

と言うと、詠琳さんは私にビンの入ったケースを渡してくれた。そのケースはかなり大きく、普通の人間では持てない重さだったが、私は既に人間を捨てた身、この程度は朝飯前だった。それから、にとりさんの所に行くと、12隻の新型次元航行戦艦を建造している最中であつたが、声を掛けて依頼していたデバイスを受け取ってから海鳴に帰った。

視点終了

その2日後、なのはは仲間達に連絡したように作戦を開始した。まず手始めに、なのはが、予め呼んでおいた並行世界の機体にエネルギーケーブルを繋げてバリア発生装置にエネルギーを送りバリア”イージスの盾”を発動させた。そして、はやてにある特殊なデバイスを持たせてから、夜天の書になのはが前もってジュエルシードの魔力やその他の魔力を利用して作り出していた擬似リンカーコアを、収集させる。そして

「闇の書、起動!」

とはやてが言うとはやての体が光りだした。因みに、守護騎士達は、記憶や感情のデータをコピーしてから蒐集した。そして、光が止むと、そこにははやてではなく、銀髪の成人女性が立っていた。そう、彼女こそ、夜天の書の管制人格ある。そして、その銀髪の女性

「では、主がお目覚めになるまで、戦おう。」

と言うとなのはは頷いてから

「わかった。じゃあ、海上まで行こう。」

と言った。そして、なのはは、海のある方角を向くと、高速で海へと向かっていった。そして、それに続く管制人格。

2人が海上に着くと、2人は激しい戦いを繰り広げていた。

そして、管制人格が、なのはに向かつて殴りかかる。しかし、それは紙一重にかわされて逆に膝で蹴られる。すると今度はデイベインバスター（弱）で管制人格を吹き飛ばした。するとそこへはやての声が聞こえて、目を覚ましたと報告があった。それに喜ぶ仲間達であつたが、なのはは渡したデバイスを使うように言った。それに従うはやてはデバイスを起動させて、デバイスに記録されているシステムを起動させ、同じく記録されていたオリジナルデータを使って元の夜天の書に戻した。因みに、そのシステムとは、防衛プログラムによって、管理者権限を制限、又は使用不可能な状態になった時に発動させる事ができるもので、防衛プログラムの全ての機能無し視してデータを書き換える事が出来る代物である。こうして、八神はやては真の夜天の書の主として覚醒を果たしたのであつた。そして、それと同時に、管理局によって改変された事で始まった闇の書事件も終わりを告げた。

しかし、問題は残されている。そう、管理局とヴォルクルス教徒の事だ。

先ず、ヴォルクルス教徒についてなのだが、なのはの予想通り、データ書き換えが終了して2分後、ルオゾールが部下と死霊兵を連れて地球に現れた。しかし、事前に待機していた恭也達の活躍で、撃退する事が出来た。そして、管理局の艦隊についてなのだが、リンディ提督率いる穏健派の裏切りによって消滅した。その後、並行世界から来た人達にお礼を言ってから、時間操作でエネルギーを元の満タン状態にして、元の世界へと返した。こうして、管理局との戦いはなのはたちの勝利で終わりを迎えたのであつた。しかし、そこ

で異変が起きた。

それは・・・八神はやてが倒れてしまったのだ。

A' s 編6話「闇の終焉」(後書き)

ジェイル特性の兵器は、あくまでなのは作戦が失敗した時に暴走した防衛プログラムのバリア(A' sの物理と魔力の複合四層バリア)を、魔力を殆ど使わずに破る為に使用するはずでした。まあ、後付設定ですが見逃して頂ければ幸いです。

それと、グダグダ&駄文ですみません。

A・S 編最終章「戦争の準備」

はやてが倒れて心配する仲間たち、しかし、なのははやてに触れてから

「うん、ただ、初めて魔法を使ったことで疲れたのが原因だね。これなら明日には目を覚ますよ。」

と言った。その事に安堵した仲間達であった。そして、なのはアースラの医務室ではなく、病院に連れて行くことを提案するのであった。

なのは曰く

「はやての足の麻痺は、夜天の書が真つ当な魔導書に戻った時にリソカーコアの侵食も止まって治り始めている。だから、このまま病院に連れて行ったほうが石田先生に迷惑がかからないし、はやても怒られない。」

らしい。こうしてはやては病院に連れて行かれる事になったのであった。

そして、翌日の昼ごろ、はやては目を覚まし、その時に丁度入ってきたシグナムから念話ではやてが倒れた後の報告を受けた。

それから1週間後、はやてはなのはの時間操作により着実に回復を早めていき、退院したのであった。その時の石田先生の表情はとても嬉しそうであった。

それから数日後、なのは達は3週間後に管理局に攻め入る事を決意し、予定より早く管理局つぶしの為の準備を早め始めるのであった。

その計画は、順調に進み、2日後にはクイントの娘であるスバルが、大地の魔装機神であるザムジードと契約を交わし、前世の記憶をも引き継いだ。その事により、前世でザムジードと契約する前から使っていたドリルアーム型のデバイス”アルクトス”を呼び覚まさせた。こうして、聖王オリヴィエを守っていた4騎士は勢ぞろいして新しい戦力も増えた。そして、その2週間後には、ハルケギニア組のデバイスや訓練も含めて全ての準備が完了したのであった。

それから数日後、なのはは戦艦を率いてミッドチルダと管理局の本局に進行するのであった。

おまけ

ギーシュとマチルダのデバイス
ディノバースト1号機と2号機

冥王計画ゼオライマーに登場する山と地の八卦ロボの良い所を合わせて出来上がったデバイス。
見た目も、2機が合わさったような形状であまりまとまりがなく、機動力もない。

キュルケとシャルロット
火のブライストと水&風のランウィン

アンリエッタとウェールズ

水のガロウィンと風のランヴェスター

ランヴェスターは見た目は風のランスターだが、ティード・ランスターが味方に居る為、名前を変えざる得なかった。

アリシア・テッサロッサと月村すずか
雷のオムザックと月のローズセラビィ

因みに八卦デバイスの見た目はスパロボMXと同じ。

ザムジード

大地の魔装機神でカーキ色である。また、スバルがISスキルとして振動破碎を持つ為、このデバイスとの相性はかなり良い。

A・S編最終章「戦争の準備」（後書き）

短くなりました。次回からは最終章突入です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4679n/>

魔法少女リリカルなのは～聖王と魔装機神～

2011年3月7日19時26分発行